

有明町埋蔵文化財発掘調査報告書（7）

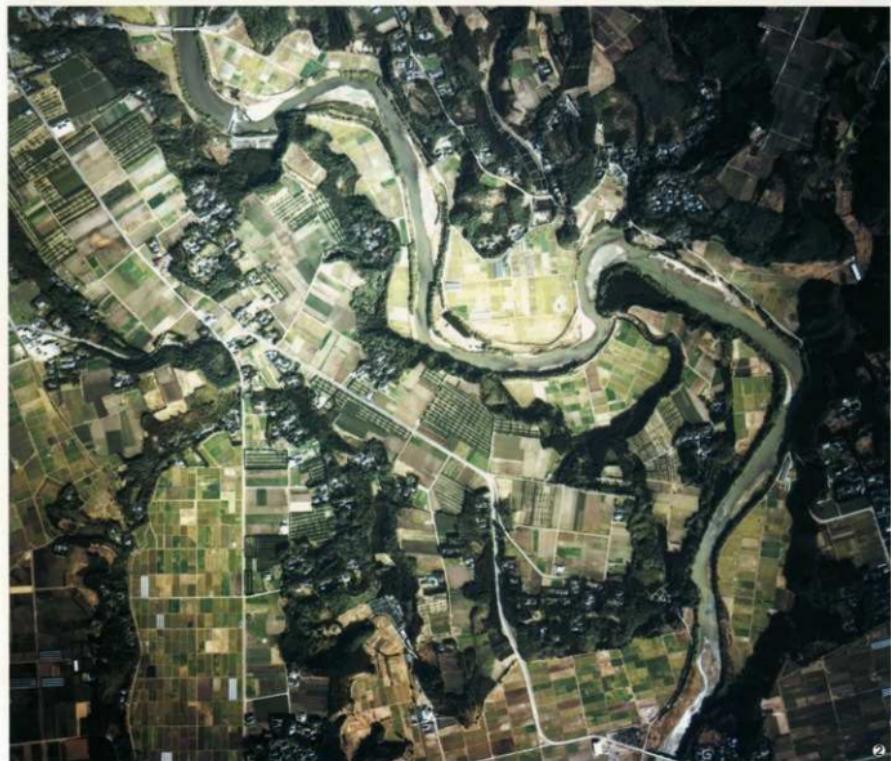
農用地総合整備事業（大隅中央区域）に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

し あけ

仕明遺跡

2005年3月

鹿児島県曾於郡有明町教育委員会



※昭和49年撮影

空中写真

※国土画像（カラー空中写真）国土交通省より

※①遺跡周辺の上流域（蓬原城周辺）

②遺跡周辺

カラー図版2



仕明遺跡から志布志湾を望む（北から撮影）



仕明遺跡付近の河岸段丘の様子（南から撮影）



仕明遺跡付近の台地の様子（北西から撮影）



仕明遺跡付近の台地の様子（南西から撮影）



農用地総合整備事業（大隅中央区域）に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

仕 明 遺 跡

2005年3月
鹿児島県曾於郡有明町教育委員会



図1 調査地点

報告書抄録

ふりがな	しあけ いせき								
書名	仕明遺跡								
調査名	農用地総合整備事業（大隅中央区域）に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書								
卷次									
シリーズ名	有明町埋蔵文化財発掘調査報告書								
シリーズ番号	(7)								
編集者名	中水忍、出口順一朗、堂込秀人、前追亮一、横手浩二郎、和田るみ子、東徹志								
編集機関	有明町教育委員会								
所在地	〒899-7492 鹿児島県曾於郡有明町野井倉1756番地 TEL 0994-74-1111								
発行年月日	2005年3月14日								
遺跡名	所在地	コード		北緯	東經	調査期間	調査面積	調査原因	
		市町村	遺跡番号						
仕明遺跡	鹿児島県曾於郡有明町蓬原字仕明	46467	69 一 66	31°28'12"	131°2'29"	確認調査 1998.08.31~09.18 本調査 (1次調査) 2000.05.29~07.19 2000.08.18~09.01 2000.11.01~11.11 2001.01.29~03.22 (2次調査) 2001.06.05~10.22 (3次調査) 2002.07.16~07.26 報告書作成 2004.04.01 ~2005.03.14	確認調査 433.25m ² 本調査 11,360m ²	農道整備事業	
		種別	主な時代		主な遺構	主な遺物		特記事項	
		集落跡	近世、中世、古代、古墳時代、弥生時代、縄文時代早期、後期旧石器時代		堅穴住居、擧立柱建物、道路状遺構、土塙墓、土坑、溝、柱列	陶磁器、薩摩焼、温石、白磁、青磁、合子、刀子、成川式、馬具、山口式、石包丁、須恵器、土師器、製塙土器、右京西式、苦浜式、石獣、剣片、マイクロコア			

序 文

この報告書は農用地総合整備事業（大隅中央区域）に伴い、有明町教育委員会が主体となり、平成11年度から平成14年度にかけて行った埋蔵文化財包蔵地の発掘調査の成果をまとめたものです。

この仕明遺跡は、旧石器時代、縄文時代早期、古墳時代、中世と様々な時代の、広い時期の遺物・遺構が確認され、特に2次調査では、古墳時代の竪穴住居内から馬具と思われる鉄器が出土しており、またこの遺跡の付近には、開発対応により調査を行った遺跡が数多く存在し、この一帯を含めた広い範囲での地域の歴史を語る上で貴重な資料と言えます。

この発掘調査の成果が、今後の研究資料として活用されるとともに、広く文化財愛護思想の啓発普及等地域の文化財として活用し、文化財に対する理解を一層深めることができればと願っております。

最後に発掘調査に従事していただいた町民の方々をはじめ、現場における調査から出土資料の整理・報告書の刊行にいたるまでご指導・ご協力いただきました県教育委員会文化財課をはじめ各関係機関、その他多くの先生方並びに関係者の方々に深く感謝申し上げます。

平成17年3月吉日

有明町教育委員会
教育長 長重逸郎

例　　言

1. 本書は農用地総合整備事業（大隅中央区域）の農道整備に伴って行われた、有明町蓬原に所在する仕明遺跡第1次～3次発掘調査の埋蔵文化財発掘調査報告書である。
2. 発掘調査・整理作業ならびに報告書作成は、縁資源公団九州支社（現、独立行政法人縁資源機構九州整備局）の依頼を受けて有明町教育委員会が主体となって実施している。
3. 発掘調査は、確認調査を平成10年8月から9月まで、本調査の1次調査を平成12年5月から平成13年3月まで、2次調査を平成13年6月から10月まで、3次調査を平成14年7月の3回に分けて実施している。
整理作業ならびに報告書作成は、平成13年度～平成16年度にかけて随時行い、平成17年3月の報告書刊行をもって完了している。
4. 発掘調査・整理作業ならびに報告書作成は、鹿児島県教育庁文化財課及び鹿児島県立埋蔵文化財センターの指導・支援のもと、有明町教育委員会が実施した。各調査は以下の者が担当している。所属や各作業の従事者についてはⅠ章に後述している。
 - 【確認調査】　中水忍・前迫亮一
 - 【1次調査】　出口順一朗・堂込秀人・鶴田静彦・東徹志
 - 【2次調査】　出口順一朗・堂込秀人・横手浩二郎・東徹志
 - 【3次調査】　出口順一朗
 - 【整理作業】　出口順一朗・堂込秀人・東徹志
 - 【報告書作成】　出口順一朗・横手浩二郎・東徹志
5. 遺物撮影を横手浩二郎氏（鹿児島県立埋蔵文化財センター）に、遺物写真の現像・焼付けを大村彌紀氏・中川ヒロミ氏（鹿児島県立埋蔵文化財センター）に行って頂いている。
6. 発掘調査及び報告書作成に際して、一部の業務を次の機関に委託して作業を実施している。
発掘作業員派遣：社団法人有明町シルバー人材センター
遺構実測作業（1次）：株式会社コバルト技建
航空写真撮影：有限会社ふじた
自然科学分析：パリノ・サーヴェイ株式会社、株式会社古環境研究所
石器の実測・トレース作業（おもに剥片石器）：株式会社埋蔵文化財サポートシステム鹿児島支店
鉄器保存処理と分析：財団法人元興寺文化財研究所
7. 発掘調査・整理作業ならびに報告書作成に際しては、以下の方々のご指導・ご支援を賜った。記して感謝を申し上げたい。また、発掘期間中には鹿児島大学法文学部埋蔵文化財教室 助手 中村直子氏、鹿児島短期大学 講師 大西智和氏にご指導をお願いし、有益な教示と助言を受けている。感謝申し上げたい。
新東晃一・池畠耕一・黒川忠広・鶴田静彦・福永修一（鹿児島県立埋蔵文化財センター）、杉山真二（株式会社古環境研究所）、賦句博隆（新和技術コンサルタント株式会社）、井上美知子・橋本英将（財団法人元興寺文化財研究所）、諫早直人（京都大学大学院）、和田るみ子（鹿児島大学大学院）、東朋子
【組織別・順位不同・敬称略】
8. 本書の作成には出口順一朗・横手浩二郎・堂込秀人・東徹志が携わり、執筆を中水忍・出口・東が分担して行っている。編集は出口・東が行っている。
9. 調査記録及び遺物の保管は、鹿児島県曾於郡有明町野井倉1756番地有明町役場および農業歴史資料館内に保管する。問合せ先は有明町教育委員会社会教育課まで。

凡　例

1. 各調査及び作業については、鹿児島県教育庁文化財課及び鹿児島県立埋蔵文化財センターの指導に準拠している。
2. 本書に用いたレベル数値及び座標値は、縁資源公団九州支社（現、独立行政法人縁資源機構九州整備局）が提示した事業実施計画図面の数値に基づいている。旧測地形を用いている。
3. 図中の方位は、主に座標値を用い、一部で磁北を使用している。磁北のときは「MN」と標記している。
4. 図の縮尺は各図に示している。図中に見られる「」は断面位置を示している。
5. 遺物番号は章ごとに通し番号とし、章外の文中や図版などでは「章番号. 番号」で標記している。本文及び挿図・図版中の番号は一致している。
6. 写真図版の遺物写真是縮尺を統一していない。
7. 本書に用いた地図は、有明町所有の『有明町管内図』を使用している。
8. 層の呼称で用いた「アカホヤ火山灰層」・「サツマ火山灰層」の推定は調査員の肉眼観察によるものである。下堀遺跡・牧遺跡の火山灰分析において相違ないことが確認されている。
9. グリッド名は南北方向をアルファベット、東西方向を数字で表し、表記は「アルファベット+数字」とした。報告書におけるグリッド名は調査時のものと異なり、基点を調査時のものから西にグリッド3つ分を移動している。
例) 調査時「C18」⇒報告書「C21」
10. 穫穴住居内における遺物分布状況は、検出面（Ⅷ層上面）以下における状況である。
11. 土色名に数字が入っているものは、小山正忠・竹原秀雄編・著 2001 農林水産省農林水産技術会議事事務局監修 財団法人日本色彩研究所色票監修 「新版標準土色帖23版」に準じた。記載に際しては、原則として色名・記号・土質の順で記した。

目 次

巻頭カラー図版

報告書抄録

序 文

例 言

凡 例

第Ⅰ章 調査に至る経緯と経過	(出口・東) 1
第Ⅱ章 遺跡の環境	(出口) 4
第Ⅲ章 確認調査の概要	(中水・東) 7
第Ⅳ章 調査の方法	(出口・東) 16
第Ⅴ章 層序	(東) 18
第Ⅵ章 北区（縄文前期・古墳・古代・中世・近世）の概要	(出口・東) 20
第Ⅶ章 西区（古墳）の概要	(出口) 81
第Ⅷ章 東区（古墳・弥生・近世）の概要	(出口) 84
第Ⅸ章 東南区（古墳・中世・近世）の概要	(出口) 114
第Ⅹ章 南区（後期旧石器・縄文早期・中世・近世）の概要	(東) 121
第Ⅺ章 分析	
第1節 分析について	(東) 159
第2節 自然科学分析（1）	(パリノ・サーヴェイ株式会社) 162
第3節 自然科学分析（2）	(株式会社古環境研究所) 165
第4節 鉄器の保存処理と分析	(財団法人元興寺文化財研究所) 171
第5節 石鏃について	(和田るみ子) 172
第Ⅻ章 まとめにかえて	(出口) 176

図 版

あとがき・後付け

挿図・表・写真目次

報告書抄録			
図 I 調査地点			
第II章			
図 II.01 周辺遺跡の分布	5	図 VI.08 北区 穴住居 2 出土遺物	27
表 II.01 周辺遺跡一覧	6	図 VI.09 北区 穴住居 2 遺物出土状況	28
第III章			
図 III.01 確認 6 レンチ 北西壁土層断面と 基本層序	7	図 VI.10 北区 穴住居 3	29
図 III.02 確認調査 レンチ配置	8	図 VI.11 北区 穴住居 3 出土遺物	29
図 III.03 確認 1 レンチ 遺構検出状況	9	図 VI.12 北区 穴住居 3 出土石器	31
図 III.04 確認 2・3 レンチ 遺構検出状況	10	図 VI.13 北区 穴住居 3 遺物出土状況	31
図 III.05 穴住居 1 土器 1 出土状況	10	図 VI.14 北区 穴住居 4	32
図 III.06 穴住居 3 土器 2 出土状況	10	図 VI.15 北区 穴住居 4 出土遺物(1)	32
図 III.07 確認 2・3 レンチ 出土遺物(1)	10	図 VI.16 北区 穴住居 4 出土遺物(2)	33
図 III.08 確認 2・3 レンチ 出土遺物(2)	11	図 VI.17 北区 穴住居 4 出土遺物(3)	35
図 III.09 確認 2・3 レンチ 出土遺物(3)	13	図 VI.18 北区 穴住居 4 遺物出土状況	36
図 III.10 確認 7 レンチ 遺構配置状況と 出土遺物	14	図 VI.19 北区 穴住居 5	37
図 III.11 確認 5 レンチ 遺構検出状況	15	図 VI.20 北区 穴住居 5 出土遺物(1)	37
図 III.12 確認 8 レンチ 遺構検出状況	15	図 VI.21 北区 穴住居 5 出土遺物(2)	38
写真 III.01 確認-穴住居 1	15	図 VI.22 北区 穴住居 5 遺物出土状況	39
写真 III.02 土器 III-1 出土状況	15	図 VI.23 北区 穴住居 6	40
写真 III.03 土器 III-2 出土状況	15	図 VI.24 北区 穴住居 6 出土遺物(1)	40
第IV章			
図 IV.01 調査区配置とグリッド	17	図 VI.25 北区 穴住居 6 出土遺物(2)	41
第V章			
表 V.01 基本層序	19	図 VI.26 北区 穴住居 6 遺物出土状況	42
第VI章			
図 VI.01 北区・西区 遺構配置(1)	20	図 VI.27 北区 土壙墓	43
図 VI.02 北区・西区 遺構配置(2)	21	図 VI.28 北区 土壙墓 出土遺物	43
図 VI.03 北区 穴住居 1	23	図 VI.29 北区 土坑 I 類	44
図 VI.04 北区 穴住居 1 出土遺物(1)	23	図 VI.30 北区 土坑 I 類 出土遺物	44
図 VI.05 北区 穴住居 1 出土遺物(2)	24	図 VI.31 北区 土坑 II 類	44
図 VI.06 北区 穴住居 1 遺物出土状況	25	図 VI.32 北区 土坑 III 類(1)	45
図 VI.07 北区 穴住居 2	27	図 VI.33 北区 土坑 III 類 出土遺物(1)	45
		図 VI.34 北区 土坑 III 類(2)	45
		図 VI.35 北区 土坑 III 類 出土遺物(2)	46
		図 VI.36 北区 土坑 III 類(3)	46
		図 VI.37 北区 土坑 IV 類(1)	48
		図 VI.38 北区 土坑 IV 類(2)	49
		図 VI.39 北区 土坑 IV 類 出土遺物	49
		図 VI.40 北区 挖立柱建物 1・2	51
		図 VI.41 北区 挖立柱建物 1・2 周辺遺構配置	52
		図 VI.42 北区 挖立柱建物 3・4	53
		図 VI.43 北区 挖立柱建物 3・4 周辺遺構配置	54
		図 VI.44 北区 挖立柱建物 5・6	55
		図 VI.45 北区 挖立柱建物 5・6 柱列 1~4	

周辺遺構配置	56	表VI.19 北区 土坑III類 計測表	47
図VI.46 北区 挖立柱建物7・8	57	表VI.20 北区 土坑IV類 計測表	47
図VI.47 北区 挖立柱建物7・8		表VI.21 北区 土坑V類 計測表	50
周辺遺構配置	58	表VI.22 北区 土坑 出出土器 観察表	50
図VI.48 北区 挖立柱建物9～11・13	59	表VI.23 挖立柱建物1の計測表	52
図VI.49 北区 挖立柱建物12・14	60	表VI.24 挖立柱建物2の計測表	52
図VI.50 北区 挖立柱建物9～14		表VI.25 挖立柱建物3の計測表	52
周辺遺構配置	61	表VI.26 挖立柱建物4の計測表	52
図VI.51 北区 道1 硬化面検出状況	62	表VI.27 挖立柱建物5の計測表	55
図VI.52 北区 道1 土層断面	62	表VI.28 挖立柱建物6の計測表	55
図VI.53 北区 道1 遺物分布状況	63	表VI.29 柱列1～4の計測表	55
図VI.54 北区 道1 出土遺物(1)	64	表VI.30 挖立柱建物7の計測表	57
図VI.55 北区 道1 出土遺物(2)	65	表VI.31 挖立柱建物8の計測表	57
図VI.56 北区 溝1・2	67	表VI.32 挖立柱建物9の計測表	60
図VI.57 北区 溝3～7・10 周辺遺構配置	69	表VI.33 挖立柱建物10の計測表	60
図VI.58 北区 溝3～7 横断面	70	表VI.34 挖立柱建物11の計測表	60
図VI.59 北区 溝5～7 土層断面略図	71	表VI.35 挖立柱建物12の計測表	60
図VI.60 北区 溝5～7 出土遺物	72	表VI.36 挖立柱建物13の計測表	60
図VI.61 北区 溝9	72	表VI.37 挖立柱建物14の計測表	60
図VI.62 北区 V層 出土遺物(1)	75	表VI.38 北区 V層出土石器 計測表	73
図VI.63 北区 V層 出土遺物(2)	76	表VI.39 北区 V層出土・表面採集土器 観察表	74
図VI.64 北区 I・V層 出土遺物	77	写真VI.01 土器VI.101 出土状況	72
図VI.65 北区 V層 出土遺物(3)	78	写真VI.02 土器VI.178 出土状況	72
図VI.66 北区 V層 出土遺物(4)	80	写真VI.03 北区 清10 土層堆積状況	72
図VI.67 北区 V～VII層 出土遺物(5)	80		
表VI.01 北区 積穴住居1 計測表	22		
表VI.02 北区 積穴住居1 出土土器 観察表	25		
表VI.03 北区 積穴住居2 計測表	26	第VII章	
表VI.04 北区 積穴住居2 出土土器 観察表	26	図VII.01 西区 土坑1～9	82
表VI.05 北区 積穴住居3 計測表	28	図VII.02 西区 V・VI層出土・表面採集遺物	83
表VI.06 北区 積穴住居3 出土土器 観察表	30	図VII.03 西区 V層 出土遺物	83
表VI.07 北区 積穴住居3 出土石器 計測表	30	表VII.01 西区 土坑 計測表	81
表VI.08 北区 積穴住居4 計測表	34	表VII.02 西区 V・VI層出土・表面採集土器 観察表	81
表VI.09 北区 積穴住居4 出土土器 観察表	34	表VII.03 西区 V層出土石器 計測表	83
表VI.10 北区 積穴住居4 出土石器 計測表	34		
表VI.11 北区 積穴住居5 計測表	35		
表VI.12 北区 積穴住居5 出土土器 観察表	36	第VIII章	
表VI.13 北区 積穴住居6 計測表	39	図VIII.01 東区 遺構配置	85
表VI.14 北区 積穴住居6 出土土器 観察表	39	図VIII.02 東区 積穴住居1～4 周辺遺構配置	86
表VI.15 北区 積穴住居6 出土石器 計測表	41	図VIII.03 東区 積穴住居1	87
表VI.16 北区 土壙基 計測表	42	図VIII.04 東区 積穴住居1 出土遺物(1)	87
表VI.17 北区 土坑I類 計測表	43	図VIII.05 東区 積穴住居1 出土遺物(2)	88
表VI.18 北区 土坑II類 計測表	44	図VIII.06 東区 積穴住居1 遺物出土状況	89
		図VIII.07 東区 積穴住居2	90

図VIII.08	東区 穹穴住居 2 出土遺物(1).....	90	第IX章		
図VIII.09	東区 穹穴住居 2 出土遺物(2).....	91	図IX.01	東南区 造構配置	115
図VIII.10	東区 穹穴住居 2 遺物出土状況.....	92	図IX.02	東南区 穹穴住居 1 周辺造構配置.....	116
図VIII.11	東区 穹穴住居 3	94	図IX.03	東南区 穹穴住居 1	117
図VIII.12	東区 穹穴住居 3 出土遺物(1).....	94	図IX.04	東南区 穹穴住居 1 出土遺物.....	117
図VIII.13	東区 穹穴住居 3 出土遺物(2).....	95	図IX.05	東南区 溝1~4 土坑1~4	118
図VIII.14	東区 穹穴住居 3 遺物出土状況.....	96	図IX.06	東南区 出土遺物	119
図VIII.15	東区 穹穴住居 4	98	表IX.01	東南区 穹穴住居 1 計測表.....	114
図VIII.16	東区 穹穴住居 4 出土遺物.....	98	表IX.02	東南区 土坑 計測表.....	115
図VIII.17	東区 穹穴住居 4 遺物出土状況.....	99	表IX.03	東南区 溝 計測表.....	115
図VIII.18	東区 穹穴住居 5・6	100	表IX.04	東南区 出土土器 観察表.....	120
図VIII.19	東区 穹穴住居 5・6 出土遺物.....	100			
図VIII.20	東区 土坑 8 出土遺物.....	102	第X章		
図VIII.21	東区 土坑1~8	102	図X.01	南区 南壁土層断面	121
図VIII.22	東区 土坑9~15	103	図X.02	南区 調査区配置	122
図VIII.23	東区 土坑201.....	104	図X.03	検出面1 造構配置	122
図VIII.24	東区 土坑201 出土遺物(1)	104	図X.04	南区 検出面1 道4・溝11・土坑4 ほか周辺造構配置	123
図VIII.25	東区 土坑201 出土遺物(2)	105	図X.05	南区 検出面1 溝1・2 土層断面	123
図VIII.26	東区 溝1	108	図X.06	南区 検出面1 土坑4	124
図VIII.27	東区 溝1 出土遺物(1)	108	図X.07	南区 検出面1 道4・土坑4の 周辺造構検出状況	125
図VIII.28	東区 溝1 出土遺物(2)	109	図X.08	南区 検出面1 土坑4の 周辺造構(土坑6・溝3・6)	125
図VIII.29	東区 溝2~5	110	図X.09	南区 検出面1 土坑1~3	126
図VIII.30	東区 V層出土・表面採集遺物	112	図X.10	南区 検出面1 土坑8~11	127
図VIII.31	東区 V層 出土遺物	113	図X.11	南区 検出面1 掘立柱建物1~3	128
表VIII.01	東区 穹穴住居 1 計測表	84	図X.12	南区 検出面1 掘立柱建物1~3の 周辺造構配置	129
表VIII.02	東区 穹穴住居 1 出土土器 観察表	88	図X.13	南区 検出面1 掘立柱建物4・5	130
表VIII.03	東区 穹穴住居 1 出土石器 計測表	88	図X.14	南区 検出面1 掘立柱建物6	130
表VIII.04	東区 穹穴住居 2 計測表	91	図X.15	南区 検出面1 道1~3、 掘立柱建物4・5の周辺造構配置	132
表VIII.05	東区 穹穴住居 2 出土土器 観察表	92	図X.16	南区 検出面1 掘立柱建物6、 柱列2・3の周辺造構配置	133
表VIII.06	東区 穹穴住居 3 計測表	93	図X.17	南区 検出面1 柱列1	134
表VIII.07	東区 穹穴住居 3 出土遺物 観察表	93	図X.18	南区 検出面1 風側木痕	134
表VIII.08	東区 穹穴住居 4 計測表	97	図X.19	南区 検出面1 柱穴1~3	134
表VIII.09	東区 穹穴住居 4 出土土器 観察表	97	図X.20	南区 検出面1 道1~3	136
表VIII.10	東区 穹穴住居 4 出土石器 計測表	97	図X.21	南区 検出面1 道4・溝11	137
表VIII.11	東区 穹穴住居 5・6 計測表	99	図X.22	南区 検出面1 道5・溝5・7	138
表VIII.12	東区 穹穴住居 5・6 出土土器 観察表	99	図X.23	南区 検出面1 道5・溝5・7の 周辺造構配置	139
表VIII.13	東区 土坑 計測表	106			
表VIII.14	東区 土坑 出土土器 観察表	106			
表VIII.15	東区 溝 計測表	107			
表VIII.16	東区 溝1 出土土器 観察表	111			
表VIII.17	東区 V層出土・表面採集土器 観察表	113			

図X.24	南区 檜出面1 溝4 土層断面	139
図X.25	南区 V・VI層 遺物分布状況	140
図X.26	南区 V・VI層 出土遺物	141
図X.27	南区 檜出面2 (XII層上面) 調査区配置	142
図X.28	南区 X・XI層 土器の分布状況	143
図X.29	南区 X・XI層 土器1類の分布状況	144
図X.30	南区 X・XI層 石器種別の 分布状況	145
図X.31	南区 X・XI層 石器石材別の 分布状況	146
図X.32	南区 X・XI層 出土土器(1)	147
図X.33	南区 X・XI層 出土土器(2)	148
図X.34	南区 X・XI層 出土土器(1)	153
図X.35	南区 X・XI層 山土石器(2)	154
図X.36	南区 X・XI層 出土石器(3)	155
図X.37	南区 X・XI層 出土石器(4)	156
図X.38	南区 X・XI層 出土石器(5)	157
図X.39	南区 補足調査 XIV層 遺物分布状況	158
図X.40	南区 補足調査トレンチ2 土層断面	158
図X.41	南区 補足調査 XIV層 出土遺物	158
表X.01	掘立柱建物1の計測表	128
表X.02	掘立柱建物2の計測表	128
表X.03	掘立柱建物3の計測表	128
表X.04	掘立柱建物4の計測表	131
表X.05	掘立柱建物5の計測表	131
表X.06	掘立柱建物6の計測表	131
表X.07	柱列1～3の計測表	131
表X.08	南区 V・VI層 出土石器の計測表	141
表X.09	南区 X・XI層 出土土器の観察表	149
表X.10	南区 X・XI層 出土剥片石器の 計測表	151
表X.11	南区 X・XI層 出土礫石器の計測表	152
表X.12	南区 XI層 出土剥片類の計測表	153
表X.13	南区 X・XI層 出土花崗岩の計測表	155
表X.14	南区 XIV層 出土剥片類の計測表	158
第Ⅺ章		
写真XI.01	分析試料(1)	160
写真XI.02	分析試料(2)	161
第2節 表1	植物珪酸体分析結果	162
写真1	植物珪酸体	164
第3節 表1	土器(胎土)の植物珪酸体 分析結果	168
図1	土器(胎土)の植物珪酸体 分析結果	169
写真1	植物珪酸体(プラント・ オバール)の顕微鏡写真	170
第4節 写真1	No.1刀子の分析箇所	171
図1	No.1刀子破断面のXRF スペクトル	171
第5節 図1	仕明遺跡 出土石鎌(VI.179)	174
表1	廣児島県内 石鎌出土遺跡	174
写真1	仕明遺跡 出土石鎌 右面刃録部 使用痕	175

図版目次

- 巻頭カラー図版
カラー図版1 空中写真(1)
カラー図版2 空中写真(2)
カラー図版3 空中写真(3)
カラー図版4 空中写真(4)
- 図版
図版1 北区 壴穴住居1
図版2 北区 壴穴住居2
図版3 北区 壴穴住居3
図版4 北区 壴穴住居4
図版5 北区 壴穴住居5
図版6 北区 壴穴住居6
図版7 北区 掘立柱建物
図版8 北区 道1
図版9 北区 溝1~7
図版10 北区 溝4~10
図版11 北区 溝7
図版12 北区 土坑・土壙墓
図版13 南区 掘立柱建物
図版14 南区 道
図版15 南区 土坑
図版16 東区 壴穴住居1
図版17 東区 壴穴住居2
図版18 東区 壴穴住居3
図版19 東区 壴穴住居4
図版20 東区 壴穴住居5・6
図版21 東区 土坑
図版22 東区 溝
図版23 西区
- 図版24 東南区(2次)
図版25 東南区(3次)
図版26 南区 繩文時代早期・後期旧石器時代の調査
図版27 北区 壴穴住居1 出土遺物
図版28 北区 壴穴住居2・3 出土遺物
図版29 北区 壴穴住居4 出土遺物
図版30 北区 壴穴住居5 出土遺物
図版31 北区 壴穴住居6 出土遺物
図版32 東区 壴穴住居1・2 出土遺物
図版33 東区 壴穴住居3 出土遺物
図版34 東区 壴穴住居4、5・東南区
 壴穴住居1・北区 土坑・北区
 土壙墓 出土遺物
図版35 東区 土坑201 出土遺物
図版36 東区 溝1 出土遺物
図版37 北区 V層 出土遺物(1)
図版38 北区 V層 出土遺物(2)
図版39 北区 V層 出土遺物(3)・
 東南区(2・3次) 出土遺物
図版40 東区 V層 出土遺物
図版41 出土鉄器 X線写真
図版42 北区 道1 出土遺物
図版43 北区 溝1~10 出土遺物
図版44 北区 V~VII層 出土遺物、確認調査
 出土土器
図版45 確認調査 出土遺物
図版46 南区 II~V層 出土遺物
図版47 南区 X・XI層 出土土器
図版48 南区 X・XI層 出土石器

第Ⅰ章 調査に至る経緯と経過

第1節 調査に至る経緯

独立行政法人総合資源機構九州整備局（以下「機構」）は、大隅中央区域において農用地総合整備事業を計画し、事業区内の埋蔵文化財包蔵地の有無について鹿児島県教育委員会文化財課に照会した。

これを受けて、鹿児島県立埋蔵文化財センター（以下、「県立埋蔵文化財センター」）と有明町教育委員会社会教育課（以下、「町社会教育課」）が平成8年6月に埋蔵文化財分布調査を実施したところ、事業区内に遺物散布地として仕明遺跡が存在することが判明した。

この分布調査の結果をもとに、機構・県文化財課・町社会教育課は、埋蔵文化財の保護と事業の調整を図るために協議を行った結果、事業着手前に埋蔵文化財確認調査（以下、「確認調査」）を実施することとなった。

確認調査は県立埋蔵文化財センターの協力で、有明町教育委員会が調査主体となり平成10年8月31日～9月18日（14日間）まで実施した。確認調査の結果、中世・古代・古墳時代・弥生時代・縄文時代早期の遺物包含層の存在が明らかとなった。

この結果を受けて、遺跡の取り扱いについて機構・県文化財課・町社会教育課は、遺跡の現状保存及び事業の設計変更等について協議を実施した。その結果、事業推進にあたっては遺跡の現状保存は困難であると判断し、道路部分については記録保存のための本調査を実施することとなった。（出口）

第2節 調査の経過

発掘調査

本調査は3ヶ年に渡って行われ、平成12年度は5月18日～7月19日、8月18日～9月1日、11月1日～11月11日、平成13年1月27日～3月22日（94日間）を、平成13年度は平成13年6月5日～10月22日（97日間）を、平成14年度は路線の一部変更に伴う拡張部分を平成14年7月16日～同月26日（8日間）にかけて、県立埋蔵文化財センターの協力のもと、有明町教育委員会が本調査を実施している。（出口）

整理作業

平成13～16年度にかけて、随時、報告書作成に至るまでの作業を実施している。

作業はおもに野口さとりを中心に、田之上ともみ・八久保 壇・川ノ上真理・安野美子・若松孝雄・円福佳一・加藤英仁・徳留 愛・山元弓枝が行っている。

委託した石器の実測・トレースは、堂込秀人氏に選別から確認・修正まで行って頂いている。

報告書作成

報告書作成は平成16年度に、県立埋蔵文化財センター横手浩二郎氏のもと、徳留愛・安野美子を中心に、以下の者が作業を実施している。

各作業は次のように分担している。北区～東南区の遺物・遺構の図化及び挿図レイアウトは、横手氏のもと徳留・安野・若松孝雄が行い、南区と一部の北区の遺物・遺構の図化及び挿図レイアウトは、東徹志のもと徳留・安野・川ノ上真理が行っている。南区-検出面2の遺物分布図作成は賦句博隆氏に行っている。遺物の石膏復元は若松が、委託以外の礫石器の実測・トレースは東のもと山元弓枝が行なっている。

写真図版は、横手氏のもとレイアウトを出口順一朗・東が分担して行い、遺物撮影を横手氏に、現像・焼付けを大村彌紀氏・中川ヒロミ氏に行って頂いている。

なお、発掘から報告書刊行に至るまでの事務処理を吉井麗子が補助している。（東）

第3節 調査の組織

確認調査（平成10年度）

調査主体	有明町教育委員会	教育長	大脇茂夫
調査総括	有明町教育委員会	社会教育課長	高崎成行
調査企画担当	有明町教育委員会	社会教育課長補佐兼社会教育課係長	濱島兼雄
	"	社会教育課主事	黒川晃
	"	社会教育課主事	中水忍
調査担当	有明町教育委員会	社会教育課主事	前追亮一
	鹿児島県立埋蔵文化財センター	文化財主事	

[重機操縦] 山口邦好（宮内機械有限会社）

[作業員] 穴見サエ子 有野昭海 市來原勝男 井ヶ倉トミヨ 宇都ミキ 江野光子 勝田ハツミ
仮谷静子 木佐タエ子 小平光子 深谷芳治 鈴木綱枝 瀬口イク 瀬口エミ 田迫チヅ
立迫利治 立山キエ 立山利行 谷川静枝 立本トシ 富山サチ 土橋ヨシ子 留村アヤ子
長竹健次 中野京子 中野ノリ 中村未古 新保松夫 西良 西平ミスミ 野口實 横山貞男
原浦八重子 原田トミ 前田重良 前野正美 南川哲美 持永ハツ子 持留タキ子 持留唯重
持留照子 山添早苗 吉岡ミチ 若宮庸成

（社団法人有明町シルバー人材センター）

1次調査（平成12年度）

調査主体	有明町教育委員会	教育長	大迫亨
調査総括	有明町教育委員会	社会教育課長	立山廣幸
調査企画	有明町教育委員会	社会教育課長補佐	濱島兼雄
	"	社会教育係長	鬼塚仁
	"	社会教育課主事	中水忍
調査担当者	有明町教育委員会	社会教育課主事	出口順一朗
	"	社会教育課臨時職員	東徹志
	鹿児島県立埋蔵文化財センター	文化財主事	堂込秀人
	"	文化財主事	鶴田靜彦

[補助員] 田之上ともみ 野口さとり 八久保豈 吉井麗子

[重機操縦] 山口邦好（宮内機械有限会社）

[作業員] 阿久根久子 有野昭海 池坂ミツ子 池之上エミ 市來原勝男 稲付辰夫 稲田光昭
岩根重春 井ヶ倉トミヨ 伊田カズ 宇都ミキ 大池萬里子 大保ユキエ 小野タミ 堀内セツ
川野雄幸 川原スミ子 木佐 煎 北野サエ 口山英郎 蔵坪サエ 藏ヶ崎満男 黒木郁子
黒木洋一 黒山フミ 小平光子 坂中ハツエ 重井キヤク 重田 幡 鈴木綱枝 瀬口イク
瀬口トミエ 園山キヤク 斎田ナル 立迫利治 立山キクエ 立山利行 立平涼子 田中寅男
谷川静枝 谷口チエ 谷口久子 谷口モギ 種子田サチ子 富追利満 富山サチ 中島政美
中野京子 中野ノリ 中本雅紹 長崎健次 鍋 サチ 野口サチ 野崎ミヤ子 野村直
櫛山貞男 橋口トシ 渡田信雄 原浦八重子 平井静男 平元トミエ 福留サチ 前田重良
牧原正則 牧本久子 牧元フジ 馬原キヨ 宮脇フミエ 水口ミチ子 本室富士雄 森山敬子
山床ユミ 山平アヤ子 山平一美 山平キサ子 山元フクミ 山口シズエ 山口行則 山添早苗
若宮庸成

（社団法人有明町シルバー人材センター）

2次調査（平成13年度）

調査主体	有明町教育委員会	教育長	大迫亨
調査総括	有明町教育委員会		

調査企画	有明町教育委員会	社会教育課長	立山廣幸
	"	社会教育課長補佐	畠山昭俊
	"	社会教育係長	鬼塚 仁
調査担当者	有明町教育委員会	社会教育課主事	出口順一朗
	"	社会教育課主事	東 徹志
	鹿児島県立埋蔵文化財センター	文化財主事	堂込秀人
	"	文化財研究員	横手浩二郎

〔補助員〕 野口さとり 八久保 壱 川ノ上真理 安野美子 円福佳一 若松孝雄 吉井麗子

〔重機操縦〕 田畑国彦(株式会社サカモト)

〔作業員〕 阿久根久子 稲付辰夫 稲田光昭 伊田カズ 岩山幸三 上山彰一 宇都ミキ 円福モミ
仮屋登九 川野雄幸 川俣ミツ 北野サエ 黒木郁子 藏坪サエ 小平光子 鈴木絹枝 濱口イク
園山キヤク 國田信夫 立追サチ 立本 翼 立木トシ 立山キエ 立山利行 谷川静枝
谷口チエ 谷口久子 谷口モギ 田追チヅ 羽 次江 富迫利満 富山サチ 留口チエ 中川 亨
中島政美 中野京子 中本雅紹 長竹健次 永野タミ 鍋 サチ 新保綾子 新保松夫 野村 直
野口雪子 野崎ミヤ子 橋口トシ 原浦八重子 別府義視 牧本久子 水野孝允 持永ハツ子
本室富士雄 森山敏子 安田直男 山平アヤ子 山平一美 山平親行 山元フクミ 山口行則
山添早苗 吉国政利

(社団法人有明町シルバー人材センター)

3次調査（平成14年度）

調査主体	有明町教育委員会	教育長	大迫 亨
調査総括	有明町教育委員会	社会教育課長	立山廣幸
調査企画	有明町教育委員会	社会教育課長補佐	畠山昭俊
	"	社会教育係長	鬼塚 仁
調査担当者	有明町教育委員会	社会教育課主事	出口順一朗
〔補助員〕	野口さとり 安野美子 若松孝雄 加藤英仁 吉井麗子		
〔作業員〕	富迫利満 野崎ミヤ子 原浦八重子 小平光子 新保松夫 新保綾子 山元フクミ		
		(社団法人有明町シルバー人材センター)	

整理作業（平成13年度～平成16年度）

〔補助員〕 田之上ともみ 野口さとり 川ノ上真理 安野美子 加藤英仁 八久保 壱 徳留 愛
山元弓枝 吉井麗子

報告書作成（平成16年度）

調査主体	有明町教育委員会	教育長	長重逸郎
調査総括	有明町教育委員会	社会教育課長	徳満裕幸
調査企画	有明町教育委員会		中崎秀博
			※平成17年1月1日より
	"	社会教育課長補佐	森重晃一
	"	社会教育係長	岩元秀光
調査担当者	有明町教育委員会	社会教育課主事	出口順一朗
	"	社会教育課主事	東 徹志
	鹿児島県立埋蔵文化財センター	文化財研究員	横手浩二郎
〔補助員〕	川ノ上真理 安野美子 若松孝雄 徳留 愛 山元弓枝 吉井麗子		

第II章 遺跡の位置及び環境

第1節 有明町の概要

仕明遺跡の所在する有明町は、大隅半島の東南部に位置し、北東部に松山町、北西部に大隅町、東部に志布志町、南西部に大崎町に隣接し、町の東南部は約1.7kmが志布志湾に面している。総面積は98.05km²あり、そのうち県内でも珍しい「飛地」1.02km²が隣接する大崎町内にある。地形は、全体として志布志湾に向かって緩い勾配になっており、平野部が極端に少なく、100mの等高線をもつて北部の山岳・丘陵地帯と南部の台地に二分される。北部の山岳・丘陵地帯は安楽川の支流である高下谷川と本村川によって開拓された伊崎田台地と、霧岳(408.3m)、岳野山(278m)、宇都山(179m)、草野丘(268m)及び伊崎田鍋・川添・山重から沢津ヶ峯を含む100~170mの山岳地帯を含む地域で、中生層を基盤として準平原化の後周囲の台地が形成されたものといわれ、山地の開析は相当に進んでいるので、火山灰台地面を除いてほとんど平坦面を残していない。開析が進んで地形が複雑になっていることは、この地域の交通に及ぼす影響が大きく、山岳・丘陵地帯の集落は谷間に点在している。南部の台地は姶良カルデラ起源による火山噴出物の台地であり、北部山岳・丘陵地帯の南端に近い町の中央部に位置し、標高20~100mの台地である。また、この台地を分断するように町の中央を菱田川が流れ、その沿岸に河岸段丘が形成されている。この河岸段丘は三段階の段丘に大別され、第三段丘面は標高30~60mの広い台地面を形成し、この一帯は明治から昭和にかけて先人たちの努力によって開墾された蓬原開田・野井倉開田が拓がっている。

第2節 周辺遺跡の概要

町内の遺跡は、昭和49・53・55・58年に大隅地区埋蔵文化財分布調査の一環として鹿児島県教育庁文化課により分布調査が実施され、また近年の開発事業に伴う分布調査が行われ、各時代の遺跡が町内全域にわたって確認された。現在(平成17年3月)までに旧石器時代2ヶ所、縄文時代65ヶ所、弥生時代75ヶ所、古墳時代81ヶ所、古代20ヶ所、中世10ヶ所、その他(時代不詳等)11ヶ所が報告されているが、各時代が重複している遺跡もあり、遺跡の数としては205ヶ所が挙げられる。

本遺跡は菱田川西岸の標高約35mの河岸段丘面にあり、蓬原原の東端に位置する。本遺跡の周辺には、主に縄文時代早期、古墳時代、中世の遺跡が集中する地域である。縄文時代早期の遺跡として、平成13年度本調査の屋部当遺跡(69-150)からは石皿、破碎した焼石、平成14年度本調査の下堀遺跡(69-127)からは連穴土坑群と前平式、吉田式、倉齒B、石坂式、下剥峰式、桑ノ丸式等の土器片、平成15年度本調査の穴倉B遺跡(69-117)からは集石3基と石板式土器が出土している。古墳時代の遺跡として、まず菱田川西岸の標高45mの河岸段丘面に馬場地下式横穴(69-86)が存在し、現在までに地下式横穴が6基確認されている。昭和37年の県道拡張工事で台地を掘り下げた時に偶然発見され、一部は削平されたが、玄室から埋葬人骨と副葬されたと思われる鉄剣2本、三角鐵1本が出土している。また田原川東岸の河岸段丘面に直径40m、高さ8mの原田古墳(69-85)が存在し、これまでに詳細な調査が行われていないため埋葬者は不明であるが、伝承ではコノハナサクヤヒメの墓であるとされている。この原田古墳の南西に22mの畠地から昭和54年農作業中に偶然地下式横穴墓が発見されている。玄室が長方形プランで切妻の家形を呈し、玄室内には軽石製組合せ石棺が置かれ、石棺内には保存状態はよくないが女性のものと思われる伸展葬の脛骨、腓骨、大腸骨、骨盤、肋骨、前腕骨、脊髄が残存し、鉄製刀子1本が副葬されていた。中世の遺跡として中世城跡と伝えられる蓬原城跡(69-91)、金丸城跡(69-79)、片平城跡(69-80)が存在し、蓬原城は中世において諸郡郡守仁卿三百五十町の中心であり仁卿氏の居城であったとされ、片平城は仁卿氏が蓬原の地を治めるにあたって、最初に築いたものであるといわれている。また蓬原の地には、中世に作られたと思われる石塔が数多く現存している。

(山口)



図II.01 周辺遺跡の分布

【参考文献】

有明町教育委員会 札元遺跡・山原遺跡 〔有明町埋蔵文化財発掘調査報告書(1)〕 1985年

有明町郷土史編纂委員会 〔有明町誌〕 1980年

河口貞徳 〔日本の古代遺跡38 鹿児島〕 1988年

表Ⅱ.01 周辺遺跡一覧

番号	遺跡名	所在地	地形	時代	遺物、遺構等	備考
69 - 7	佐屋B	野井合字佐屋	台地	縄(早)・禹(後)・弥(商)	打製石斧、平底式	H11歴史分布
69 - 12	高吉	野井合字高吉・前田・下段	台地	縄(早)・弥(後)	石器	
69 - 19	平塚A	野井合字平塚・平塚上	台地	縄(後)・中世	三面式・土師器	H11歴史分布
69 - 34	向原	野井合字向原・岩坂・中川・出水	台地	縄(地)・古墳	有茎石斧 円筒形石斧・内古墳	H11歴史分布
69 - 35	平塚B	野井合字平塚・月山・小松	台地	縄(地)・中世	打製石斧・青磁	H11歴史分布
69 - 40	尾尾	野井合字尾尾	台地	縄		H11歴史分布
69 - 48	大原A	野井合字大原・日置・山ノ前	台地	弥(中)	土器・石器	
69 - 51	大原A	野井合字大原・上大原・小松	台地	縄・古墳	土器・打製石器	H11歴史分布
69 - 52	大原	野井合字大原・河山・前畑	台地	弥(後)・古墳	石器・土器	H11歴史分布
69 - 53	下木塚	野井合字下木塚・西原	台地	古墳	石器・土器	H11歴史分布
69 - 61	野谷	野井合字野谷	台地	縄		
69 - 62	井手A	野井合字井手・上・下・水波	台地	縄・弥・古墳	土器・石器・人骨・ 刀身鋒	H11歴史分布
69 - 63	古村	野井合字古村・野古	台地	縄	石器	
69 - 64	上原A	野井合字上原・西原	台地	縄	土器	
69 - 66	社明	蓮麻字社明・宮ノ前・大園・牧	台地	印・縄(早)・縄・古墳 古代・中世	鈴形住器・合子 鍛錬炉・成田式	H 8 分布調查 H12・13・14全由出来
69 - 69	片平古墳	遠原字片平明	低地	古墳	円墳	H11歴史分布
69 - 79	金丸城跡	蓮麻字神宿	丘陵	中世		H 8 歴史分布
69 - 80	片平城跡	蓮原字下平城・比司	丘陵	中世		
69 - 82	大代	野井合字大代・駒道・大代	台地	縄・古代	土器	H11歴史分布
69 - 83	平A	野井合字平	台地	古墳	打・植・人骨	H 8 歴史分布 (昭)昭52.4.21
69 - 86	馬場池・式櫻木	蓮原字平・内城	台地	古墳		
69 - 87	東	野井合字東・横崎	台地	縄	土器	H11歴史分布
69 - 89	下原C	野井合字下原・東	台地	縄・縄	土器	H11歴史分布
69 - 90	下原D	野井合字下原・東	台地	縄	土器	H11歴史分布
69 - 91	遠原城跡	蓮原字下原	台地	中世	鐵・空甕・土器	H 8 歴史分布 (昭)昭44.1.1更
69 - 92	真言宗光明院跡	蓮原字下原	台地	中世	土器	(昭)昭44.1.1更
69 - 93	御所山城跡	蓮麻字神宿	台地	中世		(昭)昭44.1.1更
69 - 101	中B	野井合字中平	台地	縄		H11歴史分布
69 - 104	上岸	野井合字上岸・高吉	台地	縄(早)・吉備	鐵器・成川式 成川式	H 8 歴史分布 H13全由出来
69 - 105	乾	蓮原字乾・外連	台地	古墳	土器	H11歴史分布
69 - 114	梅原古墳	蓮原字大原	台地	古墳	円頂	
69 - 116	施原	蓮原字施原・大原	台地	縄・古墳	土坑・成川式	H 2 歴史分布 H 9 全由出来
69 - 122	野井坂	野井合字野井坂	台地	縄		H11歴史分布
69 - 126	平B	野井合字平	台地	古代・中	土師器・青磁	H11歴史分布
69 - 143	日原	蓮原字山ノ前	台地	古墳		H10歴史分布
69 - 144	日原	蓮原字日原・持り・内城	台地	古墳		H10歴史分布
69 - 150	所部当	蓮原字所部當・大道・柳原	台地	印・縄(早)・古墳	斜片尖底器・黑石 成川式	H10歴史分布 H13全由出来
69 - 152	施原	蓮原字施原・街ノ原・星部島	台地	古墳		H10歴史分布
69 - 154	家原	野井合字家原	台地	縄・古墳	土器	H11歴史分布
69 - 156	坂上	野井合字坂上・大代	台地	縄	土器	H11歴史分布
69 - 159	塙	野井合字塙・入・神山・山浦	台地	縄	土器	H11歴史分布
69 - 167	木森	野井合字木森・山浦	台地	縄	土器	H11歴史分布
69 - 158	船原	蓮原字船原・上原	台地	縄	土器	H10歴史分布
69 - 169	上原A	野井合字上原	台地	縄	土器	H11歴史分布
69 - 169	上原B	野井合字上原・坂上	台地	古代	土器	H11歴史分布
69 - 169	上原C	野井合字上原・坂上	台地	縄	土器	H11歴史分布
69 - 169	上原D	野井合字上原・坂上	台地	縄	土器	H11歴史分布
69 - 163	中原田	野井合字中原田	台地	縄	土器	H11歴史分布
69 - 164	中原下	野井合字中原下	台地	縄	土器	H11歴史分布
69 - 165	中原A	野井合字中原	台地	季・古代	山ノ口式・土師器	H11歴史分布
69 - 183	中原	野井合字中原	台地	季・古墳	土器	H11歴史分布
69 - 185	西原A	野井合字西原	台地	季	土器	H11歴史分布
69 - 186	西原B	野井合字西原	台地	季	土器	H11歴史分布
69 - 187	上原	野井合字上原・東原・西原	台地	季・古墳	土器	H11歴史分布
69 - 188	中原	野井合字中原・西原	台地	季	土器	H11歴史分布
69 - 189	西原道A	野井合字西原道	台地	季	土器	H11歴史分布
69 - 190	西原道B	野井合字西原道	台地	縄・季	土器	H11歴史分布
69 - 191	上・段A	野井合字上・段	台地	季	土器	H11歴史分布
69 - 192	上・段B	野井合字上・段	台地	季	土器	H11歴史分布
69 - 193	上・段C	野井合字上・段	台地	季	土器	H11歴史分布
69 - 194	上・段D	野井合字上・段	台地	季	土器	H11歴史分布
69 - 195	上・段E	野井合字上・段	台地	季	土器	H11歴史分布
69 - 196	井手A	野井合字井手	台地	季	土師器	H11歴史分布
69 - 197	柳村	野井合字柳村・下段	台地	季		H11歴史分布
69 - 198	下段	野井合字下段	台地	季		H11歴史分布
69 - 199	相原上	野井合字相原上	台地	季・古墳	土器・土師器	H11歴史分布
69 - 200	大原B	蓮原字大原・井手ノ上	台地	古墳		H11歴史分布
69 - 205	前畠	野井合字前畠	台地	古墳		H11歴史分布

第III章 確認調査の概要

第1節 調査の方法

確認調査は、中水忍（有明町教育委員会）と前追亮一氏（鹿児島県立埋蔵文化財センター）を調査担当者として、対象面積約11,360m²の範囲に11ヶ所の調査トレンチを設けて状況を確認した。面積は約434m²を割り、期間は平成10年8月31日から9月18日までの14日間を要した。

調査の方法としては、遺跡の性格・範囲を把握するために対象範囲全体に地点を選んでトレンチを設定し、トレンチ数は1~11トレンチを数えた。I層を調査員の立会いのもと、ユンボにより除去した後、人力による掘り下げ作業を行い、遺物・遺構の有無の確認を実施した。遺構や遺物の範囲及び配置や分布等が、設定したトレンチの外に拡がると考えられた場合は、事業対象範囲内において随時拡張した。

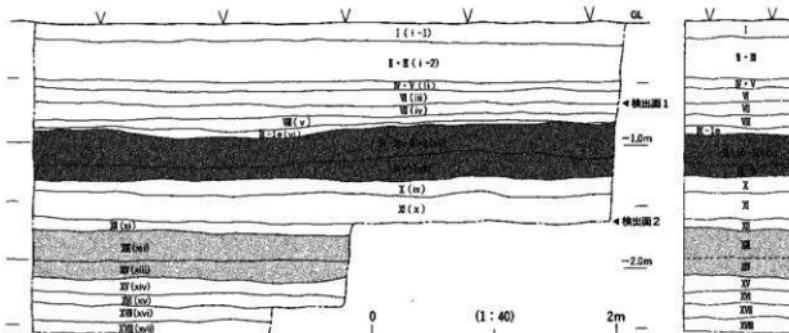
縄文時代早期に相当する層の確認は、トレンチ内に深掘り用のサブトレンチを設定して実施した。

遺構の検出については、先ずⅢ層とV層上面（検出面1）で行い、次いでXII層上面（検出面2）で行っている。

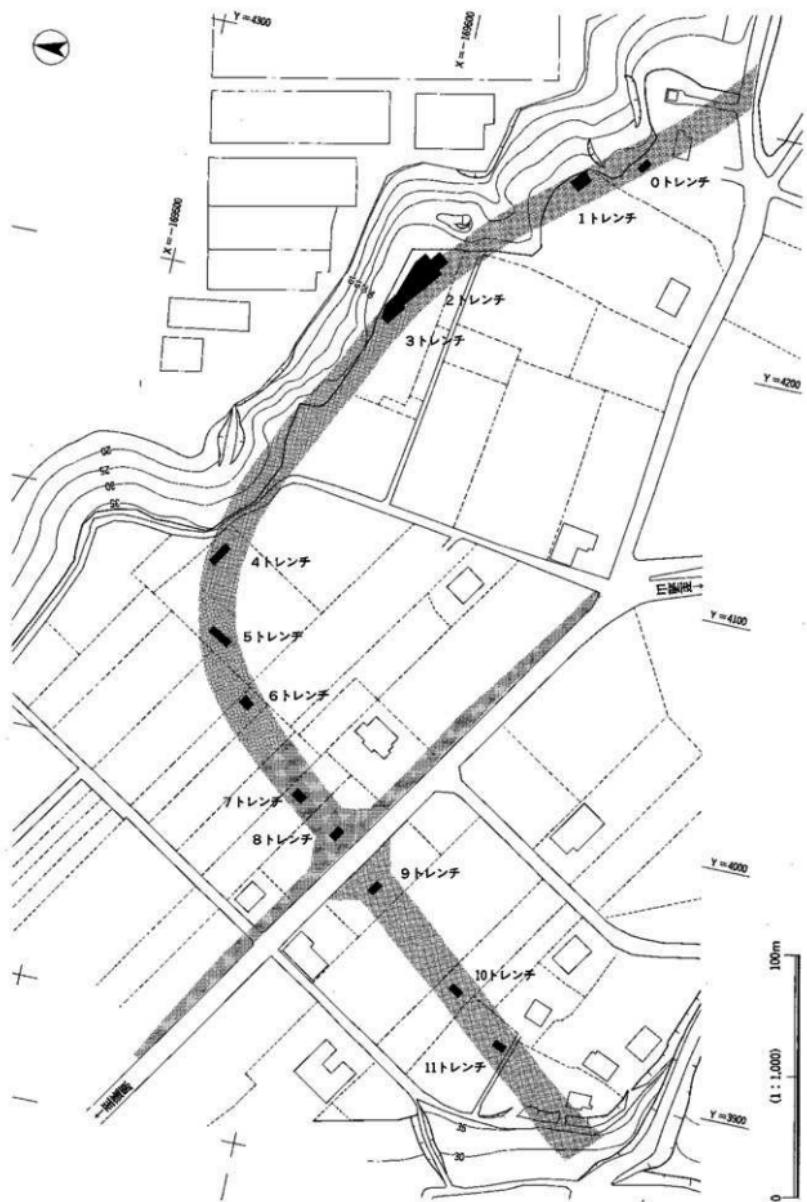
第2節 層位

対象範囲全体としては包含層の残存状況は良好であったが、一部においては旧果樹耕作による擾乱が見られた。遺物包含層は2つあり、概ねII層が近世から弥生時代にかけて、IX層が縄文時代早期に相当すると考えられる。なお、II~VI層中において縄文時代前期の土器片が出土しているが、包含層は特定できなかった。基本土層は以下のとおりである。本調査との対応関係については表V.01に示している。

I - 1 層	暗灰褐色土層	表土、現在の耕作土である。
I - 2 層	暗灰褐色土層	旧耕作土で桜島噴出物と思われる白い軽石を含む硬質層である。
II 層	黒色土層	真っ黒の腐植土で、ふかふかした軟質層である。上部は、近世に相当すると思われる遺物包含層である。下部は、弥生時代から古墳時代に相当すると思われる遺物包含層である。一部においては分層可能である。
III 層	暗茶褐色土層	約4,000年前の御池火山噴出物と思われる黄白色の降下軽石が点在している。
IV 層	黒褐色土層	やや硬質の層である。
V 層	黄白色軽石包含層	池田カルデラ噴出物と思われる黄白色の軽石が点在している。
VI 層	暗黃褐色土層	VII層の二次堆積と思われる層である。



図III.01 確認6トレンチ 北西壁土層断面と基本層序



図II.02 確認調査 トレーンチ配置

VII 層 明黄褐色火山灰層	6,300年前に鬼界カルデラから噴出したオレンジ色のアカホヤ火山灰層である。
VIII 層 黄白色土層	黄色バミス（P11か）混じりの層である。
IX 層 黒褐色土層	やや硬質の層である。
X 層 暗茶褐色土層	黄白色粒子（P12か）を含む層である。
X I 層 暗黄茶褐色土層	やや硬質のX III層の二次堆積と思われる層である。
X II 层 黄褐色土層	11,500年前のサツマ火山灰層で、平均的に堆積している。
X III 层 黑茶褐色土層	
X IV 层 淡茶褐色土層	やや粘質のある層である。
X V 层 黄褐色土層	やや粘質のある層である。
X VI 层 暗茶褐色土層	やや粘質のある層である。
X VII 层 淡黄褐色土層	小礫混じりのシラス二次堆積と思われる。やや粘質の層である。

第3節 調査の概要

1. 検出遺構

対象範囲の南側から1～4トレンチを設定して調査を開始し、その後、西側へ移動して5～11トレンチを設けて引き続き調査を実施した。なお、1トレンチの南側に1箇所トレンチを設定して調査を行い、整地のための埋土が約3m下まで続くことを確認している。これを0トレンチと呼称した。以下、トレンチごとに概要を述べる。

1 TはII層からVI層が削平されていたが、VII層上面で柱穴数個と溝を検出した。一部を深く掘り下げて下層確認をしたが遺物・遺構とも確認されなかった。

2 Tでは、II層上部から近世の陶器、古代の須恵器等が多数出土し、II層下部では弥生時代の山ノ口式土器、古墳時代の成川式土器が多数出土した。さらに、VII層上面で古墳時代と思われる竪穴住居跡1基を検出した。その中には、成川式の甕と思われる土器の大片が1個体分集中して出土し、その後の拡張部分でも同様に土器が多数出土した。拡張部分では、一部擾乱が見られたがIII層上面で古墳時代の竪穴住居跡1基と柱穴多数を検出した。

3 Tでは、部分的にVII層までの擾乱が見られたがIII層上面で古墳時代の竪穴住居跡を検出した。その他にも柱穴を多数検出した。

4・5 Tでは、II層から古墳時代の遺物が出土し、III層上面で柱穴を数個検出した。さらに一部を掘り下げて下層確認をしたが遺物・遺構とも確認されなかった。

6 Tでは、II層から古墳時代の遺物が出土したが遺構は検出されなかった。

7 Tでは、II層から古墳時代の遺物が出土した。さらに、VII層上面で土器を伴う古道と思われる遺構を検出した。

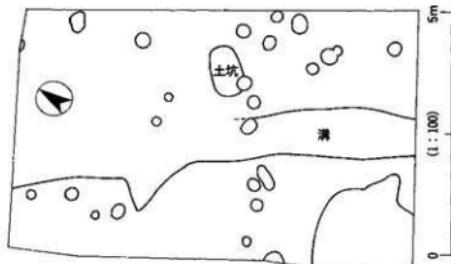
8 Tでは、土器を伴う柱穴をVII層上面で検出した。

9 Tでは、III層で遺物が出土、V層上面で柱穴を検出した。

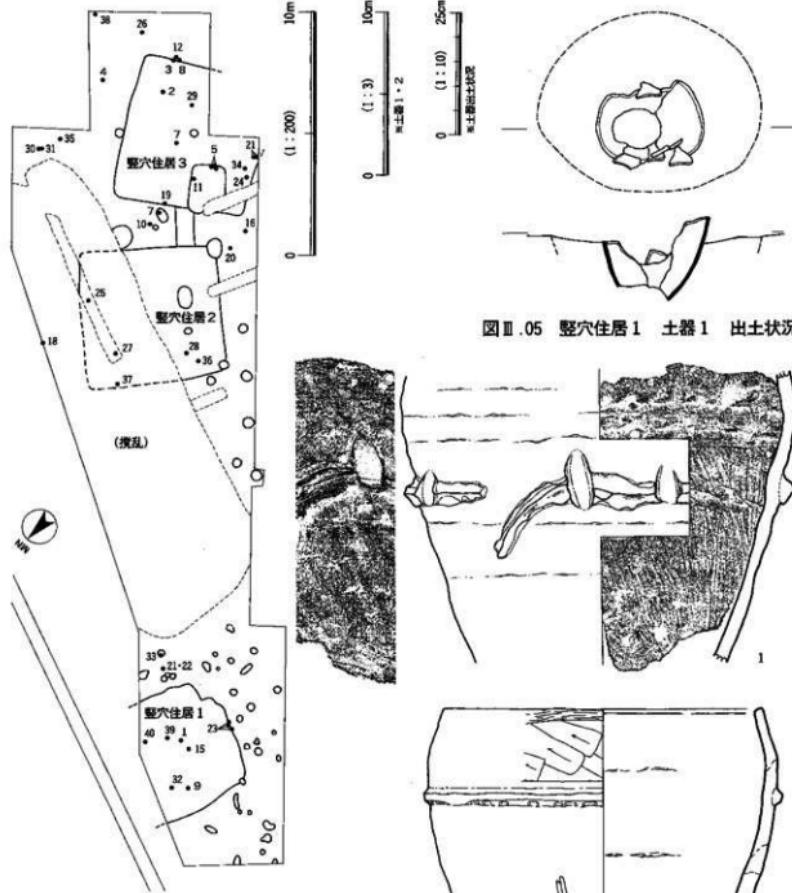
10 Tでは、III層から遺物が出土、遺構は検出されなかった。

11 Tでは、III層から遺物が出土、IX層で焼石数点が出土したが、遺構は検出されなかった。

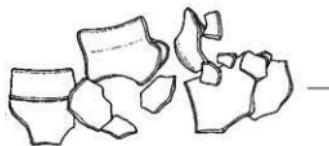
(中水)



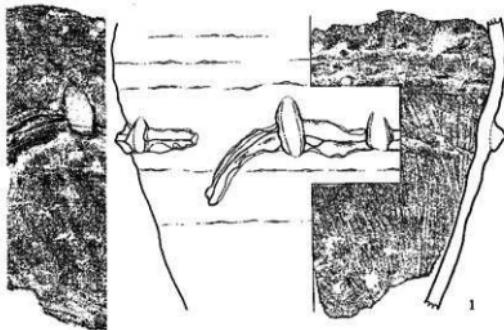
図II.03 確認1トレンチ 遺構検出状況



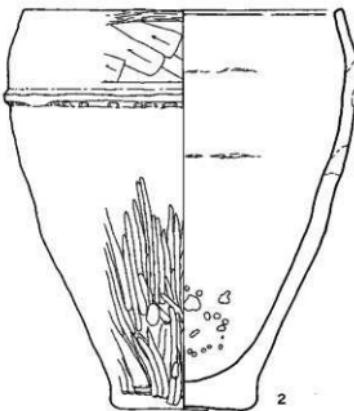
図III.04 確認2・3トレンチ 遺構検出状況



図III.06 縫穴住居3 土器2 出土状況



図III.05 縫穴住居1 土器1 出土状況



図III.07 確認2・3トレンチ 出土遺物（1）

2. 出土遺物

確認調査ではおもに2・3トレンチから遺物が出土している。時期は近世から古代・古墳時代・弥生時代・縄文時代前期までの遺物が出土している。

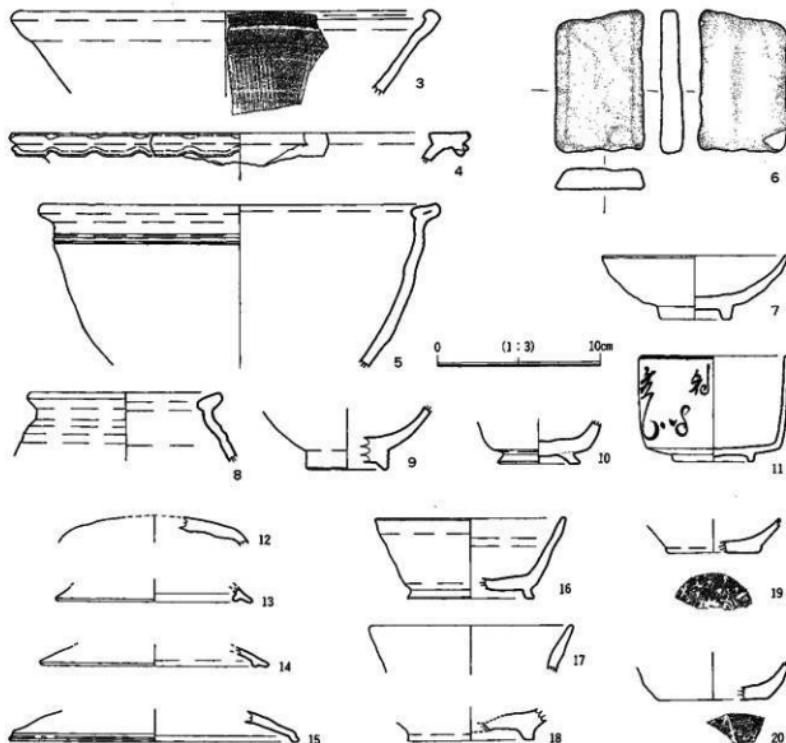
ア) 2・3トレンチ

最も多くの遺物が出土しており、時期幅も広い。遺物の分布状況は、検出されている竪穴住居内に集中している。出土状況は、確認-竪穴住居1の甕1の様に埋設されたものや、確認-竪穴住居3の甕2のようにな形土器の廃棄状況を示すものもある。詳しくは図III.04~07に示している。以下、時期別に述べる。

近世

近世の遺物は、陶磁器類3~11がある。6は石製品である。

陶器3~5・8~10は胎土の色調が赤く薩摩焼と考えられる。3~5は褐色(5YR4/1)を呈して、胎土がやや粗く1mm大の長石を多く含む。8~10は橙色(5YR6/6)を呈する。8・9は0.5mm大の長石



図III.08 確認2・3トレンチ 出土遺物(2)

を含み精緻な胎土をもつ。10は非常に粗い胎土に1mm大の長石を多く含む。器種は、3・4は擂鉢、5は鉢、8は壺、9・10は碗と考えられる。

碗7は内面にオリーブ灰色(10Y6/2)色の釉薬がかかり、胎土は精緻で、色調が灰白色(10YR8/2)を呈する。碗10は内外面が灰黄色(2.5Y6/2)、胎土は橙色(5YR6/6)を呈する。

石製品6は器面が光沢をもち、赤色化する。整った形状と被熱を受けることから温石の可能性を考えられる。

古代

古代の遺物は12~20があり、12~17は須恵器、18~20は土師器である。

須恵器12~15は杯蓋である。器面を横ナデで整える。16は高台のついた杯身、18は壺の口縁である。18の外面には自然釉がかかることもある。土師器18~20は杯身で、いずれも摩滅する。18には高台がつく。19は底面もナデで整える。20の底面にはヘラ切り痕が残る。

古墳時代

古墳時代の遺物は1・2・21~34がある。

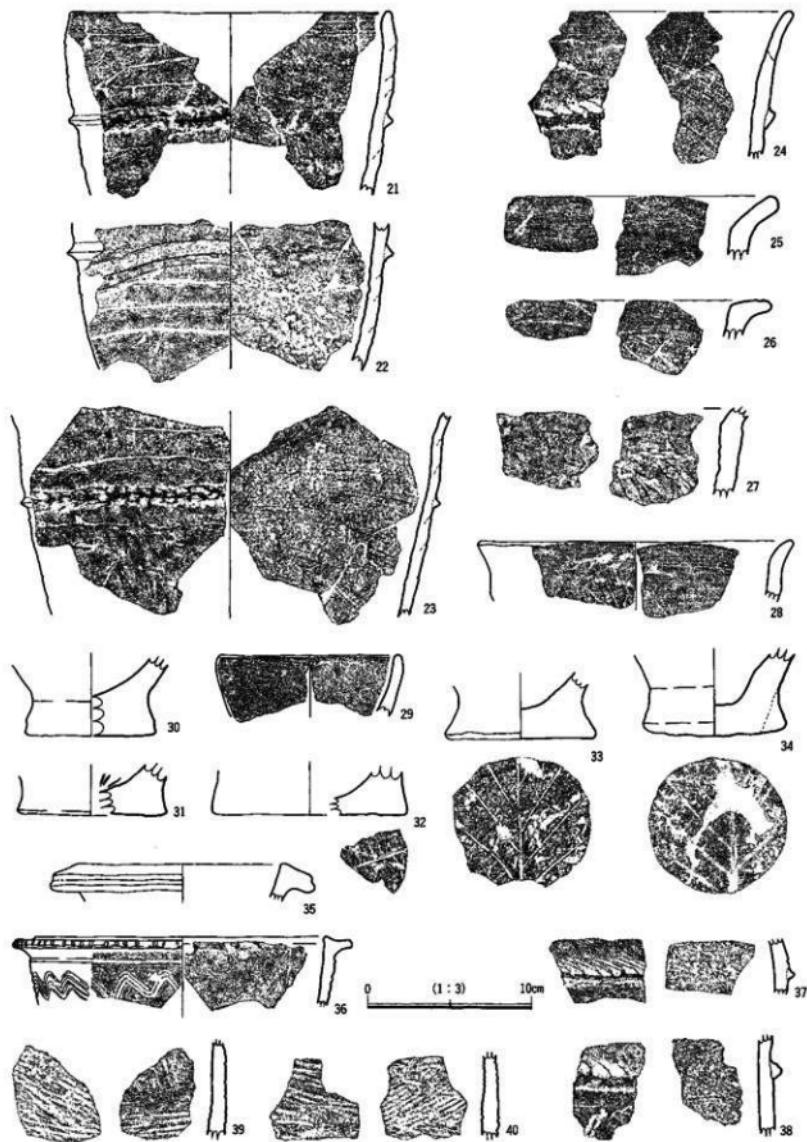
甕1は口縁部と底部が失われている。口縁部の破損は後世の削平によるものと考えられるが、底部は埋設前に打ち欠いていた可能性が考えられる。器面は外面が赤色化し、突帯より上がとくに赤い。底部近くには煤も付着する。内面は下端から6cmまでが黒化する。破損前に、立てた状態で被熱を受けたと考えられる。色調はおもにぶい褐色(7.5YR5/4)を呈する。胎土には砂粒が多く、石英・長石・雲母・黒色砂が見られる。外面には指を施す原体としたキザミを施した突帯が巡る。突帯は故意につなげていない¹。内外面の器面には接合痕を残す。調整は外面には、ナデ後に突帯を貼り付け、突帯を避けるように口縁部と底部を中心ミガキを施す。口縁部は横のミガキ、底部は斜めのミガキを施している。ミガキは幅4mmと広い。内面は横のナデ後、下3分の2に縱のミガキを施す。口縁部には指圧痕が見られる。横のナデは一部に工具を用いている可能性が考えられる。

甕2は完全な完形である。外面は煤けて内面にもタール状のものが付着する。口縁部は赤色化し、内外面に円形の剝離が見られる。色調はおもに橙色(7.5YR6/6)を呈する。胎土には砂粒は少なく、石英・長石・黒色砂が見られる。外面には突帯を貼り付けており、突帯には指頭圧痕が残る。外面の器面調整は、底部から突帯下4cmまで縱のミガキを施す。それより上は横のナデで整え、口縁部のみに横に板状工具によるナデを施す。内面は接合痕がやや残る。底部にミガキを施し、胴部から口縁部まで横のナデで整える。ナデは隨所に板状工具の木口痕が残ることから、ミガキもしくは板状工具によるナデが施されていた可能性も考えられる。外面の底面はナデで整える。

甕21・22は同一個体と考えられる。器形は口縁がやや内湾する。内面は赤色化し円形剝離が多く見られ、外面は煤けて黒色化する。色調はおもに明赤褐色(2.5YR5/6)を呈する。胎土に含まれる砂粒はやや少なく、石英・長石・雲母・黒色砂が見られる。粒度は1mm大以下で、雲母が多い。

外面には突帯を貼り付けており、突帯には指頭圧痕が残る。突帯はやや下方に下がっており、1条につながない突帯と考えられる。外面には接合痕が明瞭に残る。調整は、外面が突帯から下をナデ後に縱のミガキを施す。口縁部は内外面を横のナデで整える。内面は横もしくは斜めのナデで整える。内面のナデは工具を使用した可能性が考えられる。

甕23・24は類似しており、同一個体の可能性も考えられる。器形は口縁が外反する。内面は赤色化し円形剝離が多く見られ、外面は煤けて黒色化する。色調は、胴部23の内面が明赤褐色(2.5YR5/6)、外面が灰褐色(7.5YR4/2)を呈する。口縁部24の内面はぶい黄褐色(10YR5/3)、外面が褐灰色(10YR4/1)を呈する。いずれも胎土に砂粒はやや少なく、石英・長石・雲母・黒色砂が見られる。粒度は1mm大以下で、雲母が多く見られる。



図III.09 確認2・3トレンチ 出土遺物(3)

外面には突帯を貼り付けており、突帯には指頭圧痕が残る。外面には接合痕が明瞭に残る。調整は、外面が突帯から下をナデ後に縦のミガキを施す。口縁部は内外面を横のナデで整える。内面は斜めのナデで整える。内面のナデは工具を使用した可能性が考えられる。

甕28は外反する口縁部で内外面を横のナデで整える。内外面は煤けるが、とくに外面が黒色化する。胎土には1mm大以下の長石・石英・雲母・黒色砂・赤色砂が含まれる。色調は内面がにぶい黄橙色(10YR7/4)を呈する。

甕29はやや内湾する口縁部で内外面を横のミガキで整える。内外面はやや煤ける。胎土には1mm大以下の長石・石英・雲母・黒色砂・赤色砂が含まれる。色調は内面がにぶい褐色(7.5YR5/4)を呈する。

30~34は甕の底部で、32・33・34は底面に木葉文が見られる。外面はナデで整える。

弥生時代

弥生時代の遺物は25~27・35~38の7点がある。

甕25は、断面が「く」字状に曲がった口縁をもつ。内外面は横のナデで整える。胎土には1mm大以下の長石・石英・雲母・黒色砂・赤色砂が含まれる。色調は橙色(7.5YR7/6)を呈する。外面の一部が煤け、内面がやや赤色化する。

甕26は、断面が逆「L」字状に曲がった口縁をもつ。内外面は横のナデで整えるが、胴部内面は左へのケズリを施す。胎土には1mm大以下の長石・石英・雲母・黒色砂・赤色砂が含まれる。とくに雲母は金色を呈して、量が多い。色調はにぶい黄橙色(10YR7/4)を呈する。

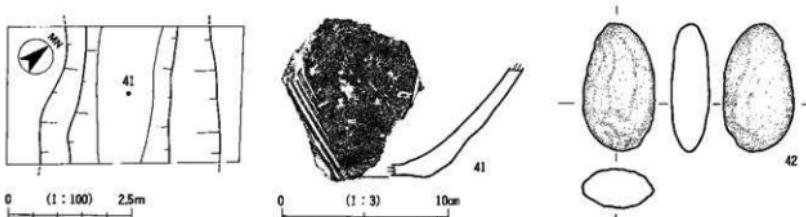
甕27は、断面が「く」字状に曲がった口縁と考えられる。口縁部の内外面は横のナデ、胴部は外面が縦のナデ、内面が左斜め上へのケズリで整える。胎土には1mm大以下の長石・石英・雲母・黒色砂・赤色砂が含まれる。色調はにぶい赤褐色(5YR5/4)を呈する。外面の一部が煤け、内面がやや赤色化する。

甕35は、断面が逆「L」字状に曲がった口縁をもち、口縁端部がやや下がる。器面には剥離が多く見られる。調整は内外面ともに横のナデで整える。胎土が他の土器と大きく異なる。胎土は色調がにぶい橙色(7.5YR6/4)を呈し、砂粒を多く含む。砂粒には2mm大以下の長石・石英・雲母・黒色砂・赤色砂が見られる。搬入品であろうか。

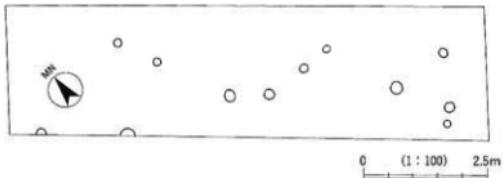
甕36は、口縁端部が突帯状に横に延びる。端部にはキザミを施す。器面は内外面を横のナデで整える。外面には多条沈線の波状文を施す。胎土には1mm大以下の長石・石英・雲母・黒色砂・赤色砂が含まれる。色調は橙色(7.5YR6/6)を呈する。外面の一部が煤ける。搬入品であろうか。

縄文時代前期

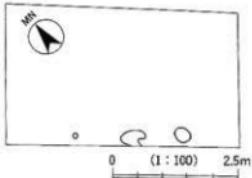
縄文時代前期と考えられる遺物は39・40の2点がある。内外面に横や斜めの貝殻条痕文を施す。色調はにぶい褐色(7.5YR5/4)を呈する。胎土には1mm大以下の長石・石英・雲母・黒色砂・赤色砂が含まれる。内面の一部が黒色化し、外面が赤色化して円形剥離が見られる。



図III.10 確認7トレンチ 遺構配置状況と出土遺物



図III.11 確認5トレンチ 遺構検出状況



図III.12 確認8トレンチ 遺構検出状況

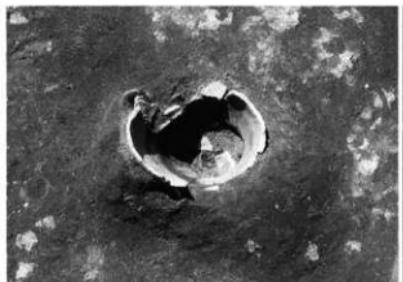
イ) 7トレンチ

溝の覆土より近世と考えられる遺物が出土している。擂鉢41は、内外面から断面まで明赤褐色（2.5 YR5/8）を呈する。薩摩焼であろうか。石製品42は明瞭な擦痕はもたないが、器面に光沢面をもつ。石材は溶結凝灰岩、色調は明オリーブ灰色（5GY7/1）を呈する。（東）

1 一般的に南九州の成川式の甕に見られる特徴と言われる。



写真III.01 確認一竪穴住居 1



写真III.02 土器III-1 出土状况



写真III.03 土器III-2 出土状况

第IV章 調査の方法

はじめに

調査は3次に分かれるが、調査区や検出面で調査者が異なる以外は、ほぼ共通の調査方法を取っている。

遺物包含層は、III～V層とX・XI層、XIV層の3つがあり、それぞれ対応する遺構をVI層上面（検出面1）とXII層上面（検出面2）、XV層上面で確認している。ただし、III～V層については、一部でVI層上面より上の層位でも遺構検出を行なっている。ここでは検出面1に含めて報告している。

掘り下げはI・II層とIX層を調査員立会いのもと重機で除去し、その他は人力で掘り下げている。

調査区の呼称は、図IV.01に示したとおりである。ただし、1次調査の前半は「A～F区」の呼称を用いている。

遺物の取り上げは、通し番号を遺物取り上げ番号（遺物番号）として付している。記録は平板図にドットとして記録している。以下、詳細について述べる。
(東)

第1節 本調査の方法

確認調査の結果を受けて、仕明遺跡本調査は調査区内の任意の起点から10m×10mグリッドを設定し、西から東へ1～43区、北から南にA～S区の記号・番号を付し、A-1区、B-1区と呼称した¹。

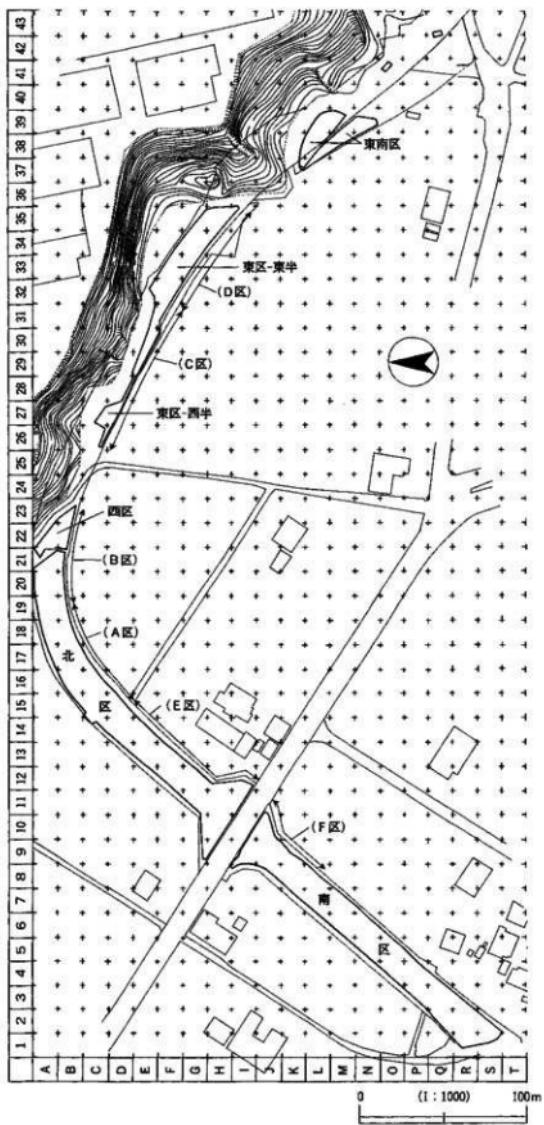
1次調査

1次調査は平成12年度に行った。調査の便宜上から、町道を挟んで北東側の、A-16～21区、B-14～21区、C-14～17区、D-13～16区、E-12～15区、F-11～14区、G-9～13区、H-9～12区、I-10～12区内の調査区域を「北区」と呼び、町道を挟んで南西側のI-8～10区、J-8～11区、K-7～10区、L-6～9区、M-6～8区内の調査区域を「南区」と呼称し、北区・南区のVI層上面までの中世・古代・古墳時代の遺物包含層及び遺構の調査を行った。調査は、北区はB-16区付近の畠地から調査区域に沿ってI・II層を重機で除去した後、III～VI層を人力による掘り下げを行いながら東西の方向に調査を進めた。遺物包含層の残存状況は、III層の上位まで構造改善事業により削平をうけている以外は良好であった。南区はI-9区付近の畠地から、北区と同様の方法で調査を進めた。調査区内は近年行なわれた構造改善事業により、III層を含めて削平を受けているように見受けられたが、比較的の残存状況は良好であった。

2次調査

2次調査は平成13年度に行った。1次調査で完了した北区を除く延長距離約300mの調査を実施した。M-5～8区、N-4～7区、O-3～6区、P-2～5区、Q・R-1～4区、S-1・2区の範囲を「南区」、A・B-21～23区の範囲を「西区」、C-26・27区、D-26～28区、E-28～32区、F-31～34区、G-32～36区、H-34～36区、I-35・36区の範囲を「東区」、K-37～39区、L-38・39区、M-38・39区の範囲を「東南区」と呼称した。

西区・東区・東南区はIX-1a層上面までの中世・古代・古墳時代の遺物包含層の調査を、南区は前年度未調査部分のM-5・6区、N-4～7区、O-3～6区、P-2～5区、O-2～4区、R-1～3区、S-1・2区の範囲の中世・古代・古墳時代の遺物包含層の調査及びIX-1b層下層の縄文時代早期の遺物包含層が確認されているP-3～5区、Q-2～4区、R-1～4区、S-1・2区の範囲の調査を行った。東区は、東区東端のI-35区より調査を行った。東端部に擾乱部分と、中央部に天地返し等によりIX-1a層中まで削平を受けて破壊されている区域もあり、遺物包含層が残存する区域でも



図IV.01 調査区配置とグリッド

V層の上部は削平を受けているよう
に見受けられ、遺物包含層の残存状
況は好ましくなかった。西区は北区
に隣接する調査区であり、遺物包含
層の残存状況は北区と同様に比較的
の良好であった。

東南区は遺物包含層であるV層は
ほとんど削平されており、所によつて
は遺構検出面であるVII層上面は土
層改良等により削平を受けて破壊さ
れており、また検出面においても近
代に使用されたと思われる貯蔵穴痕
が検出され、遺跡の残存状況は当遺
跡内では最も悪い状態であった。

南区は、1次調査の残りの中世・
古代・古墳時代の遺物包含層をもつ
調査区のM-5・6区、N-4~7区、
O-3~6区、P-2~5区、
O-2~4区、R-1~3区、S-
1・2区の範囲のうち、P-3~5区、
Q-2~4区の範囲はスギ・竹
や雑木が植生していた区域であり、
風倒木の痕跡や樹根がⅦ層に達する
箇所も見られ、R-1~3区、S-
1・2区の範囲についても、VII層上
面での遺物・遺構の残存状況は良好
とはいえない。

3次調査

3次調査に伴う東南区の調査は、
路線変更に伴う拡張部分の調査を行
った。遺跡の残存状況は2次調査
と同様に悪い状態で、V層がほとん
ど削平され、VII層上面まで擾乱を受
け、近年に作られた貯蔵穴等により
破壊されていた。

(出口)

- 1 整理作業において、グリッドの呼称を変更している。

例) グリッドC18→C21

第V章 層序

はじめに

層位に用いた名称・呼称の根拠については、各調査担当者の見解に従っている。また、観察は肉眼観察による。

第1節 基本層序

層位の遺存状況は、東南区が最も悪く、そこから南北に向かうに従って、攪乱が少なくなっている。いずれの区においてもIII層で大きな削平が行われている。以下、層別に述べる。

- I層 現在の耕作土層である。I～III層は層中に白色砂粒を含むのを特徴としている。
- II層 含まれる白色砂粒は桜島火山灰（大正）と考えられる。旧耕作土層である。
- III層 IV層を削平して存在しており、近世の遺物包含層と考えられる。
- IV層 中世の遺物包含層と考えられる。一部で近世の遺物が見られるが、造構などによる落ち込みと考えられる。調査地全域で層の残存状況が悪く、ほぼ消滅している。
- V層 中世～弥生時代・古墳時代の遺物包含層と考えられる。時期別に細分できていない。
- VI層 層全体がやや赤く発色する黒色土で、当初霧島カルデラの御池火山灰層と考えられたが、他の調査結果から異なることが判明している¹。
- VII層 やや青く発色する黒色土である。
- VIII層 1cm前後の黄色軽石を多量に含む黒褐色土である。池田降下軽石に比定される。
- IX層 おもに橙色の砂質土で構成される。アカホヤ降下火山灰層に比定される。隣接する牧遺跡で確認された明瞭な火碎流堆積層は確認されていない。
- X層 X～XII層の中で最も黒色が強い土層である。縄文時代早期の遺物包含層と考えられる。
- XI層 硬質の黒色土層である。縄文時代早期の遺物包含層と考えられ、層の上位に遺物が集中している。
- XII層 やや黒色が薄い土層で、非常に硬質である。極わずかに遺物が出土するが、上層からの遺構などに伴う落ち込みと考えられる。本来は無遺物層と考えられる。
- XIII層 黄色の砂質土で構成される。サツマ降下火山灰層に比定される。
- XIV層 後期旧石器時代の遺物包含層である。
- XV層 粘性のある褐色土である。いわゆる「チョコ層」にあたる可能性がある。
- XVII層 いわゆる「シラス」層の2次堆積層と考えられる。シラスは入戸火碎流堆積物（A-Ito）に比定される。

第2節 現地形と旧地形

遺跡は、菱田川左岸の河岸段丘上にある。現地地形は河岸段丘上がほぼ平坦であるが、北区と南区の境になる現在の道路を頂点にして、北東と南西方向へと緩やかに下る。推定される旧地形も類似するものと考えられ、大きな起伏などは見られない。ただし、河岸段丘縁辺にあたる西区から東南区には、雨水などの侵食による小さな谷地形が存在したが、現在は埋め土により平坦にされている。

地形については、巻頭カラー図版及び図II.01を参照されたい。

(東)

1 上免遺跡・下堀遺跡・牧遺跡の発掘調査成果による。

表V.01 基本圖序

北区・東区・西区・東陽区・南区(2次)		南区(1次)			
層	土色	特徴	層	土色	特徴
I	黒褐色の火山灰 溶岩を含む山灰	I-1 黒褐色土 土色、性状の作工が異なる。 I-2 鮎灰色土 田舎で泥質風土とよばれるもの を含む土である。	I	青色土 9802/1 表面は白色アラッカの土である。 表面は白色アラッカの土である。 1号カラも適切かつ強い。	Ⅰ 青色土 (1801.7.) 表面は白色アラッカの土である。 表面は白色アラッカの土である。 1号カラも適切かつ強い。
II	褐黃火山灰(火成土)		II	青色土 (1801.7.) 表面は白色アラッカの土である。 表面は白色アラッカの土である。 1号カラも適切かつ強い。	Ⅱ 田舎土 表面は白色アラッカの土である。 表面は白色アラッカの土である。 1号カラも適切かつ強い。
III	近郊の漁港地帯				Ⅲ 田舎土 表面は白色アラッカの土である。 表面は白色アラッカの土である。 1号カラも適切かつ強い。
IV	中央の漁港地帯				IV 田舎土 表面は白色アラッカの土である。 表面は白色アラッカの土である。 1号カラも適切かつ強い。
V	中世古代・古墳時代 遺跡を含む層		V	青褐色土 9802/1 表面は白色アラッカの土である。 表面は白色アラッカの土である。 1号カラも適切かつ強い。	V 田舎土 表面は白色アラッカの土である。 表面は白色アラッカの土である。 1号カラも適切かつ強い。
VI			VI	青褐色土 9802/1 表面は白色アラッカの土である。 表面は白色アラッカの土である。 1号カラも適切かつ強い。	VI 田舎土 表面は白色アラッカの土である。 表面は白色アラッカの土である。 1号カラも適切かつ強い。
VII			VII	青褐色土 9802/1 表面は白色アラッカの土である。 表面は白色アラッカの土である。 1号カラも適切かつ強い。	VII 田舎土 表面は白色アラッカの土である。 表面は白色アラッカの土である。 1号カラも適切かつ強い。
VIII			VIII	青褐色土 9802/1 表面は白色アラッカの土である。 表面は白色アラッカの土である。 1号カラも適切かつ強い。	VIII 田舎土 表面は白色アラッカの土である。 表面は白色アラッカの土である。 1号カラも適切かつ強い。
IX	ヤクダ層(千葉石層)		IX	青褐色土 9802/1 表面は白色アラッカの土である。 表面は白色アラッカの土である。 1号カラも適切かつ強い。	IX 田舎土 表面は白色アラッカの土である。 表面は白色アラッカの土である。 1号カラも適切かつ強い。
X	城又村(千葉石層) 城又村(千葉石層)		X	青褐色土 9802/1 表面は白色アラッカの土である。 表面は白色アラッカの土である。 1号カラも適切かつ強い。	X 田舎土 表面は白色アラッカの土である。 表面は白色アラッカの土である。 1号カラも適切かつ強い。
XI	城又村(千葉石層) 城又村(千葉石層)		XI	青褐色土 9802/1 表面は白色アラッカの土である。 表面は白色アラッカの土である。 1号カラも適切かつ強い。	XI 田舎土 表面は白色アラッカの土である。 表面は白色アラッカの土である。 1号カラも適切かつ強い。
XII			XII	青褐色土 9802/1 表面は白色アラッカの土である。 表面は白色アラッカの土である。 1号カラも適切かつ強い。	XII 田舎土 表面は白色アラッカの土である。 表面は白色アラッカの土である。 1号カラも適切かつ強い。
XIII	アダム山地層		XIII	青褐色土 9802/1 表面は白色アラッカの土である。 表面は白色アラッカの土である。 1号カラも適切かつ強い。	XIII 田舎土 表面は白色アラッカの土である。 表面は白色アラッカの土である。 1号カラも適切かつ強い。
XIV	鶴見川河床の 漁港地帯含層		XIV	オーフー層 9802/1 表面は白色アラッカの土である。 表面は白色アラッカの土である。 1号カラも適切かつ強い。	XIV 田舎土 表面は白色アラッカの土である。 表面は白色アラッカの土である。 1号カラも適切かつ強い。
XV	(1)手取川か?		XV	青褐色土 9802/1 表面は白色アラッカの土である。 表面は白色アラッカの土である。 1号カラも適切かつ強い。	XV 田舎土 表面は白色アラッカの土である。 表面は白色アラッカの土である。 1号カラも適切かつ強い。
XVI			XVI	青褐色土 9802/1 表面は白色アラッカの土である。 表面は白色アラッカの土である。 1号カラも適切かつ強い。	XVI 田舎土 表面は白色アラッカの土である。 表面は白色アラッカの土である。 1号カラも適切かつ強い。
XVII	(シラス2号地層) (土器層)		XVII	青褐色土 9802/1 表面は白色アラッカの土である。 表面は白色アラッカの土である。 1号カラも適切かつ強い。	XVII 田舎土 表面は白色アラッカの土である。 表面は白色アラッカの土である。 1号カラも適切かつ強い。

第VI章 北区(縄文前期・古墳・古代・中世・近世)の概要

はじめに

北区の調査はV層を調査対象の遺物包含層として実施し、遺構検出をV層上面において行っている。

第1節 層位と遺構配置

層位の詳細についてはV章に述べている。なお、北区においては遺物包含層の1つである基本層位IV層が、後世の削平によりほぼ消滅している。地点によっては、わずかに層の一部が残る程度である。

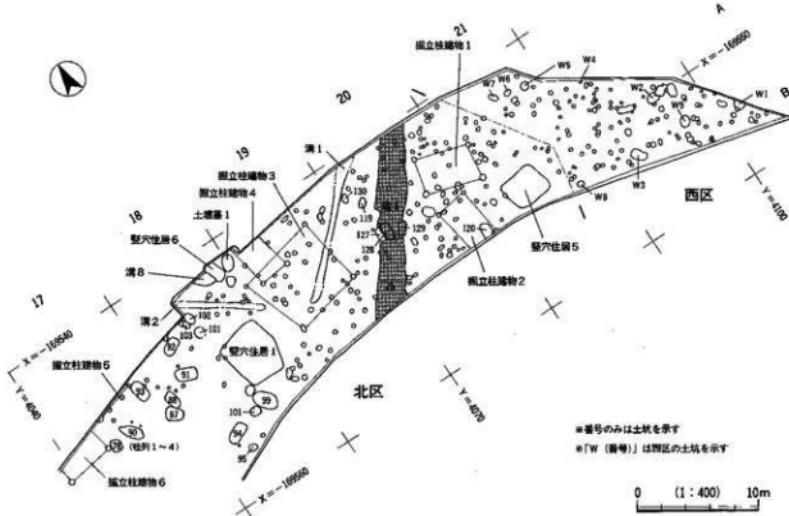
北区と西区における遺構の分布は、遺構が調査区全体に拡がり、数ヶ所の集中範囲が存在する。とくに河岸段丘線辺部である北区北端から西区には柱穴などが集中する。また、北区中央のグリッドC14~B17には土坑が、グリッドE13~D14までは掘立柱建物が集まっている。北区北端には溝と道路状遺構が集中する。立地・時期などにより遺構の偏りが生じていると考えられる。

V層上面において復元される地形は、北区の西端が最も高く、そこから東に向かって緩やかに下っている。
(東)

第2節 遺構

遺構は、竪穴住居6棟、掘立柱建物14棟、土坑105基、溝10条、道(道路状遺構)1条に、多数の柱穴を検出している。溝については4条が道路状遺構の可能性が考えられる。また、溝1に重複して1基の風倒木痕も検出している。風倒木痕は北東方向に向かって地層が横転しており、南区で検出された風倒木痕と土層・規模などが類似している。

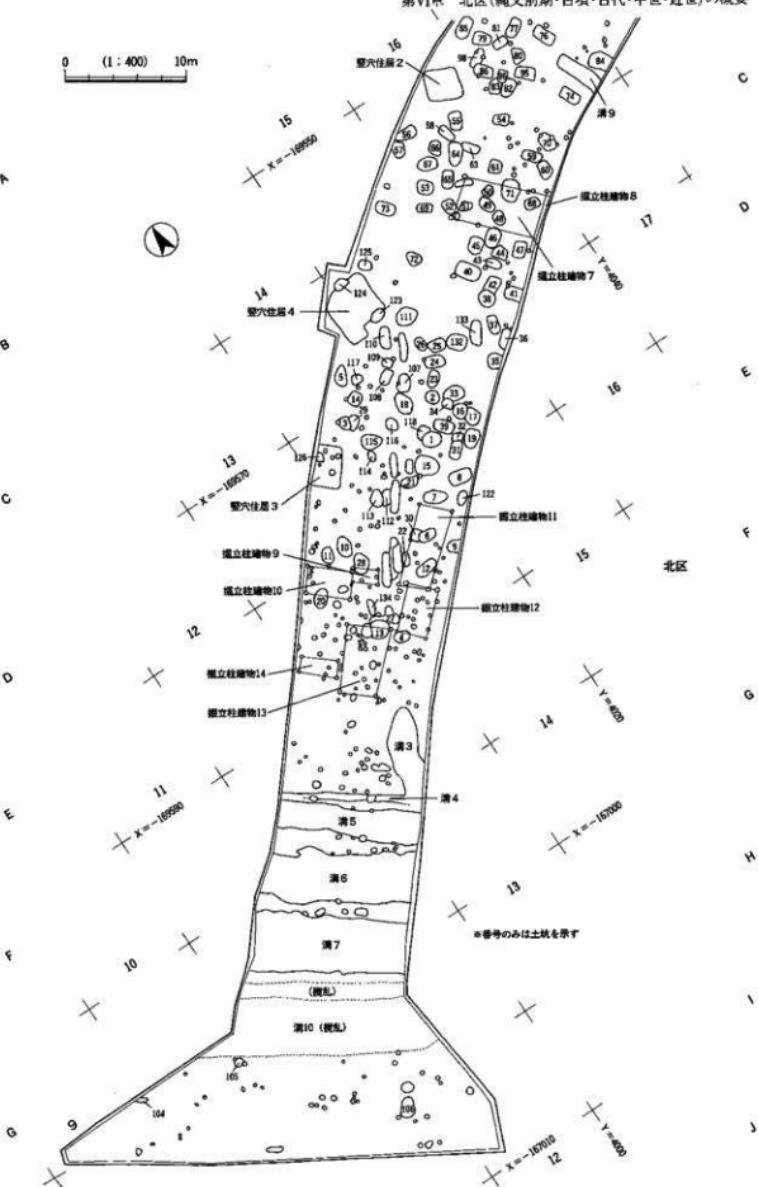
検出遺構の時期は、おもに縄文時代晩期から古墳時代・古代(9~10世紀・11~12世紀頃)・中世(16~17世紀)に分けられる。一部では近世の遺構も存在する。以下、遺構別に述べる。
(東)



図VI.01 北区・西区 遺構配置(1)

第VI章 北区(縄文前期・古墳・古代・中世・近世)の概要

0 (1 : 400) 10m



図VI.02 北区・西区 遺構配置 (2)

a. 造構

豎穴住居

VIII層上面において6基検出された。

(1) 豊穴住居1 (図VI.03)

A・B-18区で検出された。平面形は隅丸長方形で、住居の長軸方向は南北に延びる。豎穴部はIX-1b層中まで掘り込まれ、検出面からの深さは最深部で17.5cmを測り、豎穴部内の埋土は池田降下軽石を含んだ弾力のある黒褐色土であった。床面はベッド状造構と思われる二段構造の掘り込みが確認され、二段構造中央にある掘り込み面の形状は隅丸長方形に近く、その床面には若干の硬化が認められた。その他床面上の造構は、二段構造上段の床面に9基(P1~P9)の柱穴と下段の床面のほぼ中央に1基(P10)の柱穴が検出された。

なお住居内の遺物は、埋土上位においては住居の北側に、主に成川式土器片が集中して出土し、二段構造の上段・下段とも床面上に遺物は確認できず、床面に近いレベルに遺物がごくわずか出土するのみであった。(図VI.06)

(出口)

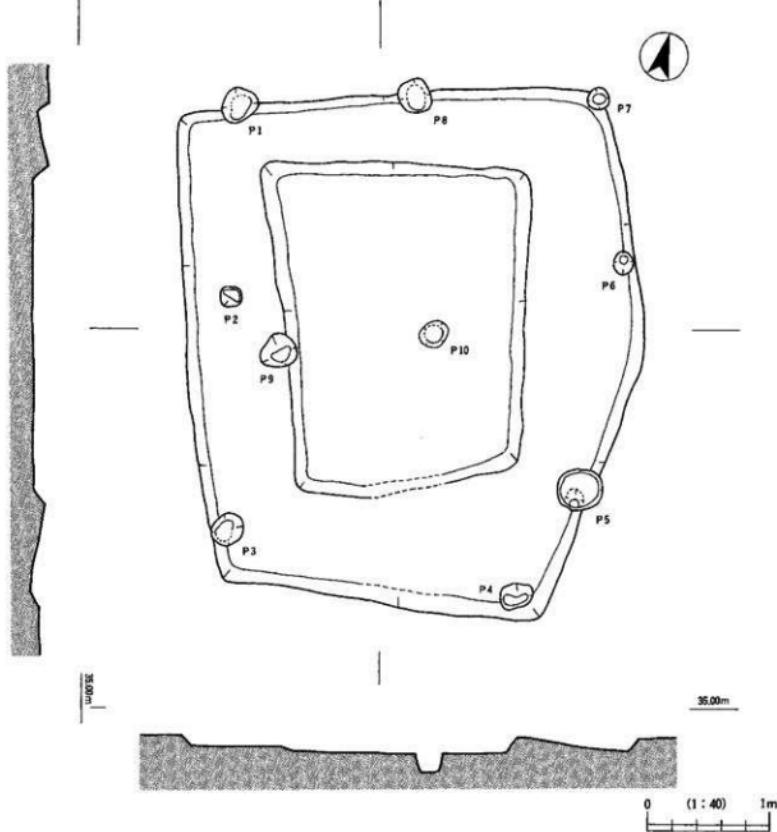
豎穴住居1 出土遺物 (図VI.04・図VI.05)

1は成川式土器の甕である。口縁部がやや外反し、頸部に1条の刻目突帯が巡る。外面の口縁部に煤が付着する。2・3は成川式土器の壺である。2は口唇部が平坦で、口縁部が大きく外反し、頸部に1条の刻目突帯が巡る。内面の口縁部に1条の波状沈線が施されている。3は口唇部が平坦で、口縁部が外反する。4は成川式土器の鉢で、内面に薄く煤が付着する。5は成川式土器の壺と思われ、底部が平底を若干上底に呈している。6は成川式土器の甕で、脚が外反し、端部が丸みを帯びる。7は弥生時代後期の甕で、脚が外反し、端部は平坦である。8・9は成川式土器の甕である。8は脚が直行し、端部は平坦である。9は脚が直行し、端部は丸みを帯びる。10は安国寺式土器の煮である。口縁部が中途で屈曲してから外反し、外面の口縁部上面に波状紋が施されている。11は成川式土器の壺で、底部が平底である。12~14は成川式土器の高环である。12は環部が中途で屈曲し、大きく外反する。13は脚の下部が外反し、脚の中位に3箇所の穿孔が施されている。14は脚が直行すると思われる。

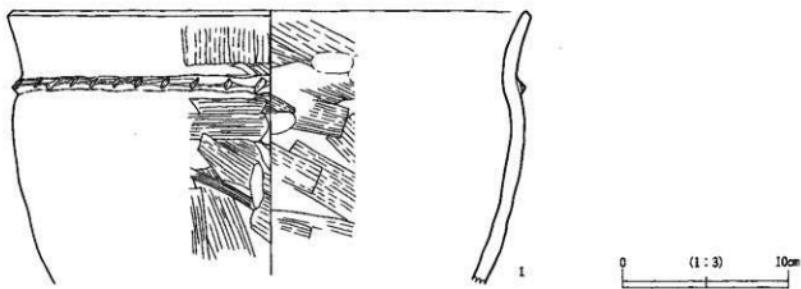
(出口)

表VI.01 北区 豊穴住居1 計測表

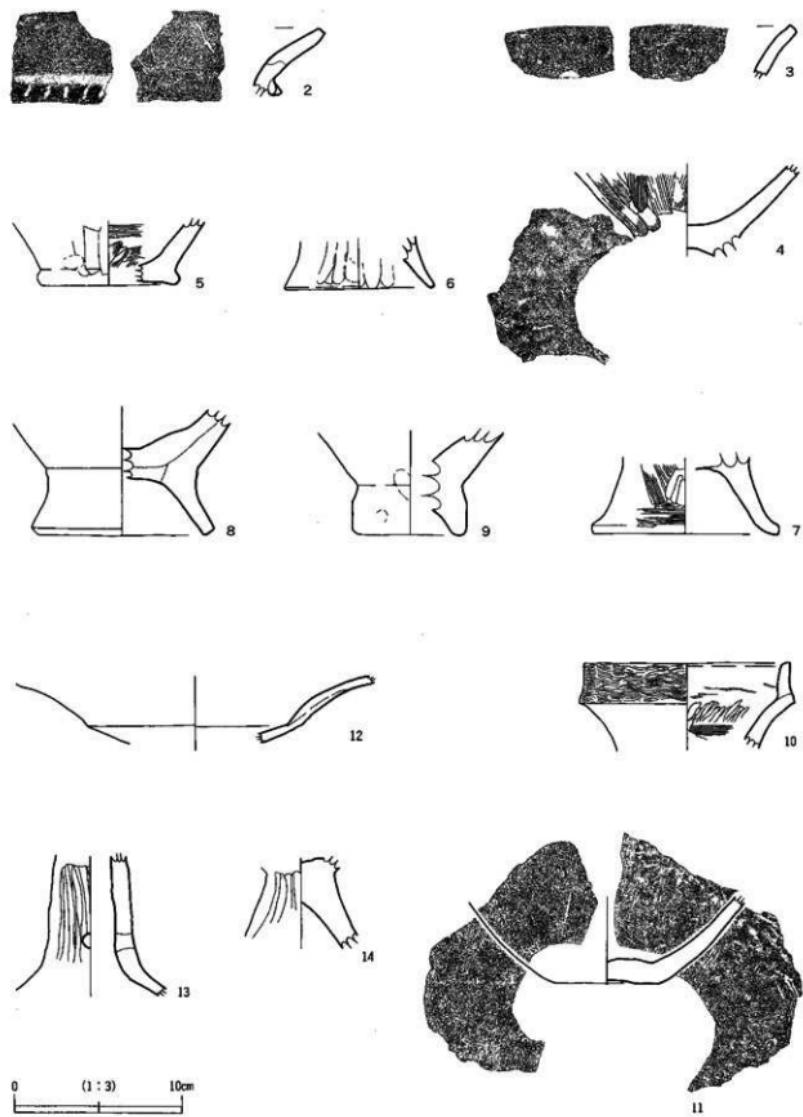
住居番号	図面番号	検出区	検出層	平面形	床面形	長軸(m)	短軸(m)	深さ(m)	ピット数	硬化面の有無	床上面/底の有無	備考		
1	図VI.03	A-B-18	VIII	隅丸長方形	隅丸長方形	11.10	9.35	0.18	10	有	無	ベッド状造構あり		
P1	円形	0.30	0.25	0.23	P5	橢円形	0.37	0.34	0.04	P9	橢円形	0.31	0.28	0.25
P2	橢円形	0.20	0.19	0.07	P6	橢円形	0.20	0.16	0.21	P10	橢円形	0.26	0.22	0.15
P3	橢円形	0.28	0.24	0.22	P7	円形	0.19	0.18	0.07					
P4	橢円形	0.27	0.20	0.23	P8	橢円形	0.30	0.29	0.25					



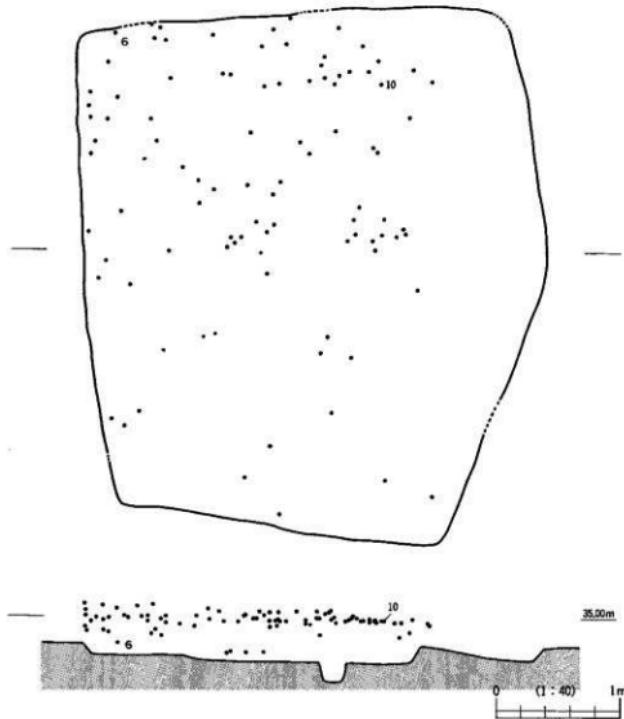
図VI.03 北区 竪穴住居1



図VI.04 北区 竪穴住居1 出土遺物(1)



図VI.05 北区 積穴住居1 出土遺物 (2)



図VI.06 北区 窪穴住居1 遺物出土状況

表VI.02 北区 窪穴住居1 出土土器 観察表

件名 番号	東 西 北 南	測定 点	測量 距離	測量・踏査 部位	地 質 構 造	土 質 組 成	色 調	形 態	深度(cm)		備 考
									内面	外面	
IVI.04.1	6	A-16	北区 窪穴住居1	成川式土器 窪穴住居1	山積部	○	○	内面に凹凸感 内面に凹凸感	内面 ヨコナギ - ハナモク 内面 ヨコナギ - ハナモク	- 31.0	- 16.5 内面凹凸あり 外底に付着
IVI.04.2	10	A-16	北区 窪穴住居1	成川式土器 窪穴住居1	山積部	○	○	内面に凹凸感 内面に凹凸感	内面 ヨコナギ - ハナモク 内面 ヨコナギ - ハナモク	- -	- 4.0 既日使用あり
IVI.04.3	7	A-16	北区 窪穴住居1	成川式土器 窪穴住居1	山積部	○	○	内面に凹凸感 内面に凹凸感	内面 ヨコナギ - ヨコナギ 内面 ヨコナギ - ヨコナギ	- -	- 3.0
IVI.04.4	13	A-16	北区 窪穴住居1	成川式土器 窪穴住居1	堆部	○	○	内面に凹凸感 内面に凹凸感	内面 ヨコナギ 内面 ヨコナギ - ハラカツアマメシ	- -	- 5.0 内面に付着
IVI.04.5	2	A-16	北区 窪穴住居1	成川式土器 窪穴住居1	堆部	○	○	内面に凹凸感 内面に凹凸感	内面 ヨコナギ - ハラカツアマメシ 内面 ヨコナギ - ハラカツアマメシ	- -	- 8.0 内面 ヨコナギ - ハラカツアマメシ
IVI.04.6	1410	A-16	北区 窪穴住居1	成川式土器 窪穴住居1	堆部	○ ○	○	内面に凹凸感 内面に凹凸感	内面 ヨコナギ 内面 ヨコナギ	- -	- 8.7 内面 ヨコナギ
IVI.04.7	16	A-16	北区 窪穴住居1	成川式土器 窪穴住居1	堆部	○	○	内面に凹凸感 内面に凹凸感	内面 ヨコナギ - ハラカツアマメシ 内面 ヨコナギ - ハラカツアマメシ	- -	- 13.4 内面 ヨコナギ
IVI.04.8	15	A-16	北区 窪穴住居1	成川式土器 窪穴住居1	堆部	○ ○	○	内面に凹凸感 内面に凹凸感	内面 ヨコナギ 内面 ヨコナギ - ハラカツアマメシ	- -	- 16.0 内面 ヨコナギ - ハラカツアマメシ
IVI.04.9	16	A-16	北区 窪穴住居1	成川式土器 窪穴住居1	堆部	○ ○	○	内面に凹凸感 内面に凹凸感	内面 ヨコナギ 内面 ヨコナギ	- -	- 6.0 内面 ヨコナギ
IVI.04.10	13-7	A-16	北区 窪穴住居1	成川式土器 窪穴住居1	山積部	○	○	内面に凹凸感 内面に凹凸感	内面 ヨコナギ 内面 ヨコナギ	- -	- 12.7 内面 ヨコナギ - ハラカツアマメシ
IVI.04.11	11	A-16	北区 窪穴住居1	成川式土器 窪穴住居1	堆部	○	○	内面に凹凸感 内面に凹凸感	内面 ヨコナギ - ハラカツアマメシ 内面 ヨコナギ - ハラカツアマメシ	- -	- 6.2 内面 ヨコナギ
IVI.04.12	15	A-16	北区 窪穴住居1	成川式土器 窪穴住居1	堆部	○	○	内面に凹凸感 内面に凹凸感	内面 ヨコナギ 内面 ヨコナギ	- -	- 3.9 内面 ヨコナギ
IVI.04.13	13	A-16	北区 窪穴住居1	成川式土器 窪穴住居1	堆部	○	○	内面に凹凸感 内面に凹凸感	内面 ヨコナギ 内面 ヨコナギ	- -	- 8.5 内面 ヨコナギ
IVI.04.14	16	A-16	北区 窪穴住居1	成川式土器 窪穴住居1	堆部	○ ○	○	内面に凹凸感 内面に凹凸感	内面 ヨコナギ 内面 ヨコナギ	- -	- 5.4 内面 ヨコナギ - ハラカツアマメシ

(2) 穫穴住居2 (図VI.07)

B-16区で検出された。平面形は若干歪みのある隅丸方形で、住居の長軸方向は北西に延びる。竪穴部はIX-1b層中まで掘り込まれ、検出面からの深さは最深部で20cmを測り、竪穴部内の埋土は弾力のある黒褐色土であった。床面は自然堆積層よりもやや硬さのある硬化面であり、その他床面上の遺構として柱穴が3基 (P1~P3) 検出された。

なお住居内の遺物は、床面直上には確認できず、埋土上位において住居の北側に分布し、そのほとんどが成川式土器であった。(図VI.09) (出口)

竪穴住居2 出土遺物 (図VI.08)

15は成川式土器の甕である。内面の脇部から底部には煮沸痕と思われる剝離面が見られる。16は成川式土器の鉢である。口縁部がわずかに外反し、外面ともに煤が付着する。17は成川式土器の壺で、頸部に1条の刻目突窓が巡り、外面の脇部に煤が付着する。18は成川式土器の甕で、内面に煤が付着する。19は成川式土器の甕で、脚は直行し、脚の端部が平坦である。20は成川式土器の甕と思われ、口唇部が平坦で、口縁部が直行する。(出口)

表VI.03 北区 穫穴住居2 計測表

住居番号	図面番号	検出区	検出層	平面形	床面形	長軸(m)	短軸(m)	深さ(m)	ピット数	硬化面 の有無	底土面 の有無	備考		
												16	17	18
2	図VI.07	B-16	T8	隅丸方形	隅丸方形	7.90	6.25	0.20	3	無	無			
番号	平面形	長軸(m)	短軸(m)	深さ(m)	番号	平面形	長軸(m)	短軸(m)	深さ(m)	番号	平面形	長軸(m)	短軸(m)	深さ(m)
P1	円形	0.49	0.45	0.13	P2	楕円形	0.29	0.23	0.19	P3	椭円形	0.19	0.17	0.11

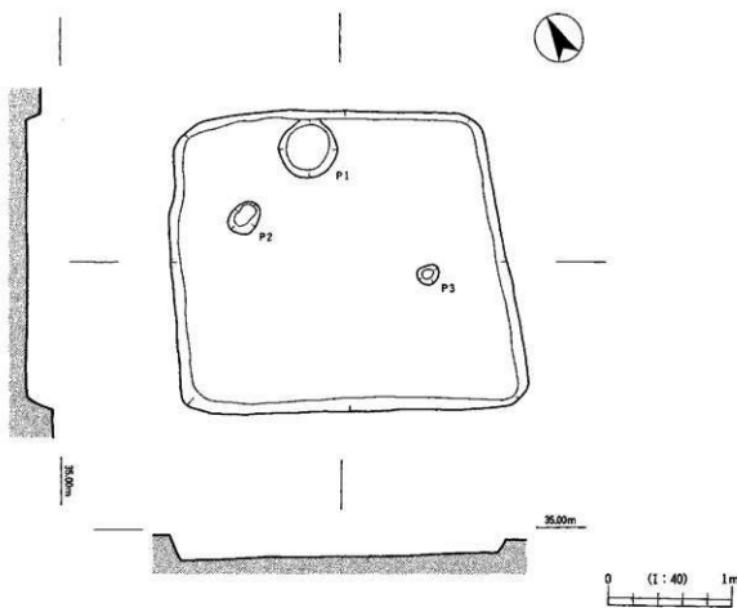
表VI.04 北区 穫穴住居2 出土土器 観察表

序号	図面番号	柱穴番号	B-16	北区	遺構	地質・岩相	方位	上			色調	調査	深度(cm)	備考	
								内面	外壁	小口					
VI.08.15	1-7	B-16	埋土	北区 竪穴住居2	虎川式土器 裏	鶴見	○○○	内面 に山凹赤褐色 外壁 に山凹赤褐色	内面 に山凹赤褐色 外壁 に山凹赤褐色	内面 に山凹赤褐色 外壁 に山凹赤褐色	ナ・ココナデ ナ・ココナデ ナ・ココナデ	-	-	9.05	
VI.08.16	1423 1443	B-16	埋土	北区 竪穴住居2	虎川式土器 裏	山線砂	○	内面 に山凹赤褐色 外壁 に山凹赤褐色	内面 に山凹赤褐色 外壁 に山凹赤褐色	内面 に山凹赤褐色 外壁 に山凹赤褐色	ナ・ココナデ ナ・ココナデ	-	-	8.45	内面に直付帶
VI.08.17	17	B-16	埋土	北区 竪穴住居3	虎川式土器 裏	鶴見	○	内面 に山凹赤褐色 外壁 に山凹赤褐色	内面 に山凹赤褐色 外壁 に山凹赤褐色	内面 に山凹赤褐色 外壁 に山凹赤褐色	ナ・ココナデ ナ・ココナデ	-	-	9.45	面白帯あり外壁に直付帶
VI.08.18	17	B-16	埋土	北区 竪穴住居2	虎川式土器 裏	鶴見	○○	内面 に山凹赤褐色 外壁 に山凹赤褐色	内面 に山凹赤褐色 外壁 に山凹赤褐色	内面 に山凹赤褐色 外壁 に山凹赤褐色	ナ・ココナデ ナ・ココナデ	-	-	12.2	内面に直付帶
VI.08.19	16	B-16	埋土	北区 竪穴住居2	虎川式土器 裏	鶴見	○	内面 に山凹赤褐色 外壁 に山凹赤褐色	内面 に山凹赤褐色 外壁 に山凹赤褐色	内面 に山凹赤褐色 外壁 に山凹赤褐色	ナ・ココナデ ナ・ココナデ	-	-	5.35	
VI.08.20	13	B-16	埋土	北区 竪穴住居2	虎川式土器 裏?	鶴見	○	内面 に山凹赤褐色 外壁 に山凹赤褐色	内面 に山凹赤褐色 外壁 に山凹赤褐色	内面 に山凹赤褐色 外壁 に山凹赤褐色	ナ・ココナデ ナ・ココナデ	-	-	1.1	

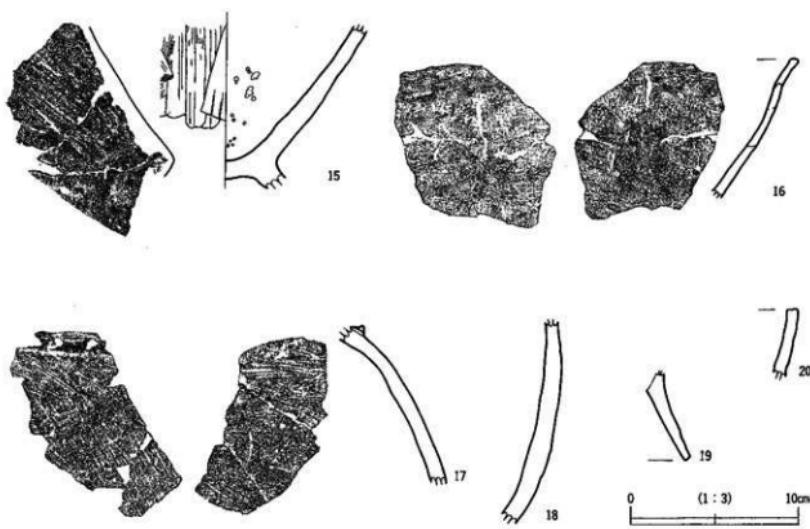
(3) 穫穴住居3 (図VI.10)

D-14区で検出された。住居の北西側が調査区外に延びるため、平面形がはっきりしないが、隅丸方形または隅丸長方形と思われ、住居の長軸方向は南西から北東方向に延びると推測される。竪穴部はIX-1a層中まで掘り込まれ、検出面からの深さは最深部で18cmであり、竪穴部内の埋土は池田降下輕石を含んだ弾力のある黒色土であった。床面は自然堆積層よりもやや硬さのある硬化面であり、その他床面上の遺構として、柱穴が5基 (P1~P5) 検出された。

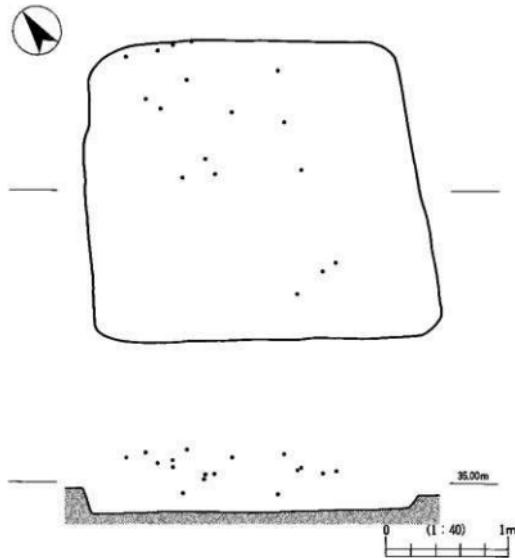
なお住居内の遺物は、床面直上には確認できず、埋土上位において住居の中央に出土している。(図VI.13) (出口)



図VI.07 北区 壁穴住居2



図VI.08 北区 壁穴住居2 出土遺物



図VI.09 北区 穫穴住居2 遺物出土状況

竪穴住居3 出土遺物 (図VI.11・図VI.12)

21～25は成川式土器の甕である。21は口縁部がわずかに外反し、頸部は一条の刻目突帯が巡る。外面の胴部には煤が帯状に付着している。22は口縁部が直行する。23は底部が外反し、平底である。24は脚が直行し、脚の端部は平坦である。25は脚が直行し、平底を上底に呈している。26はほぼ完形の成川式土器の塊形土器である。口縁部はわずかに内湾し、底部は丸底に近い平底である。内面の胴部には煮沸痕と思われる剝離面が見られる。27は成川式土器の高壺で、脚の下部が外反する。

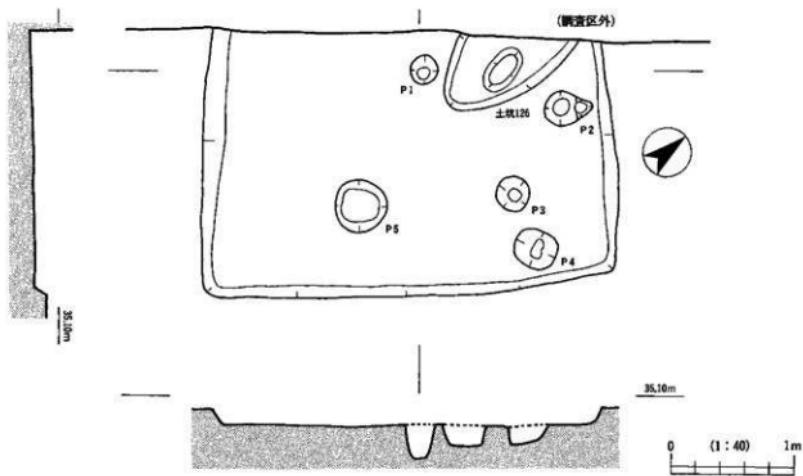
(出口)

台石28は、おもに磨面2ヶ所と敲打部2ヶ所をもつ。磨面は側面のものが最も擦痕が明瞭である。腹面の磨面は欠損部付近の擦痕が最も明瞭となる。背面の脇にもまとまった擦痕が見られ、やや面をもっている。いずれの磨面は程度の差はあるが器面がやや光沢をもつ。敲打部は背面のものが大きく凹む。背腹面に見られる磨面と敲打部は欠損する前のもので、欠損後に側面の磨面と敲打部を使用した可能性が考えられる。

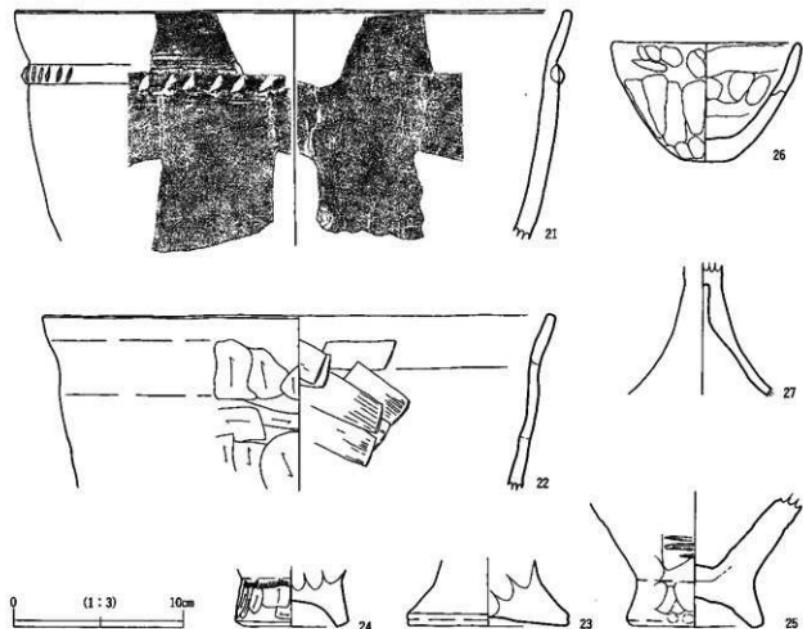
(東)

表VI.05 北区 穫穴住居3 計測表

住居番号	図面号	検出区	検出層	平面形	床面形	長軸(m)	短軸(m)	深さ(m)	ピット数	硬化層の有無	側面/底の有無	備考		
3	図VI.10	D-14	IV	(満丸方形)	(満丸方形)	(8.50)	(5.60)	(0.18)	6	無	無			
番号	平面形	長軸(m)	短軸(m)	深さ(m)	番号	平面形	長軸(m)	短軸(m)	深さ(m)	番号	平面形	長軸(m)	短軸(m)	深さ(m)
P1	円形	0.26	0.23	0.29	P3	円形	0.30	0.28	0.10	P5	円形	0.45	0.43	0.12
P2	楕円形	0.39	0.29	0.28	P4	楕円形	0.35	0.30	0.10					



図VI.10 北区 積穴住居3



図VI.11 北区 積穴住居3 出土遺物

表VI.06 北区 穫穴住居3 出土土器 観察表

測定 番号	遺物 番号	測定 位置	器種	部位	土 質	色 調	測定	法量(cm)		備考	
								口径	底径		
IV VI.11.21	886-897 915-924	D-14	堆土	北区 竪穴住居3	成川式土器 甕	口縁部 一部部	○ ○ ○ ○ ○	内面 に近い褐色 外縁 に近い赤褐色	ロコナデ・ヘラ削り	33.5 — 14.1	底面剥離あり外側に傾き
IV VI.11.22	886-898 915-925	D-14	堆土	北区 竪穴住居3	成川式土器 甕	口縁部 一部部	○ ○ ○ ○ ○	内面 に近い褐色 外縁 に近い赤褐色	ロコナデ・ヘラ削り	— —	—
IV VI.11.23	—	D-14	堆土	北区 竪穴住居3	成川式土器 甕	口縁部 一部部	○ ○ ○ ○ ○	内面 に近い褐色 外縁 に近い褐色	ナデ・ロコナデ・ヘラ削り	30.4 — 10.6	—
IV VI.11.24	874	D-14	堆土	北区 竪穴住居3	成川式土器 甕	口縁部 一部部	○ ○ ○ ○ ○	内面 に近い褐色 外縁 に近い褐色	ナデ	— 9.6 4.0	平底
IV VI.11.25	—	D-14	堆土	北区 竪穴住居3	成川式土器 甕	口縁部 一部部	○ ○ ○ ○ ○	内面 に近い褐色 外縁 に近い褐色	ナデ・ロコナデ	— 5.4 3.5	—
IV VI.11.26	886-898 915-921	D-14	堆土	北区 竪穴住居3	成川式土器 甕	口縁部 一部部	○ ○ ○ ○ ○	内面 に近い褐色 外縁 に近い褐色	ロコナデ・ヘラ削り	— 7.3 7.9	手底上端
IV VI.11.27	923	D-14	堆土	北区 竪穴住居3	成川式土器 甕	口縁部 一部部	○ ○ ○ ○ ○	内面 に近い褐色 外縁 に近い褐色	ナデ・ロコナデ	— 7.8	内面に高底

表VI.07 北区 穫穴住居3 出土石器 計測表

団 番号	遺物 番号	出土位置		器種	石材	法量(cm·g)				備考
		区	層位			長さ	幅	厚さ	重量	
VI.28	875	北区 竪穴住居3	堆土	台石	砂岩	16.55	11.5	7.25	1683.15	(出口)

(4) 穫穴住居4 (図VI.14)

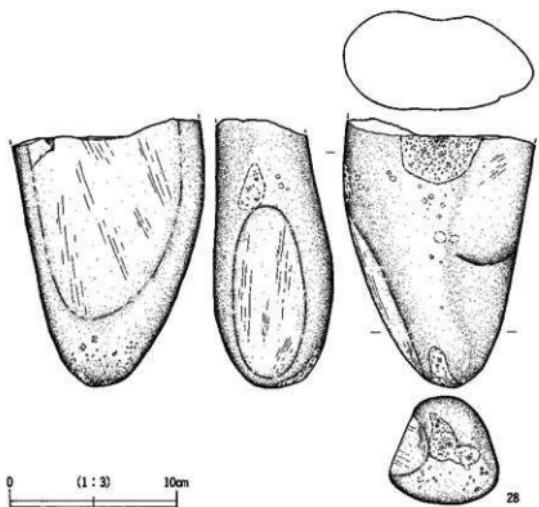
C-14・15区から検出された。平面形は南北隅の一部が張り出す隅丸長方形で、住居の長軸方向は南北方向に延びる。竪穴部はIX-1a層中まで掘り込まれ、検出面からの深さは最深部で40cmであり、竪穴部内の埋土は池田降下軽石を含む黒茶褐色土であった。床面は自然堆積層よりもやや硬さを持つ硬化面であり、その他床面上の遺構として、12基の柱穴が検出された。

なお住居内の遺物は、床面に近いレベルで住居のほぼ中央に、石包丁(36)磨石(37・39)等の石器を含めて、多くの成川式土器片が出土し、床面直上においても確認できた。(図VI.17) (出口)

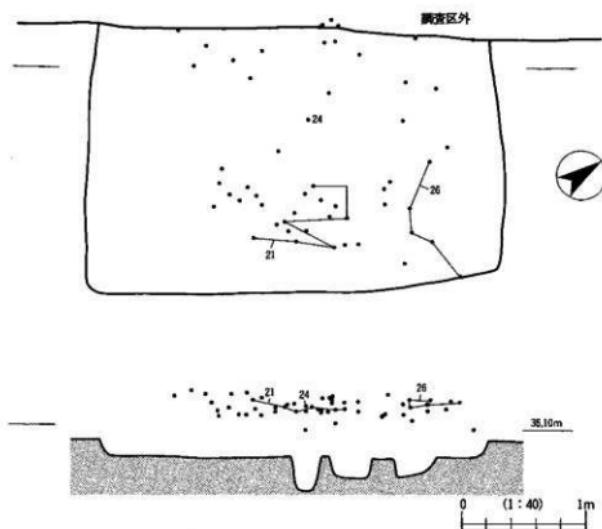
竪穴住居4 出土遺物 (図VI.15・図VI.16・図VI.17)

29~32は成川式土器の甕である。29はほぼ完形で、口縁部は外反し、外面の胴部の下部から底部にかけて器壁の剝離部分が見られる。内外面の口縁部から胴部の上部にかけて煤が多く付着する。30は口縁部が外反し、外面全体に煤が付着する。31は口縁部がわずかに外反し、外面全体に煤が付着する。32は外面の胴部の上端部にわずかに煤が付着する。33~35は成川式土器の小型甕である。33は完形で、口縁部は内湾し、底部は丸底である。外面の口縁部には工具による波状紋が施され、内面の胴部には煮沸痕と思われる剝離面が見られる。34は脚部がわずかに内湾する。35は底部が平底で、接地面が極端に狭い。156は成川式土器の甕である。口縁部は直行し、頸部に1条の突帯が巡る。(出口)

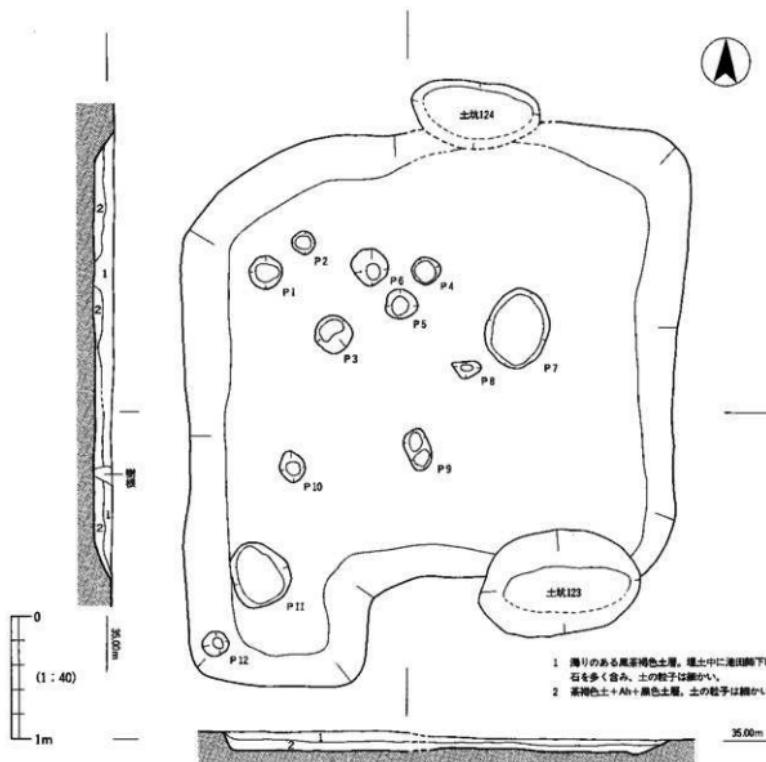
石包丁36はほぼ全面が光沢面となり、明瞭な擦痕も見られる。表面の一部には赤色の鉄成分が付着する。磨石37は表面に明瞭な磨面をもち、磨面はやや光沢をもつ。また、裏面は赤色化する。上下の尖部には敲打痕が見られる。一部が剥離する。側面にも2つの敲打部がある。石製品39の機能は不明である。器面は光沢をもち、敲打痕・擦痕は見られない。石製品40の機能は不明である。軽石製で削ったと考えられる面をもち、面は尖部の先端で2叉状となる。(東)



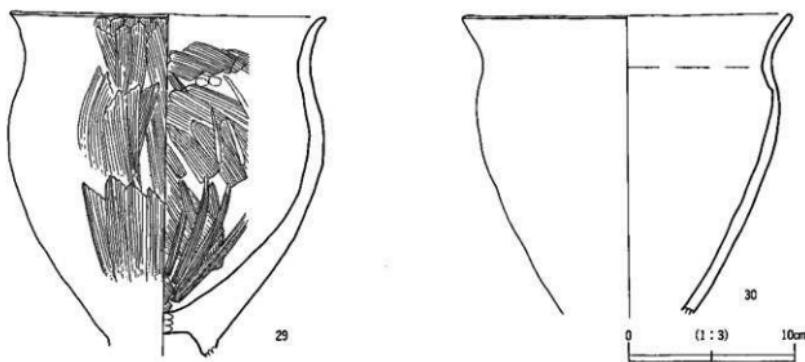
図VI.12 北区 穹穴住居3 出土石器



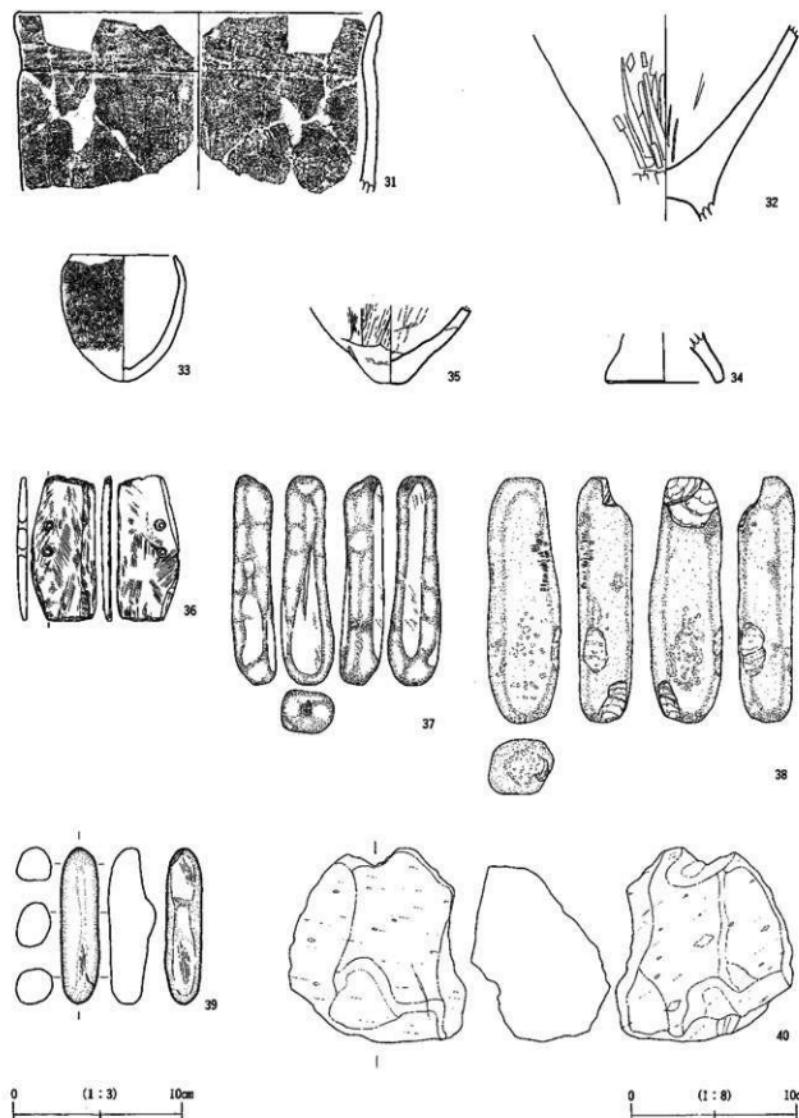
図VI.13 北区 穹穴住居3 遺物出土状況



図VI.14 北区 壺穴住居4



図VI.15 北区 壺穴住居4 出土遺物 (1)



図VI.16 北区 穂穴住居4 出土遺物(2)

表VI.08 北区 穫穴住居4 計測表

住居番号	検出区	検出層	平面形		床面形	長軸(m)	短軸(m)	深さ(m)	ピット数	硬化面の有無	底土面/底土の有無	備考	
			長軸(m)	短軸(m)									
4	IVI.14	C-14・15	Ⅷ	隅丸方形	隅丸方形	11.25	10.25	0.40	12	無	無	南北隅丸か突出	
P1	円形	0.28	0.27	0.34	P5	円形	0.26	0.25	0.14	P9	椭円形	0.35	0.20 0.19
P2	円形	0.20	0.19	0.27	P6	椭円形	0.30	0.28	0.21	P10	椭円形	0.27	0.21
P3	円形	0.30	0.29	0.36	P7	椭円形	0.67	0.53	0.06	P11	椭円形	0.54	0.50
P4	円形	0.24	0.23	0.14	P8	椭円形	0.26	0.15	0.1	P12	円形	0.22	0.20 0.17

表VI.09 北区 穫穴住居4 出土土器 観察表

発掘番号	地質	井戸26	X	Y	層位	遺物	構造・特徴	方位	内寸	外寸	高さ	○	色	消	調査		法算(cm)	備考	
															内寸	外寸			
IVI.15.29	947-950 809-906 1014-1026	C-15	土	北区 縫穴住居4	成川式土器 骨器	灰白色	円筒形	○	○	○	内側に深い褐色 外側に深い褐色	内側 外側	内側 外側	内側 外側	内側 外側	内側 外側	18.7	20.8	内外側に茶付青
IVI.15.30	940-945 807-902 1014-1026	C-15	土	北区 縫穴住居4	成川式土器 骨器	灰白色	円筒形 一輪脚	○	○	○	内側に深い褐色 外側に深い褐色	内側 外側	内側 外側	内側 外側	内側 外側	内側 外側	19.8	20.3	
IVI.16.31	923-925 807-909	C-15	土	北区 縫穴住居4	成川式土器 骨器	灰白色	円筒形	○	○	○	内側に深い褐色 外側に深い褐色	内側 外側	内側 外側	内側 外側	内側 外側	内側 外側	22.1	11.0	外側に茶付青
IVI.16.32	940-945 807-902	C-15	土	北区 縫穴住居4	成川式土器 骨器	灰白色	円筒形	○	○	○	内側に深い褐色 外側に深い褐色	内側 外側	内側 外側	内側 外側	内側 外側	内側 外側	—	12.0	内側に茶付青
IVI.16.33	937	C-14	土	北区 縫穴住居4	成川式土器 小口型	灰白色	円筒形	○	○	○	内側に深い褐色 外側に深い褐色	内側 外側	内側 外側	内側 外側	内側 外側	内側 外側	6.4	7.75	左側斜面に丸点 右側に茶付青・内側に茶付
IVI.16.34	942	C-15	土	北区 縫穴住居4	成川式土器 小口型	灰白色	円筒形	○	○	○	内側に深い褐色 外側に深い褐色	内側 外側	内側 外側	内側 外側	内側 外側	内側 外側	—	9.2	3.0
IVI.16.5	963	C-15	土	北区 縫穴住居4	成川式土器 小口型	灰白色	円筒形	○	○	○	内側に深い褐色 外側に深い褐色	内側 外側	内側 外側	内側 外側	内側 外側	内側 外側	—	1.5	4.6
IVI.17.39	996	C-15	土	北区 縫穴住居4	成川式土器 小口型	灰白色	円筒形	○	○	○	内側に深い褐色 外側に深い褐色	内側 外側	内側 外側	内側 外側	内側 外側	内側 外側	—	27.5	外側に茶付青

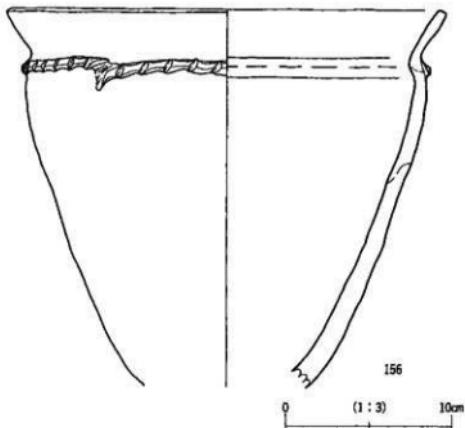
表VI.10 北区 穫穴住居4 出土石器 計測表

図番号	遺物番号	出土位置		器種	石材	法量(cm・g)				備考
		区	層位			長さ	幅	厚さ	重量	
VI.36	988	北区 縫穴住居4	埋土	石包丁	粘板岩?	8.75	3.7	0.5	32.90	
VI.37	961	北区 縫穴住居4	埋土	磨石	砂岩	12.7	3.05	2.4	149.65	
VI.38	934	北区 縫穴住居4	埋土	敲石	砂岩	(14.2)	4.3	(3.2)	374.53	
VI.39	927	北区 縫穴住居4	埋土	石製品	砂岩	9.4	2.15	2.9	90.60	
VI.40	—	北区 縫穴住居4	埋土	石製品	軽石	15.9	14.55	11.4	616.16	

(5) 穫穴住居5 (図VI.19)

A・B-21区で検出された。平面形は隅丸長方形で、住居の長軸方向は東西方向に延びる。竪穴部はIX-1a層中まで掘り込まれ、検出面からの深さは最深部で40cmであり、竪穴部内の埋土は弾力のある黒褐色土であった。床面は自然堆積層よりもやや硬さを持つ硬化面であり、その他床面上の遺構として、8基の柱穴が検出された。

なお住居内の遺物は、床面に近いレベルで住居のはば中央に、多くの成川式土器片が出土し、床面直上においても確認できた。(図VI.22)



図VI.17 北区 積穴住居4 出土遺物(3)

積穴住居5 出土遺物(図VI.20・図VI.21)

41は成川式土器の甕である。口縁部はわずかに外反し、外面の口縁部から胴部の上部にかけて帯状に煤が付着する。42は成川式土器の小型壺で、口縁部はわずかに外反し、外面の胴部にわずかに煤が付着する。43～46は成川式土器の甕である。43は口唇部が平坦で、口縁部が内湾する。44は口唇部が1mmほど膨らみ、口縁部が外反する。45は口縁部が外反する。46は脚が外反し、端部は平坦である。47は成川式土器の高环であり、環部が中途で屈曲し、大きく外反する。48は成川式土器の甕で、脚部が直行し、端部は丸みを帯びる。49～51は成川式土器の壺である。49は脚が直行し、端部は丸みを帯びる。脚の内面全体に煤が付着する。50は口唇部が平坦で、口縁部が大きく外反し、頸部には1条の刻目突帯が巡る。51は頸部に1条の刻目突帯が巡り、外面全体に煤が付着する。

(出口)

表VI.11 北区 積穴住居5 計測表

住居番号	図面番号	検出区	検出手	平面形	床面形	長軸(m)	短軸(m)	深さ(m)	ピット数	硬化面/成土面ノ塗の有無		参考		
										有	無			
5	図VI.19	A-B-21	W	隅丸長方形	隅丸長方形	8.70	7.30	0.40	8	有	無			
P1	精円形	0.28	0.25	0.19	P4	精円形	0.30	0.42	0.20	P7	円形	0.29	0.28	0.16
P2	精円形	0.25	0.23	0.27	P5	精円形	0.56	0.52	0.14	P8	円形	0.22	0.22	0.24
P3	精円形	0.21	0.21	0.36	P6	円形	0.29	0.26	0.21					

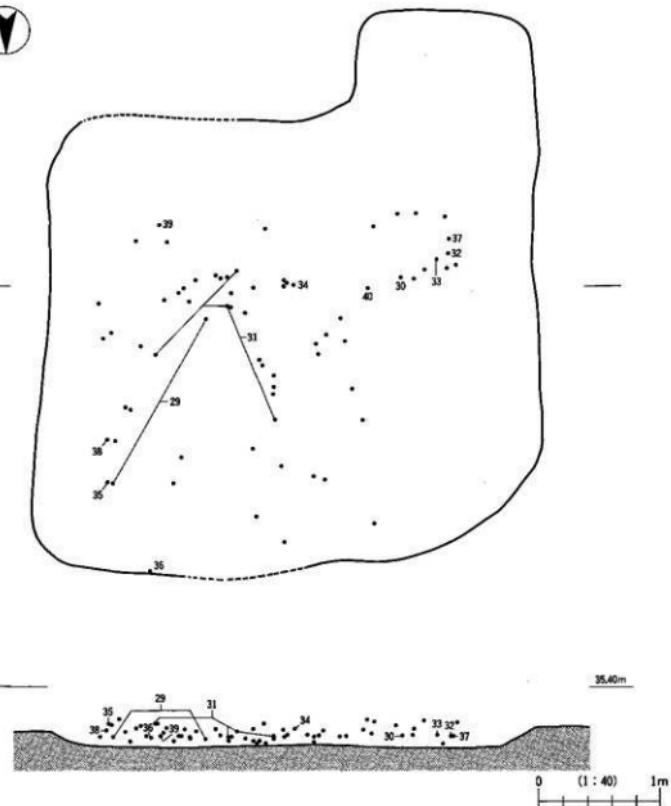
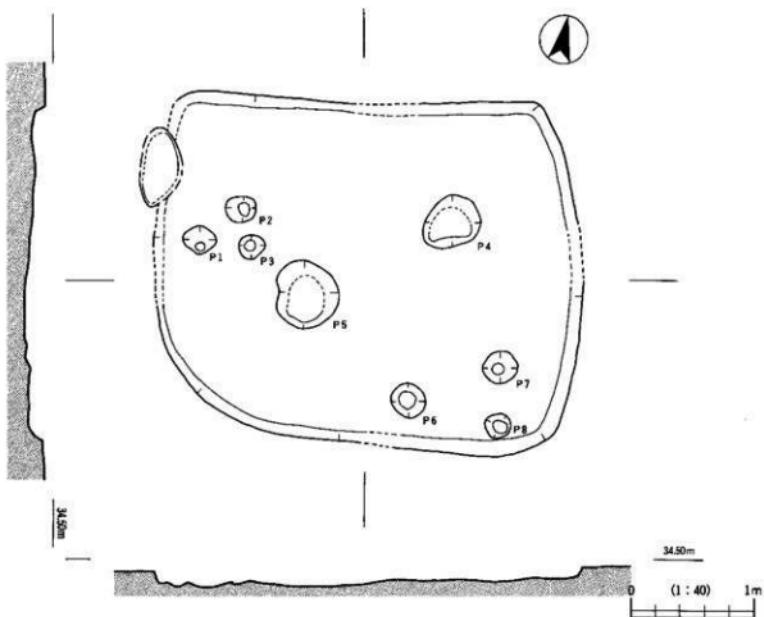


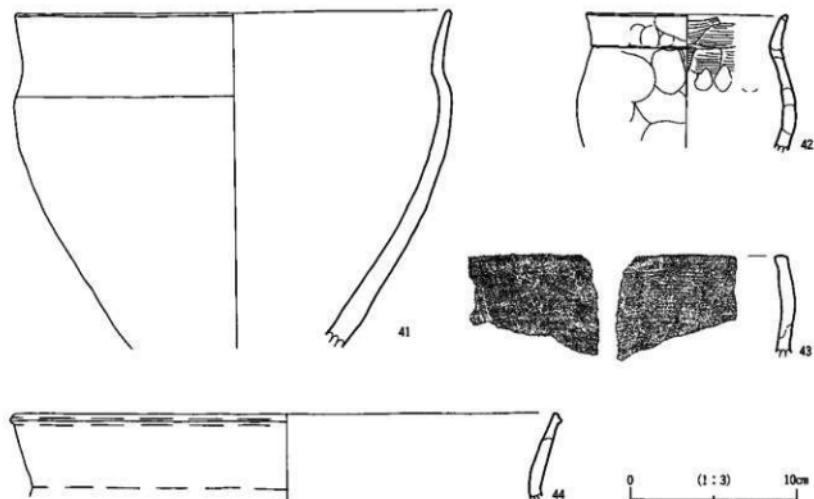
図 VI.18 北区 積穴住居4 遺物出土状況

表 VI.12 北区 積穴住居5 出土土器 観察表

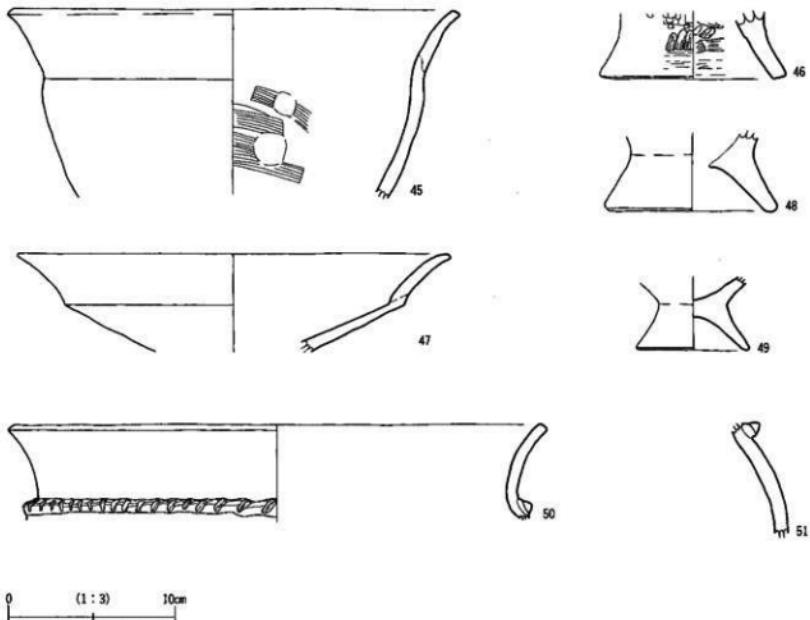
査定 番号	発 見 地 點 名	区	層	遺物	測量・標記	部位	形 式 目 次 名 称	内 面 色	外 面 色	調　査			底面(cm)	備　考
										直 径 (cm)	高 (cm)	幅 (cm)		
MEVI.20.43	519	B-21	地土	北区 積穴住居5	成川式土器 一輪鉢	口縁部 一輪鉢	○	○	内面にぶいき褐色 外面にぶいき褐色	内面 ハラ刷毛 外面 ナナ・ヨコナデ		26.1	26.0	外側に墨痕、傷有り
MEVI.20.43	519-043	B-21	地土	北区 積穴住居5	成川式土器 一輪鉢	口縁部 一輪鉢	○	○	内面 喜美色 外面 喜美色	内面 ハケ目・ヨコナデ・工具刷毛・複数斑点 外面 にぶいき褐色		12.2	—	6.3 外側に平行有
MEVI.20.43	519-043	B-21	地土	北区 積穴住居5	成川式土器 一輪鉢	口縁部 一輪鉢	○	○	内面 喜美色 外面 にぶいき褐色	内面 ハラ刷毛 外面 ナナ・ハラ刷毛		—	—	—
MEVI.20.43	1414	B-21	地土	北区 積穴住居5	成川式土器 一輪鉢	口縁部	○	○	内面 にぶいき褐色 外面 にぶいき褐色	内面 ヨコナデ・ハラ刷毛 外面 ヨコナデ・ハラ刷毛		—	—	5.9 外側に墨痕有
MEVI.21.44	826-927	B-21	堆土	北区 積穴住居5	成川式土器 一輪鉢	口縁部	○	○	内面にぶいき褐色 外側に墨痕有	内面 ヨコナデ・ハラ刷毛 外側 ハラ刷毛		32.6	—	5.3 外側に墨痕 内側に平行有
MEVI.21.45	1330-1331	B-21	地土	北区 積穴住居5	成川式土器 一輪鉢	口縁部 一輪鉢	○	○	内面 喜美色 外側 喜美色	内面 ハラ刷毛 外側 ナナ・ヨコナデ・複数斑点		26.6	—	11.6 安磐なし
MEVI.21.46	1414	B-21	地土	北区 積穴住居5	成川式土器 一輪鉢	脚部	○	○	内面 にぶいき褐色 外側 にぶいき褐色	内面 ヨコナデ・ハラ刷毛 外側 ヨコナデ・ナナ・ハラ刷毛		—	10.8	4.1
MEVI.21.47	1331-1332	B-21	地土	北区 積穴住居5	成川式土器 一輪鉢	脚部	○	○	内面 喜美色 外側 喜美色	内面 ヨコナデ 外側 ハラ刷毛		35.5	—	5.5 内・外側に墨痕
MEVI.21.48	1414	B-21	堆土	北区 積穴住居5	成川式土器 一輪鉢	脚部	○	○	内面 にぶいき褐色 外側 にぶいき褐色	内面 ヨコナデ・ナナ 外側 ヨコナデ・ハラ刷毛		—	16.0	4.5
MEVI.21.49	1417	B-21	地土	北区 積穴住居5	成川式土器 一輪鉢	脚部	○	○	内面 喜美色 外側 喜美色	内面 ナナ 外側 ハラ刷毛		—	—	内側に墨痕有
MEVI.21.50	277	B-21	地土	北区 積穴住居5	成川式土器 一輪鉢	口縁部	○	○	内面 にぶいき褐色 外側 にぶいき褐色	内面 ヨコナデ・ハラ刷毛 外側 ヨコナデ		33.5	—	3.9 線目有り
MEVI.21.51	287	B-21	地土	北区 積穴住居5	成川式土器 一輪鉢	脚部	○	○	内面 喜美色 外側 喜美色	内面 ヨコナデ・リコナデ・複数斑点 外側 ヨコナデ		—	—	6.3 刻印有り



図VI.19 北区 窪穴住居5



図VI.20 北区 窪穴住居5 出土遺物(1)



図VI.21 北区 穫穴住居5 出土遺物（2）

（6） 穫穴住居6（図VI.23）

A-18区で検出された。住居の北西側が調査区外に延び、また溝8と切り合わされているため、平面形かはっきりしないが、隅丸方形若しくは隅丸長方形と思われ、長軸方向は南東から北西方向に延びると思われる。竪穴部はIX-1a層中まで掘り込まれ、検出土面からの深さは最深部で55cmで、竪穴内部の埋土は弾力のある黒褐色土であった。床面は自然堆積層よりもやや硬さを持つ硬化面であり、その他床面上の遺構は検出されなかった。

なお住居内の遺物は、埋土上位において成川式土器が出土したが、床面直上の遺物は確認できなかった。（図VI.26）

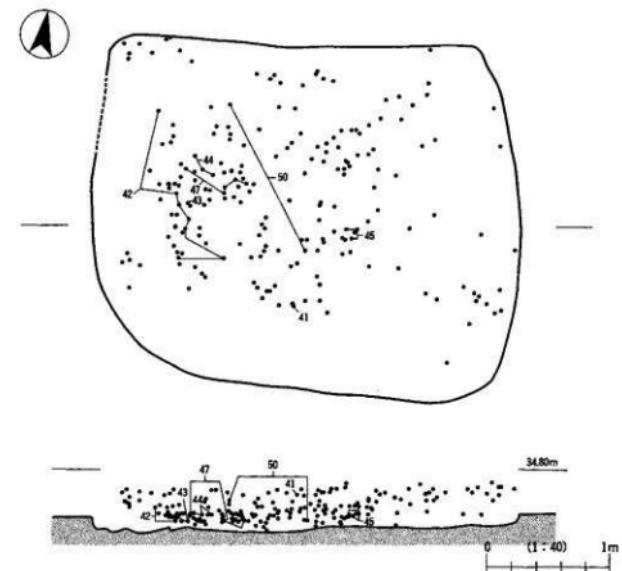
竪穴住居6 出土遺物（図VI.24・図VI.25）

52・53は成川式土器の高杯である。52は口縁部が内湾する。53はほぼ完形で、杯部が中途で屈曲し、口縁部がわずかに外反し、脚部は大きく外反する。外面の口縁部には工具による波状紋が施される。54・55は成川式土器の甕である。54はほぼ完形で、口唇部は平坦で、口縁部は外反する。55は口縁部が外反し、外面の口縁部から胴部の上部にかけて煤が付着する。

（出口）

台石56は断面が逆三角形を呈す。腹面には敲打部があり、面全体が赤色化する。また、上下の尖部にも敲打痕が見られ、一部が剥離する。設置後に上面だけが被熱したものと考えられる。鉄床石であろうか。

（東）



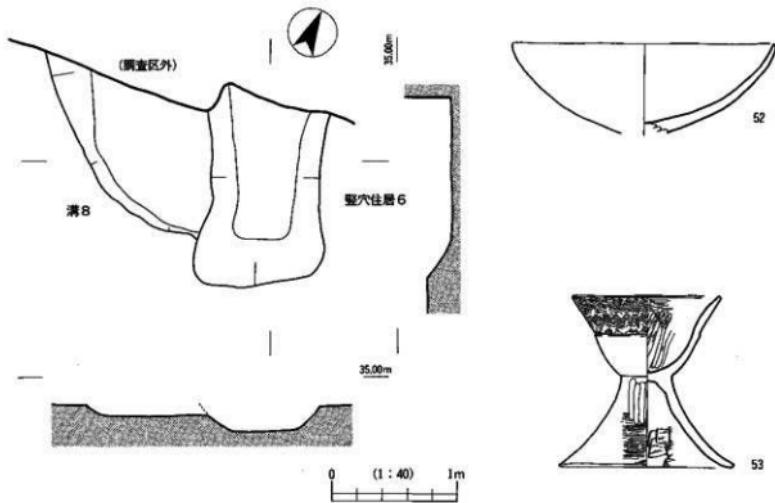
図VI.22 北区 穫穴住居5 遺物出土状況

表VI.13 北区 穫穴住居6 計測表

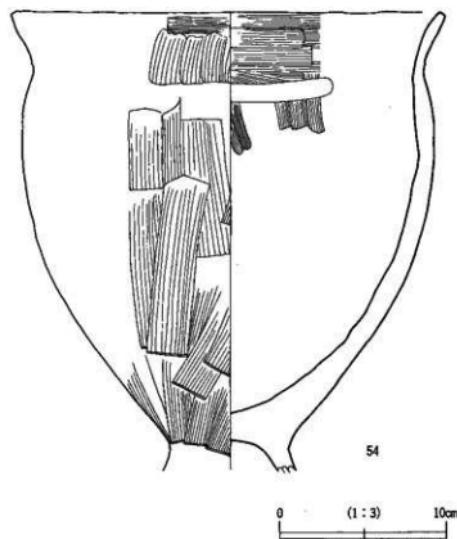
件名 番号	図面番号	検出区	検出層	平面形	床面形	長軸 (m)	短軸 (m)	深さ (m)	ピット数	硬土層/埴 の有無	備考
6	図VI.23	A 18	7B	(隅丸長方形)(隅丸長方形)	(5.30)	(2.60)	(0.55)	0	無	無	

表VI.14 北区 穫穴住居6 出土土器 観察表

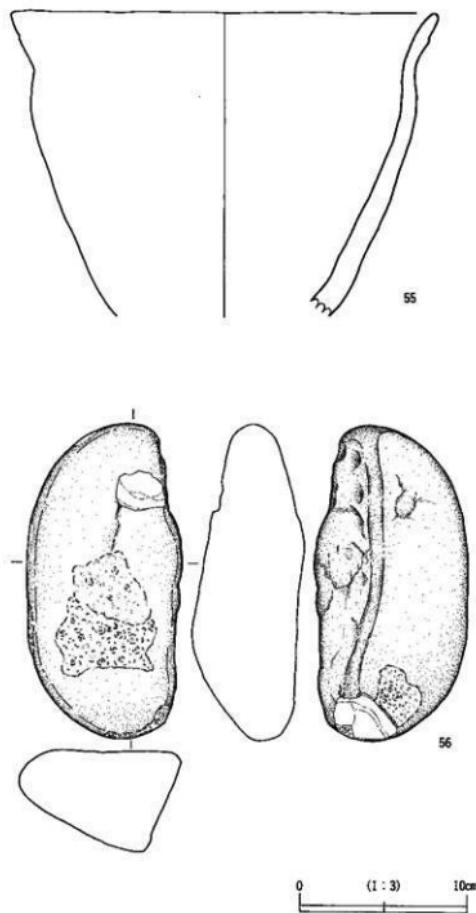
件名 番号	検出 年	柱定番 号	区	層	遺構	埋蔵・調査 部位	地 上 部 土 器				色 調	型 式	底 面 (cm)	備 考
							日 付	重 量	小 分 類	種 類				
図VI.24-52	1227	A-18	北区	成川土器7 竪穴住居5	柱孔	○ ○ ○	内面 青色	内面 ヨコナデ・チナナデ	16.0	—	5.5			
図VI.24-53	1240-1249	A-19	北区	成川土器7 竪穴住居5	変形	○ ○ ○	外周 明赤褐色	外周 ヨコナデ・チナナデ	9.2	10.3	10.5	底吹口直腹		
図VI.24-54	1243	A-18	北区	成川土器7 竪穴住居6	柱孔	○	内面 青色	内面 ヨコナデ・チナナデ・ハケ凹	25.5	—	28.3	外周に直腹		
図VI.25-55	1243	A-18	北区	成川土器7 竪穴住居6	柱孔	○ ○ ○	内面 青色	内面 ヨコナデ・チナナデ・ハケ凹	26.0	—	18.5	外周に直腹		



図VI.23 北区 竪穴住居6



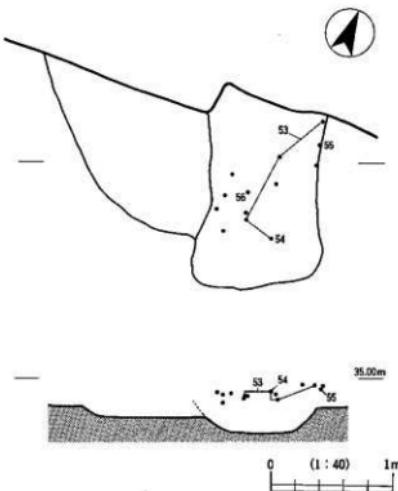
図VI.24 北区 竪穴住居6 出土遺物 (1)



図VI.25 北区 穂穴住居6 出土遺物 (2)

表VI.15 北区 穂穴住居6 出土石器 計測表

区 番号	遺物 番号	出土位置		器種	石材	法量 (cm · g)				備考
		区	層位			長さ	幅	厚さ	重量	
VI.56	1249	北区 穂穴住居6	埋土	台石	砂岩	(19.4)	9.4	6.45	1486.50	



図VII.26 北区 積穴住居6 遺物出土状況

土坑

(1) 土壙墓 (図VII.27)

A-18・19区で検出された。検出面はVII層上面である。土壙墓内の埋土は弾力のある黒色土で、埋土内からは土師器の塊(57)皿(58~62)と鉄製刀子(63)が出土した。土師器の塊(57)皿(58~62)は、土坑の東端の傍に破碎した状態で土師器片が合い重なり、鉄製刀子(63)は土坑の西端の床面に、置かれたような状態で出土した。

土壙墓 出土遺物 (図VII.27)

57は完形の土師器の塊である。口縁部は体部がわずかに丸みをもつものの、直線的に口縁部に至り、糸切り離し痕が見られる。58~62は土師器の皿である。58は底部に糸切り離し痕が見られる。59・60は完形で、口縁部は内湾し、底部に糸切り離し痕が見られる。61は完形で、口縁部は直行し、底部に糸切り離し痕が見られる。62は口縁部がわずかに内湾し、糸切り離し痕が見られる。63は片刃の鉄製刀子である。法量は長さ25.2cm、幅2.7cm、厚さ0.4cm、重さ91.75gを測り、柄の一部が欠損し、目貫には目釘と思われる木質遺物と、刃部には鞘と思われる木質遺物が付着する。

表VII.16 北区 土壙墓 計測表

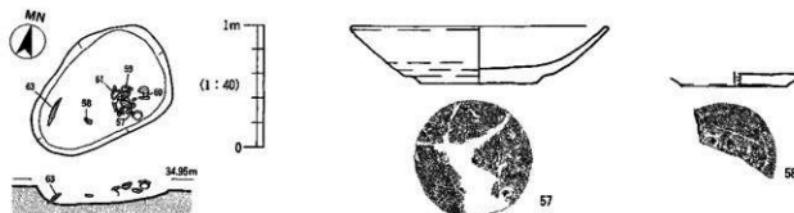
名稱	検出番号	検出区	平面形	長軸(cm)	短軸(cm)	深さ(cm)	長軸方位	埋土	備考
土壙墓	図VII.27	A-18-19	楕円形	122	89	15	北東	黒色土	土師器塊(57)・皿(58-62) 鉄製刀子(63)出土

(2) 土坑群

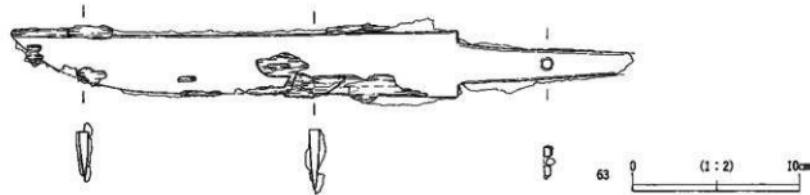
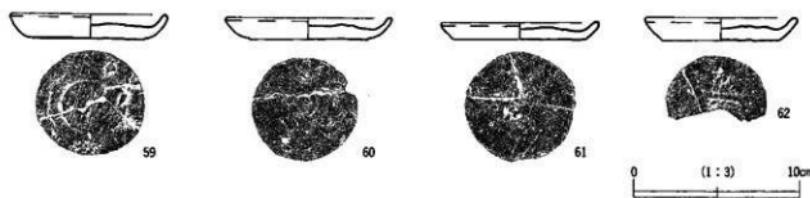
A-16~20区、B-15~21区、C-14~17区、D-13~16区、E-13~15区、G-9・10区、H-8区、I-11区の調査区域に、土坑105基が検出された。検出面はVII層上面である。平面形は円形・楕円形・隅丸長方形・隅丸方形と様々であったが、便宜上埋土の状況を元にしてI~V類に分類した。

①土坑Ⅰ類 (図VII.29)

該当土坑…土坑2・13・38・130



図VI.27 北区 土塚墓



図VI.28 北区 土塚墓 出土遺物

土坑I類は、平面形が円形もしくは円に近い椭円形を呈し、検出面での埋土は黒褐色土であり、近代に近い土坑ではないかと思われる。

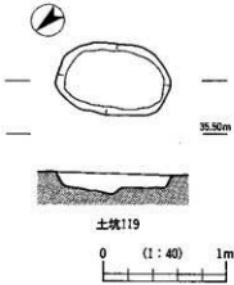
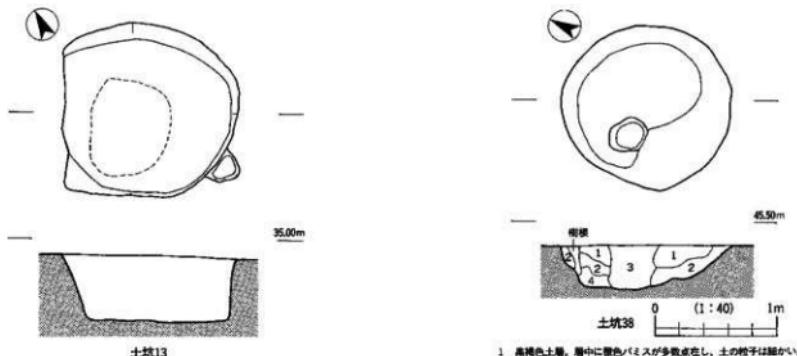
なお、土坑130の埋土内から遺物(64)が出土している。

土坑130 出土遺物(図VI.30)

64は成川式土器の甕で、口縁部が大きく外反する。

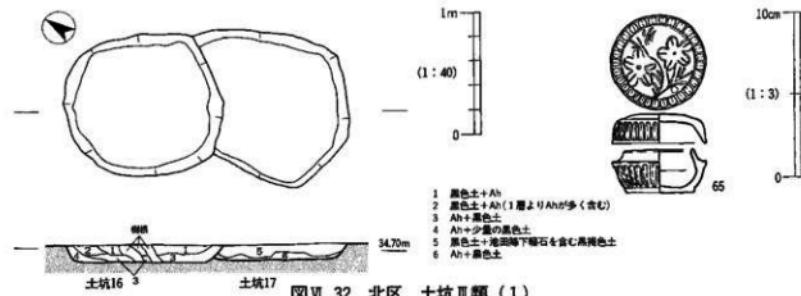
表VI.17 北区 土坑I類 計測表

土坑番号	探査番号	検出区	平面形	長軸(cm)	短軸(cm)	長軸方位	埋土	備考
2	—	D-15	円形	112	108	西	黒褐色土	
13	図VI.29	E-13	(円形)	(169)	(143)	北西	黒茶褐色土+Ah 層	擾乱により一部破壊を受ける
38	図VI.29	C-15・16	円形	140	136	北北西	黒褐色土	土坑42と切り合う
130	図VI.29	A-20	(椭円形)	(69)	(40)	北北東	黒褐色土	溝2と切り合う 成川式土器甕(64)出土

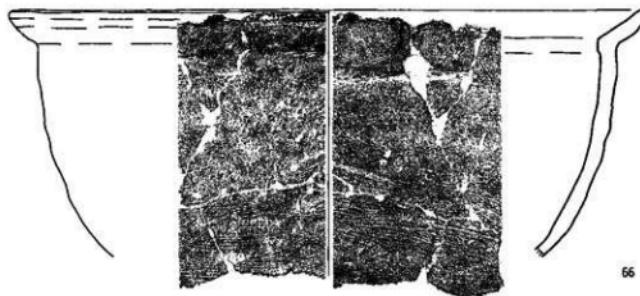


表VI.18 北区 土坑II類 計測表

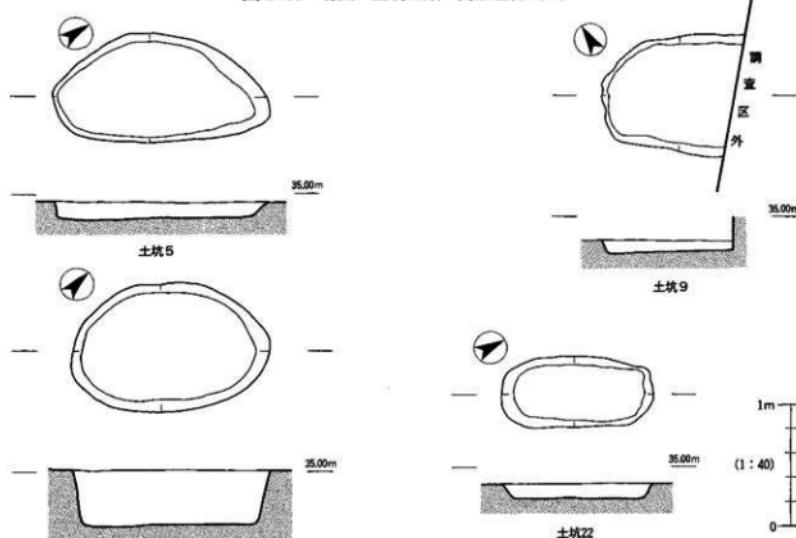
土坑番号	探査番号	検出区	平面形	長軸(cm)	短軸(cm)	長軸方位	埋土	備考
119	図VI.31	A-20	楕円形	92	58	北東	シラス+黒色土	



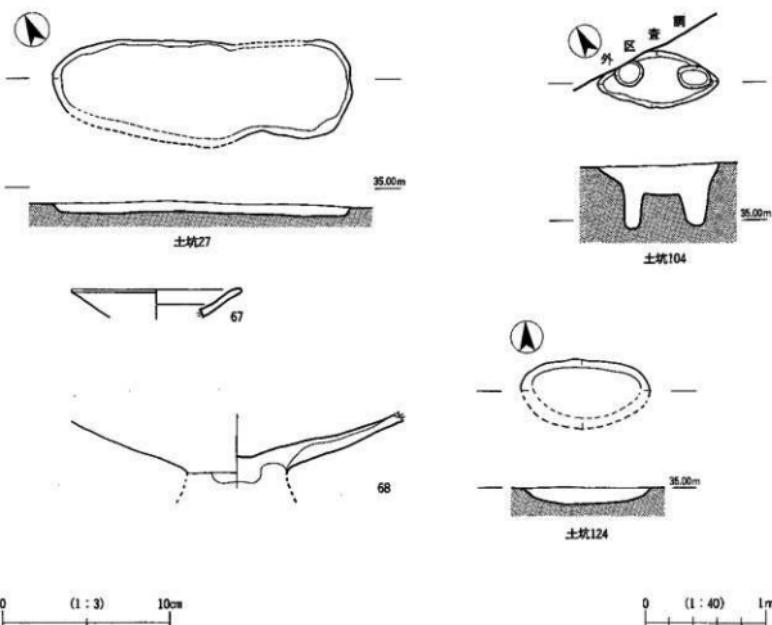
図VI.32 北区 土坑II類 (1)



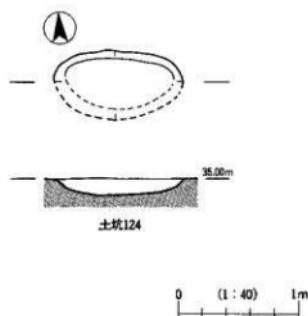
図VI.33 北区 土坑II類 出土遺物 (1)



図VI.34 北区 土坑II類 (2)



図VII.35 北区 土坑Ⅲ類 出土遺物（2）



図VII.36 北区 土坑Ⅲ類（3）

なお、土坑9・16・17・27・124は埋土内から遺物が出土している。土坑9からは合子片と思われる白磁片、土坑16からは完形の白磁合子（65）と土師器甕（66）が出土した。土坑17からも土師器甕が出土し、土坑16出土の土師器甕と接合した。この土師器甕は、同町教育委員会で発掘調査を行った長田遺跡（有明町教育委員会 2003年3月）の2号土壙墓より出土した遺物と酷似している。また土坑27からは白磁皿片（67）が、土坑124からは成川式土器高环片（68）が出土した。

土坑Ⅲ類 出土遺物（図VII.33・図VII.35）

65は完形の白磁合子である。土坑16より出土した。施釉は外面に施され、内面は無釉である。66は土師器甕である。土坑16・17より出土した。口縁部は外反し、胴部の下部は斜め方向のハケ目調整で、その調整方向は主に左から右に向かって左下がりだが、所々に逆向きの調整も見られる。67は白磁皿である。口縁部が直行し、内外面に釉が施されている。68は成川式土器の高環で胴部が直行する。

表VI.19 北区 土坑Ⅱ類 計測表

土坑番号	検査番号	検出区	平面形	長軸(cm)	短軸(cm)	長軸方位	埋土	備考
5	図VI.34	C-14	楕円形	174	90	北北東	黒褐色土	
9	図VI.34	E-14	(椭円形)	(108)	(101)	北西	黒茶褐色土	合子片1点出土
16	図VI.32	D-15	円形	127	118	北西	黒色土	白磁合子(65)十郎器甕(66)出土 土坑17と切り合う
17	図VI.32	D-15	(隅丸長方形)	(157)	(120)	北	黒褐色土	上部器甕(66)出土 土坑16と切り合う
20	図VI.34	E-13	楕円形	161	104	北東	黒茶褐色土	
22	図VI.34	E-14	楕円形	124	58	北北東	墨色土	
27	図VI.36	E-13	隅丸長方形	240	81	北西	黒色土	白磁瓶(67)出土 後孔により一部破壊を受けている
104	図VI.36	G-9-10	(椭円形)	(100)	(48)	北西	黒色土	底面にピット2基検出
124	図VI.36	C-15	楕円形	105	56	西	黒褐色土	堅穴住居4と切り合う 成川式土器甕环(68)出土

④土坑Ⅳ類 (図VI.37・図VI.38)

該当土坑…土坑1・10・11・24・26・29・30・52・61・80・95・96・99・100・101・102・105・106・114・122・125・126・128

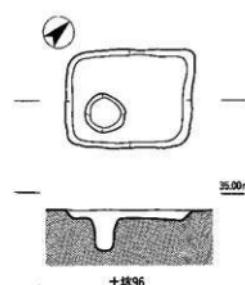
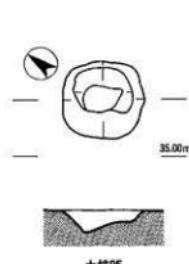
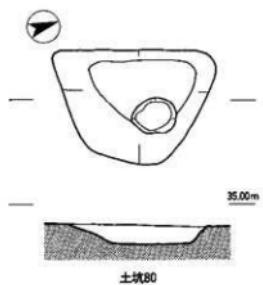
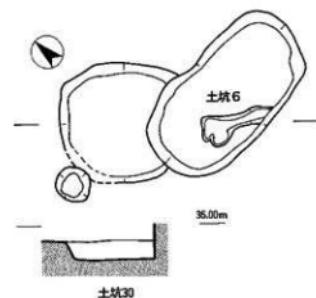
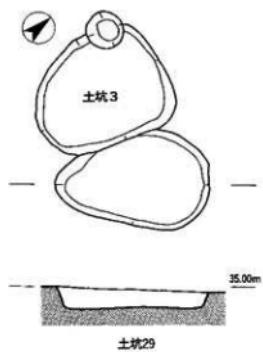
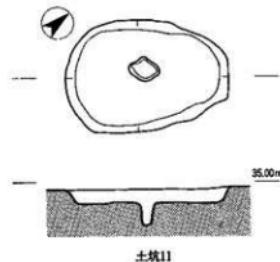
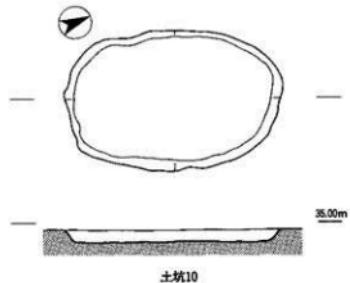
土坑IV類は、平面形が楕円形・隅丸長方形を呈し、検出面での埋土は、検出面及び埋土中に白黄色の池田降下鰐石を含む黒色・黒褐色・黒茶褐色土である。長軸が長いもので215cm、短いもので66cmと大小様々あり、土坑の長軸方位はほとんどが北北西・北北東に向いている。

土坑Ⅳ類 出土遺物 (図VI.39)

69は完形の成川式土器の手捏土器である。底部は丸底に近く、内外面部に指頭圧痕が顕著に見られる。70は成川式土器の蓋で脚部が外反する。

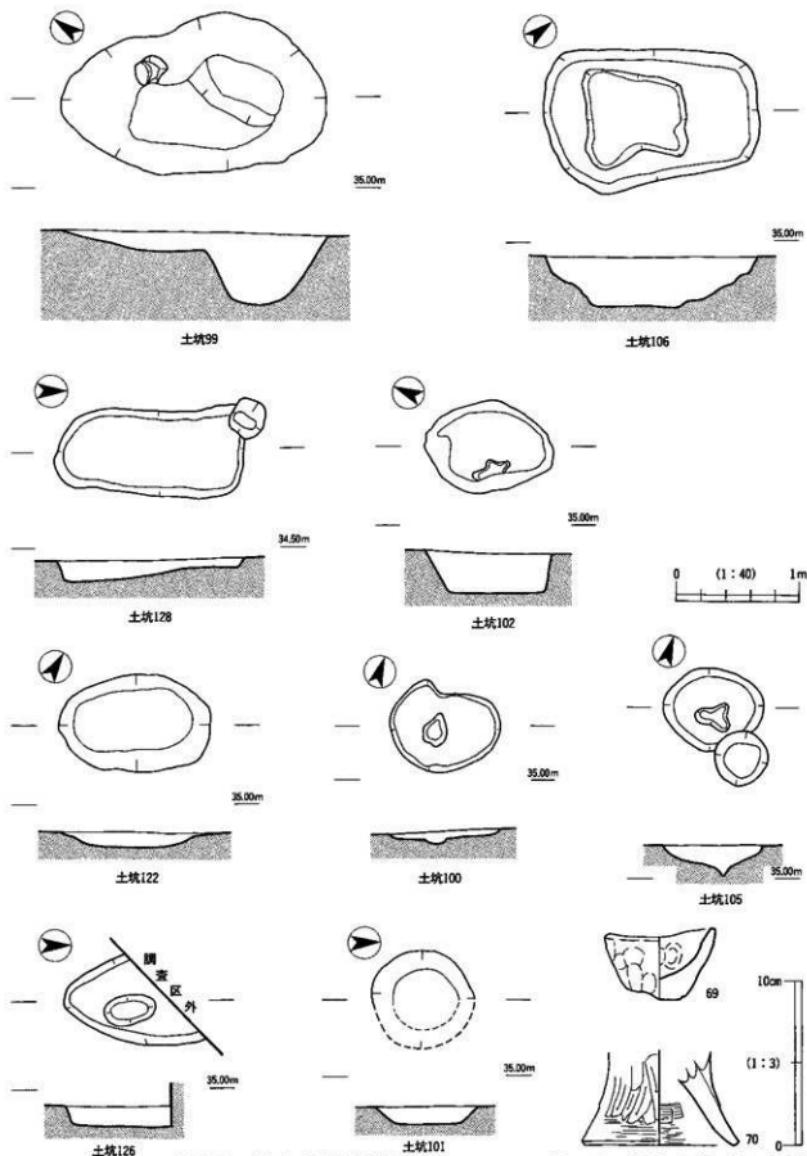
表VI.20 北区 土坑Ⅳ類 計測表

土坑番号	検査番号	検出区	平面形	長軸(cm)	短軸(cm)	長軸方位	埋土	備考
1	-	D-14-15	楕円形	162	120	西北西	黒色土+池田降下鰐石	
10	図VI.37	D-E-13	楕円形	175	116	北北東	黒色土+池田降下鰐石	
11	図VI.37	D-E-13	楕円形	135	94	北北東	黒色土+池田降下鰐石	底面にピット1基検出
24	-	D-15	楕円形	167	103	北西	黒褐色土+池田降下鰐石	
26	-	C-15	楕円形	116	88	北北東	黒褐色土+池田降下鰐石	
29	図VI.37	D-14	楕円形	125	81	北東	黒褐色土+池田降下鰐石	土坑3と切り合う
30	図VI.37	E-14	(楕円形)	(114)	(97)	北西	黒褐色土+池田降下鰐石	土坑6と切り合う
52	-	C-16	隅丸長方形	116	104	北	黒褐色土+池田降下鰐石	
61	-	B-C-16	隅丸長方形	104	98	北東	黒褐色土+池田降下鰐石	
80	図VI.37	B-17	隅丸長方形	115	93	北北東	黒色土+池田降下鰐石	底面にピット1基検出
95	図VI.37	B-18	隅丸長方形	66	62	北北西	黒褐色土+池田降下鰐石	
96	図VI.37	B-17	隅丸長方形	103	81	北東	黒色土+池田降下鰐石	土坑82・83と切り合う 底面にピット1基検出
99	図VI.38	B-18	楕円形	215	131	北北西	黒色土+池田降下鰐石	
100	図VI.38	B-18	楕円形	90	74	北東	黒色土+池田降下鰐石	
101	図VI.38	A-18	楕円形	84	86	北	黒茶褐色土+池田降下鰐石	手掘土器(69)成川式土器甕(70)出土
102	図VI.38	A-18	楕円形	104	76	北北西	黒色土+池田降下鰐石	
105	図VI.38	H-10	楕円形	82	69	北東	黒茶褐色土+池田降下鰐石	柱穴と切り合う
106	図VI.38	I-11	楕円形	175	119	北北東	黒色土+池田降下鰐石	
114	-	D-14	楕円形	97	66	北北東	黒茶褐色土+池田降下鰐石	
122	図VI.38	E-14-15	楕円形	123	80	北東	黒褐色土+池田降下鰐石	
125	-	C-15	楕円形	109	86	北西	黒褐色土+池田降下鰐石	
126	図VI.38	D-14	(楕円形)	86	71	北	黒色土+池田降下鰐石	堅穴住居3と切り合う
128	図VI.38	A-20	楕円形	143	74	北	黒褐色土+池田降下鰐石	土坑127と切り合う



0 (1 : 40) 1m

图VI.37 北区 土坑IV类 (1)



図VI.38 北区 土坑IV類 (2)

図VI.39 北区 土坑IV類 出土遺物

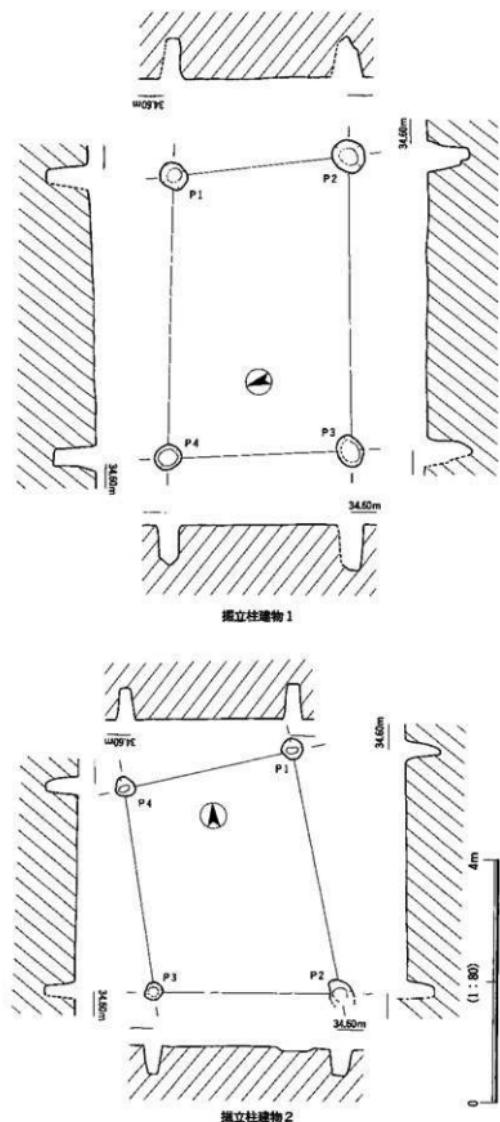
⑤ V類

該當土坑 6・7・8・12・15・18・21・23・25・28・31・33・34・35・36・37・40・41・42・43・44・45・46・47・48・49・50・53・54・55・56・57・58・59・60・62・63・64・65・67・68・69・71・74・77・78・84・86・87・88・89・90・93・94・98・103・107・108・109・110・112・113・115・116・117・120・123・127・129

土坑V類は、平面形が椭円形・隅丸長方形・隅丸方形を呈し、検出面での埋土は、検出面及び埋土中に白黄色の池田降下軽石を含む黒茶褐色・黒褐色土である。長軸が長いもので200cm、短いもので67cmと大小様々あり、土坑の長軸方位はほとんどが北西・北東に向いている。類例的にはIV類に似るが、異なる点は、これらの土坑を半裁し、その断面を観察すると土坑の立ち上がりラインが明瞭ではなく、V層に黒茶褐色・黒褐色土が染み状に入る状態で検出される点である。またV類土坑の埋土中からは遺物は全く見当たらない点も土坑IV類と異なる特徴である。
(出口)

表VI.22 北区 土坑 出土土器 観察表

横幅 横 幅 cm	縦幅 縦 幅 cm	区 区 域 No.	層 層 別 別 名	遺物 遺物 名	剖面 剖面 形 形	剖面 剖面 部位 部位 名	土 土 質 質 名	内 内 容 容 量 量 cm ³	外 外 質 質 名	調査 調査 方 方 法 法	深度(cm)			備 考	
											口井	井内	井内		
IV-VI.28	37 12-15-17	A-19	黒土	上底面	土器部	充てん	○	内面 池田降下軽石 外面 黒茶褐色	内面 ロクロナデ 外面 ロクロナデ・ホモリ	15.2 7.0 3.0	底部に赤切り削し痕				
IV-VI.28	58	9 A-19	黒土	土器部	土器部	瓶底	○	内面 池田色 外面 黒茶褐色	内面 ロクロナデ 外面 ナデ・ホモリ	— 6.4 0.6	底部に赤切り削し痕				
IV-VI.28	29	3 A-19	黒土	土器部	土器部 火照	一輪	○ ○	内面 池田色 外面 黒茶褐色	内面 ロクロナデ 外面 ロクロナデ・ホモリ	9.15 5.6 1.2	底部に赤切り削し痕				
IV-VI.29	40	1-2 A-19	黒土	上底面	土器部	瓶底 火照	○ ○	内面 池田色 外面 黒茶褐色	内面 ロクロナデ 外面 ロクロナデ	9.55 7.0 1.3	底部に赤切り削し痕				
IV-VI.29	61	4-14-15 A-19	黒土	土器部	土器部 火照	一輪	○ ○	内面 池田色 外面 黒茶褐色	内面 ロクロナデ 外面 ロクロナデ・ホモリ	3.2 8.0 1.0	底部に赤切り削し痕				
IV-VI.30	62	4-13 A-19	黒土	土器部	土器部 火照	牛頭	○ ○	内面 池田色 外面 黒茶褐色	内面 ロクロナデ 外面 ロクロナデ・ヘラ切り	2.9 7.0 1.4	底部に赤切り削し痕				
IV-VI.30	64	1234 A-20	黒土	底成150	底成式 器	口縁部	○ ○ ○	内面 池田色 外面 黒茶褐色	内面 ロクロナデ・ナデ黒色 外面 ナデ・ロクロナデ・ナデ黒色	26.4 — 5.5					
IV-VI.33	65	一様	D-15	黒土	上底16	六瓣 合	充てん	2.5YR 1/2	内面 池田色 外面 黒茶褐色 特徴：明神山色 物語：紫白色	内面 ロクロナデ 外面 ロクロナデ	5.8 4.9 4.4				
IV-VI.33	66	一様	D-15	黒土	底成16-17	山底部 一側傾	○ ○ ○	内面 にじいろ色 外面 にじいろ色	内面 ロクロナデ・ナデ・ヘラ切り 外面 ロクロナデ・ナデ・ヘラ切り	38.4 — 15.1	内・外面に埋付窓				
IV-VI.35	67	1208	X-13	黒土	13627	白壁 底	底成部	2.3YR 1/2	内面 黒茶褐色 外面 黒茶褐色	内面 ロクロナデ 外面 黒茶褐色	10.2 — 1.7				
IV-VI.36	68	95	C-15	黒土	底成124	底成式 器	平面	○ ○ ○	内面 にじいろ色 外面 黒茶褐色	内面 ナデ 外面 ナデ	— — 4.1				
IV-VI.39	69	34	A-18	黒土	底成181	底成式 器 子持土器	米芯	○ ○ ○	内面 にじいろ色 外面 黒茶褐色	内面 ナデ・切削研磨 外面 ナデ・削痕・張	6.8 — 4.4	内・外面に埋施			
IV-VI.39	70	18	A-18	黒土	底成181	底成式 器	脚部	○ ○ ○	内面 にじいろ色 外面 黒茶褐色	内面 ロクロナデ 外面 ロクロナデ・ヘラ切り	— 9.8 5.7				



3. 挖立柱建物と柱列

復元された掘立柱建物は14棟を数える。おもに北区北端と南半に集中している。北端の一群は各建物の軸方向がやや不一致なのに対して、南半の一群は軸方向が一致している。また、両地点の周囲には柱穴が集中しており、他の施設などが存在していた可能性がある。

各掘立柱建物の時期は、埋土と出土遺物から古墳時代から中世の広い範囲が考えられる。詳しくは遺構内出土遺物がなく不明である。

柱列は4基を確認している。調査区中央の掘立柱建物5・6に隣接している。

掘立柱建物 1～4

いずれも1間×1間であるが、掘立柱建物2・4は調査区外に統く可能性が考えられる。また、掘立柱建物2・4は平面形がやや歪である。

建物の軸方向は、掘立柱建物1を除き、軸方向が一致する。掘立柱建物2～4の軸方向は、近接する竪穴住居1・5とも類似している。

周囲には、多数の柱穴があり、施設が集中していたか、複数の時期を通して掘立柱を利用した施設が築かれていたものと考えられる。また、この地点は、現在の河岸段丘線近くから10mと崖に近く¹、立地的に何らかの目的をもった施設が集中した可能性も考えられる。

時期については、不明である。

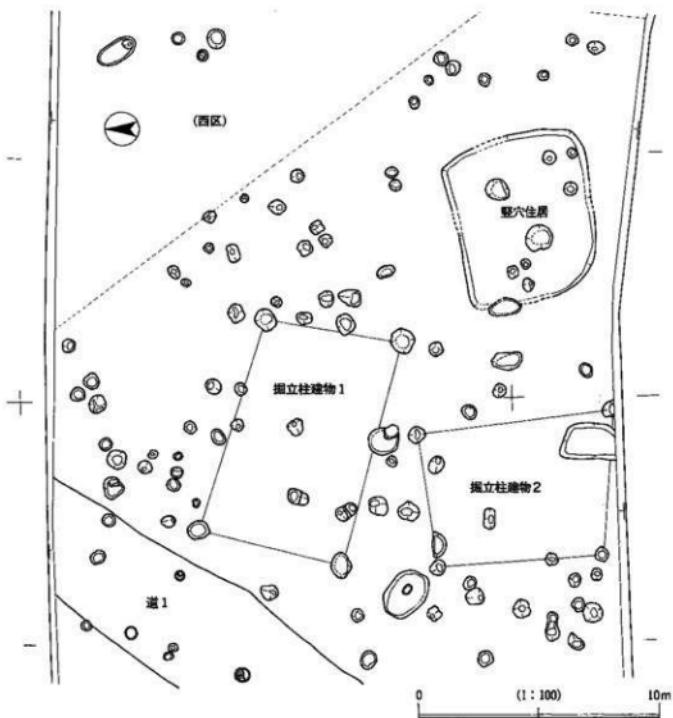


図 VI.41 北区 掘立柱建物 1・2 周辺遺構配置

表 VI.23 掘立柱建物 1 の計測表

	径×深さ(cm)	距離(cm)
P1	40×60	P1-P2 280
P2	52×68	P2-P3 480
P3	40×76	P3-P4 300
P4	44×68	P4-P1 460

表 VI.24 掘立柱建物 2 の計測表

	径×深さ(cm)	距離(cm)
P1	36×56	P1-P2 400
P2	40×40	P2-P3 300
P3	28×48	P3-P4 340
P4	32×52	P4-P1 280

表 VI.25 掘立柱建物 3 の計測表

	径×深さ(cm)	距離(cm)
P1	40×88	P1-P2 560
P2	40×40	P2-P3 580
P3	48×60	P3-P4 572
P4	40×36	P4-P1 680

表 VI.26 掘立柱建物 4 の計測表

	径×深さ(cm)	距離(cm)
P1	28×28	P1-P2 240
P2	44×16	P2-P3 140
P3	24×48	P3-P4 120
P4	32×12	P4-P5 208
P5	32×12	P5-P1 272

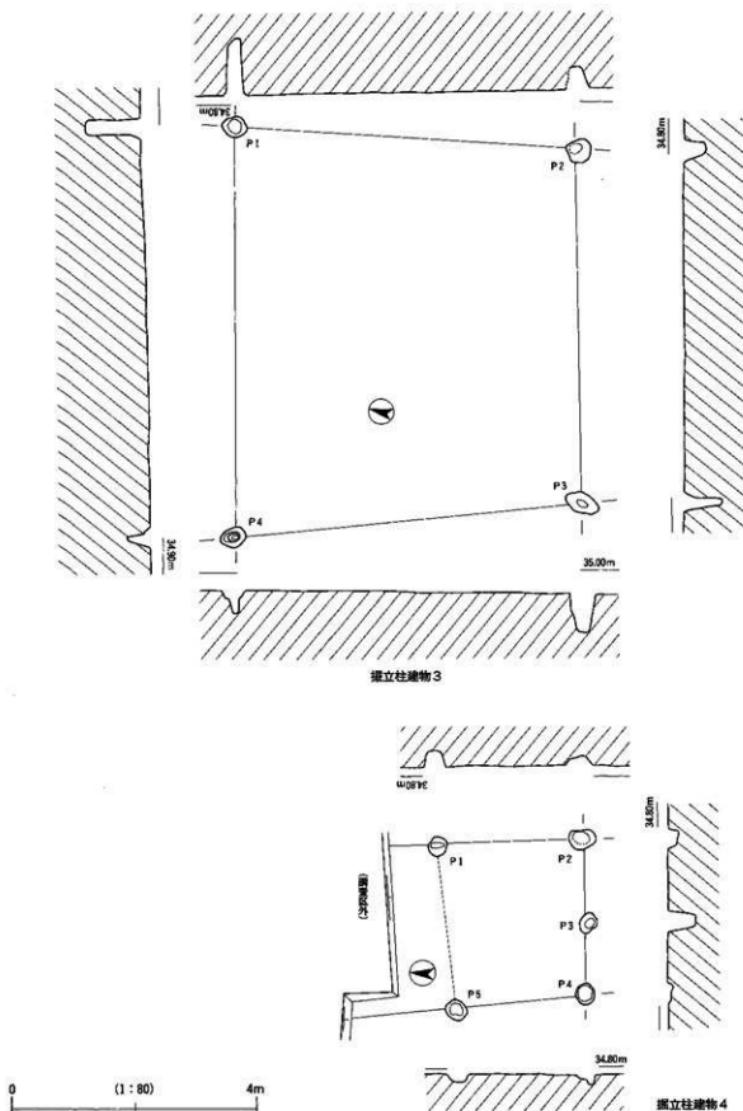


図 VI.42 北区 掘立柱建物 3・4

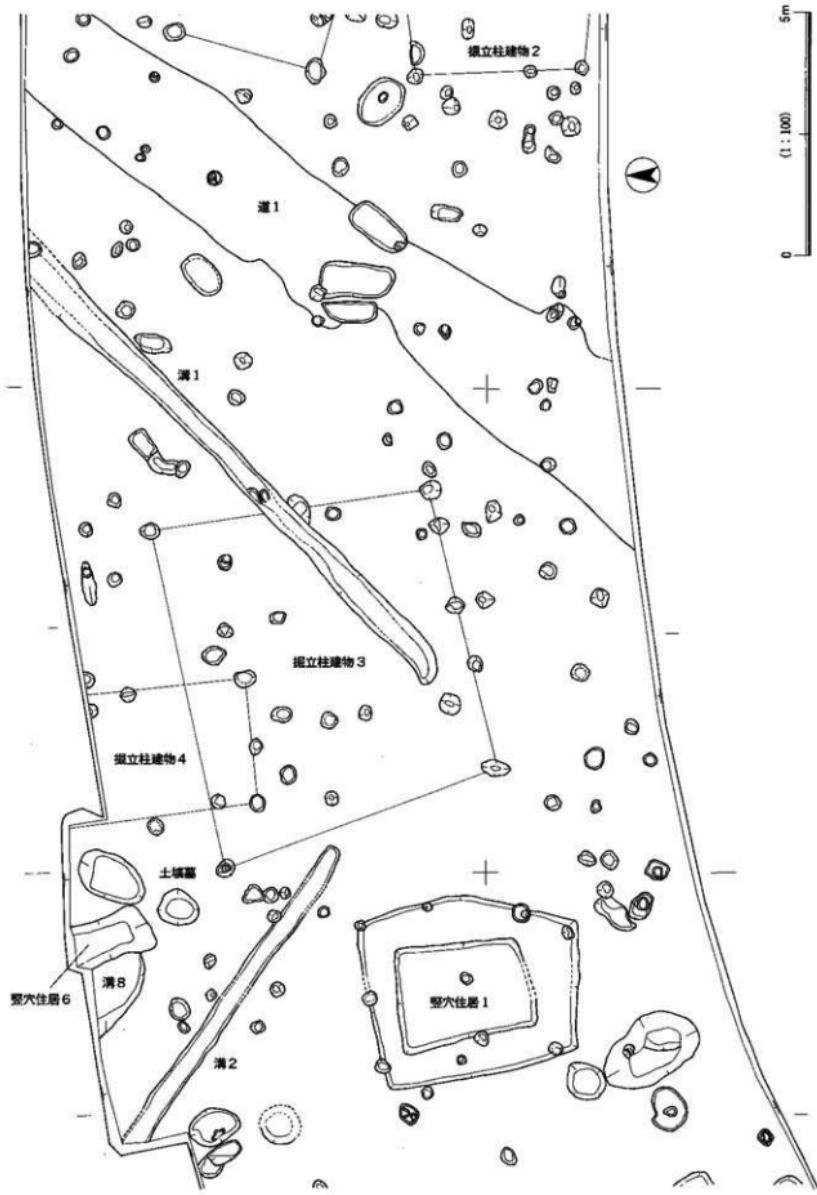
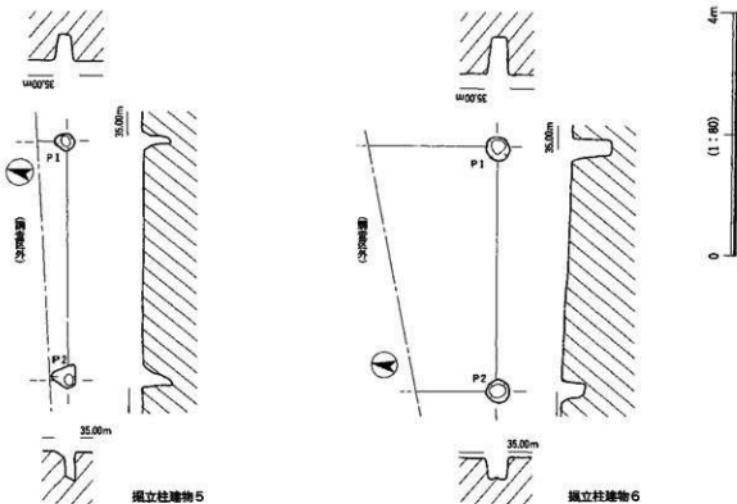


図 VI.43 北区 提立柱建物 3・4 周辺遺構配置



図VI.44 北区 挖立柱建物5・6

表VI.27 挖立柱建物5の計測表

	径×深さ(cm)	距離(cm)
P1	32×48	P1-P2 388
P2	36×52	

表VI.28 挖立柱建物6の計測表

	径×深さ(cm)	距離(cm)
P1	40×68	P1-P2 400
P2	40×40	

表VI.29 柱列1~4の計測表

柱列1		
	径×深さ(cm)	距離(cm)
P1	20×4	P1-P2 64
P2	20×45	P2-P3 100
P3	22×6	P3-P4 100
P4	20×7	P2-P4

柱列2		
	径×深さ(cm)	距離(cm)
P1	18×6	P1-P2 90
P2	14×3	P2-P3 170
P3	14×14	P3-P4 76
P4	8×9	P4-P5 70
P5	10×17	P5-P6 66
P6	16×7	

柱列3		
	径×深さ(cm)	距離(cm)
P1	10×9	P1-P2 66
P2	12×10	P2-P3 66
P3	10×11	P3-P4 80
P4	10×9	P4-P5 120
P5	10×24	P5-P6 80
P6	12×17	

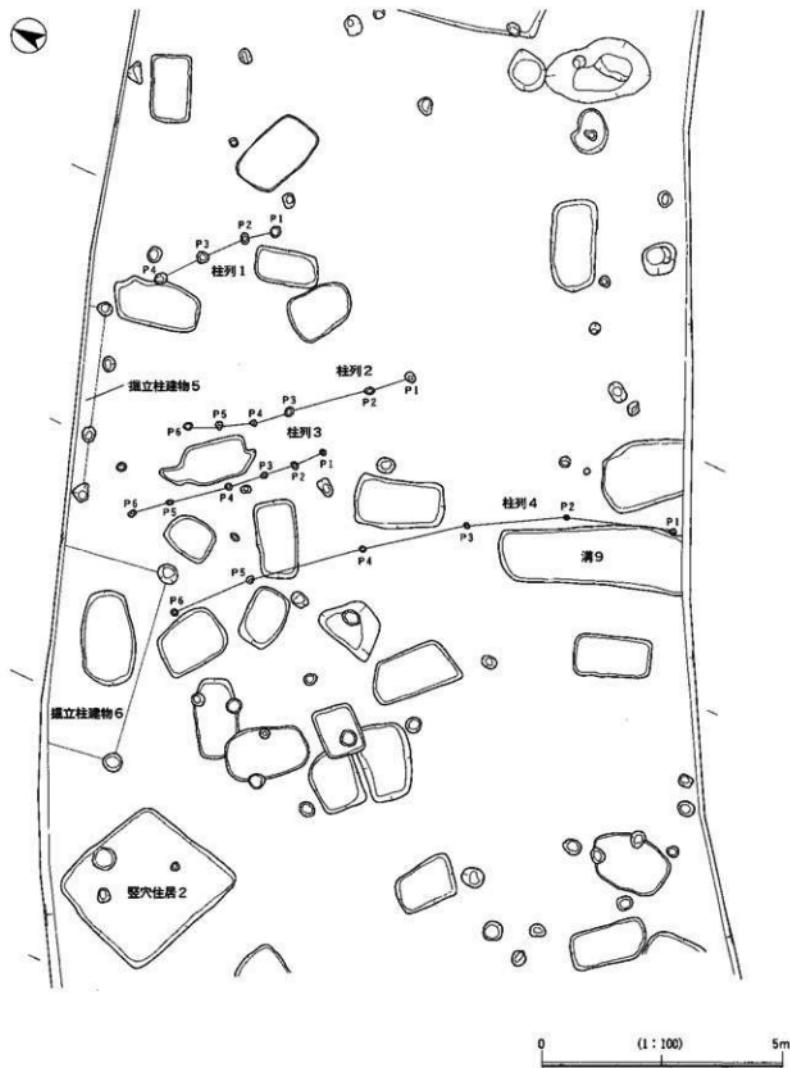
柱列4		
	径×深さ(cm)	距離(cm)
P1	10×17	P1-P2 220
P2	6×9	P2-P3 200
P3	8×7	P3-P4 216
P4	12×8	P4-P5 236
P5	10×11	P5-P6 170
P6	10×23	

掘立柱建物5・6

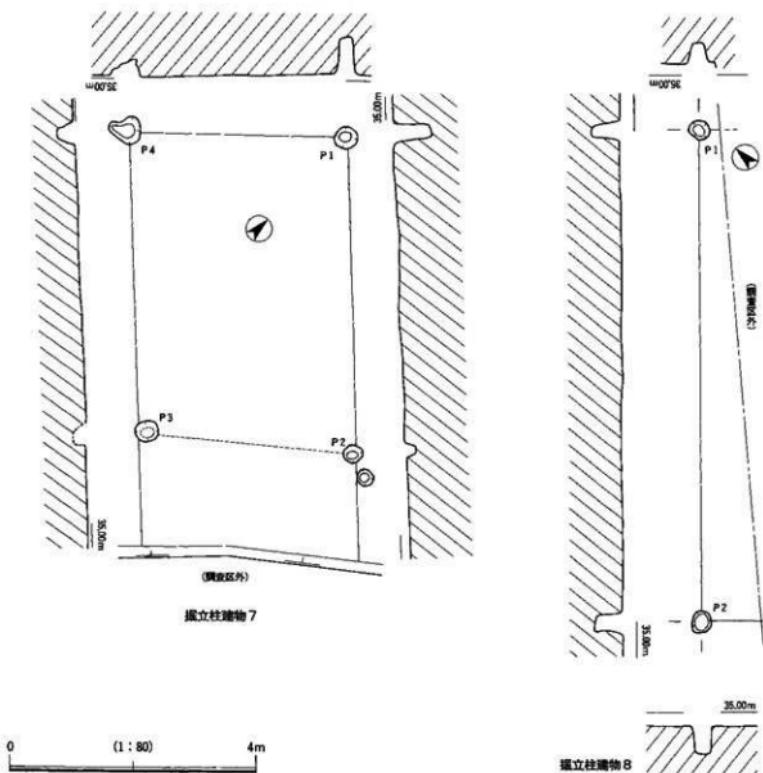
掘立柱建物の集中する地点からやや離れる。軸方向は掘立柱建物2~4と類似するものと考えられる。いずれも調査区外に建物の主要部分があるものと考えられ、詳細は不明である。周囲には、柱列1~3が近接する。

柱列1~4

小規模な柱列が並んでいることを確認している。柱穴は、柱列1が径20cm程度、柱列2~4が径10~15cm程度を測る。性格などは不明である。



図VI.45 北区 掘立柱建物5・6 柱列1～4 周辺造構配置



掘立柱建物 7・8

掘立柱建物の集中する地点から離れる。軸方向は掘立柱建物 9~14 と類似する。いずれも調査区外に建物が延びており、詳細は不明である。また、周囲には柱穴も少ない。柱列 1~4 に近接する。

表 VI.30 挖立柱建物 7 の計測表

	径×深さ(cm)	距離(cm)
P1	36×64	P1-P2 520
P2	36×16	P2-P3 340
P3	40×24	P3-P4 492
P4	48×20	P4-P1 360

表 VI.31 挖立柱建物 8 の計測表

	径×深さ(cm)	距離(cm)
P1	32×40	P1-P2 800
P2	32×44	

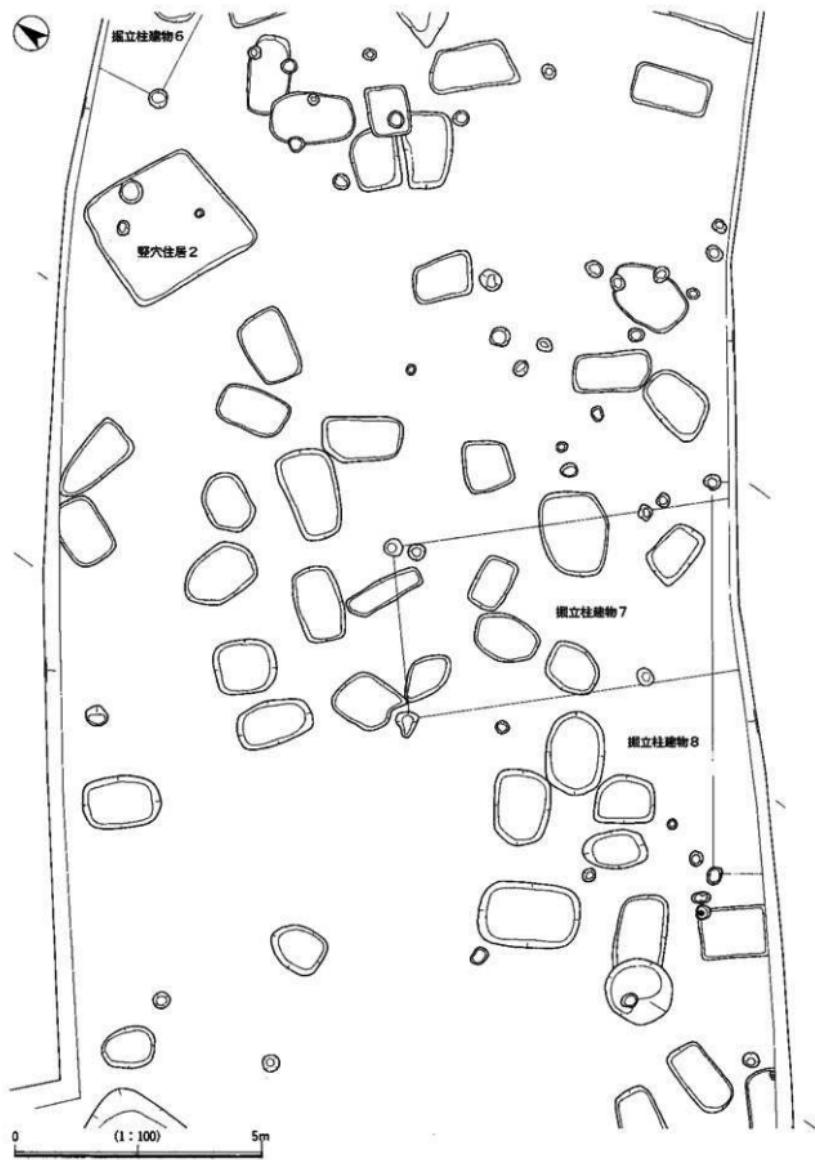
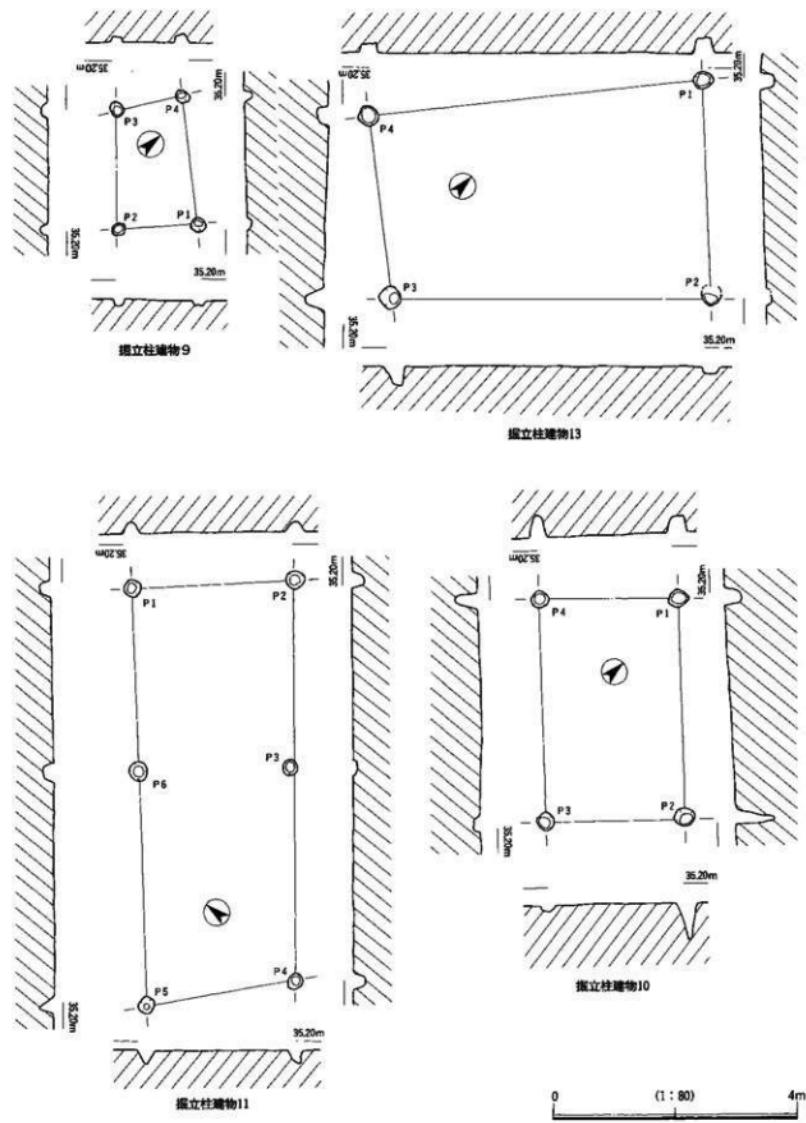


图 VI.47 北区 掘立柱建物 7・8 周边遗構配置



図VI.48 北区 挖立柱建物9~11・13

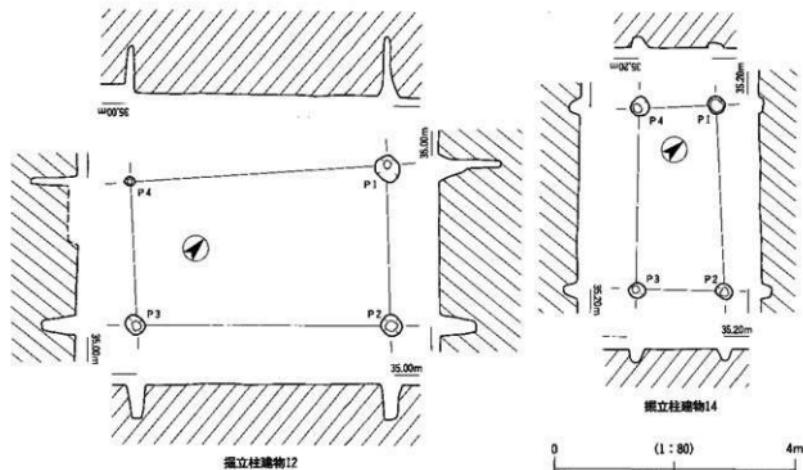


図 VI.49 北区 挖立柱建物12・14

表 VI.32 挖立柱建物9の計測表

	径×深さ(cm)	距離(cm)
P1	24×8	P1-P2 132
P2	20×12	P2-P3 200
P3	24×8	P3-P4 108
P4	24×16	P4-P1 212

表 VI.35 挖立柱建物12の計測表

	径×深さ(cm)	距離(cm)
P1	40×100	P1-P2 260
P2	36×60	P2-P3 420
P3	32×56	P3-P4 236
P4	16×76	P4-P1 420

表 VI.33 挖立柱建物10の計測表

	径×深さ(cm)	距離(cm)
P1	32×24	P1-P2 360
P2	36×60	P2-P3 228
P3	28×12	P3-P4 360
P4	28×36	P4-P1 228

表 VI.36 挖立柱建物13の計測表

	径×深さ(cm)	距離(cm)
P1	32×24	P1-P2 360
P2	32×8	P2-P3 520
P3	36×32	P3-P4 300
P4	36×20	P4-P1 548

表 VI.34 挖立柱建物11の計測表

	径×深さ(cm)	距離(cm)
P1	28×16	P1-P2 268
P2	36×20	P2-P3 308
P3	24×8	P3-P4 352
P4	24×20	P4-P5 252
P5	28×20	P5-P6 388
P6	28×16	P6-P1 300

表 VI.37 挖立柱建物14の計測表

	径×深さ(cm)	距離(cm)
P1	28×8	P1-P2 308
P2	28×16	P2-P3 140
P3	28×20	P3-P4 300
P4	32×16	P4-P1 132

表 VI.38 挖立柱建物9～14

多くは1間×1間であるが、掘立柱建物11は2間×1間である。規模は小ささままである。建物の軸方向はほぼ一致する。各建物に大きな時期差はないと考えられる。また、周囲には多数の柱穴があり、掘立柱を利用した施設が集中していたものと考えられる。時期は、滑石製石鍋の2次加工品149などが周囲から出土していることから、中世の可能性を考えられる。（東）

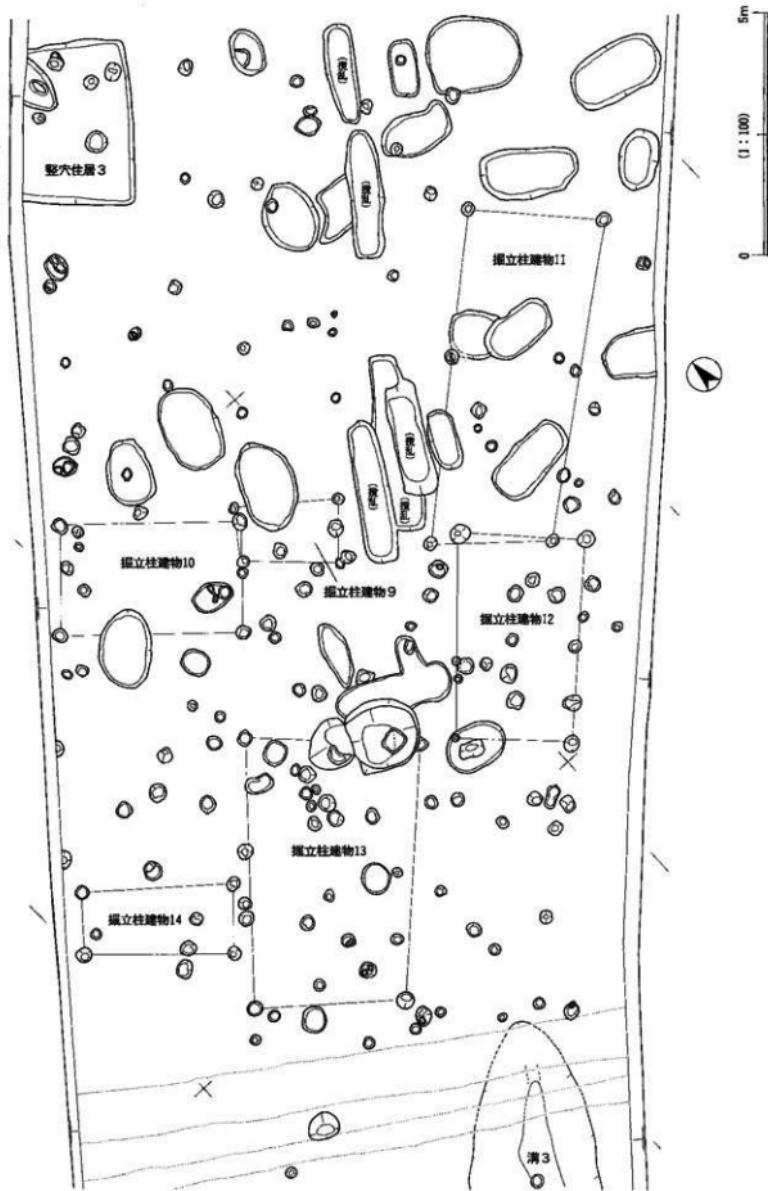
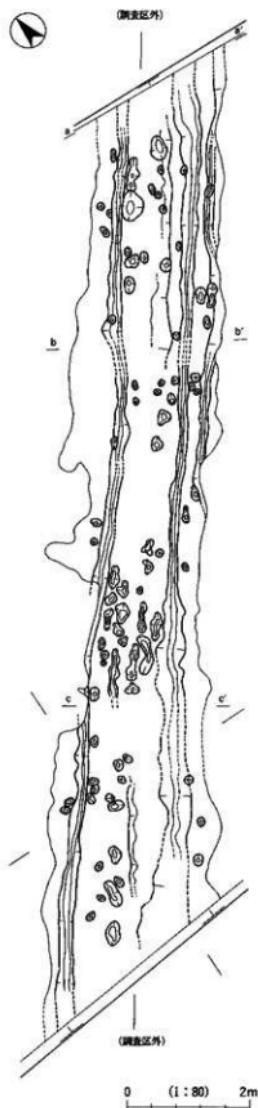
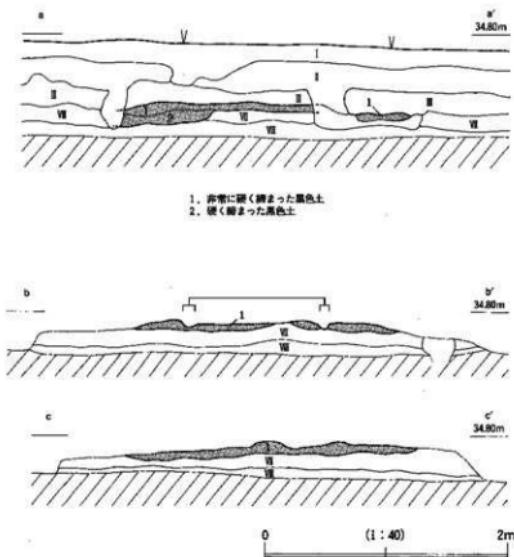


図 VI.50 北区 掘立柱建物 9~14 周辺造構配置



図VI.51 北区 道1 硬化面検出状況



図VI.52 北区 道1 土層断面

4. 道と溝

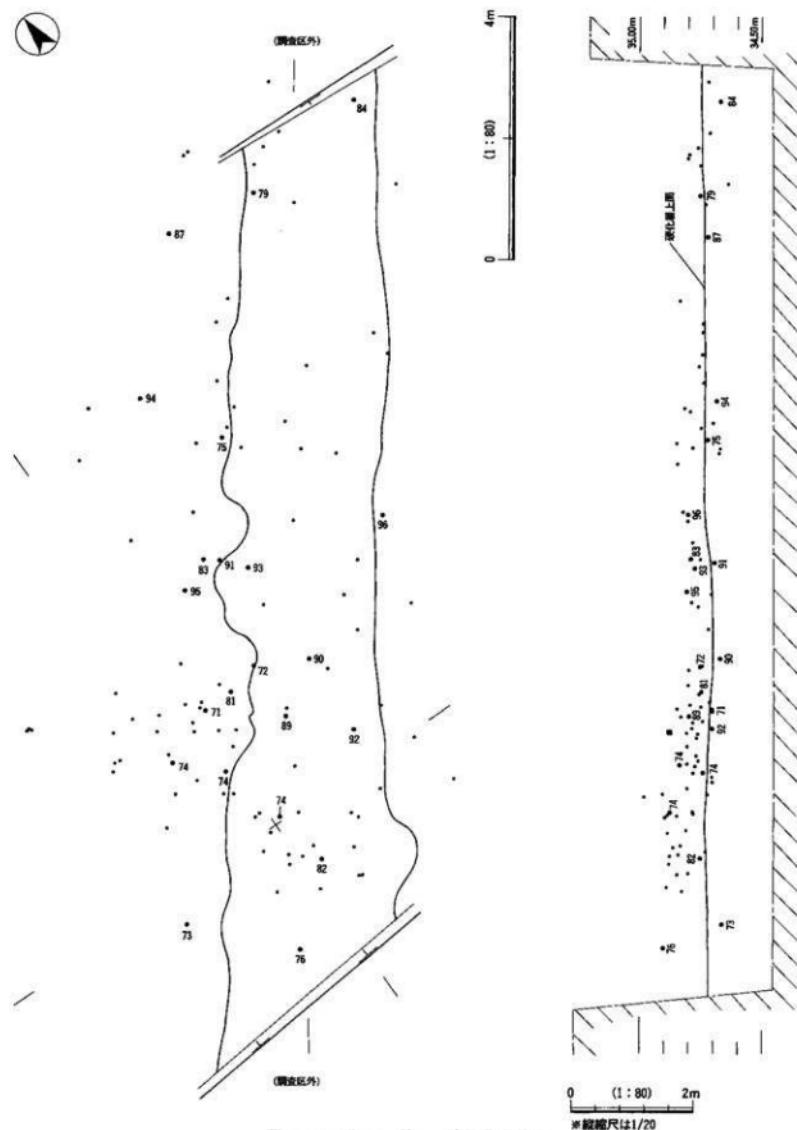
道と溝を合わせて11条確認している。溝3・5・6には硬化面が存在しており、道路状遺構と考えられる。

ア) 道1

南西から北東に向かって硬化面が延びる。規模は幅240cmを測る。硬化面はほぼ1層で形成され、基本層序VII層の上に築かれる。硬化層は黒色土で他の土の混入がなく、古代の遺物が層中や層下に分布することから、古代の遺物を包含する地山を硬く締めて硬化面を造ったものか、人などの往来により、繰り返し踏み締めたため硬質化したものなどの可能性が考えられる。

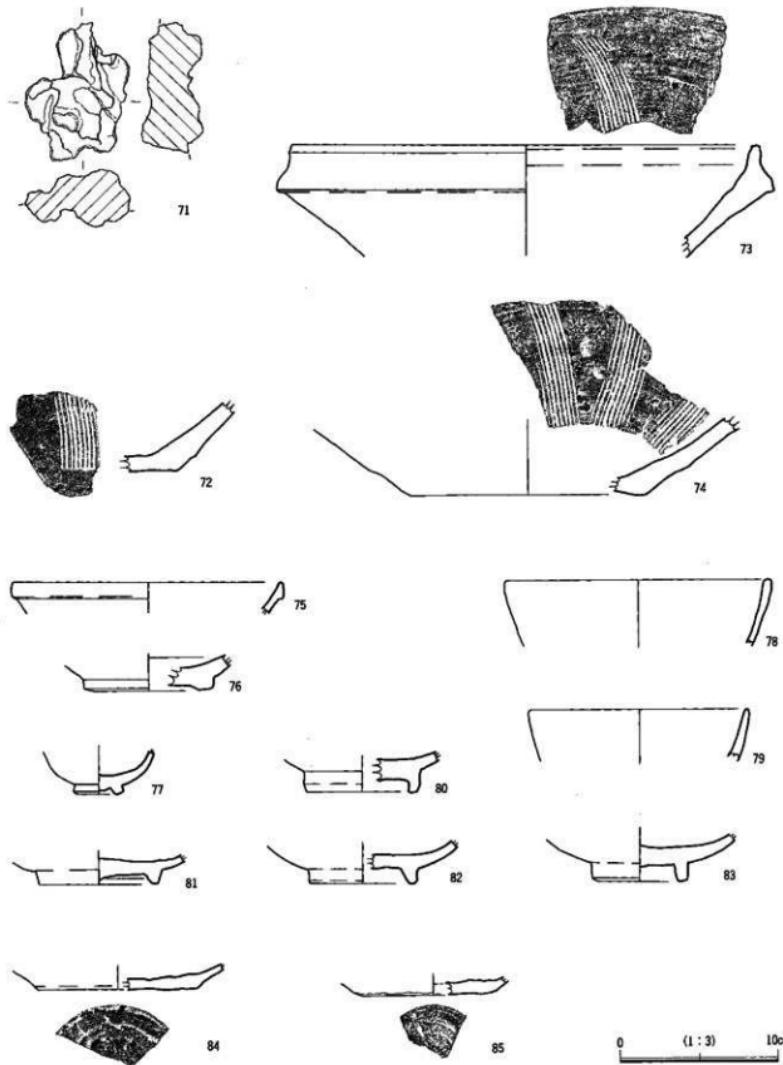
また、硬化層は非常に良く締まるが、硬化層上面には大小の凹凸が多く見られる。調査区北壁の土層断面に掘り込みなどがない、築かれた層位も浅いことから掘り込みなどは伴わなかったと考えられる。

硬化面に見られる凹凸には2条の溝と円形ないし楕円形の凹みがある。2条の溝は幅110cm程で並行して延びており、硬化面とも並行する。このことから道を進んだ荷車などの轍跡の可能性が考えられる。並行する溝が轍跡であると円形ないし楕円形の凹みは牛馬などの歩行による足跡の可能性が考えられる。

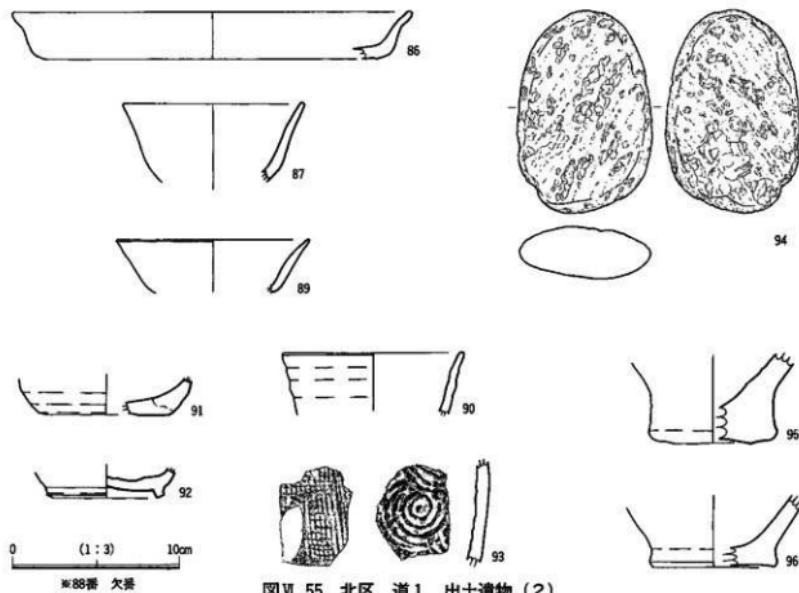


図VI.53 北区 道1 遺物分布状況

0 (1:80) 2m
*縮尺は1/20



图VI.54 北区 道1 出土遗物（1）



図VI.55 北区 道1 出土遺物 (2)

遺物の分布状況

硬化面を中心に垂直分布を見ると硬化面下には須恵器が多く分布し、上には陶磁器が見られる。陶磁器の中でも擂鉢は比較的高い位置にあり、平面分布も道1の脇に集まる。硬化層中からは青磁80と須恵器92が出土している。このことから時期は、中世後半の16世紀代と考えられる。分布状況の詳細は図VI.53に示している。

出土遺物

道1周辺では、おもに以下の遺物が出土している。時期はおもに須恵器が9世紀代、白磁75・76が12~13世紀代、擂鉢72~73と青磁79・82・83は16世紀代と考えられる²。

鉛錆71は長さ86.13cm×幅63.52cm、重さ184.83gを測る。磁力には反応しない³。

擂鉢72~73は同一個体と考えられる。色調はふい黄橙色(10YR6/4)を呈す。胎土には0.5~5mmの大砂粒が多く含まれる。とくに長石が多い。器面は外面をヨコナデで仕上げる。内面には擂目が施される。

陶磁器75~83は貿易陶磁と考えられる。75~77・81は白磁、78~80・82・83は青磁である。口縁75と底部76は類似する。底部は高台上から下が露胎となる。色調は釉が灰白色(5Y7/1)、胎土が灰白色(2.5Y7/1)を呈する。口縁78と底部80は類似する。口縁78は口縁端部がやや肥厚し、外面には蓮弁文が見られる。底部80は高台の内側まで釉薬が見られる。色調は釉がオリーブ灰色(2.5GY6/1)、胎土が灰色(5Y6/1)を呈する。口縁79と底部83は類似する。底部83は高台の内側まで釉薬が見られる。色調は釉が灰オリーブ色(5Y5/2)、胎土が灰白色(5Y7/1)を呈する。底部77は、疊付けまで釉薬が見

られる。色調は釉が灰白色（N8/0）、胎土が灰白色（N8/0）を呈する。底部81は見込みが露胎となる。外面は疊付まで釉薬が見られる。色調は釉が淡黄色（2.5Y8/4）、胎土が灰白色（2.5Y8/2）を呈する。底部82は見込みに線刻が施される。釉薬は高台内まで見られる。色調は釉が明緑灰色（10GY7/1）、胎土が灰白色（2.5Y7/1）を呈する。

土師皿84・85は、色調が橙色（7.5YR7/6）を呈して、器面をヨコナデで整える。底部は84がヘラギリ、85が糸切りであろうか。

須恵器86～93は口縁部4点、底部2点、胴部1点が出土しており、器種は杯・皿・甕がある。器面調整はいずれもヨコナデで整える。皿86・杯89は胎土が類似し、色調が灰黄色（2.5Y6/2）を呈する。

杯87・杯90は胎土が類似し、色調が灰色（5Y5/1）を呈する。底部91は焼成が軟く、器面が摩滅する。色調は灰黄色（2.5Y7/2）を呈する。底部92は高台をもつ。焼成は堅微、色調は灰色（7.5Y5/1）を呈する。胴部93は内面に同心円状の当て具痕、外面に格子目のタクキが見られる。焼成は堅微であるが、断面と内面の色調は橙色（7.5YR7/6）を呈する。外面は褐灰色（10YR4/1）を呈する。

石製品94は、軽石製品で明晰な擦痕は見られないが、器形は丸みを帯び、器面が滑らかである。

底部95・96は、古墳時代の成川式などの甕の底部である。

イ) 溝1・2

溝1・2は延長線上が直角に交わる。2つを合わせて何らかの区画溝の可能性が考えられる。時期は溝1の出土土器から古代末の9世紀代と考えられる。

溝1は、北東から南西に向かってまっすぐ延びる。断面形は「U」字状を呈する。規模は幅62cm×深さ27cmを測る。溝2は、北西から南東に向かってまっすぐ延びる。断面形は「U」字状ないし皿状を呈する。規模は幅44cm×深さ63cmを測る。

出土遺物

溝1から須恵器97～99と土師器100が出土している。杯身97・98は高台がつく。器面はヨコナデで整える。97は内面がによい黄褐色（10YR5/3）と赤色化する。外面の色調は暗灰黄色（2.5Y5/2）を呈する。杯身98は色調が灰色（10Y5/1）を呈する。器面は内外面がヨコナデ、底面がナデで整える。やや軟質である。杯身99は、色調が灰オーリーブ色（5Y6/2）を呈する。器面は内外面をヨコナデで、底面をナデで整える。

杯身100は内外面をヨコナデで、底面をナデで整える。色調は橙色（7.5YR6/6）を呈する。

ウ) 溝3～7・10

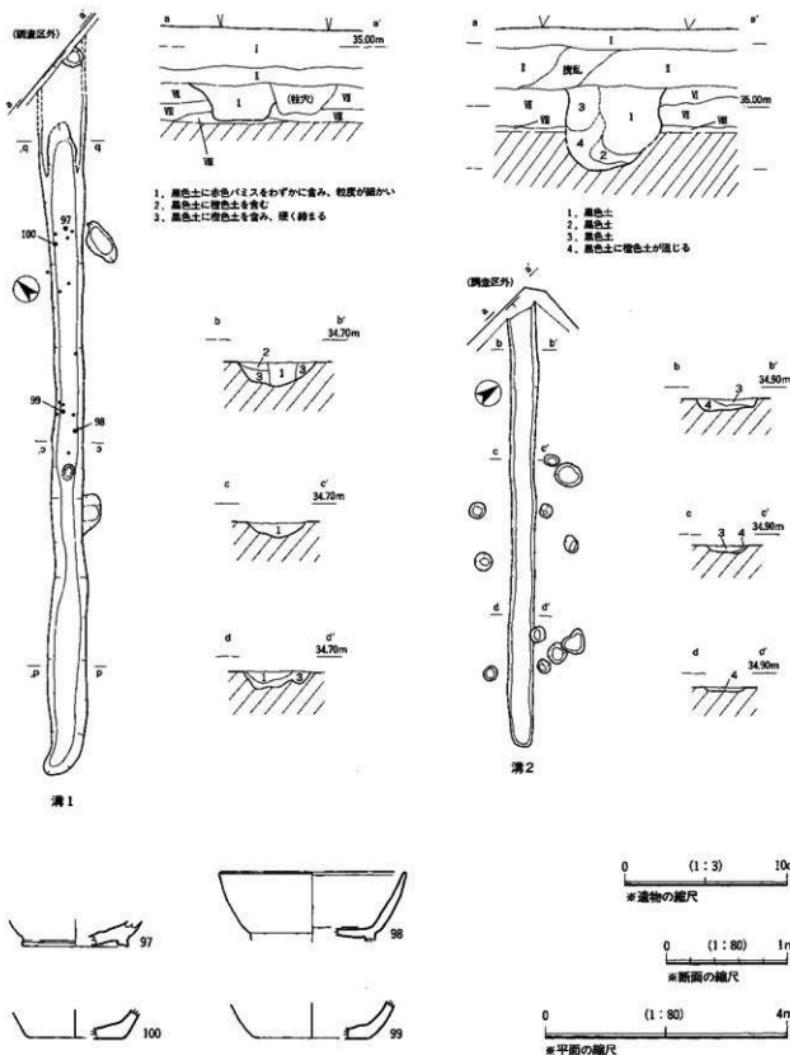
溝が多条に並行して、西側では近代・現代の道路とも並行する。溝3・5・6は道路状遺構と考えられる。溝4も道路状遺構の可能性が考えられる。

溝3は、溝群から北東に向かって突き出す。底面の高さは、溝群に向かってスロープ状に低くなるが、溝4・溝5と接続地点では段差となる。底面は地山がやや硬く締まり、一部では黒色の埋土で形成された硬化面が検出されている。規模は幅252cm×深さ38cmを測る。覆土には人為的な埋め戻し土などはみられない。

溝4は遺存状態が悪い。調査区南壁の土層断面では硬化層が存在しており、硬化面が存在していた可能性が考えられる。

溝5は、浅い掘り込みをもち、埋土に硬化層が存在する。硬化層は硬化面として延びる。規模は幅86cm×深さ22cmを測る。掘り方の底面には、浅い土坑が見られ、等間隔に1列に並ぶ。土坑には黒色土と橙色土とのブロックが混ざりあった土が堆積する。規模はおもに径44cm×深さ8cmを測る。

溝6は、深い掘り込みに、厚い硬化層が存在する。硬化層は硬化面として延びる。硬化層は分層でき、



図VI.56 北区 溝1・2

6つの硬化層が確認できる。規模は幅158cm×深さ52cmを測る。掘り方の底面には、数多くの浅い土坑が見られ、土坑が等間隔に並ぶ。土坑の形態には円形のものやビーナツ状のものが見られる。土坑には黒色土と橙色土とのブロックが混ざりあった土が堆積する。規模は幅45cm×長さ146cmの楕円形土坑の中に、平面が62cm×38cm、深さ8cmを測る小土坑が掘り込まれる。なお、溝6には側壁にテラス状の段差が見られる。東側の平面が半円形の段差は、壁面の一部が急ではあるがスロープ状を呈する⁵。

溝7は、溝3～6と全く異なる。断面形が逆台形を呈して、規模が幅446cm×深さ296cmと大きい。覆土には水成堆積と考えられる層も存在している。層全体的には、下層には地山ブロック土が混じるものが多く、中層には水成堆積を示す層が多い。上層は非常に硬い層が形成されている。中層の水成堆積層の下付近より、径50cm程度の樹木の切り株が出土しており、溝内で生育していたものと考えられる。性格は不明であるが、埋没過程によって使用目的が変わっていると考えられる。

溝10はシラス土が堆積する。調査中は近代の搅乱として扱っている。規模は幅472cm×深さ30cmを測る。性格については道路などが考えられるが、詳しくは不明である。

遺物の出土状況と溝の時期

溝3～6からの出土遺物は、溝3の埋土から土師器10・白磁が、溝5の硬化層からは青磁碗101や石錠（X I章5節を参照）、成川式土器や須恵器・白磁・蓮弁文の青磁などが、溝6の埋土から白磁碗102や硬化層から外面に綱目文を絵付けする磁器178（図版43）などが見られる。遺物の時期差は大きいが、断面などがやや摩滅するものが多く、多くは硬化層などの埋土から出土する。本米は遺物包含層にあつたと考えられ、溝内に硬化層を構築するため移動した黒色土層中に含まれていたものと推察される。なお、溝5の埋土中から打製の石錠（VI.179）が1点出土している。詳しくはII章に後述する。

また、白磁103は多くは溝6から出土したが、一部は溝5からも出土している。このことから溝3～溝6の間に大きな時期差はないと考えられる。

溝3～6の時期としては、溝6の硬化層出土から出土した綱目文の磁器178が17世紀代後半と考えられることから、その前後に各溝は順次築かれたと考えられる。

溝7からは金属製品104が最下層より出土している。時期は不明であるが、隣接する溝4～6や金属製品104が鉄砲玉の可能性があることから、中世末から近世の範囲と考えられる。

出土遺物

図化したものは101～104がある。青磁碗101は高台内まで釉薬が見られる。色調は釉がぶい黄色（2.5Y6/3）、胎土がぶい黄橙色（10YR6/3）を呈する。白磁碗102は高台から下が露胎となる。色調は釉が灰白色（2.5Y8/2）、胎土が灰白色（10YR8/2）を呈する。外面には発色のぶい須頬で絵付を施す。土師器103は尖り底で、外面をナデ、内面をヨコのケズリで整える。器種は不明である。金属製品104は、やや歪んだ円形を呈する。白色の鋸をふき、磁石には反応しない。鉄砲玉であろうか。

エ) 溝8・9

溝8は竪穴住居6と共に検出されている。詳細は不明である。溝9は柱列4に隣接している。規模は幅112cm×深さ385cm以上を測る。詳細は不明である。(東)

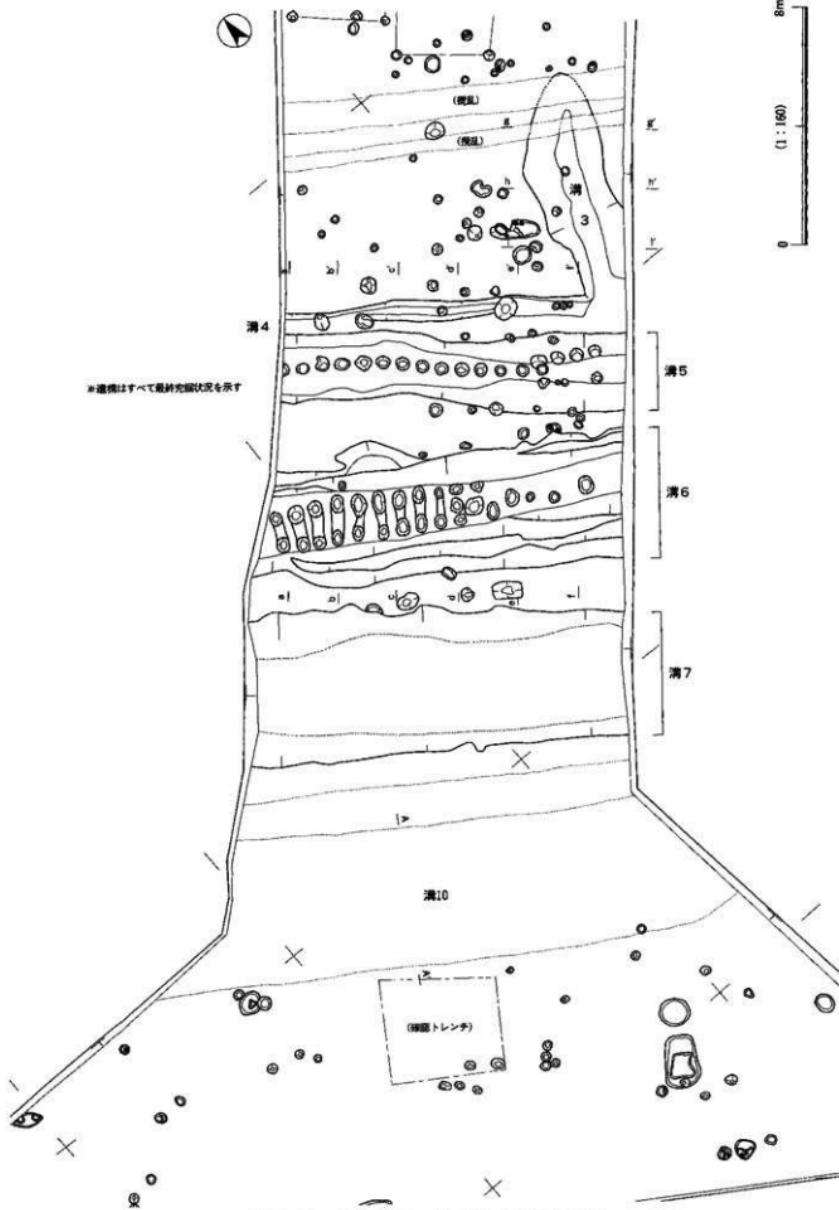
1 時期差による崖の侵食を考慮しても、河岸段丘上の地点的に、展望の良い地点であったと考えられる。

2 中村和英氏（鹿児島県立埋蔵文化財センター）のご教授による。

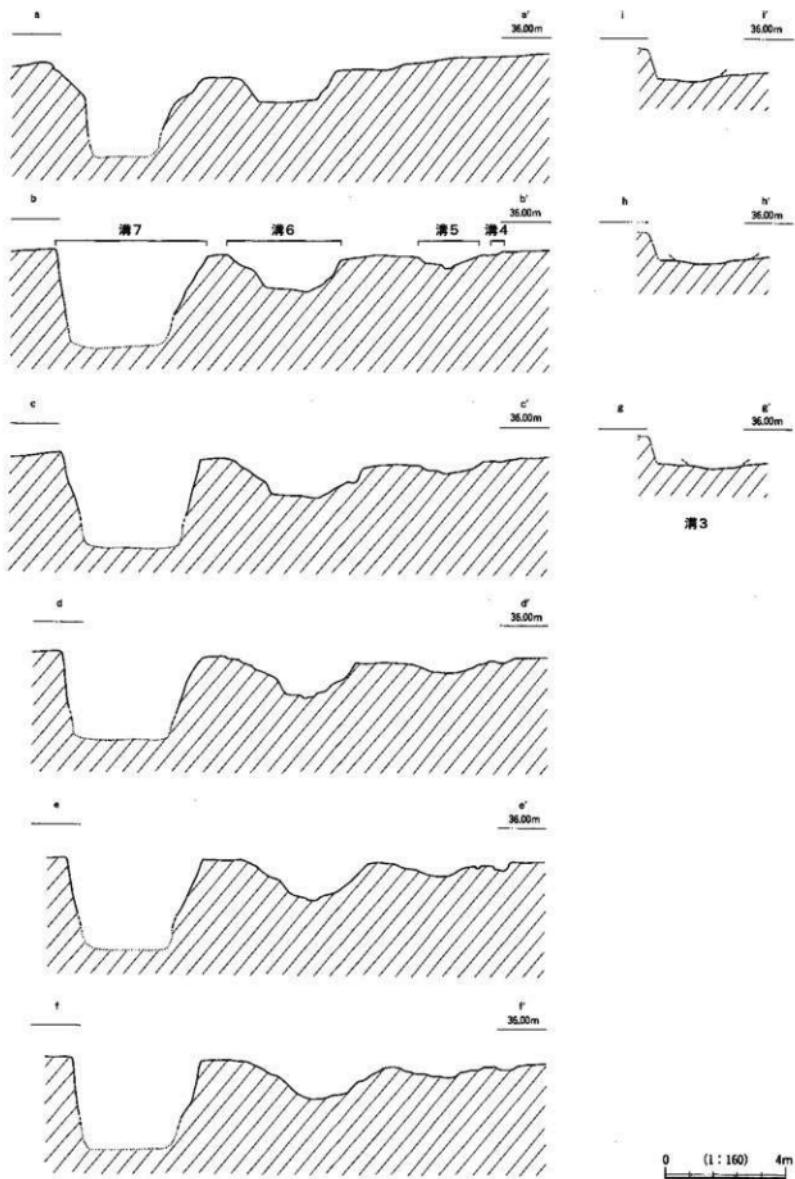
3 教材用磁石での結果である。

4 ここではブロック状の地山層などを含む上層を人為的な埋め戻し土と考えている。

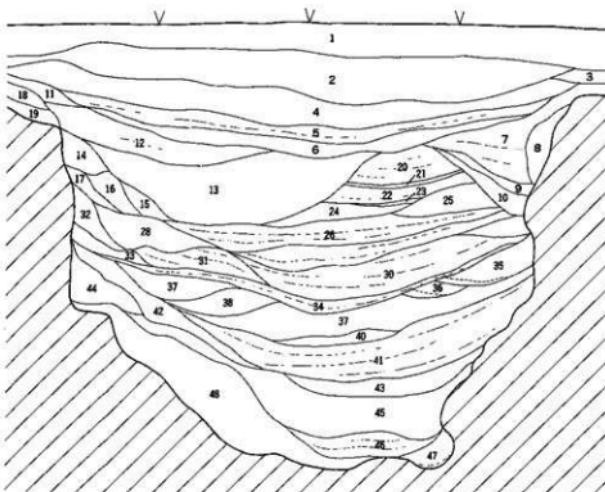
5 図VI.56中の矢印が示す位置である。



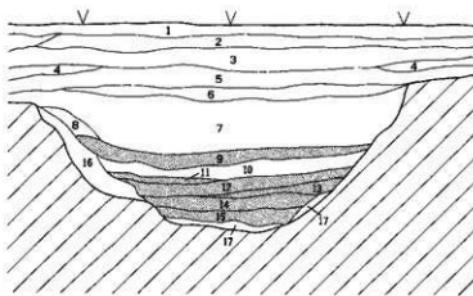
図VI.57 北区 溝3~7・10 周辺遺構配置



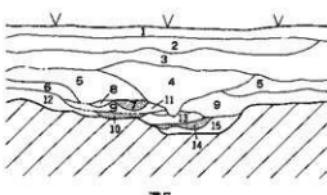
図VI.58 北区 溝3~7 横断面



溝7



溝6



溝5

- 表7
- 1 基本層序 第1層に對応する
 - 2 墓原色土と10cm以下での白色粘土を含む
 - 3 黒褐色土と第1層に對応する
 - 4 墓原色土と瓦白色シルトの互層に、白色粘土を多量に含む。硬い
 - 5 灰白色シルト質土
 - 6 黑褐色粘土
 - 7 黑褐色粘土質土、硬い
 - 8 黑褐色土、土の運び
 - 9 黑褐色土質土
 - 10 黑褐色土に埋め物を含む
 - 11 黑褐色土
 - 12 地に傾斜する
 - 13 黑褐色粘土層に褐色土層の帯が散在する
 - 14 黑褐色土
 - 15 黑褐色土
 - 16 灰灰褐色土質土
 - 17 黑褐色土
 - 18 特褐色土
 - 19 黑褐色土と褐色土が混ざる
 - 20 黑褐色土と土質土ブロックを含む
 - 21 地灰褐色土質土
 - 22 黑褐色土
 - 23 墓原色砂質土
 - 24 黑褐色土質土
 - 25 黑褐色土
 - 26 墓原色砂質土
 - 27 灰灰褐色土質土
 - 28 にいわゆる黒褐色土に多量の褐色土を含む
 - 29 黑褐色土と褐色土が混ざる
 - 30 墓原色砂質土と灰褐色砂質土との互層
 - 31 墓原色砂質土と灰褐色砂質土との互層
 - 32 にいわゆる黒褐色土に多量の褐色土を含む
 - 33 にいわゆる黒褐色土に多量の褐色土を含み、5cmの厚さでロードを見る
 - 34 黑褐色土
 - 35 墓原色砂質土と灰褐色砂質土との互層
 - 36 墓原色砂質土と灰褐色砂質土との互層
 - 37 墓原色砂質土と灰褐色砂質土と墓原色土
 - 38 黑褐色土
 - 39 黑褐色粘土質土
 - 40 黑褐色砂質土
 - 41 黑褐色砂質土
 - 42 黑褐色土に10cm以下での褐色土ブロックを含む
 - 43 墓原色砂質土に黒褐色土を含む
 - 44 地灰褐色土質土に褐色土を含む
 - 45 地灰褐色土質土に10cm大の褐色土ブロックを含む
 - 46 墓原色土質土と灰褐色砂質土との互層
 - 47 墓原色砂質土と灰褐色砂質土と褐色土
 - 48 黒褐色土に5cmの褐色土ブロックを含む

表6

- 1 基本層序 第1層に對応する
- 2 基本層序 第1層に對応する
- 3 基本層序 第1層に對応する
- 4 黑褐色土に白い砂質土を含む
- 5 黑褐色土と褐色土が混じり合つ
- 6 黑褐色土、土質が重く、軟らかい
- 7 黑褐色土に褐色土質土(アカホヤ火山灰層土)と赤色砂質土が混ざる
- 8 不明
- 9 アカホヤ火山灰層土とイケダ砂質土が混じる褐質土(礫化過程)
- 10 黑褐色土、硬い
- 11 黄白色土を多く含む褐質土(礫化過程)
- 12 黄白色土を多く含む褐質土(礫化過程)
- 13 黄褐色土質土、一般にアカホヤ火山灰層土を含む(礫化過程)
- 14 褐褐色質土、赤褐色の繊維状に延びる、鉄分の沈着か(礫化過程)
- 15 にいわゆる褐質土、サツマ火山灰層土を含み、赤褐色の繊維状に延びる(礫化過程)
- 16 黑褐色土、地盤の軟化された地盤(本層土)を覆うとする
- 17 黑褐色土、アカホヤ火山灰層土と暗褐色土(泥層土)が混じる
- 18 サツマ火山灰層下の地山が硬質化する(地山)

表5

- 1 基本層序 第1層に對応する
- 2 基本層序 第1層に對応する
- 3 基本層序 第1層に對応する
- 4 3層土と5層土が混じり合つ
- 5 黑褐色土に白い砂質土を含む
- 6 黑褐色土、土質が重く、軟らかい
- 7 黑褐色土、1cmの大砂を多く含む(礫化層)
- 8 褐褐色土(アカホヤ火山灰層土)と赤褐色土が混ざる
- 9 不明
- 10 黑褐色質土(礫化過程)、調査倉庫は溝4に対応と考える
- 11 黑褐色土と砂質土(アカホヤ火山灰層土)と赤褐色砂質土が混ざる
- 12 不明
- 13 黑褐色土に白色砂粒を含む
- 14 黑褐色土質土、1mの大砂を多く含む(礫化層)
- 15 黑褐色土質土、アカホヤ火山灰層土と黒褐色土が混ざる

図VI.59 北区 溝5~7 土層断面略図

縮尺 1/100



写真 VI.01 土器 VI.101 出土状況



写真 VI.02 土器 (VI.178) 出土状況



写真 VI.03 北区 溝10 土層堆積状況

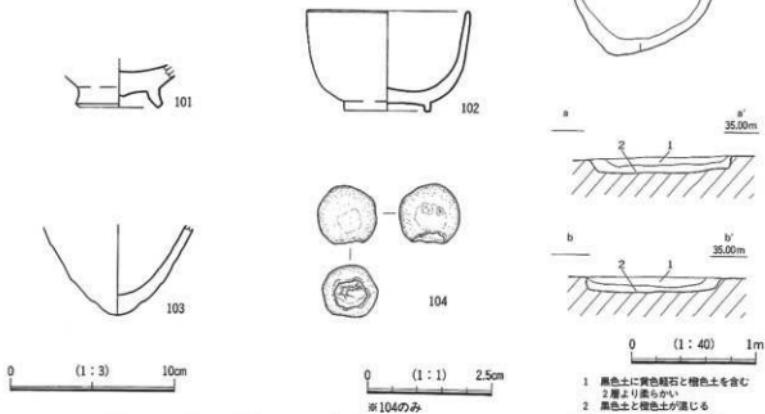
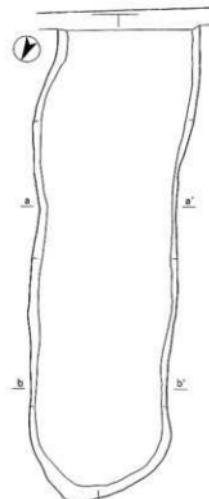


図 VI.60 北区 溝5~7 出土遺物

図 VI.61 北区 溝9

b. 北区 V層出土・表面採集 遺物 (図VI.62・図VI.63・図VI.64・図VI.65)

105・106は土師器の皿である。105は口縁部がわずかに内湾し、底部は平底で、糸切り離し痕が見られる。106は底部に高台をもつ。107~121は成川式土器の甕である。107は口唇部が平坦で、口縁部が内湾する。108は口縁部が外反する。109はほぼ完形で、口縁部が外反し、内面の底部には煮沸痕と思われる剥離痕が見られる。110・111は口唇部が平坦で、口縁部が外反する。112は頸部に1条の刻目突帯が巡る。114は頸部に1条の刻目突帯が巡り、外面に煤が付着する。116は外面に著しく煤が付着する。117は頸部に1条の刻目突帯が巡る。118は脚が直行する。120は底部が丸みを帯びた平底である。121は口唇部がわずかに膨らみ、口縁部が外反する。122は成川式土器の小型甕である。脚が外反し、その端部は丸みを帯びる。123・124は成川式土器の甕である。123は脚がわずかに外反し、その端部は平坦である。124は頸部に1条の刻目突帯が巡る。125は成川式土器の壺であり、脚がわずかに外反し、その端部は丸みを帯びる。126は成川式土器の甕で、胴部に1条の刻目突帯が巡る。127・128は成川式土器の高環である。128は环部が中途で屈曲し、口縁部が外反する。129は成川式土器の壺形土器と思われる。底部が開口し、その端部は平坦である。130は成川式土器の高環で、环部が屈曲部から外反する。131は表面採集資料である。白磁の碗で、口唇部が玉縁口縁を呈す。132は龍泉窯の青磁碗で、胴部に片切影の鎬連弁が見られる。133は表面採集資料の青磁の碗であり、底部の一部に釉掻き取り痕が見られる。135は表面採集資料の成川式土器の甕である。口縁部が内湾し、胴部に1条の刻目突帯が巡る。口縁部に煤が著しく付着する。136は成川式土器の壺で口縁部が直行する。137は成川式土器の鉢であり、口縁部が外反し、外面に煤が付着する。139・140は成川式土器の高環である。139は口唇部が平坦で、口縁部が外反する。140は口唇部が平坦で、口縁部は内湾する。141は成川式土器の鉢であり、口縁部が外反し、胴部に煤が付着する。142は成川式土器の高環であり、环部が中途で屈曲し、口縁部が外反する。143は成川式土器の壺である。口唇部に竹管状の工具によるものと思われる一条の沈線が巡り、口縁部は直行する。144は表面採集資料の成川式土器の壺形土器であり、口縁部はやや蛇行しながら直行する。145は成川式土器の壺で、口縁部が外反する。146は山ノ口式土器の壺で、胴部に3条の三角突帯が巡る。147は成川式土器の甕である。口唇部は平坦で、口縁部は外反し、口縁部の下位に1条の刻目突帯を持つ。外面全体に著しく煤が付着する。148は成川式土器の小型甕で底面は丸底である。

(出口)

石製品149は滑石製石製品の二次加工品であるが、機能は不明である。表面には煤が一面に付着し、左側面は破碎面と考えられる。それ以外の面は明瞭な擦痕や光沢が見られる。貫通した穿孔がある。

(東)

150・151は土師器の皿である。150は底部が平底で、ヘラ切り離し痕が見られる。151は口縁部がわずかに外反し、底部は平底である。152は須恵器の甕である。口縁部が外反し、底部は平底と思われ、ヘラ切り離し痕が見られる。153は成川式土器の甕で、胴部に1条の刻目突帯が巡る。154は土師器の环であり、高台部分が欠損する。155は成川式土器の鉢である。脚が外反し、その端部は若干丸みを帯びるが平坦である。

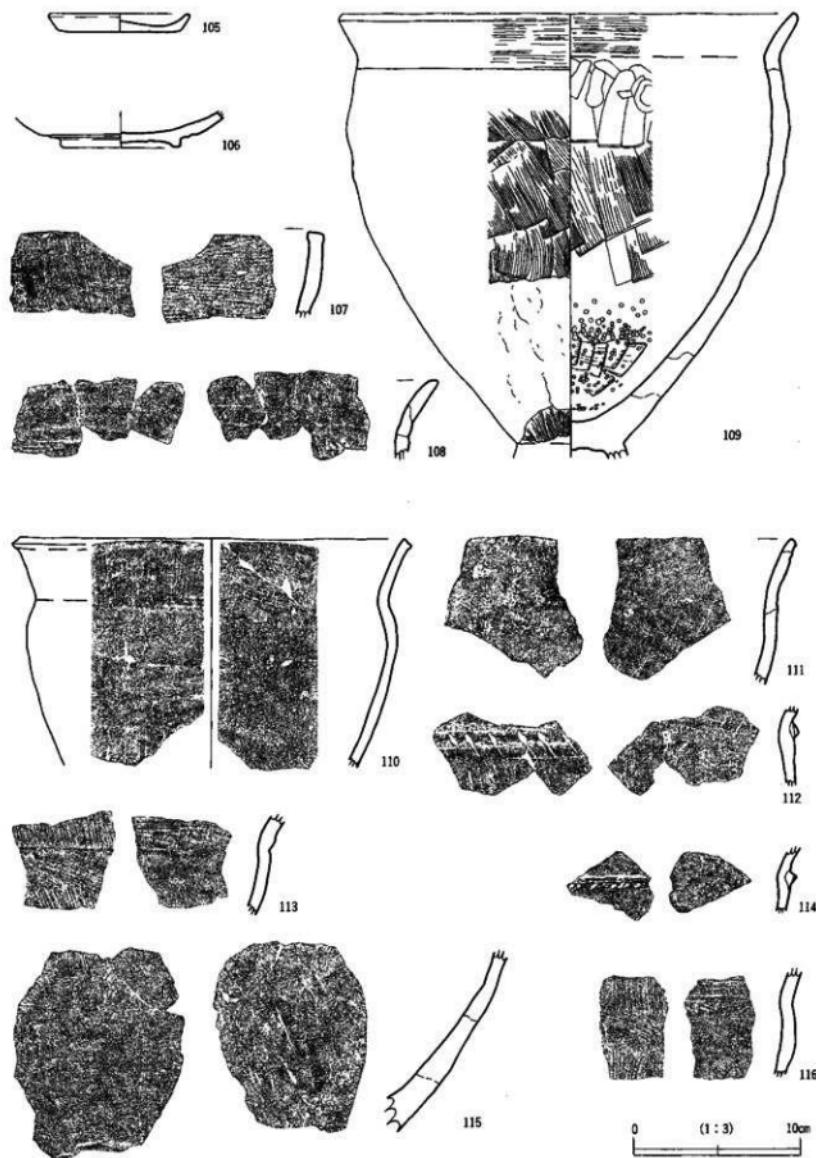
(出口)

表VI.38 北区 V層出土土石器 計測表

図番号	遺物番号	出土位置		器種	石材	法量(cm·g)				備考
		区	層位			長さ	幅	厚さ	重量	
VI.149	-	北区一括	V	石鍋	滑石	(3.7)	(2.0)	(1.2)	11.55	

表VI.39 北区 V層出土・表面探集土器 観察表

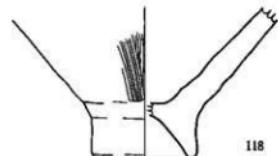
測定番号	測定年月	区	番	遺構	種別・断面	断面	地質	色調	調査			深度(cm)	備考
									右側	中間	左側		
IVVI.02 10	1203	E-12	V	-	北山層 五 「土器帶」	半輪	内面に汚れ色、 外面に褐色	内面 ロジウムチタンデコ 外面 ロジウムチターネラ切引装丁テ	8.4	7.4	1.1	-	
IVVI.02 10	232	E-16	V	-	成川式土器 五	板面	内面に褐色 外側に褐色	内面 ティートガラ 外側 ティートガラ、内面 ブラックライン	-	7.3	2.1	外壁に焼付帶	
IVVI.02 10	632	A-19	V	-	成川式土器 五	口縁部	内面 变色色 外側 变色色	内面 ハバリ 外側 ヨシニアヘハ削り	-	-	5.1	内面に变色	
IVVI.02 10	306	A-16	V	-	成川式土器 五	口縫	内面に褐色 外側に褐色	内面 ハバリ 外側 ハバリ	-	-	4.7	外壁に燒付帶	
IVVI.02 10	56~59	A-16	V	-	成川式土器 五	先端	内面 にいわゆる 外側 にいわゆる	内面 ヨシニアヘハ削り 外側 ヨシニアヘハハバリ引抜手ナシテ	27.5	27.4	外壁に燒付帶	-	
IVVI.02 10	68~69	B-13	V	-	成川式土器 五	側縫	内面 にいわゆる 外側 にいわゆる	内面 ヨシニアヘハハバリ引抜手ナシテ	22.4	-	14.1	外壁に燒付帶 口縫部に外灰	
IVVI.02 10	472~477	B-17	V	-	成川式土器 五	側縫	内面 にいわゆる 外側 にいわゆる	内面 ハラカリナナ 外側 ハラカリナナ	-	-	-	-	
IVVI.02 10	36	A-16	V	-	成川式土器 五	口縫部	内面に褐色 外側に褐色	内面 リミングテクニクル 外側 リミングテクニクル	-	-	8.9	-	
IVVI.02 10	67~67	A-16	V	-	成川式土器 五	側縫	内面 にいわゆる 外側 にいわゆる	内面 ハラカリナナ 外側 ハラカリナナ	-	-	4.7	側縫部有り	
IVVI.02 10	1216	A-16	V	-	成川式土器 五	側縫	内面 にいわゆる 外側 にいわゆる	内面 ハラカリナハハバリ 外側 ハラカリナハハバリ	-	-	6.2	外壁に燒付帶	
IVVI.02 10	501	A-19	V	-	成川式土器 五	側縫	内面 にいわゆる 外側 にいわゆる	内面 ヨシニア 外側 ヨシニア	-	-	3.8	側縫部有り 外壁に燒付帶	
IVVI.02 10	920	D-12	V	-	成川式土器 五	側縫	内面 にいわゆる 外側 にいわゆる	内面 ヨシニア 外側 ヨシニア	-	-	11.0	内面に燒付帶	
IVVI.02 10	393	A-16	V	-	成川式土器 五	側縫	内面 にいわゆる 外側 にいわゆる	内面 ハラカリナ 外側 ハラカリナ	-	-	6.2	外壁に燒付帶 内面に燒付帶	
IVVI.02 10	588	D-10	V	-	成川式土器 五	側縫	内面 にいわゆる 外側 にいわゆる	内面 ヨシニア 外側 ヨシニア	-	-	8.2	側縫部有り	
IVVI.02 10	589	B-10	V	-	成川式土器 五	側縫	内面 にいわゆる 外側 にいわゆる	内面 ヨシニア 外側 ヨシニア	-	-	9.3	0.1 内面に焼付帶	
IVVI.02 10	85	A-16	V	-	成川式土器 五	側縫	内面 にいわゆる 外側 にいわゆる	内面 ハラカリナ 外側 ハラカリナ	-	-	8.7	外壁に燒付帶 内面に燒付帶	
IVVI.02 10	71	A-16	V	-	成川式土器 五	側縫	内面 にいわゆる 外側 にいわゆる	内面 ヨシニア 外側 ヨシニア	-	-	16.6	側縫部有り	
IVVI.02 10	401	A-16	V	-	成川式土器 五	側縫	内面 にいわゆる 外側 にいわゆる	内面 ヨシニア 外側 ヨシニア	-	-	29.1	4.7 残灰	
IVVI.02 10	32	A-16	V	-	成川式土器 五	側縫	内面 にいわゆる 外側 にいわゆる	内面 ヨシニア 外側 ヨシニア	-	-	9.2	3.8 外壁に燒付帶	
IVVI.02 10	204	A-16	V	-	成川式土器 五	側縫	内面 にいわゆる 外側 にいわゆる	内面 ヨシニア 外側 ヨシニア	-	-	5.3	3.1 内面に燒付帶	
IVVI.02 10	30	A-16	V	-	成川式土器 五	側縫	内面 にいわゆる 外側 にいわゆる	内面 ヨシニア 外側 ヨシニア	-	-	9.3	0.1 内面に焼付帶	
IVVI.02 10	646	A-19	V	-	成川式土器 五	側縫	内面 にいわゆる 外側 にいわゆる	内面 ヨシニア 外側 ヨシニア	-	-	6.0	7.3 内外に黒斑	
IVVI.02 10	650~657	B-19	V	-	成川式土器 五	側縫	内面 にいわゆる 外側 にいわゆる	内面 ヨシニア 外側 ヨシニア	-	-	20.5	-	
IVVI.02 10	646	A-19	V	-	成川式土器 五	側縫	内面 にいわゆる 外側 にいわゆる	内面 ヨシニア 外側 ヨシニア	-	-	9.2	対向部より 内面に黒斑	
IVVI.02 10	196	A-16	V	-	成川式土器 五	側縫	内面 にいわゆる 外側 にいわゆる	内面 ヨシニア 外側 ヨシニア	-	-	4.5	外壁に燒付帶	
IVVI.02 10	269	B-16	V	-	成川式土器 五	側縫	内面 にいわゆる 外側 にいわゆる	内面 ヨシニア 外側 ヨシニア	-	-	27.4	6.0 外面に燒付帶	
IVVI.02 10	693	A-19	V	-	成川式土器 五	側縫?	内面 にいわゆる 外側 にいわゆる	内面 ヨシニア 外側 ヨシニア	-	-	7.6	9.1	
IVVI.02 10	843	A-19	V	-	成川式土器 五	側縫	内面 にいわゆる 外側 にいわゆる	内面 ヨシニア 外側 ヨシニア	-	-	23.4	4.8 内面に黒斑	
IVVI.02 10	1~1	北区	土	-	北区	半輪	内面 にいわゆる 外側 にいわゆる	内面 ハラカリナ 外側 ハラカリナ	-	-	18.0	2.9 局部焼付 灰入	
IVVI.02 10	485	E-16	V	-	北区	半輪	内面 にいわゆる 外側 にいわゆる	内面 ヨシニア 外側 ヨシニア	-	-	-	-	
IVVI.02 10	291	B-17	V	-	南腰	断面	模様リード一ノ字 内面 にいわゆる	内面 断面 内面 リード一ノ字	-	-	5.4	5.6 断面	
IVVI.02 10	-45	北区	土	-	北区	断面	灰入	内面 灰入	-	-	5.3	4.5 離散取灰痕	
IVVI.02 10	-46	北区	土	-	北区	断面	白	内面 白	-	-	7.0	2.1	
IVVI.02 10	192	北区	土	-	北区	断面	内面 灰入	内面 ナイフ痕	-	-	-	-	内面に白粉
IVVI.02 10	192	A-16	V	-	成川式土器 五	口縫部	内面 にいわゆる 外側 にいわゆる	内面 ヨシニア 外側 ヨシニア	-	-	3.8	-	
IVVI.02 10	320	R-14	V	-	成川式土器 五	口縫部	内面 にいわゆる 外側 にいわゆる	内面 ヨシニア 外側 ヨシニア	-	-	22.2	8.2 内外に燒付帶	
IVVI.02 10	95	A-19	V	-	成川式土器 五	側縫?	内面 にいわゆる 外側 にいわゆる	内面 ヨシニア 外側 ヨシニア	-	-	8.2	-	
IVVI.02 10	316~317	B-14	V	-	成川式土器 五	側縫?	内面 にいわゆる 外側 にいわゆる	内面 ヨシニア 外側 ヨシニア	-	-	4.2	-	
IVVI.02 10	329	B-14	V	-	成川式土器 五	側縫?	内面 にいわゆる 外側 にいわゆる	内面 ヨシニア 外側 ヨシニア	-	-	4.2	外壁に燒付帶	
IVVI.02 10	104~107	A-16	V	-	成川式土器 五	側縫?	内面 にいわゆる 外側 にいわゆる	内面 ヨシニア 外側 ヨシニア	-	-	11.5	内面に燒付帶 内面に黒斑	
IVVI.02 10	341	B-14	V	-	成川式土器 五	側縫?	内面 にいわゆる 外側 にいわゆる	内面 ヨシニア 外側 ヨシニア	-	-	44.2	4.8 内面に焼付帶	
IVVI.02 10	145	A-16	V	-	成川式土器 五	口縫部	内面 にいわゆる 外側 にいわゆる	内面 ヨシニア 外側 ヨシニア	-	-	2.3	-	5.5 山形都L1水の深さ
IVVI.02 10	-1	北区	土	-	北区	半輪	内面 にいわゆる 外側 にいわゆる	内面 ヨシニア 外側 ヨシニア	-	-	14.0	9.2 4.9 先端に黒斑 内面に黒斑	
IVVI.02 10	131	A-16	V	-	成川式土器 五	口縫部	内面 にいわゆる 外側 にいわゆる	内面 ヨシニア 外側 ヨシニア	-	-	12.8	4.5 内面に燒付帶	
IVVI.02 10	112	A-16	V	-	山ノ内式土器 五	側縫?	内面 にいわゆる 外側 にいわゆる	内面 ヨシニア 外側 ヨシニア	-	-	4.25	安井3全	
IVVI.02 10	146	A-16	V	-	成川式土器 五	口縫部	内面 にいわゆる 外側 にいわゆる	内面 ヨシニア 外側 ヨシニア	-	-	-	4.9 刻印突起あり	
IVVI.02 10	76~816	A-16	V	-	成川式土器 小口輪	側縫?	内面 にいわゆる 外側 にいわゆる	内面 ヨシニア 外側 ヨシニア	-	-	7.4	-	
IVVI.02 10	1231	A-17	V	-	土腰器	断面	内面 にいわゆる 外側 にいわゆる	内面 ヨシニア 外側 ヨシニア	-	-	7.5	1.9 局部焼付 内面に高麗	
IVVI.02 10	1329	A-17	V	-	土腰器	口縫部	内面 にいわゆる 外側 にいわゆる	内面 ヨシニア 外側 ヨシニア	-	-	12.0	9.5 3.2 外壁に焼付帶	
IVVI.02 10	1225	B-17	V	-	土腰器	口縫部	内面 にいわゆる 外側 にいわゆる	内面 ヨシニア 外側 ヨシニア	-	-	33.4	4.7 4.7 ヘラ切り	
IVVI.02 10	73	A-16	V	-	成川式土器 五	側縫?	内面 にいわゆる 外側 にいわゆる	内面 ヨシニア 外側 ヨシニア	-	-	5.45	局部焼付 内面に黒斑	
IVVI.02 10	1280	A-16	V	-	土腰器	口縫部	内面 にいわゆる 外側 にいわゆる	内面 ヨシニア 外側 ヨシニア	-	-	1.6	-	
IVVI.02 10	291	A-16	V	-	成川式土器 五	側縫?	内面 にいわゆる 外側 にいわゆる	内面 ヨシニア 外側 ヨシニア	-	-	29.1	4.7	



図VI.62 北区 V層 出土遺物 (1)



117



118



119



120



121



121



123



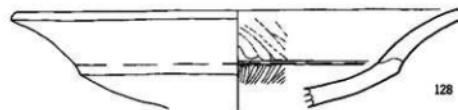
124



125



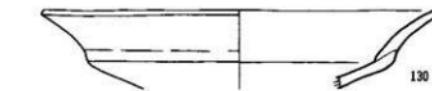
126



127



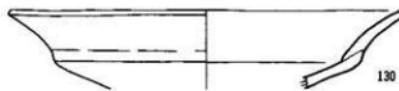
127



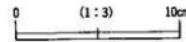
128



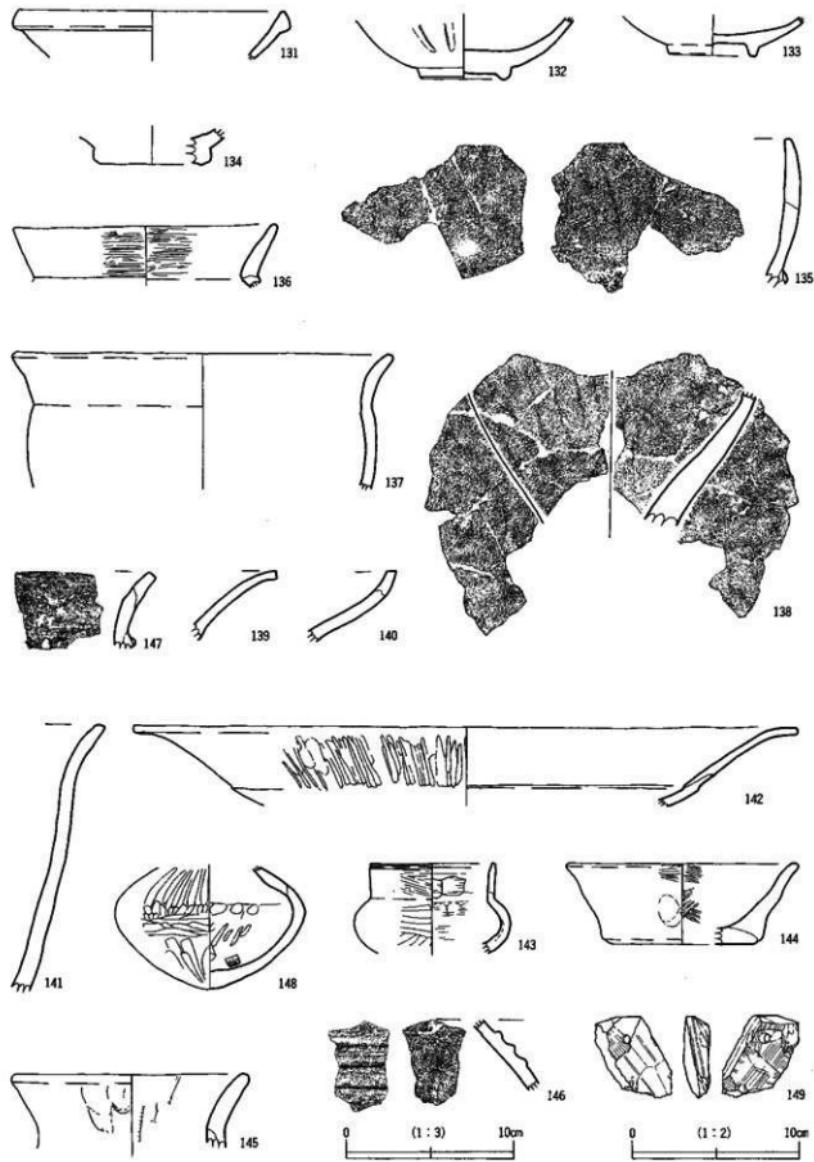
128



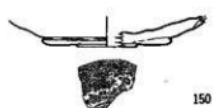
129



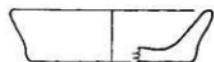
図VI.63 北区 V層 出土遺物 (2)



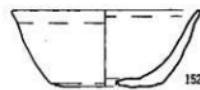
図VI.64 北区 I・V層 出土遺物



150



151



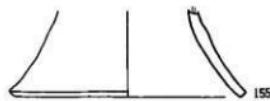
152



153



154



155

0 (1 : 3) 10cm

図VI.65 北区 V層 出土遺物 (3)

2. その他

北区では、特徴のある土器が確認されている。

布目土器

土師器156~168は、いずれも粗雑な作りで器面が赤色化し、内面に網目が残る。内面の網目にナデケシは施されていない。外面は不定方向のナデで整える。これらのことから製塩土器と考えられる。

製塩土器の分布は北区北端グリッドA18~B21の範囲に集中する。出土層位は基本層序第V層に集まる。時期は古代と考えられる。また、製塩土器と考えられる土器は、以下のように細別される。

①: 網目は7目/cmを測る。色調は橙色を呈する。胎土が粗く、1~10mm大の砂粒を含む。計9点が出土している。

- ・胸部160 (iii層一括)
- ・口縁部? 157 (B区iii層一括)
- ・口縁部? 158 (iii層515)
- ・胸部161 (iii層481)
- その他 (A区、iii層、75、表採一括)
- ・底部159 (B区iii層809)
- ・胸部156 (牛男畠)
- ・胸部162 (B区iii層811)

②: 網目は11目/cmを測る。色調は橙色を呈する。胎土は密、少量の1mm大の砂粒を含む。計5点が出土している。

- ・口縁部? 164 (iii層461)
- ・胸部165 (B区iii層480)
- その他 (表採一括)
- ・口縁部? 163 (表採)
- ・胸部162 (B区iii層811)

③: 網目は12目/cmを測る。色調は灰橙色を呈する。胎土はやや粗く、少量の1~2mm大の砂粒を含む。計2点が出土している。

- ・口縁部? 167 (iii層810)
- ・底部166 (iii層419)

④: 網目は4目/cmを測る。色調は肌色を呈する。胎土は密、1mm大の砂粒を含む。1点が出土している。

- ・胸部168 (iii層475)

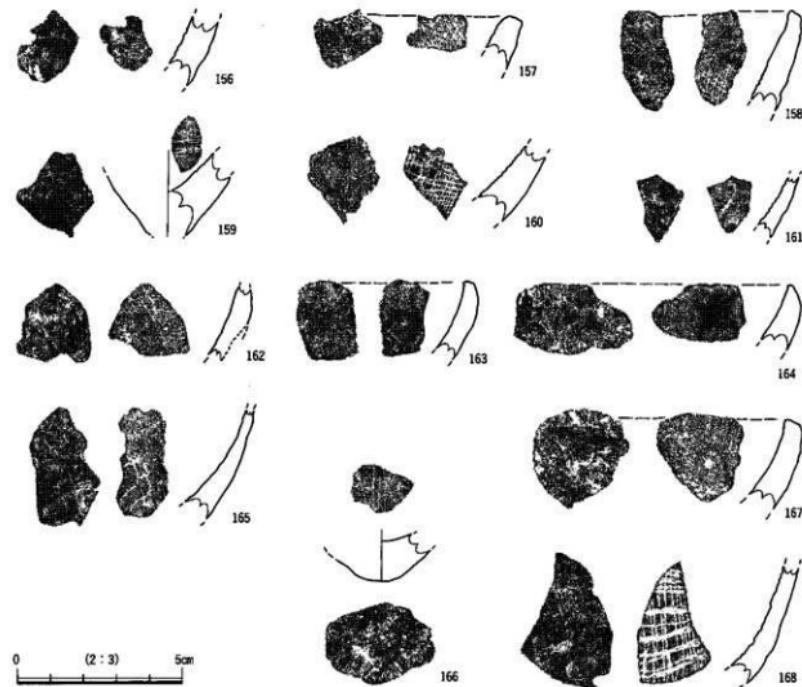
なお、①類のA区、iii層、75と②類の表採一括の2点については、土器胎土のプラントオバール分析を行っている。詳しくはXII章を参照されたい。

貝殻条痕文土器

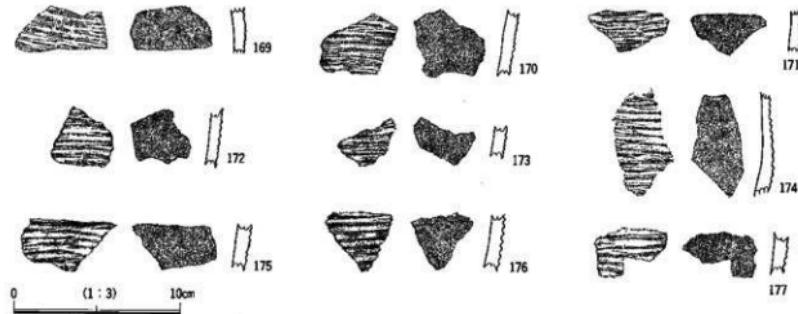
外面に横位の貝殻条痕文を施す土器群である。iii(V)層出土とされるものもあるが、詳しい出土層位は不明である。少なくともイケダ降下軽石(VIII)層からV層までの間で出土している。これらのことから縄文時代早期の轟式系の土器と考えられる。土器の内面は丁寧なナデで整える。外面は黒色化して煤も付着する。胎土には0.5mm以下の大石英・長石・雲母・黒色砂を含む。土器の分布はグリッドD15~A19 (A区)に集中している。

- ・169 (A区iii層144)
- ・171 (A区iii層119)
- ・173 (A区iii層426)
- ・175 (表採)
- ・177 (不明)
- ・170 (A区77)
- ・172 (iii層397)
- ・174 (iii層71)
- ・176 (不明)

(東)



図VI.66 北区 V層 出土土器(4)



図VI.67 北区 V~VI層 出土土器(5)

第VII章 西区(古墳)の概要

西区は1次調査で行った北区の延長上にある調査区である。北区で見られたような豊穴住居等の遺構の存在が予測されたが、生活を示す遺構は検出されず、VII層上面においてVI層を含む黒色土を埋土とした柱穴35基、VIII層上面では黒色土を埋土とする土坑9基、柱穴75基が検出された。(図VI.02) 遺物はV層で181点、VI層で10点出土し、主に成川式土器と須恵器が191点出土した。

a. 遺構

土坑(図VI.01)

VIII層上面において9基の土坑が検出された。それぞれの土坑の埋土はV層に似た弾力のある黒色土である。埋土内から遺物が確認できなかったため、土坑の造られた時期の特定はできなかった。各土坑の計測値は表VII.01のとおりである。

表VII.01 西区 土坑 計測表

土坑番号	検出番号	検出区	平面形	長軸(cm)	短軸(cm)	長軸方位	備考
1	図VI.01	B-23	(横円形)	(90)	(69)	北西	柱穴状遺構と切り合う
2	図VI.01	B-22	横円形	122	81	西	
3	図VI.01	B-22	横円形	140	80	北西	
4	図VI.01	A-22	(横円形)	(70)	(48)	北西	柱穴状遺構と切り合う
5	図VI.01	A-21	横円形	80	65	北東	柱穴状遺構と切り合う
6	図VI.01	A-21	横円形	65	49	西	柱穴状遺構と切り合う
7	図VI.01	A-21	横円形	85	45	北西	柱穴状遺構と切り合う
8	図VI.01	B-21	円形	54	50	東北東	
9	図VI.01	B-22	横円形	92	72	北北東	柱穴状遺構と切り合う(2基)

b. 遺物

西区 V、VI層出土・表面採集 遺物

1~3はV層出土の須恵器の柄である。1は口縁部がわずかに外反する。2・3は底部に高台をもち、外にふんばる。4は表面採集資料の陶器の皿であり、底部は平底である。5はV層出土の成川式土器の小型壺であり、底部は平底である。外面全体に煤が付着する。6は表面採集資料の成川式土器の蓋であり、口縁部がわずかに内湾する。

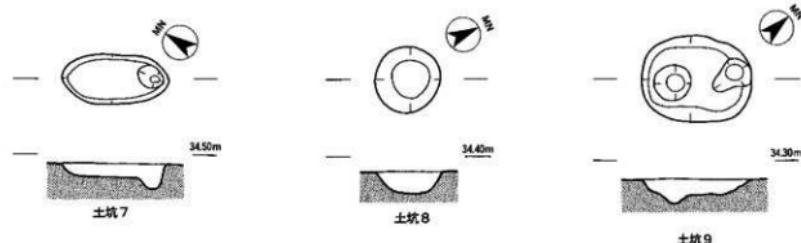
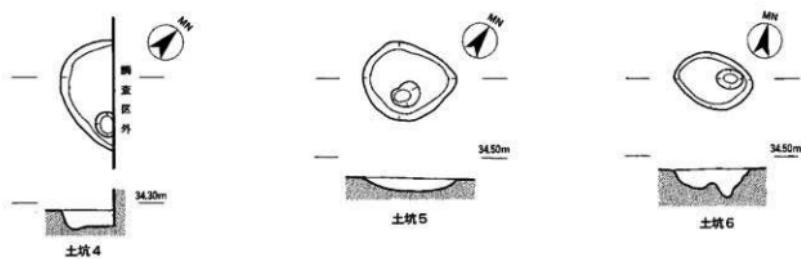
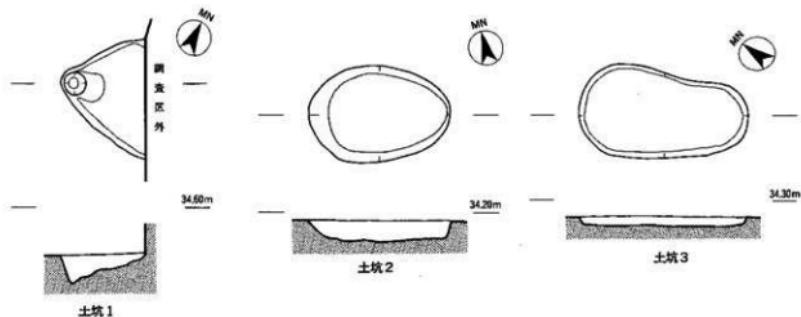
(出口)

石製品7の機能は不明である。軽石の全面を研摩して形を整える。局部磨製石鎌8は赤色チャート製で、表面を研摩する。側刃の剥離は研摩後に調整する。打製石鎌9は不純物を多く含んだ黒曜石(竜ヶ水産)製である。

(東)

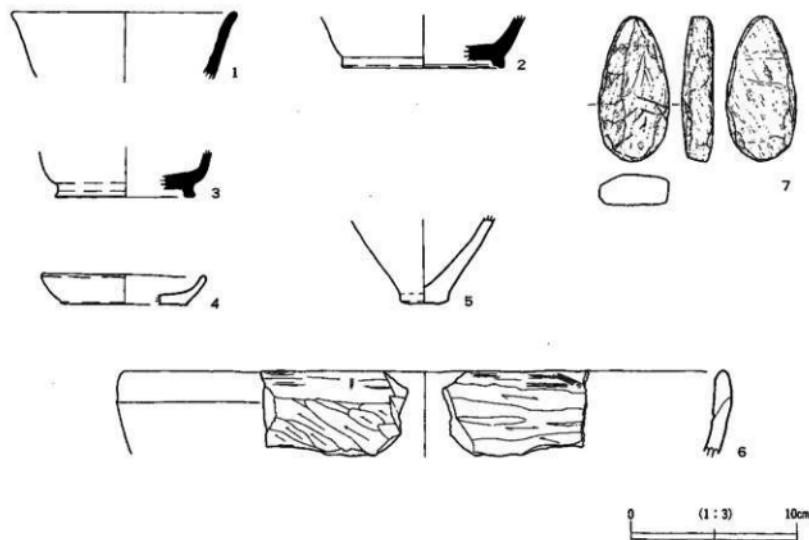
表VII.02 西区 V、VI層出土・表面採集土器 観察表

検出番号	表面	底面	区	層	遺物	種別	石	土	砂	色	形	測定		重量(g)	寸法 口縁 底盤 蓋	備考	
												石	土	砂			
図VI.02 1	280	B-21	V	-	須恵器 柄?	口縫部		内面 底盤	内面 底盤	内面 底盤	内面 底盤	○	内面 底盤	ロクナデ	13.3	4.0	
図VI.02 2	168	B-22	V	-	須恵器 柄?	底盤		内面 底盤	内面 底盤	内面 底盤	内面 底盤	○	内面 底盤	ロクナデ	9.8	3.1	
図VI.02 3	169	B-22	V	-	須恵器 柄?	底盤		内面 底盤	内面 底盤	内面 底盤	内面 底盤	○	内面 底盤	ロクナデ	-	8.2	2.8
図VI.02 4	-M	内2	安1	-	須恵器 柄?	口縫部		内面 底盤	内面 底盤	内面 底盤	内面 底盤	○	内面 底盤	ロクナデ	8.6	7.6	1.8 外面上に塗付層
図VI.02 5	1005	A-22	V	-	成川式土器 小口盤	底盤	○	内面 底盤	内面 底盤	内面 底盤	内面 底盤	○	内面 底盤	ナダ	-	2.8	5.1 表面に塗付層
図VI.02 6	-M	白2	灰1	-	成川式土器 蓋	口縫部		内面 底盤	内面 底盤	内面 底盤	内面 底盤	○	内面 底盤	ロクナデ・ヘラ削り	36.6	5.1	

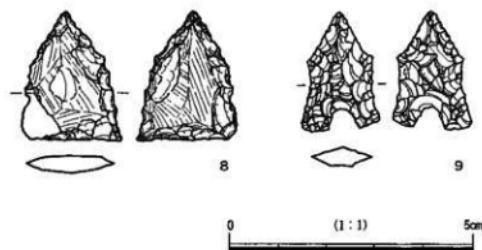


0 (1:40) 1m

図VII.01 西区 土坑 1～9



図VII.02 西区 V、VI層出土・表面採集 遺物



図VII.03 西区 V層 出土遺物

表VII.03 西区 V層出土石器 計測表

図 番号	遺物 番号	出土位置		器種	石材	法量(cm·g)				備考
		区	層位			長さ	幅	厚さ	重量	
VII.07	505	西区	V	石製品	燧石	8.6	4.15	1.7	15.75	
VII.08	-	西区	V	局部磨製石族	赤色チャート	(2.7)	(1.9)	3.5	2.15	暗赤紫色
VII.09	147	西区	V	打製石族	黒曜石	2.5	1.6	0.4	1.18	

第VIII章 東区（古墳・弥生・近世）の概要

東区は1次調査でE・F-30・31区、E-G-32区、F-G-33区、G-H-34区、G-I-35区のV層の調査を、2次調査でC・D-26・27区、D-E-28・29区、E-29区のV層の調査及び東区全体の遺構の調査を行った。東区の遺構検出面はV層上面であり、土坑16基、溝5基、竪穴住居6基が検出された。

a. 遺構

竪穴住居

V層上面において4基（竪穴住居1～4）、IX-1a層上面において2基（竪穴住居5・6）検出された。

（1）竪穴住居1（図VIII.03）

H-34・35区で検出された。遺構の南東側が溝1と切り合ひの関係にあり、平面形がはっきりしないが隅丸長方形と思われ、住居の長軸方向が南北に延びる。竪穴部はIX-1a層中まで掘り込まれ、検出面からの深さは最深部で20cmで、竪穴内部の埋土は暗灰色土であった。床面は黒色土とIX-1a層が混ざる貼り床で、貼り床のほぼ中央に硬化面が検出された。その他床面上の遺構として、竪穴壁を巡る様に幅50cm、深さ10～20cm程度の溝と、溝底面に6基（P2・P4～8）、貼り床上面に11基（P3・P11～20）、竪穴壁の際に3基（P1・P9・P10）の柱穴が計20基検出された。

なお住居内の遺物は、埋土上位において住居の南西隅に、主に成川式土器片が集中して出土し、床面直上においては遺物量も少なく、住居の隅丸部付近に敲石（7）、磨石（8・9）等の遺物が出土した。（図VIII.04）

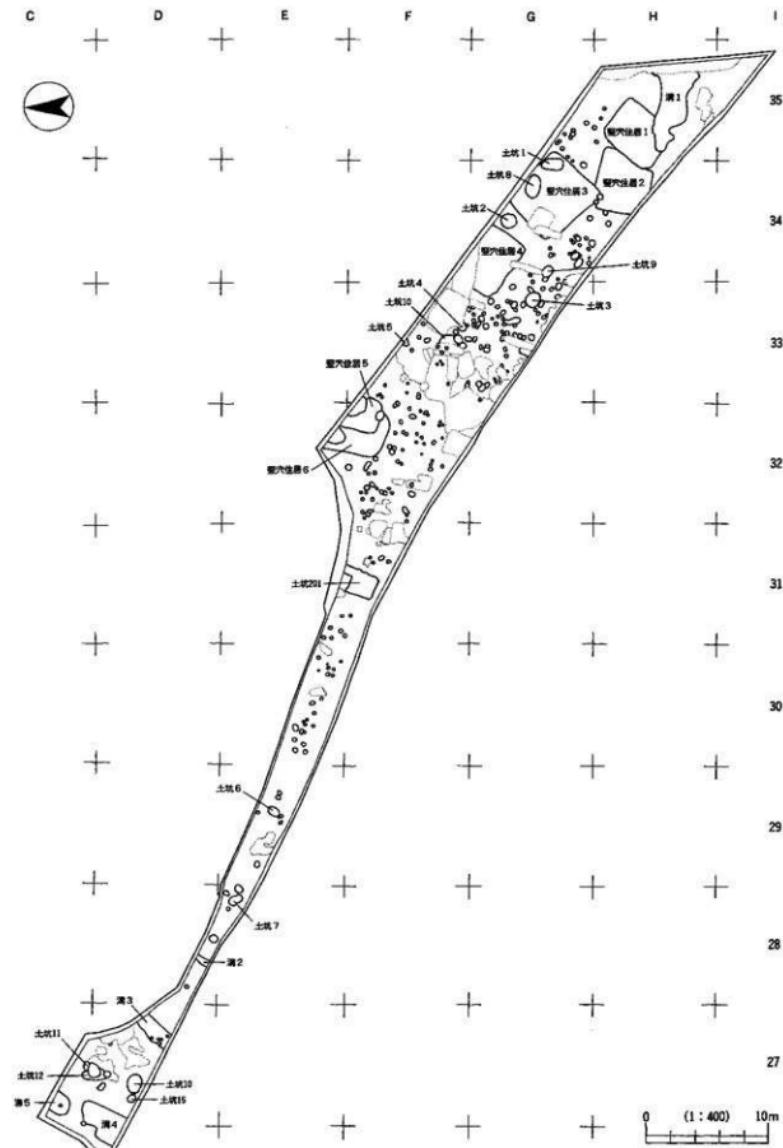
竪穴住居1 出土遺物（図VIII.04・図VIII.05）

1は須恵器の蓋である。蓋口縁部が直行し、口縁端部が直立する。2は成川式土器の高坏で、口縁部が内湾する。3は成川式土器の壺と思われ、口縁部が直行し、外面に煤が付着する。4は成川式土器の壺形土器と思われ、口縁部は内湾し、底部は丸底に近い。5は成川式土器の壺と思われ、口縁部が直行し、口唇部がわざかに外反する。6は成川式土器の壺で、底部が平底である。（出口）

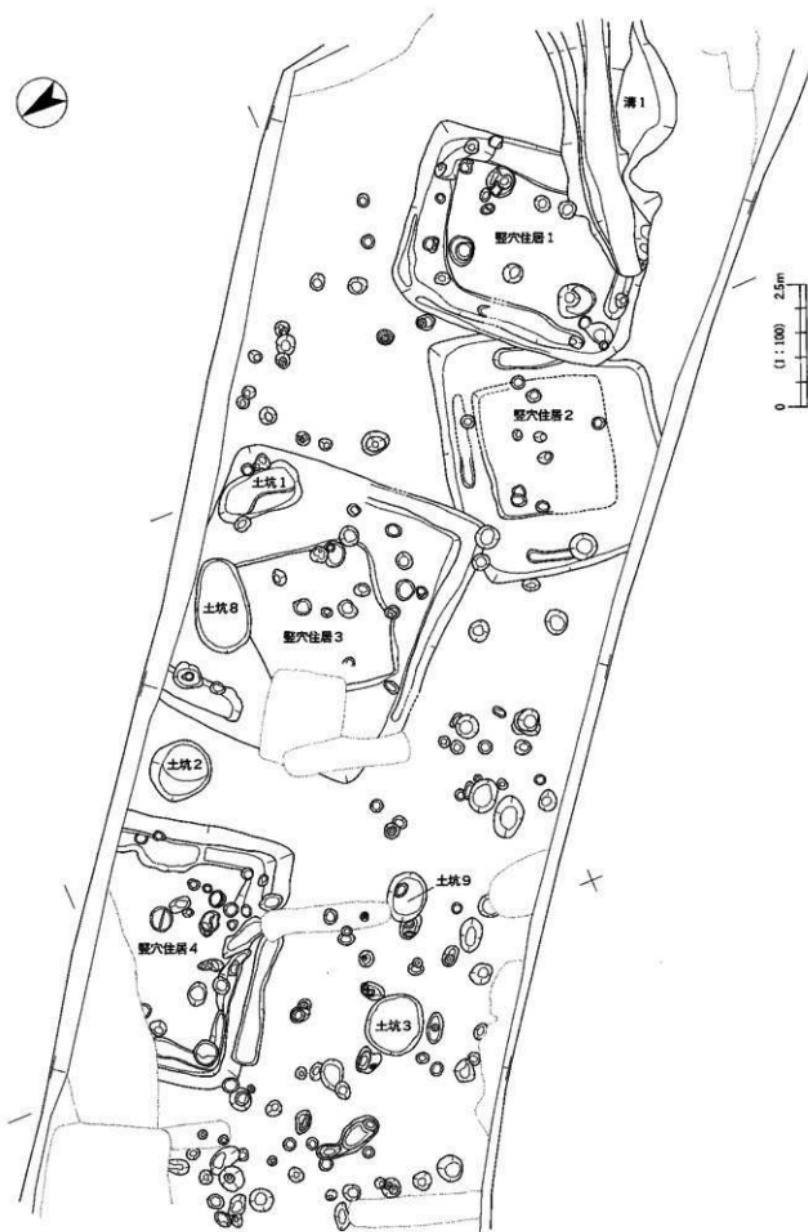
磨・敲石7は側面に敲打部が見られる。石製品8の機能は不明である。器面はやや光沢をもち、とくに中央の抉状の凹み周辺は光沢がある。石製品9の機能は不明である。表裏面は平坦な面をもち、器面全体がやや光沢をもつ。石製品10の機能も不明であるが、器面などは8・9に類似する。（東）

表VIII.01 東区 竪穴住居1 計測表

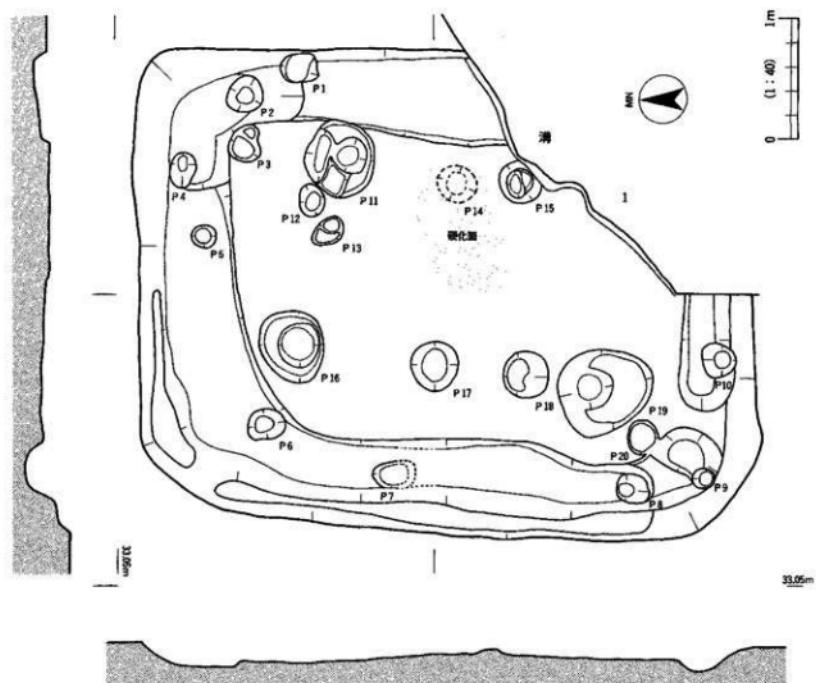
住居番号	測定番号	検出区	検出層	平面形	床面形	長軸(m)	短軸(m)	深さ(m)	ピット数	硬化面の有無	焼土面の有無	備考		
1	図VIII.03	H-34・35	V層	（隅丸長方形） （隅丸長方形）	5.00	4.05	0.39	20	右	無	溝1・竪穴住居2と切り合 床面に貼り床を持つ			
番号	平面形	長軸(m)	短軸(m)	深さ(m)	番号	平面形	長軸(m)	短軸(m)	深さ(m)	番号	平面形	長軸(m)	短軸(m)	深さ(m)
P1	楕円形	0.32	0.25	0.55	P8	楕円形	0.26	0.23	0.11	P15	円形	(0.35)	(0.30)	0.34
P2	楕円形	0.32	0.18	0.23	P9	円形	0.18	0.17	0.39	P16	楕円形	0.62	0.52	0.49
P3	楕円形	0.32	0.27	0.20	P10	楕円形	0.30	0.28	0.42	P17	円形	0.49	0.39	0.19
P4	楕円形	0.30	0.20	0.32	P11	楕円形	0.64	0.57	0.63	P18	円形	0.38	0.36	0.16
P5	円形	0.20	0.19	0.13	P12	楕円形	0.28	0.20	0.17	P19	楕円形	0.78	0.69	0.47
P6	楕円形	0.30	0.27	0.39	P13	楕円形	0.30	0.22	0.40	P20	円形	0.39	0.25	0.09
P7	円形	0.34	0.21	0.07	P14	楕円形	0.34	0.32	0.28					



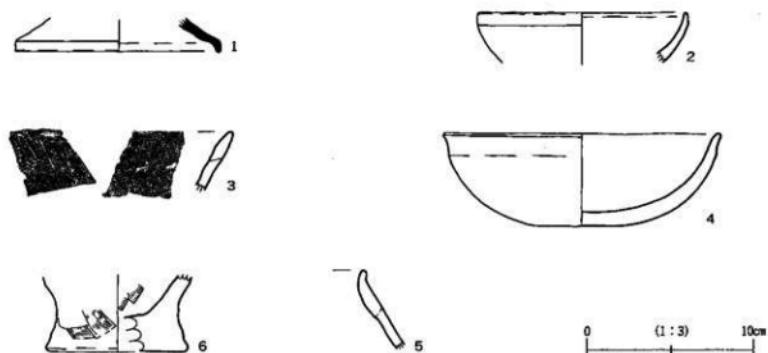
図VII.01 東区 遺構配置



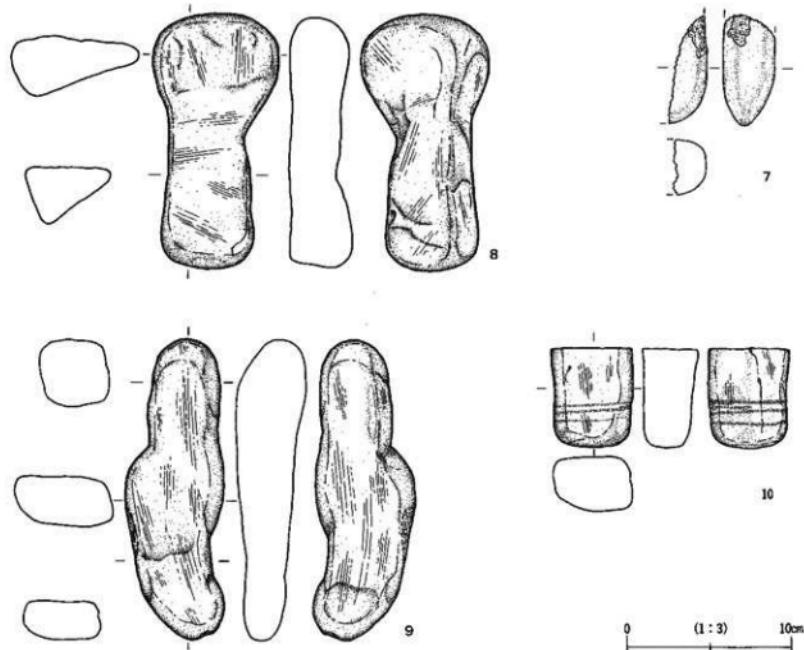
図VII.02 東区 四穴住居 1～4 周辺造構配図



図VII.03 東区 竪穴住居 1



図VII.04 東区 竪穴住居 1 出土遺物 (1)



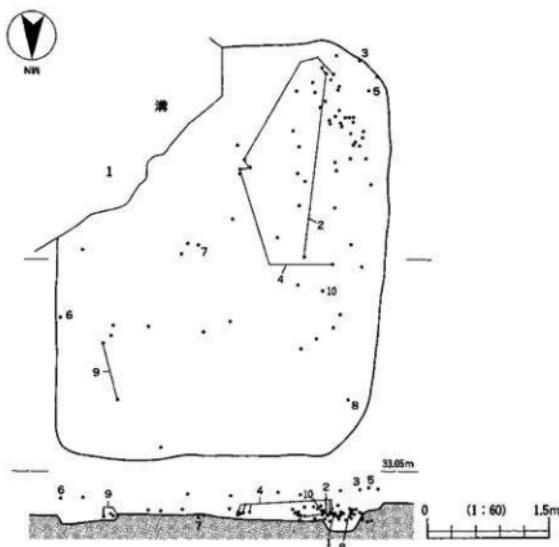
図VII.05 東区 積穴住居1 出土遺物 (2)

表VII.02 東区 積穴住居1 出土石器 観察表

発掘 場所 番号	東区 581	区 層位	遺物 種類	表面・断面 形態	部位	地 質 形 状 特 徴	色 調	測定	法長(cm)			備考
									口元	底辺	最高	
IV区.04.1	307	H-20	堆土	圓錐形 塊状	頂部	■ 外縁 底辺 側面 斜面	内面: 黄白色 外縁: 黄白色	ロコナデ	12.1	—	2.0	複数発見品
IV区.04.2	357-368	H-34	堆土	圓錐形 塊状	口縁部	○ 内面 外縁 底辺 側面 斜面	内面: 黄白色 外縁: 黄白色 底辺: ナチュラル	ロコナデ	12.7	—	5.06	
IV区.04.3	1073	H-34	堆土	圓錐形 塊状	口縁部	○ 内面 外縁 底辺 側面 斜面	内面: 黄白色 外縁: 黄白色 底辺: ナチュラル	ロコナデ	—	3.45	—	1次廻出遺物 外縁に擦り傷
IV区.04.4	364-365	H-32	堆土	圓錐形 塊状	中張	○ 内面 外縁 底辺 側面 斜面	内面: 黄白色 外縁: 明赤褐色	ロコナデ	16.7	—	5.00	
IV区.04.5	359	H-34	堆土	圓錐形 塊状	口縁部	○ 内面 外縁 底辺 側面 斜面	内面: 黄白色 外縁: 明赤褐色	ロコナデ+ハテヒ・ナデ巻き	—	—	—	
IV区.04.6	1074	H-35	堆土	圓錐形 塊状	底面	○ 内面 外縁 底辺 側面 斜面	内面: 黄白色 外縁: 黄白色	ロコナデ	—	5.2	—	1次廻出遺物 外縁に擦り傷
IV区.04.7	1091	H-35	堆土	圓錐形 塊状	底面	○ 内面 外縁 底辺 側面 斜面	内面: 黄白色 外縁: 黄白色	ロコナデ+ハケ目	—	8.3	4.0	1次廻出遺物

表VII.03 東区 積穴住居1 出土石器 計測表

発 掘 場 所 番 号	遺 物 番 号	出土位置		器種	石材	法量(cm·g)				備考
		区	層位			長さ	幅	厚さ	重量	
VII.07	581	東区 積穴住居1	埋土	磨・敲石	砂岩	(6.65)	(2.3)	(3.2)	48.50	
VII.08	331	東区 積穴住居1	埋土	石製品	砂岩	15.7	7.5	3.6	519.81	
VII.09	370	東区 積穴住居1	埋土	石製品	砂岩	18.3	6.0	4.0	577.71	
VII.10	371	東区 積穴住居1	埋土	石製品	砂岩	(5.95)	(4.9)	(3.5)	197.87	
VII.07	581	東区 積穴住居1	埋土	石製品	砂岩	—	—	—	—	



図VII.06 東区 壇穴住居1 遺物出土状況

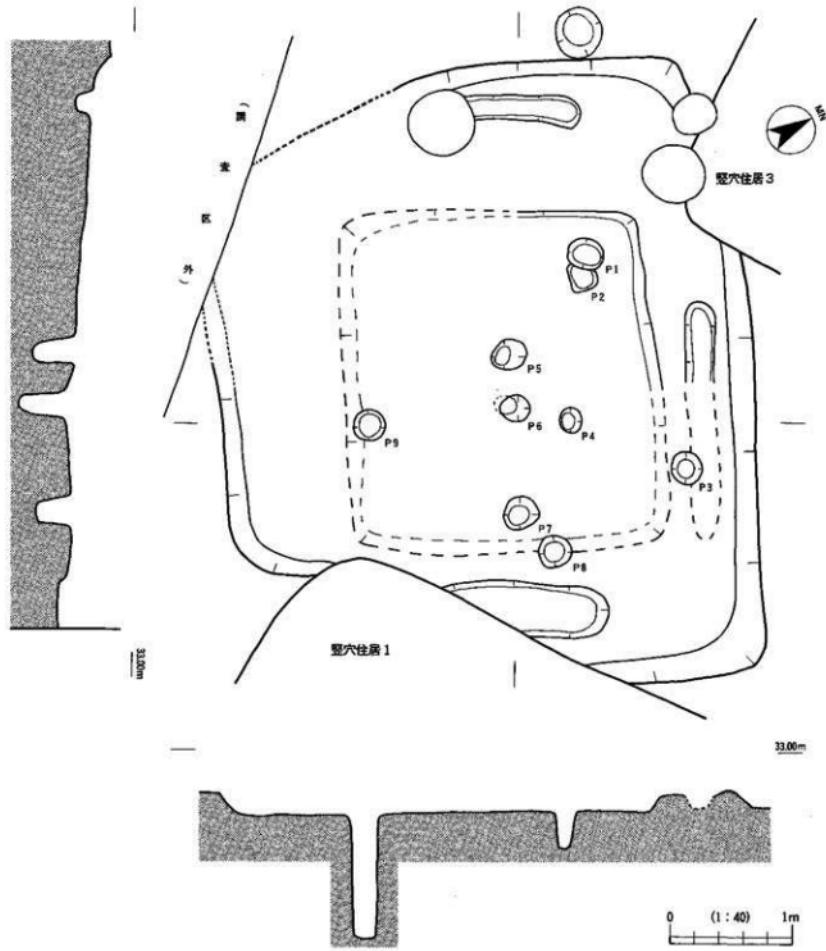
(2) 壇穴住居2 (図VII.07)

H-34・35区で検出された。住居の南東隅が壇穴住居1と、北西隅が壇穴住居3と切り合い、南西隅は調査区外に延びているため、平面形がはっきりしないが隅丸長方形と思われ、住居の長軸方向が東西に延びる。壇穴部はIX-1b層中まで掘り込まれ、検出面からの深さは最深部で30cmで、壇穴部内の埋土は黒色土であった。床面は黒色土にIX-1a層がわずかに混ざる程度で、硬化面も確認できなかった。その他床面上の遺構として、それぞれ形状の酷似した細長い楕円形の3基の溝と、9基の柱穴が検出された。また、壇穴部の北西側の一部に浅い段差が検出されたが、その他の箇所は壇穴部の中央に向って緩やかに下り、全体を巡るような段差は確認できなかった。

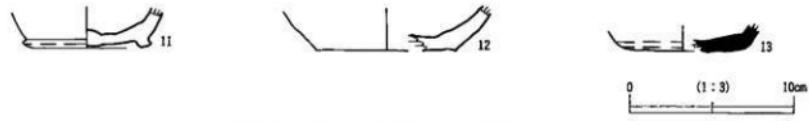
なお住居内の遺物は、埋土上位において住居の南東隅に多く出土し、完形に近い成川式土器の甕(17)が出土したが、ほとんどが破碎された成川式土器片であり、床面上においては遺物量も少なく、主に成川式土器と思われる土器片が確認された。(図VII.10)

壇穴住居2 出土遺物 (図VII.08・図VII.09)

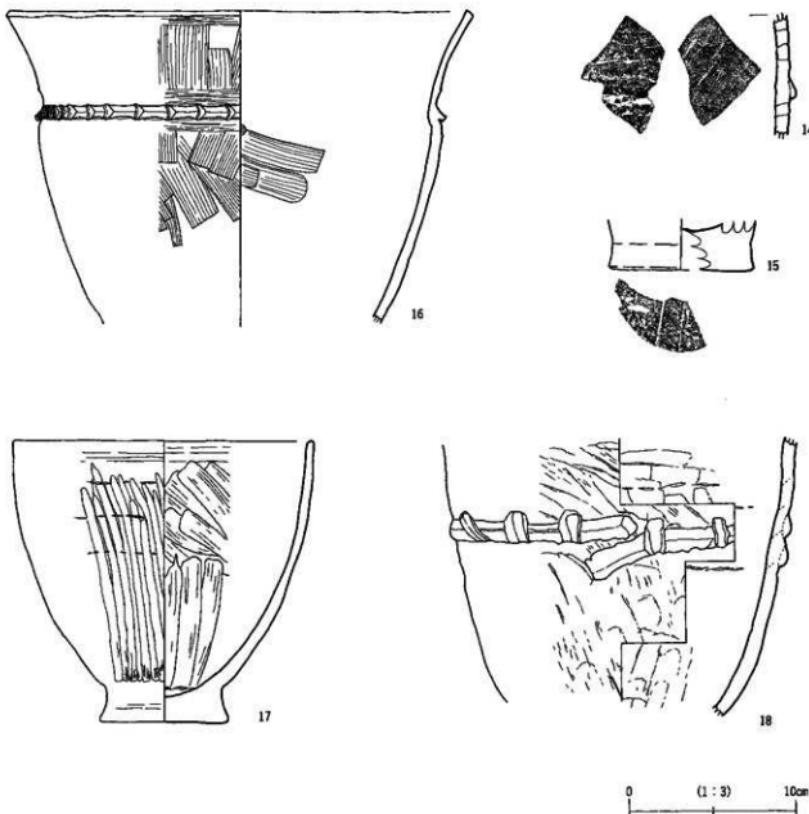
11は土師器の壠で、底部に削り出した高台をもつ。12は成川式土器の甕で、底部は平底である。13は須恵器の壠で、底部は平底に近い。14~18は成川式土器の甕である。14は胴部に1条の突帯が廻り、外面に煤が付着する。15は底部が平底で、葉脈痕と思われる沈線が見られる。16は口縁部が外反し、頸部に1条の刻目突帯を廻る。17は完形で、口縁部から底部にかけて緩やかに内湾する。底部は平底で、葉脈痕と思われる沈線が見られる。18は胴部に1条の刻目突帯を廻り、外面に煤が帯状に付着する。



図VIII.07 東区 整穴住居2



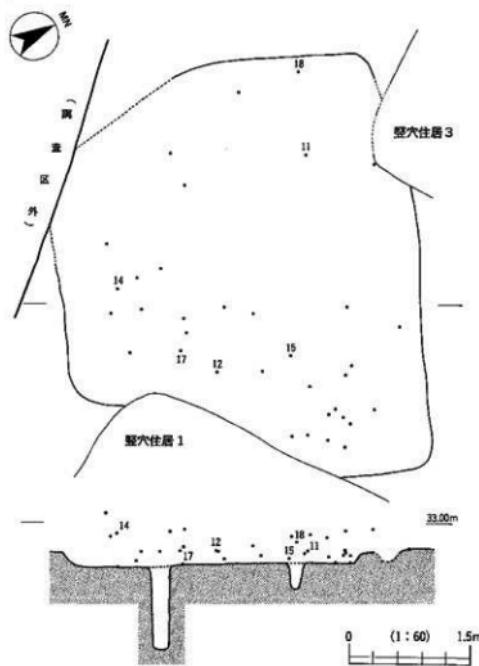
図VIII.08 東区 整穴住居2 出土遺物 (1)



図VII.09 東区 穫穴住居2 出土遺物(2)

表VII.04 東区 穫穴住居2 計測表

住居 番号	部番号	被出区	被出層	平面形	床面形	長軸 (m)	短軸 (m)	深さ (m)	ピット数	碳化物 の有無	地土層/城 の有無	備考		
P2	円錐形	H-34-35	WB	(楕丸長方形) (楕丸長方形)	(5.20)	(4.55)	0.30	9	無	無	無	竪穴住居1・3と切り合う		
P1	楕円形			平圓形	長軸(m)	短軸(m)	深さ(m)							
P2	(楕円形)	(0.28)	(0.22)	0.05										
P3	円形			0.26	0.25	0.22								
					P4	楕円形	0.20	0.18	0.29	P7	平圓形	0.30	0.27	0.26
					P5	椭円形	0.30	0.25	0.34	P8	円形	0.26	0.25	0.35
					P6	椭円形	0.26	0.22	0.36	P9	円形	0.27	0.25	0.63



図VII.10 東区 壁穴住居2 遺物出土状況

表VII.05 東区 壁穴住居2 出土器物 観察表

件番 事項 番号	表面 状況 名	測定 点番 号	区 域	層 位	遺構 種別	遺構 名	幅 度	土 質 名	土 質 特 性	色 調	調査	法面(m)		備 考	
												上層	中層		
ⅡⅢⅧ.08.11	558	I-34	埋土	東北 壁穴住居2	土蜘蛛 壁	剥離	○ ○	内面	シルバーブラウン色	内面	ヨコナデ・ヘラ切り壁	-	6.6	2.3	
ⅡⅢⅧ.08.12	161	I-34	埋土	成川土塚 壁	剥離	○ ○	内面	シルバーブラウン色	外壁	2ナタ・ナタナ	-	8.4	2.7	外壁に塗付有	
ⅡⅢⅧ.08.13	1972	I-34	埋土	壁穴住居2	壁 漆	剥離	○	内面	シルバーブラウン色	内面	ヨコナデ・ナタナ	-	3.0	1.5	1次剥落物
ⅡⅢⅧ.08.14	1879	I-34	埋土	成川土塚 壁	剥離	○	内面	シルバーブラウン色	内面	ヨコナデ・ヘラ切り壁	-	7.3	2.3	外壁に塗付有	
ⅡⅢⅧ.08.15	365	I-34	埋土	壁穴住居2	剥離	○ ○	内面	シルバーブラウン色	外壁	ヨコナデ	-	8.8	3.0	裏剥離	
ⅡⅢⅧ.08.16	17	I-34	埋土	成川土塚 壁	剥離	○ ○	内面	シルバーブラウン色	内面	ナタ・ハサワ	28.4	-	19.1	剥離有り	
ⅡⅢⅧ.08.17	952	I-34	埋土	壁穴住居2	剥離	○ ○	内面	シルバーブラウン色	内面	ヨコナデ・ナタ・ハサワ	18.3	7.6	17.0	裏剥離	
ⅡⅢⅧ.08.18	357	I-34	埋土	成川土塚 壁	剥離	○ ○ ○	内面	シルバーブラウン色	内面	ヘラナデ・ヨコナデ	-	17.5	剥離有り		

(3) 穫穴住居3 (図VII.11)

G-34・35区、H-34区にかけて検出された。住居の北端部が調査区外に延びているため、平面形がはっきりしないが、隅丸長方形と思われ、住居の長軸方向が北西から南東に延びる。竪穴部はIX-1a層中まで掘り込まれ、検出面からの深さは最深部で26cmで、竪穴部内の埋土は暗灰色土であった。床面は、黒色土とIX-1a層が混ざる貼り床が検出されたが、そのほか中央にはIX-1a層がより多く混ざる隅丸方形の硬化面の部分があり、その中央に焼土と思われる土壤の変色部分が検出された。その他床面上の遺構として、一部が擾乱の影響により平面形がはっきり検出できない箇所もあるが、住居の北隅と南隅の竪穴壁を沿うように帯状に延びる2基の溝と、19基の柱穴が検出された。

なお住居内の遺物は、他の竪穴住居と異なって遺物量も少なく、埋土中において住居の南隅と西隅にわずかに出土するのみであったが、住居の南東側の貼り床内からは鉄器(23・24)が出土した。

竪穴住居3 出土遺物 (図VII.12・図VII.13)

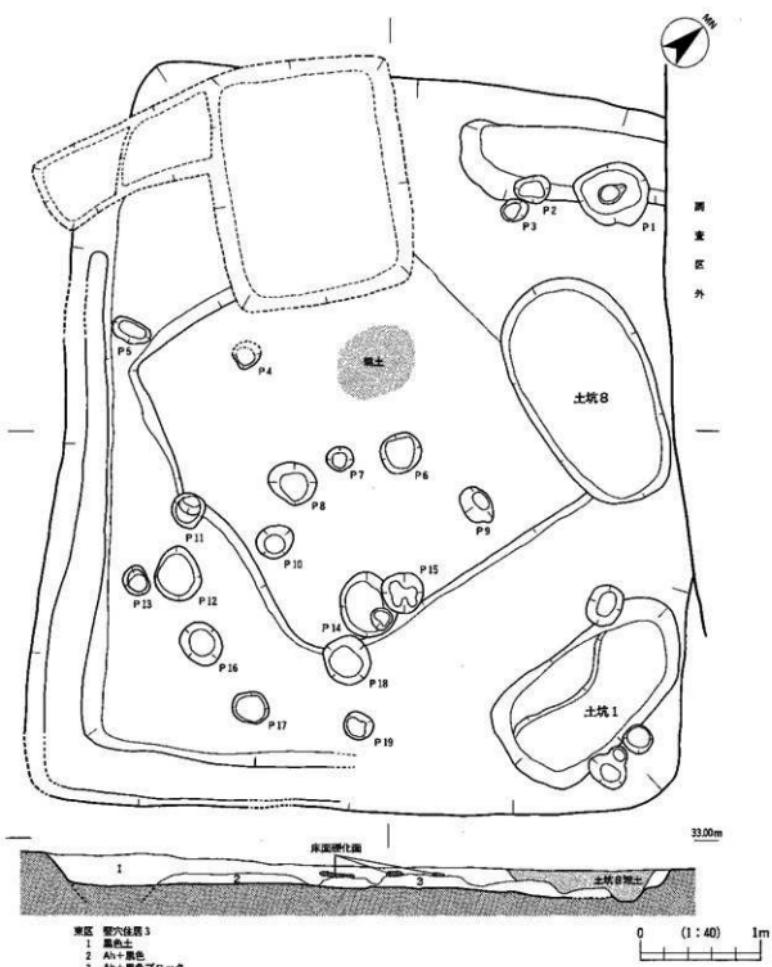
19は成川式土器の塊形土器で、口縁部が内湾し、外面に煤が付着する。20は成川式土器の壺で、胴部に1条の刻目突帯が巡り、その刻目は突帯の下部に施される。21は成川式土器の甕で、口縁部がわずかに外反し、外面全体に著しく煤が付着する。22は成川式土器の甕で、口縁部はわずかに外反し、胴部に1条の刻目突帯が巡り、外面の口縁部から突帯付近まで帯状に煤が付着する。23・24は鉄製の轡の一部と思われる。23は衡環が環状で、街と思われる部分は口中に留める部位が欠損し、衡内環の処理が左右で異なっている。衡環には木質の遺物が、立間にには革状の遺物が付着する。24は衡環の一部と思われ、その端部に街か引き手の一部と思われる部位が残存する。

表VII.06 東区 穫穴住居3 計測表

住居番号	区番号	検出区	検出層	平面形	床面形	反軸(m)	短軸(m)	深さ(m)	ピット数	硬化面の有無	焼土層/塙の有無	参考		
												竪穴住居3と切り合合う床面に貼り床を持つ		
3	図版.11	G-34-35	Ⅳ	(隅丸長方形)(隅丸長方形)(5.90)(5.20)		0.26	0.19							
P1	楕円形	0.62	0.55	0.35	P8 楕円形	0.40	0.33	0.17	P12 楕円形	0.35	0.34	0.18		
P2	楕円形	0.28	0.24	0.20	P9 楕円形	0.34	0.24	0.13	P16 楕円形	0.38	0.30	0.20		
P3	楕円形	0.22	0.20	0.15	P10 楕円形	0.30	0.28	0.18	P17 楕円形	0.30	0.26	0.18		
P4	楕円形	0.24	0.24	0.10	P11 楕円形	0.30	0.26	0.15	P18 楕円形	0.40	0.35	0.15		
P5	楕円形	0.32	0.19	0.16	P12 楕円形	0.46	0.38	0.12	P19 楕円形	0.24	0.22	0.12		
P6	楕円形	0.32	0.32	0.15	P13 楕円形	0.26	0.29	0.13						
P7	円形	0.21	0.20	0.16	P14 (楕円形)	(0.54)	(0.42)	0.20						

表VII.07 東区 穫穴住居3 出土土器 観察表

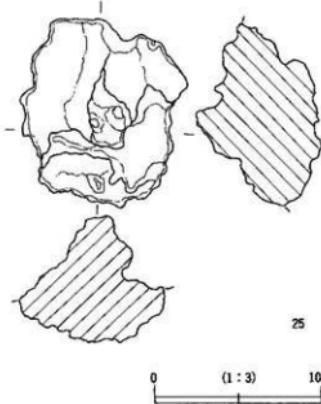
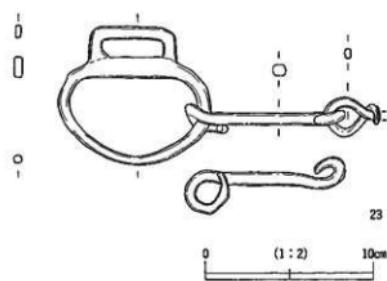
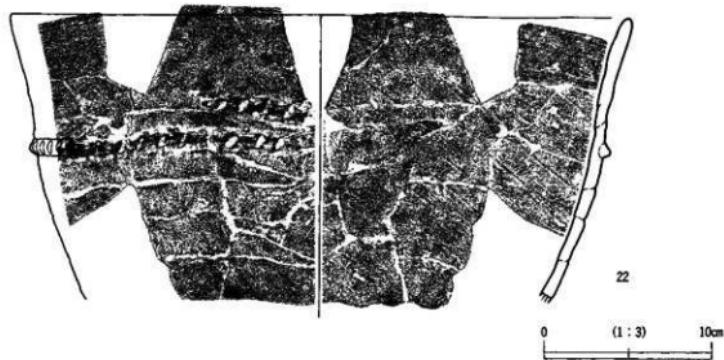
標本番号	実地名	区	層	遺構	焼土・跡跡	部位	石	窓	角	小	主	鉢	色 調			計測(cm)			備考		
													石	窓	角	小	主	鉢	U形	直角	都
IV-VI.19	514	G-34	住居	東区 竪穴住居3	成川式土器 甕	口縁部	○	○	内面	灰青褐色	内面	ナデ	9.4	—	3.05	外側に黒斑					
IV-VI.20	315	G-34	住居	東区 竪穴住居3	?	?			外側	灰褐色	外側	ナデ跡									
IV-VI.21	516	G-34	住居	東区 竪穴住居3	成川式土器 甕	口縁部	○	○	内面	灰褐色	内面	ナデ									
IV-VI.22	377-978	G-34	住居	東区 竪穴住居3	成川式土器 甕	口縁部 一跡部	○	○	内面	にじ・青褐色	内面	ヨコナデ→ウタリ									
	595								外側	黑色	外側	ナデ・ヨコナデ									
									内面	にじ・青褐色	内面	ヨコナデ・ココナデ									
									外側	にじ・青褐色	外側	ナデ・ヨコナデ・ナデ									
													37.5	—	17.4	外側に黒斑あり					



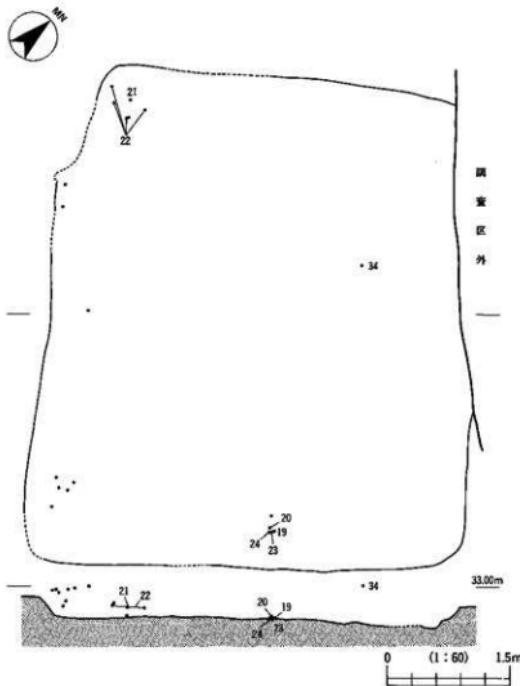
図VII.11 東区 積穴住居3



図VII.12 東区 積穴住居3 出土遺物 (1)



図VII.13 東区 積穴住居3 出土遺物 (2)



図VII.14 東区 穫穴住居3 遺物出土状況

(4) 穫穴住居4号 (図VII.15)

G-33・34区にかけて検出された。住居の北側が擾乱により破壊され、東端部が調査区外に延びていて、平面形がはっきりしないが、隅丸長方形と思われ、住居の長軸方向は北西から南東に延びている。竪穴部はIX-1a層中まで掘り込まれ、検出面からの深さは最深部で21cmで、竪穴部内の埋土は暗灰色土であった。床面は、黒色土とIX-1a層が混ざる貼り床が検出されたが、わずかに硬化する程度であった。その他床面上の遺構として、竪穴壁を巡るように幅30~69cm、深さ10~33cm程度の溝が4基、溝底面に5基 (P1・P14~15・P20~22)、貼り床上面に13基 (P3~13・P18~19)、竪穴壁の際に3基 (P2・P16~17) の柱穴が検出された。

なお、住居内の遺物は、埋土中においては椀型漆 (25) が出土した他は成川式土器片であり (図VII.17)、床面直上においては磨石 (31) が1点出土したのみだった。

豊穴住居4 出土遺物 (図VII.13・図VII.16)

25は楕円形溝で、長さ11.6cm、幅10.2cm、厚さ7.8cm、重さ471.96gを測る。26は須恵器の蓋で、天井部がわざかに内湾し、口縁端部が欠損する。27は土師器の蓋で、天井部がわざかに内湾し、外面に1条の沈線が施される。28は成川式土器の鉢で、口唇部が平坦で、口縁部がわざかに内湾する。29は成川式土器の壺と思われる。30は成川式土器の甕と思われ、口縁部が直行し、外面全体に煤が付着する。

(出口)

砥石31は表裏面が光沢面と化し、右側面にもやや光沢が見られる。裏面の中央には、黒色のタール状のものが帯状に付着する。側面には敲打部が見られる。

(東)

表VII.08 東区 豊穴住居4 計測表

住居番号	図面番号	検出区	検出層	平面形	床面形	長軸(m)	短軸(m)	深さ(cm)	ピット数	硬化面の有無	焼土層/塗の有無	備考		
												有	無	床面に貼り床を持つ
4	図VII.15	G	33-34	畠(隅丸長方形)	(隅丸長方形)	(4.90)	(3.56)	(0.21)	22	有	無	無	床面に貼り床を持つ	
P1	平面形	長軸(m)	短軸(m)	深さ(cm)	P9	円形	0.18	0.16	0.12	P17	椭円形	0.48	0.31	0.20
P2	楕円形	0.25	0.19	0.35	P10	楕円形	0.54	0.38	0.17	P18	楕円形	1.00	0.40	0.10
P3	(楕円形)	(0.30)	(0.15)	0.29	P11	楕円形	0.36	0.30	0.23	P19	楕円形	0.53	0.24	0.43
P4	楕円形	0.56	0.48	0.44	P12	楕円形	0.22	0.19	0.17	P20	楕円形	0.33	0.20	0.19
P5	楕円形	0.34	0.30	0.48	P13	楕円形	0.30	0.28	0.30	P21	楕円形	0.36	0.33	0.23
P6	楕円形	0.43	0.30	0.37	P14	(楕円形)	0.26	0.26	1.09	P22	楕円形	0.54	0.49	0.29
P7	楕円形	(0.22)	(0.13)	0.20	P15	楕円形	0.26	0.28	0.26					
P8	円形	0.26	0.23	0.16	P16	楕円形	0.24	0.19	0.28					

表VII.09 東区 豊穴住居4 出土土器 観察表

種類	表面	底面	区	層	遺物名	特徴	器種	石材	石英	角閃石	斜長石	長石	粘土	有機物	測量(cm)			備考
															長	幅	厚	
IV	IV	IV	IV	IV	407-408 410	G-34	豊土	東区 豊穴住居4	須恵器	電線	○	内面:淡黄色 外面:褐色	内面:ナメ	-	18.6	2.1	1.1	複数個出土
VII	IV	IV	IV	IV	579	C-34	豊土	東区 豊穴住居4	土器	電線	○	内面:淡黄色 外面:褐色	内面:ナメ	-	-	2.0		
VII	IV	IV	IV	IV	1183	G-34	豊土	豊穴住居4	成川式土器 蓋?	口縁部	○ ○	内面:淡黄色 外面:褐色	内面:ヨコナメ	-	-	2.9	1次調査出土	
VII	IV	IV	IV	IV	1184	G-34	豊土	豊穴住居4	成川式土器 蓋?	柄部	○ ○ ○	内面:淡黄色 外面:褐色	内面:ナメ 外面:ナメ	秋ナメ	-	3.7	1次調査出土	
VII	IV	IV	IV	IV	406	G-34	豊土	豊穴住居4	成川式土器 蓋?	口縁部	○ ○	内面:淡黄色 外面:褐色	内面:ナメ 外面:ナメ	ナメ	-	4.3	外面上に貼り付着	

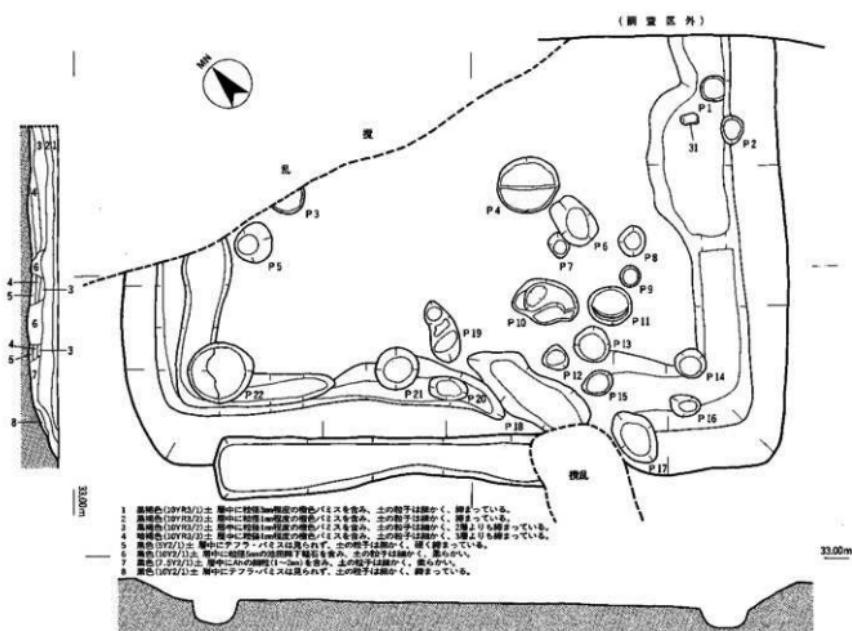
表VII.10 東区 豊穴住居4 出土石器 計測表

図面番号	遺物番号	出土位置		器種	石材	法量(cm·g)				備考
		区	層位			長	幅	厚	重量	
VII.31	-	東区 豊穴住居4	埋土	砥石	砂岩	13.7	8.3	5.85	1250.40	

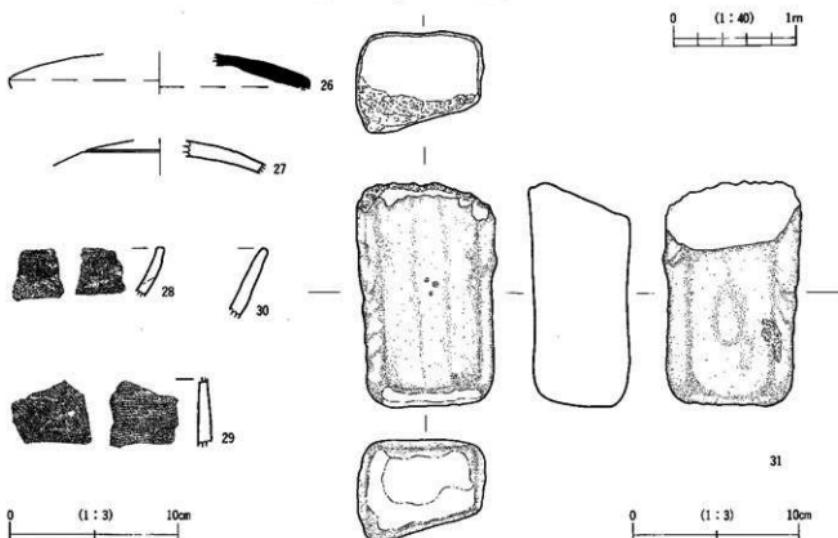
(5) 豊穴住居5・6 (図VII.18)

E・F-32区に検出された。この豊穴住居5・6付近はIX-1a 層上面まで削平を受けているため、床面がかろうじて検出できただけであった。豊穴住居5が豊穴住居6を切り合わせる形で検出された。それぞれの住居の北側が調査区外に延びているため、平面形ははっきりしないが、豊穴住居5・6とも隅丸長方形と思われる。住居の長軸方向は共に北から南に延びると思われる。豊穴部はIX-1b 層中まで掘り込まれ、検出面からの深さは最深部で12cmで、検出面における豊穴部内の埋土は、床面に近いためかIX-1a 層が混ざる黒色土であった。床面は、黒色土とIX-1a 层が混ざる貼り床が検出されたが、わずかに硬化する程度であった。その他床面上の遺構として、豊穴住居5には貼り床上面に1基(P3)、豊穴壁の際に2基(P1~2)の柱穴が計3基、豊穴住居6には貼り床上面に4基(P5~8)、豊穴壁の際に1基(P4)の柱穴が計5基検出された。

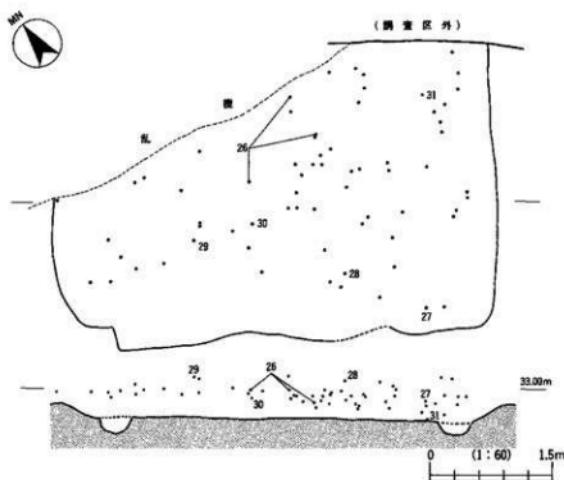
なお、遺物は確認調査の際に出土しているため、出土状況については第III章で記述する。



図VII.15 東区 堅穴住居4



図VII.16 東区 堅穴住居4 出土遺物



図VII.17 東区 穫穴住居4 遺物出土状況

竪穴住居5 出土遺物 (図VII.19)

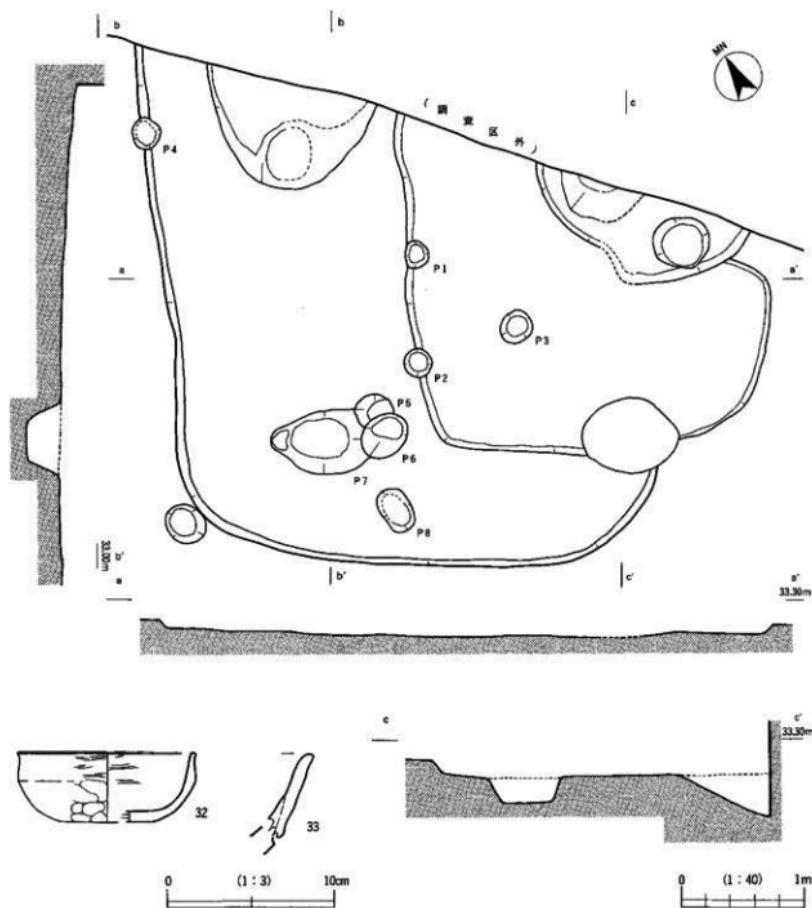
32は成川式土器の高杯である。口縁部が直行し、口縁部の下端に環部の屈曲部と思われる部位も見られる。33は成川式土器の壺であり、口縁部から底部にかけて緩やかに内湾し、底部は平底である。

表VII.11 東区 穫穴住居5・6 計測表

住居番号	団番号	後出区	後出周	平面形	床面形	長軸(m)	短軸(m)	深さ(m)	ピット数	硬化面の有無	焼土面/底の有無	備考		
5	団VII.18	E-F-32	IX-1a	(隅丸長方形)	(隅丸長方形)	(3.06)	(2.95)	(0.16)	3	無	無	竪穴住居5と切り合つ 床面に貼り床を持つ		
番号	平面形	長軸(m)	短軸(m)	深さ(m)	番号	平面形	長軸(m)	短軸(m)	深さ(m)	番号	平面形	長軸(m)	短軸(m)	
P1	格円形	0.24	0.18	0.12	P2	円形	0.24	0.23	0.34	P3	格円形	0.28	0.24	0.22
住居番号	団番号	後出区	後出周	平面形	床面形	長軸(m)	短軸(m)	深さ(m)	ピット数	硬化面の有無	焼土面/底の有無	備考		
6	団VII.18	E-F-32	IX-1a	(隅丸長方形)	(隅丸長方形)	(3.80)	(3.80)	(0.13)	5	無	無	竪穴住居5と切り合われる 床面に貼り床を持つ		
番号	平面形	長軸(m)	短軸(m)	深さ(m)	番号	平面形	長軸(m)	短軸(m)	深さ(m)	番号	平面形	長軸(m)	短軸(m)	
P4	格円形	0.28	0.23	0.21	P6	格円形	0.41	0.31	0.13	P8	格円形	0.38	0.24	0.30
P5	(格円形)	(0.30)	(0.20)	(0.30)	P7	(格円形)	(0.72)	(0.52)	(0.27)					

表VII.12 東区 穫穴住居5 出土土器 觀察表

検査番号	表面形	底面形	区	基盤	焼付・器種	基盤	内壁	内壁	内壁	内壁	色調	測定		法則(cm)	備考		
												内壁	内壁	内壁	内壁		
DEW.19.22	434	F-32	東区	成川式土器 焼火住居5	成川式土器 焼火住居5	内壁	内壁	内壁	内壁	内壁	内壁	ナチュラル	ナチュラル	ナチュラル	ナチュラル	19.6 9.7 4.2	確認調査遺物
DEW.19.23	430	F-32	東区	成川式土器 焼火住居5	成川式土器 焼火住居5	内壁	内壁	内壁	内壁	内壁	内壁	ナチュラル	ナチュラル	ナチュラル	ナチュラル	- - 5.1	確認調査遺物



図VIII.19 東区 竪穴住居5・6 出土遺物

図VIII.18 東区 竪穴住居5・6

土坑

VII層上面において16基の土坑が検出された。各土坑の計測値は表VII.13のとおりである。

(1) 土坑1・8 (図VII.21)

G-34区の竪穴住居3の貼り床上面で検出された。土坑1・8とも平面形は楕円形を呈し、黒色土の埋土を持つ土坑である。土坑8号埋土内からは須恵器の蓋(34)が出土している。

土坑8 出土遺物 (図VII.20)

34は須恵器の蓋である。外面の天井部につまみが付き、見受け部は直行する。内面の天井部に渦巻状の割りが見られる。

(2) 土坑3 (図VII.21)

G-33区で検出された。平面形は楕円形を呈す。埋土中に遺物の出土はなく、土坑埋土中の底面中央に暗赤褐色の焼土層があり、その層の直上をかぶるように、シラスと思われる微細な粒子が土坑の中央に堆積する。

(3) 土坑14 (図VII.22)

D-27区で検出された。平面形は楕円形に近い隅丸長方形を呈す。埋土中に遺物の出土はなく、他の土坑と異なり、埋土上位において池田降下軽石を含むオリーブ黒色土が堆積し、土坑の東端が楕円状に掘り込まれる。

(4) 土坑201 (図VII.23)

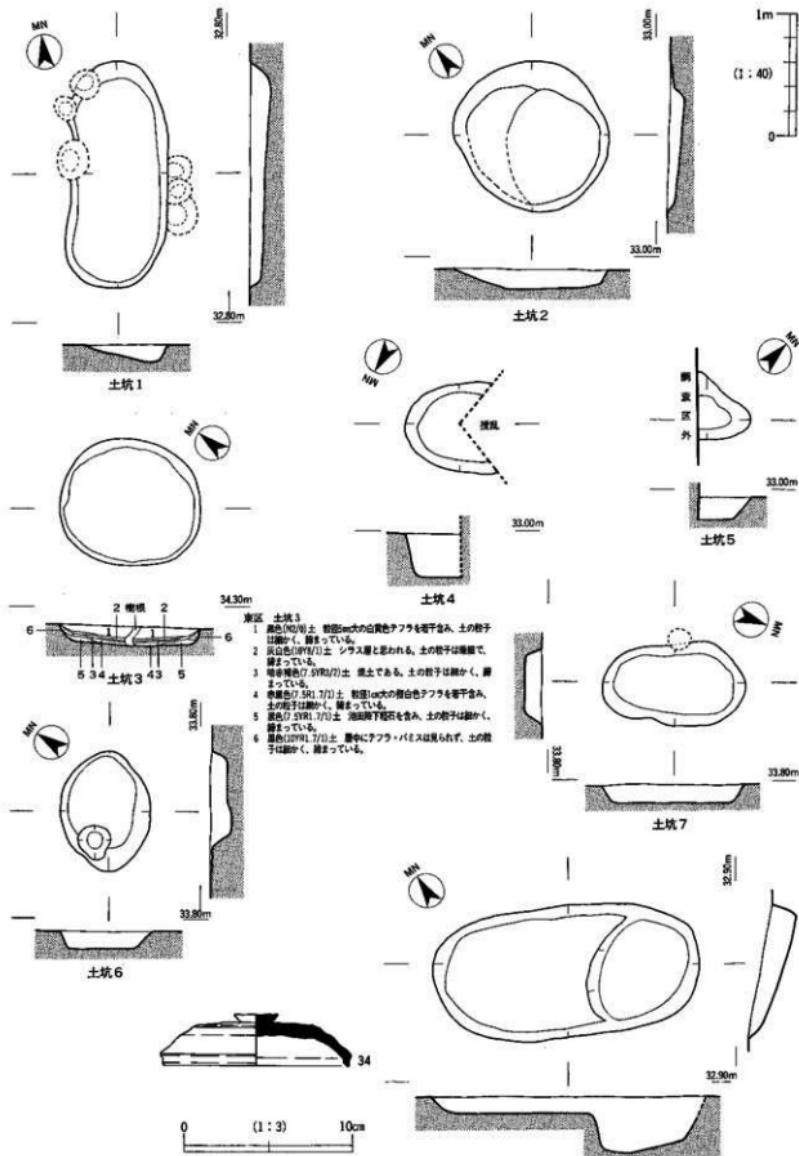
E-28区で検出された。E-28区付近はIX-1a層中まで削平を受けていたため、検出はIX-1a層で行った。土坑の北東端と南西端は調査区外に延び、全体の形状ははっきりわからない。残存する平面形は縦横幅約2mの方形土坑と、その方形土坑につながる幅70cm程の溝があり、その溝は方形土坑部分の北東隅から真っ直ぐに北東に延びる。

土坑の検出面からの深さは、方形土坑部分が約70cmで、床面全体に傾斜はほとんど見られなかった。溝部分は南西から北東に向かって傾斜し、最も深い所で調査区外に近い北東端部の38cm、最も浅い所で方形土坑部分に接する南西端部の5cmを測る。

土坑内の遺物は、検出面とほぼ同レベルで、方形土坑部分の中央に染付・黒薩摩等の壇・甕・鉢類等が多く出土しており、遺物を囲うように軽石等も多数出土したが、埋土下位からは全く遺物は見当たらなかった。

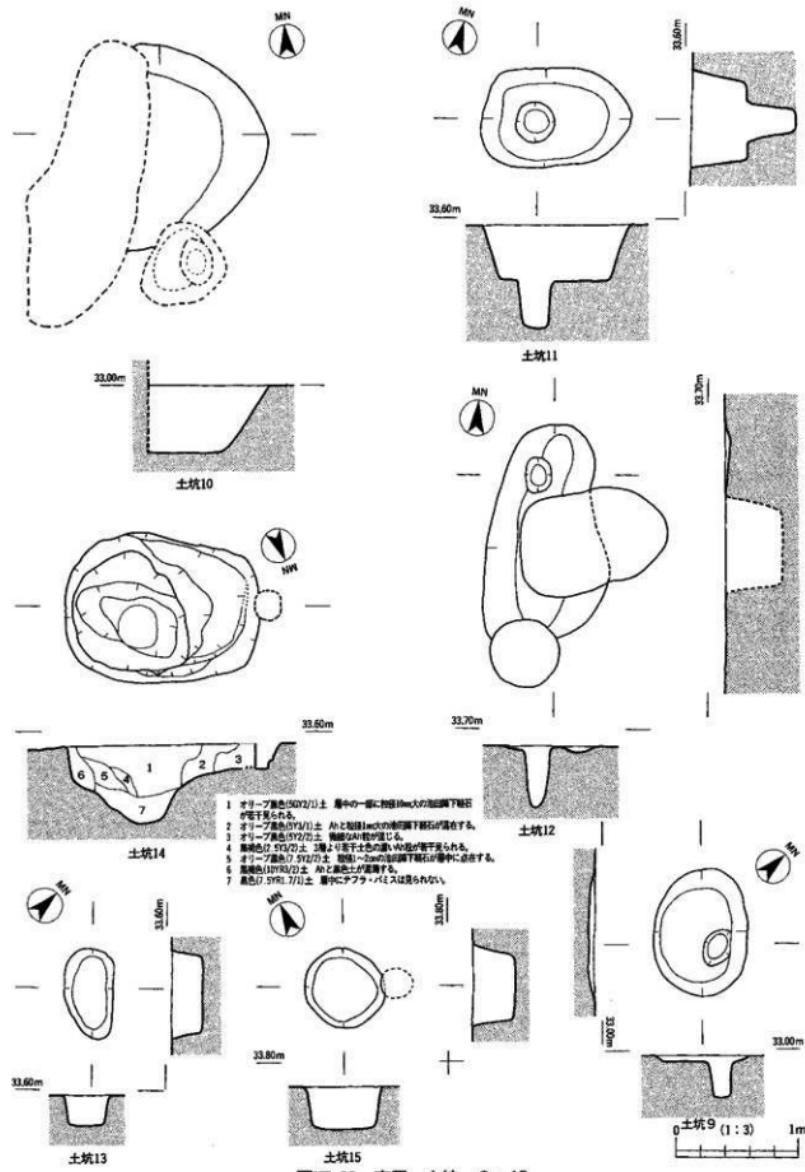
土坑201 出土遺物 (図VII.24・図VII.25)

35~37は黒薩摩の壇である。35は口縁部がわずかに内溝し、底部は高台をもち、内面の底部の一部に釉掻き取り痕が見られる。36・37は底部に高台をもち、内面の底部の一部に釉掻き取り痕が見られる。38・39は肥前系の白磁の碗である。それぞれ底部に高台をもち、高台内面に砂目があり、内面の底部の一部に釉掻き取り痕が見られる。40・41は薩摩焼の壠である。それぞれ底部には高台をもち、内面の底部の一部に釉掻き取り痕が見られる。42は肥前系の染付の皿で、底部は浅い高台をもつ。43は薩摩焼の鉢である。口唇部が肥大し、口縁部はわずかに内溝する。口唇部には釉が掻き取られた痕跡が見られる。44は黒薩摩の甕で、口唇部は肥大し、貝目跡も見られ、口縁部は外反する。45は黒薩摩の鉢で、口唇部は肥大し、口縁部は内溝する。口縁部に1条の深い沈線が巡る。46・47は黒薩摩の甕である。46は頸部に1条、胸部に2条の浅い沈線が巡る。47は底部が平底である。48は黒薩摩のすり鉢である。底部は平底と思われ、内面にはすり鉢のハケ目が見られ、櫛目は7条である。

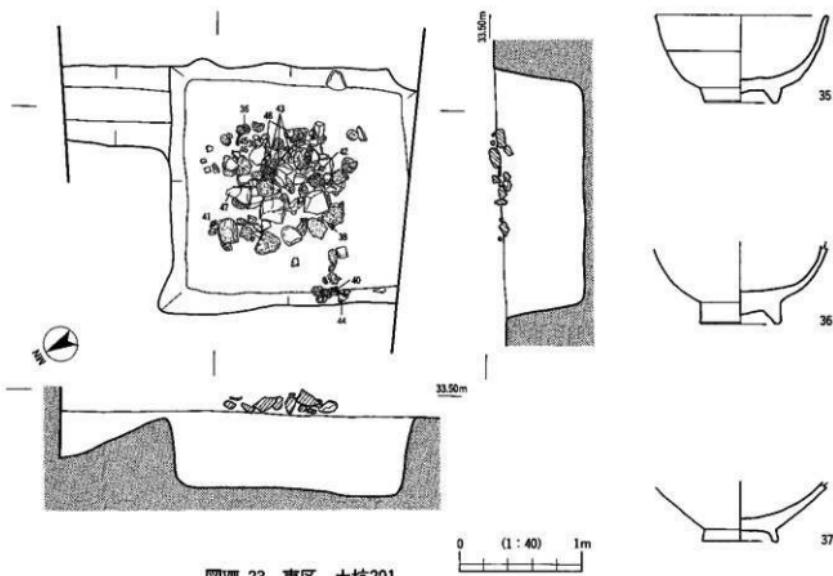


図VII.20 東区 土坑8 出土遺物

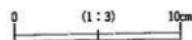
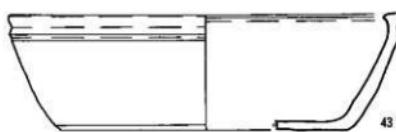
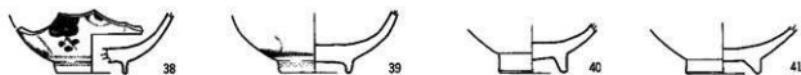
図VII.21 東区 土坑1~8



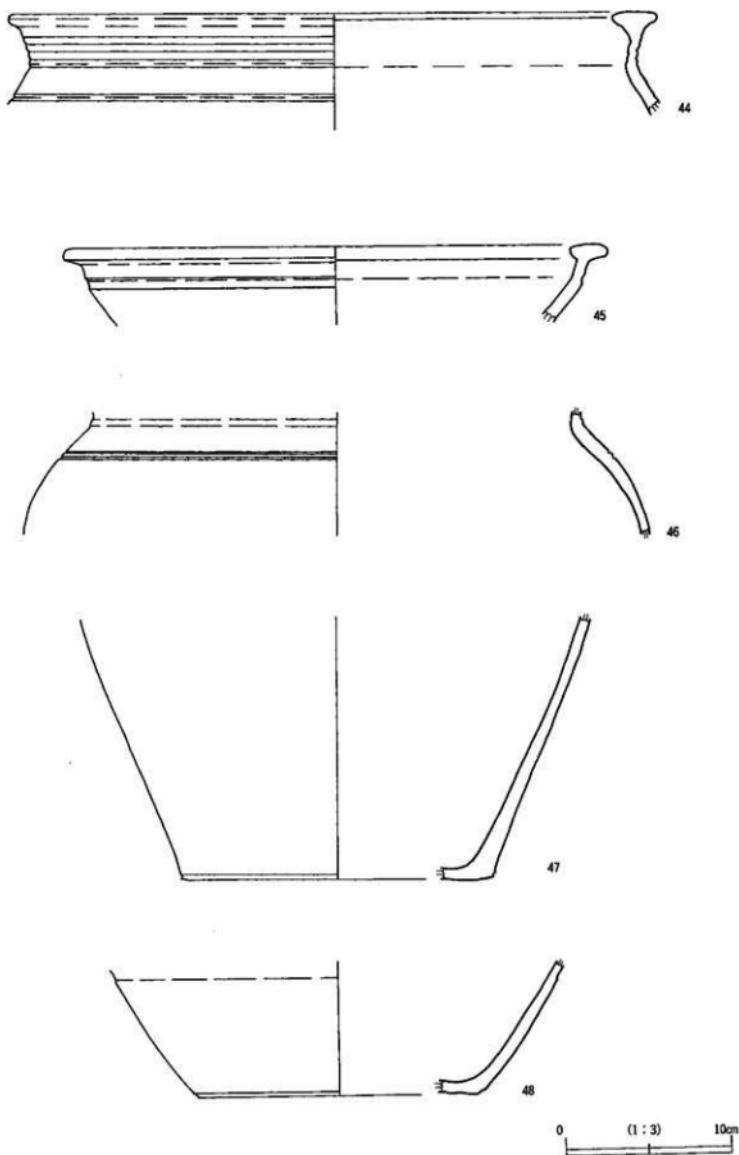
図VII.22 東区 土坑 9~15



図VII.23 東区 土坑201



図VII.24 東区 土坑201 出土遺物（1）



図VII.25 東区 土坑201 出土遺物 (2)

表VII.13 東区 土坑 計測表

土坑番号	検査番号	検出区	平面形	長軸(cm)	短軸(cm)	長軸方位	備考
1	IV-VI.21	G-34	梢円形	180	72	北	整穴住居3内検出
2	IV-VI.21	G-34	梢円形	126	125	北東	
3	IV-VI.21	G-33	梢円形	110	106	北西	底面に焼土
4	IV-VI.21	F-33	(梢円形)	(72)	(44)	北西	擾乱により一部破壊
5	IV-VI.21	F-33	(梢円形)	(56)	(43)	北西	事務棧道区域外に延びる
6	IV-VI.21	E-29	梢円形	108	76	北西	
7	IV-VI.21	E-28	梢円形	100	72	北東	
8	IV-VI.21	G-34	梢円形	216	110	北西	整穴住居3内検出 須直器(IV-01)出土
9	IV-VI.22	G-34	梢円形	116	66	北	
10	IV-VI.22	F-33	(梢円形)	(170)	(100)	北	擾乱により一部破壊
11	IV-VI.22	C-D-27	梢円形	120	84	西	土坑12に切り合う
12	IV-VI.22	C-D-27	(梢円形)	(177)	(102)	北	土坑11に切り合う
13	IV-VI.22	D-27	梢円形	75	38	北西	
14	IV-VI.22	D-27	馬蹄長方形	158	125	北	
15	IV-VI.22	D-27	円形	66	66	北東	
201	IV-VI.23	E-F-31	(馬蹄方形)	(384)	(210)	北東	

表VII.14 東区 土坑 出土器 観察表

横列番号	検査番号	井深(m)	X	Y	層	遺構	種別・構造	断面	土質	名	測定	深度(cm)		備考	
												上界	下界	高さ	
IV-VI.30	34	1150	K	G-34	埋土	東区 土坑3	須直器 半埋	○	内面 外面	ロクロナダ・ナダ	-	11.1	3.1	内面に溝状の削り	
IV-VI.34	35	22	F-31	埋土	東区 土坑21	南脇 墓塚	中壇	南斜黄色 2.5YR7/1	内面 外面	ロクロナダ・ナダへへきり	-	10.4	4.8	6.3	1大調査遺物 須直器取り残
IV-VI.34	36	21	F-31	埋土	東区 土坑21	南脇 墓塚	中壇	灰黃色 10YR7/2	内面 外面	ロクロナダ・ナダへへきり?	-	4.3	4.8	1大調査遺物 須直器取り残	
IV-VI.34	37	一括	F-31	埋土	東区 土坑21	白磚 瓦砾堆	底面	底面	内面 外面	ロクロナダ・ナダへへきり?	-	4.4	3.6	1大調査遺物 須直器・支矢孔BCS9	
IV-VI.34	38	6	F-31	埋土	東区 土坑21	白磚 瓦砾堆	底面	底面	内面 外面	ロクロナダ	-	4.5	3.7	1大調査遺物 須直器取り残	
IV-VI.34	39	28	F-31	土	東区 土坑21	白磚 瓦砾堆	底面	底面	内面 外面	ロクロナダ・ナダへへきり?	-	4.3	2.7	1大調査遺物 須直器取り残	
IV-VI.34	40	4	F-31	土	東区 土坑21	南脇 墓塚	底面	灰褐色 7.5YR7/3	内面 外面	ロクロナダ・ナダへへきり?	-	3.8	2.5	1大調査遺物 須直器取り残	
IV-VI.34	41	31	F-31	土	東区 土坑21	南脇 墓塚	底面	褐色 7.5YR7/6	内面 外面	ロクロナダ・ナダへへきり?	-	4.4	2.7	1大調査遺物 須直器取り残	
IV-VI.34	42	31	F-31	土	東区 土坑21	白磚 瓦砾堆	底面	底面	内面 外面	ロクロナダ	-	7.4	2.8	1大調査遺物	
IV-VI.34	43	17-27	F-31	土	東区 土坑21	南脇 墓塚	底面	灰褐色 10YR7/3	内面 外面	ロクロナダ・ナダへへきり?	-	22.8	17.6	7.1	1大調査遺物
IV-VI.35	44	3	F-31	埋土	東区 土坑21	南脇 墓塚	底面	灰褐色 2.5YR7/1	内面 外面	ロクロナダ・ナダへへきり?	-	36.0	-	6.2	1大調査遺物
IV-VI.35	45	33	F-31	土	東区 土坑21	南脇 墓塚	底面	灰褐色 2.5YR7/1	内面 外面	ロクロナダ・ナダへへきり?	-	22.0	-	4.7	1大調査遺物
IV-VI.35	46	36	F-31	埋土	東区 土坑21	南脇 墓塚	底面	灰褐色 7.5YR7/1	内面 外面	ロクロナダ・ナダへへきり?	-	1	7.5	1大調査遺物	
IV-VI.35	47	11	F-31	埋土	東区 土坑21	南脇 墓塚	底面	灰褐色 10YR7/1	内面 外面	ロクロナダ・ナダへへきり?	-	19.2	16.1	1大調査遺物	
IV-VI.35	48	18-27	F-31	土	東区 土坑21	南脇 墓塚	底面	灰褐色 10YR7/6	内面 外面	ロクロナダ	-	17.2	8.1	1大調査遺物	

溝

VII層上面において5基の溝が検出された。各溝の計測値は表VII.15のとおりである。

(1) 溝1 (図VII.26)

H-35区で検出された。造構の東端が近年の擾乱によって破壊されているため、造構全体の形状ははっきりしない。溝中央には幅20~30cm程の硬化面が西から東に向って下っており、その傾斜は約18°である。溝内の遺物は埋土上位から大量に出土したが、床面の直上には遺物は見当たらなかった。

溝1 出土遺物(図VII.27・図VII.28)

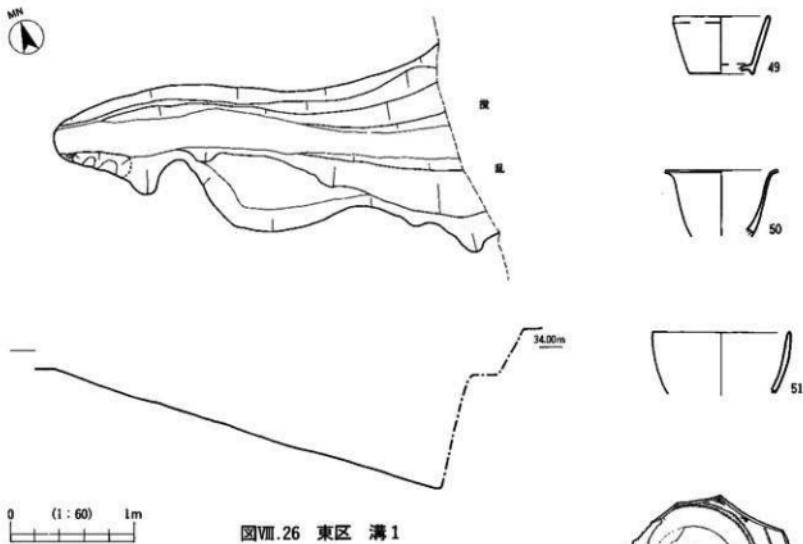
49は白磁の酒器の一種であると思われ、口縁部は直行する。50は白磁の壺で口縁部は外反する。51は白磁の碗で口縁部がわずかに内湾する。52は陶器の壺で口縁部は直行する。53は白磁の皿で、口縁部は内湾し、内面の胴部には蓮弁紋が施される。54は染付の碗である。口縁部は内湾し、底部には浅い高台をもち、内面の底部の一部に釉掻き取り痕が見られる。55は陶器の甕である。口唇部は肥大し、口縁部は内側に屈曲し、頸部が極端な括れをもつ。外面には使用によるものか磨耗した形跡が見られる。56は薩摩焼の擂鉢である。底部は平底の若干上底を呈し、内面には擂鉢特有のカキ目が施され、横目は7条単位である。57は薩摩焼の壺で、口縁部が内側に屈曲してから直行する。58は薩摩焼の土瓶と思われ、残存した形状から八角形の土瓶と思われる。59は薩摩焼の徳利で、口唇部が肥大し、口縁部がわずかに内湾する。60・61は陶器の甕である。60は底部に高台をもち、61は底部に高台をもち、内面の底部の一部に釉掻き取り痕が見られる。62は薩摩焼の甕である。底部に高台をもち、工具による削り出し痕が見られる上底である。63は完形の須恵器の甕で、口縁部は直行し、底部は高台をもつ。64は須恵器の碗と思われ、底部には高台と思われる部位が残存する。65は須恵器の高杯であり、脚部が内側に屈折し、外面は施釉されている。66は須恵器の壺と思われ、口唇部が肥大し、口縁部が大きく外反する。67は繩文後期～晚期相当の深鉢である。底部の接地面に葉脈痕が見られる。68は成川式土器の甕である。頸部に1条の刻目突帯を巡るが、突帯の上部が欠損しているため、刻目の様子がはっきりしない。

(2) 溝2・3・4・5(図VII.29)

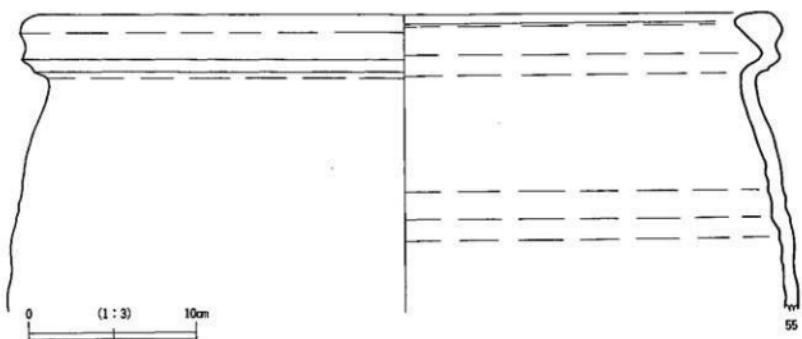
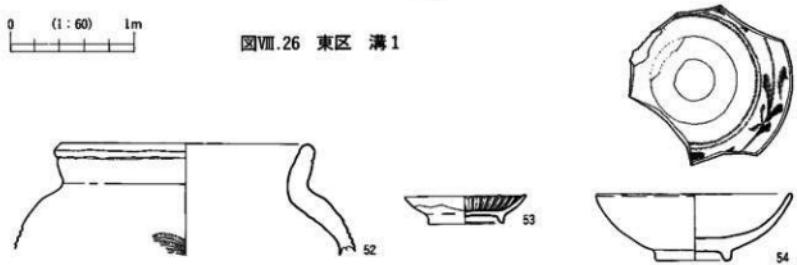
溝2はD-28区、溝3はD-27区、溝4はC・D-26・27区、溝5はC-27区で検出された。溝2・3は北東端と南西端が調査区外に延び、溝4は南西端部が、溝5は北東端部が調査区外に延び、いずれの溝も全体の形状ははっきりしない。これらの溝は長軸方位が揃って北東に並んでいるように思われる。なお、溝3の床面直上からは成川式土器と思われる土器片が1点出土したが、溝2・4・5からは遺物は確認できなかった。

表VII.15 東区 溝 計測表

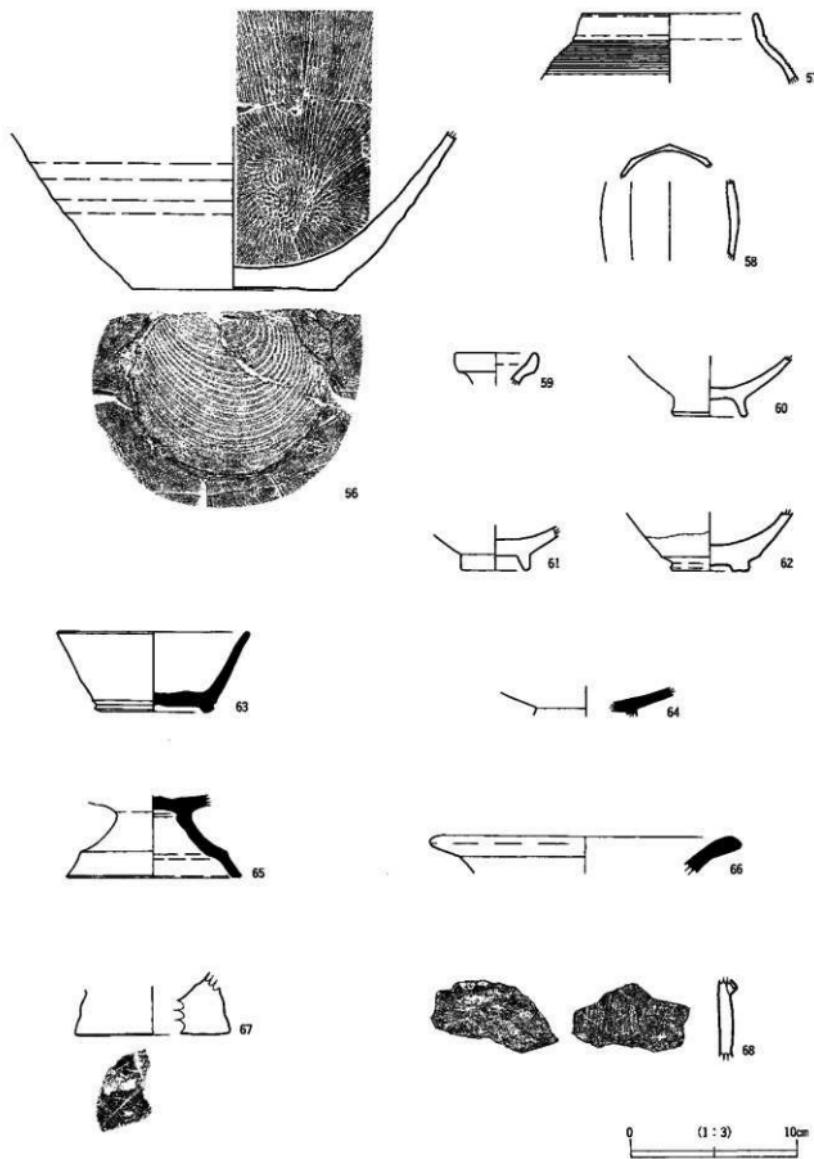
溝番号	地図番号	検出区	長軸(cm)	短軸(cm)	長軸方位	硬化面の有無	備考
1	図VII.26	H-35	(326)	(150)	北西	有	豊穴住居1と切り合う
2	図VII.29	D-28	(118)	(48)	北東	無	
3	図VII.29	D-27	(280)	(130)	北東	有	
4	図VII.29	C・D-26・27	(364)	(270)	北東	無	
5	図VII.29	C-27	(150)	(176)	北東	無	



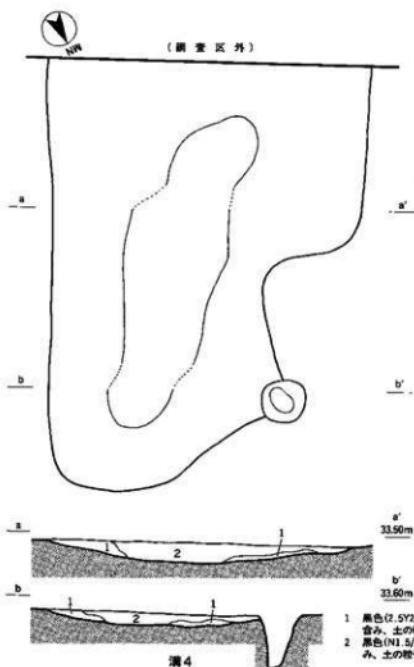
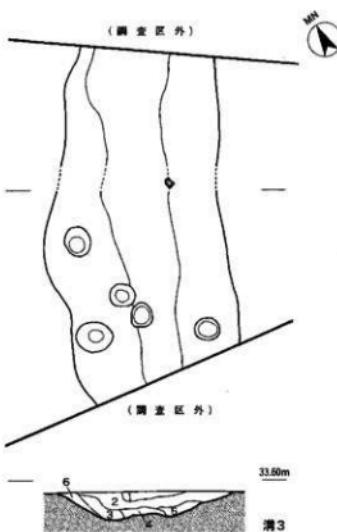
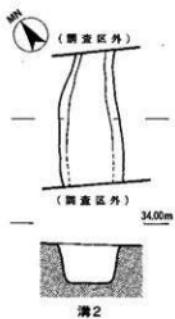
図VIII.26 東区 溝1



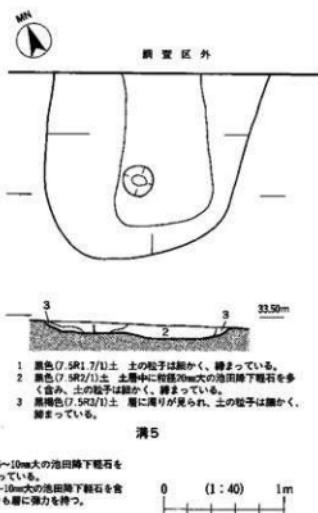
図VIII.27 東区 溝1 出土遺物 (1)



図VII.28 東区 溝1 出土遺物 (2)



- 1 黒色(10Y2/1)土 土の粒子は細かく、繋まっている。
- 2 黒色(10YR2/1)土 層間にAh層と見られる粒径1mmの大いのバニスを含み、土の粒子は細かく、繋まっている。
- 3 ないし黒褐色(10YR3/1)土 黒色土が混在し、土の粒子は細かく、繋まっている。
- 4 ないし黒褐色(10YR4/1)土 Ah層と黒色土が混在する層で、土の粒子は大きめ(3mmよりも多く)で繋まっている。
- 5 反青褐色(10YR4/2)土 Ah層と黒色土が混在する層で、土の粒子は細かく、層に張力をもつ。
- 6 明黄褐色(10YR6/6)土 Ah層と思われる。



図VII.29 東区 溝2~5

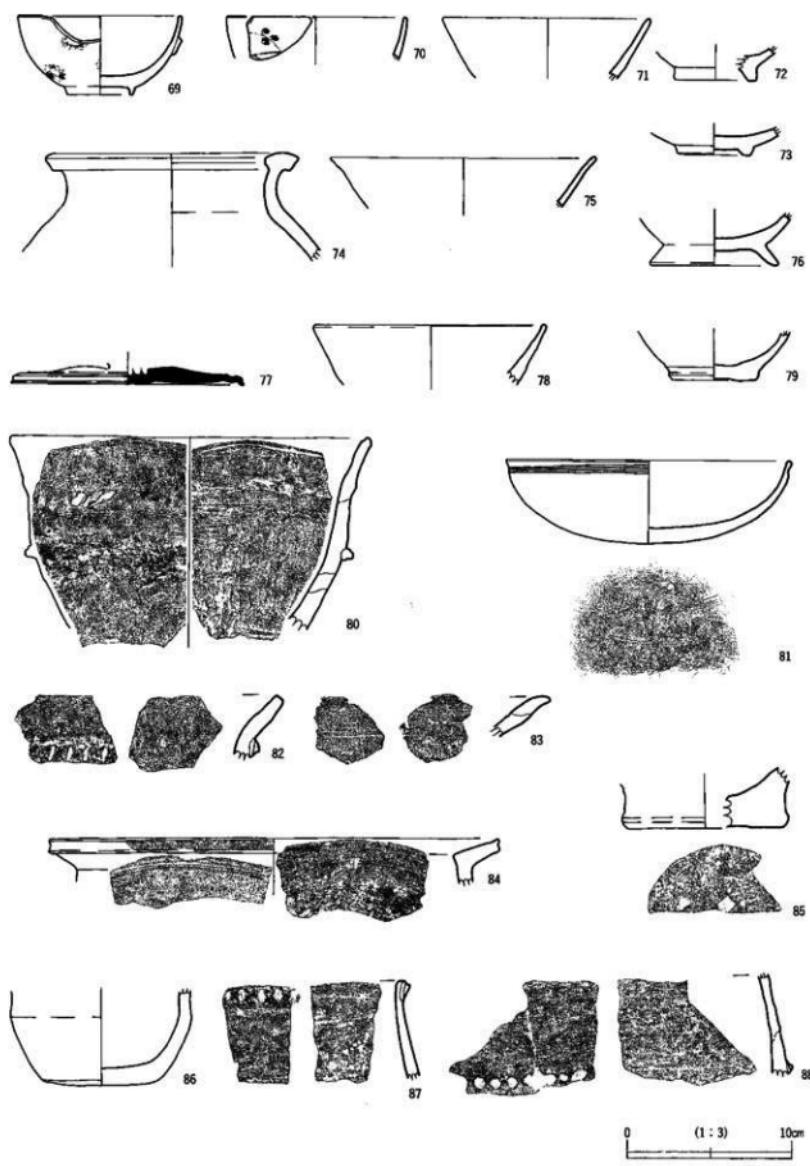
表VII.16 東区 溝1 出土土器 観察表

件名 番号	測定 距離 (cm)	区	面	遺構	種別・器種	部品	目 石 内 小 口 縁 部 等 等	色 調	調 査	計量(cm)		備 考
										口 幅 (cm)	器 高 (cm)	
IVTR.27.49	309	H-35	埋土	東区溝1	口縁	中折	内面 2.5GYR/1	内面 青磁色	内面 黒漆地	6.9	4.0	3.35
IVTR.27.50	1088	H-20	埋土	東区溝1	白磁	平	白色	内面 白磁色	内面 黒漆地	6.95	-	4.0 1次調査物
IVTR.27.51	309	H-35	埋土	東区溝1	白磁	口縁部	内面 白色	内面 青磁色	内面 黒漆地	8.6	-	3.75
IVTR.27.52	1089	H-35	埋土	東区溝1	陶器	山根部 一側斜	内面 白色	内面 青磁色	内面 黒漆地	35.0	-	6.8 1次調査物
IVTR.27.53	208	H-30	埋土	東区溝1	白磁	平田	2.5YR/1	内面 青磁色	外面 黒漆地	7.4	-	1.7 内面に墨跡
IVTR.27.54	309	H-35	埋土	東区溝1	白磁	小折	2.5YR/1	内面 青磁色	内面 黒漆地	12.0	1.0	4.05
IVTR.27.55	1102	H-35	埋土	東区溝1	陶器	山根部	2.5YR/1	内面 青磁色	内面 黒漆地	41.6	-	18.3
IVTR.27.56	208-309	H-35	埋土	東区溝1	白磁	7.5YR/1	内面 青磁色	内面 黒漆地	4.8	ロコリナデ		
IVTR.27.57	1086	H-35	埋土	東区溝1	白磁	7.5YR/1	内面 青磁色	内面 黒漆地	-	12.5	9.7	
IVTR.27.58	1089	H-35	埋土	東区溝1	白磁	7.5YR/1	内面 青磁色	内面 黒漆地	10.0	4.2	1次調査物	
IVTR.27.59	1089	H-35	埋土	東区溝1	白磁	7.5YR/1	内面 青磁色	内面 黒漆地	-	-	4.05 1次調査物	
IVTR.27.60	309	H-35	埋土	東区溝1	白磁	7.5YR/1	内面 青磁色	内面 黒漆地	4.8	-	1.9	
IVTR.27.61	1085	H-35	埋土	東区溝1	白磁	7.5YR/1	内面 青磁色	内面 黒漆地	-	4.4	3.7 1次調査物	
IVTR.27.62	1086	H-35	埋土	東区溝1	白磁	7.5YR/1	内面 青磁色	内面 黒漆地	-	4.9	2.6 1次調査物	
IVTR.27.63	1089	H-35	埋土	東区溝1	白磁	7.5YR/1	内面 青磁色	内面 黒漆地	-	-	4.05 1次調査物	
IVTR.28.02	309	H-35	埋土	東区溝1	陶器	山根部	2.5YR/1	内面 青磁色	内面 黒漆地	-	2.8	3.5 2次調査物
IVTR.28.03	1154	H-25	埋土	東区溝1	陶器	山根部	2.5YR/1	内面 青磁色	外面 黒漆地	37.4	5.1	4.85 1次調査物
IVTR.28.04	1123	H-35	埋土	東区溝1	陶器	山根部 一側斜	2.5YR/1	内面 青磁色	外面 黒漆地	-	-	1.75 1次調査物
IVTR.28.05	309	H-35	埋土	東区溝1	陶器	山根部	2.5YR/1	内面 青磁色	外面 黒漆地	10.4	-	5.0
IVTR.28.06	1124	H-35	埋土	東区溝1	陶器	山根部	2.5YR/1	内面 青磁色	外面 黒漆地	17.4	-	2.2 1次調査物
IVTR.28.07	1087	H-35	埋土	東区溝1	成川式土器	腹	○ ○	内面 青磁色	内面 黒漆地	-	8.3	3.5 1次調査物
IVTR.28.08	1156	H-35	埋土	東区溝1	成川式土器	腹	○ ○	内面 青磁色	内面 黒漆地	-	-	4.45 内面に白粉有 内面に黒漆

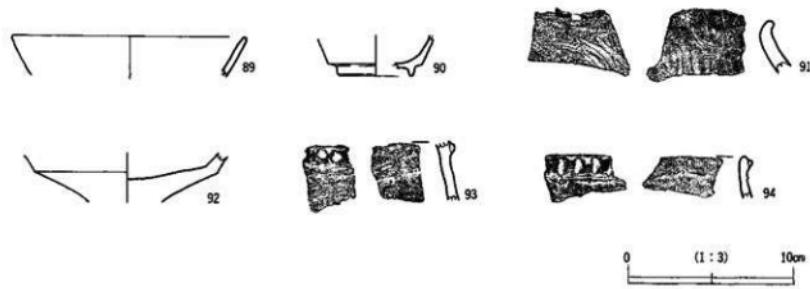
b. 東区 III層出土・表面採集 遺物 (VII.30・VII.31)

69は白磁の碗である。胴部に窯着した口縁部片が付着し、底部は高台をもち、高台内面に砂目が見られる。70は肥前系の白磁碗で、口縁部が内湾する。71・72は薩摩焼の塊と思われる。71は口縁部が直行する。72は底部に高台をもち、内面の底部の一部に稚撚き取り痕が見られる。73は青磁の皿である。底部に高台をもち、内面の底部の一部に釉撚き取り痕が見られる。74は陶器の壺で、口唇部は肥大し、口縁部は外反する。口唇部には釉が撚き取られた痕跡が見られる。75は表面採集資料で内黒土器の塊と思われ、口縁部が直行し、内面全体に均一に煤が付着する。76は表面採集資料で内黒土器の蓋と思われ、底部には高台をもち、内面全体に均一に煤が付着する。77は須恵器の蓋である。外面の天井部のつまみが欠損し、内面の天井部中央には左回りの渦巻き状の削りが見られる。また窓変したためか器形が波打つように歪んでいる。78・79は土師器の塊である。78は口縁部が直行し、外面に煤が付着する。79は底部が平底である。80は表面採集資料の成川式土器の甕である。口縁部は外反し、胴部には1条の突帯が巡る。外面の突帯付近の胴部に帶状に煤が付着する。81は土師器の皿であり、口縁部は内湾し、底部は丸底である。外面の底部にヘラ押きの浅い沈線が見られる。82は成川式土器の壺である。口縁部の下位に1条の刻目突帯が巡り、外面に煤が付着する。83は成川式土器の高坏である。口縁部はわずかに外反し、外面には煤が多く付着する。

84は弥生期土器の甕と思われ、口唇部は平坦で外側に向かって、口縁部は鋭角に屈折する。85は成川式土器の甕である。底部は平底で、接地面のほぼ中央に1cm四方の□形の凹みが見られる。86は成川式土器の壺で、底部は平底である。87・88は突帯文の深鉢と思われる。87は口唇部に突帯が巡り、88は胴部に突帯が巡る。89は土師器の塊で、口縁部が内湾する。90は白磁の塊で、底部に高台をもつ。91は成川



図VII.30 東区 V層出土・表面採集 遺物



図VII.31 東区 V層 出土遺物

式土器の小型壺と思われ、口縁部が極端に短く、わずかに外反する。92は成川式土器の高環で、環部が中途で屈曲する。

93は突帯文の深鉢と思われ、側部に1条の刻目突帯が巡る。94は突帯文の深鉢であり、口唇部に刻目突帯が巡り、口縁部は外反する。

表VII.17 東区 V層出土・表面採集土器 観察表

標本番号	地點名	式	層	遺跡	種別・特徴	部位	土色	色調	調査	法長(cm)		備考	
							内面	背面	側面	内面	背面		
IV-VI.30.60	一橋 東区	V	-	古墳	手掘	内面	褐色	褐色底色	内面	褐色	9.85	4.45	表面したじゆれが右側面に伸びる
IV-VI.30.70	一橋 東区	V	-	古墳	手掘	内面	褐色	褐色底色	内面	褐色	11.9	2.6	
IV-VI.30.71	一橋 東区	V	-	古墳	手掘	内面	褐色	褐色底色	内面	褐色	12.6	3.75	裏面底?
IV-VI.30.72	-85 東区	V	-	古墳	手掘?	底部	褐色	褐色底色	内面	褐色	-	4.0	表面き裂あり底
IV-VI.30.73	1164 I-35	V	-	古墳	手掘	内面	灰白色	灰白色	内面	褐色	11.4	4.1	1次調査遺物 表面き裂あり底
IV-VI.30.74	310 H-30	V	-	古墳	手掘	内面	褐色	褐色底色	内面	褐色	14.0	2.5	
IV-VI.30.75	-85 東区	表土	-	古墳	手掘	○	○	○	内面	褐色	16.0	3.05	
IV-VI.30.76	-85 東区	表土	-	古墳	手掘	○	○	○	内面	褐色	-	7.5	3.15
IV-VI.30.77	1129 I-35	V	-	古墳	手掘	○	○	○	内面	褐色	-	13.8	1.5 1次調査遺物 表面き裂あり底
IV-VI.30.78	1160 I-30	V	-	古墳	手掘	○	○	○	内面	褐色	-	17.1	3.00 1次調査遺物 表面に擦れ有
IV-VI.30.79	506 D-27	V	-	古墳	手掘	内面	褐色	褐色底色	内面	褐色	-	5.0	3.0
IV-VI.30.80	-85 東区	表土	-	成川式土器	手掘	○	○	○	内面	褐色	21.5	7.75	外側に擦れ有 内面に擦れ有
IV-VI.30.81	1105 II-1	V	-	土器	手掘	○	○	○	内面	褐色	17.4	5.1	外側に擦れ有 内面に擦れ有
IV-VI.30.82	1175 35	V	-	成川式土器	手掘	○	○	○	内面	褐色	-	3.75	底面吹込み 外側に擦れ有
IV-VI.30.83	95 東区	V	-	成川式土器	手掘	○	○	○	内面	褐色	-	2.5	外側に擦れ有
IV-VI.30.84	-85 魚K	V	-	成川式土器	手掘	○	○	○	内面	褐色	-	27.3	
IV-VI.30.85	477 C-26	V	-	古墳	手掘	○	○	○	内面	褐色	-	10.3	1次調査遺物 表面に凹凸の凹み有
IV-VI.30.86	1678 I-35	V	-	成川式土器	手掘	○	○	○	内面	褐色	-	7.6	5.8 外側に擦れ有
IV-VI.30.87	104 II-35	V	-	成川式土器	手掘	○	○	○	内面	褐色	-	9.5	表面擦 外側に擦れ有
IV-VI.30.88	48 D-27	V	-	突帯文	手掘	○	○	○	内面	褐色	-	6.3	突帯文 外側に擦れ有
IV-VI.30.89	485 D-27	V	-	突帯文	手掘	○	○	○	内面	褐色	-	14.0	2.5 1次調査遺物
IV-VI.30.90	1655 G-30	V	-	古墳	手掘	○	○	○	内面	褐色	-	4.2	2.5 1次調査遺物
IV-VI.30.91	1852 G-35	V	-	突帯文	手掘	内面	褐色	褐色底色	内面	褐色	-	3.1	1次調査遺物 表面に擦れ有
IV-VI.30.92	519 G-24	V	-	成川式土器	手掘	○	○	○	内面	褐色	-	2.8	
IV-VI.30.93	485 D-27	V	-	突帯文	手掘	○	○	○	内面	褐色	-	3.4	突帯文有り 外側に擦れ有
IV-VI.30.94	487 D-27	V	-	突帯文	手掘	○	○	○	内面	褐色	-	2.5	突帯文有り 外側に擦れ有

第IX章 東南区（古墳・中世・近世）の概要

東南区はK～N-37区、L～O-38・39区の範囲の調査を行なった。東南区は、所々IX-1a層まで削平され、検出面においても近代に使用されたと思われる貯蔵穴が多数認められ（図IX.01）、遺跡の残存状況は好ましくなかった。遺構はVII・IX-1a層上面において、2次調査では土坑1基と溝4基、3次調査では竪穴住居1基、土坑3基が検出された。遺物は竪穴住居1とV層からわずかに出土した。

8. 遺構

竪穴住居

（1）竪穴住居1（図IX.03）

M-38区で検出された。住居の西隅が調査区外に延び、南西側の一部が擾乱により破壊されているが、平面形は隅丸長方形と思われ、住居の長軸方向は北東から南西に延びる。住居内の埋土は弾力のある黒色土で、床面には若干の硬化があり、床面のほぼ中央に長さ230cm、最大幅58cm、最深部24cmの溝と3基の柱穴が検出された。遺物は埋土層の上位で出土したが、床面直上では確認できなかった。

表IX.01 東南区 竪穴住居1 計測表

作業番号	回番号	検出区	検出層	平面形	床面形	長軸(m)	短軸(m)	深さ(m)	ピット数	確認面の有無	埋土層/床の有無	備考		
1	図IX.03	M-38	IX-1a	（隅丸長方形）	隅丸長方形	(3.50)	(3.00)	(0.55)	3	無	無	3次調査検出		
番号	平面形	長軸(m)	短軸(m)	深さ(m)	番号	平面形	長軸(m)	短軸(m)	深さ(m)	番号	平面形	長軸(m)	短軸(m)	深さ(m)
P1	楕円形	0.33	0.31	0.15	P2	円形	0.12	0.20	0.12	P3	楕円形	0.23	0.20	0.25

東南区 竪穴住居1 出土遺物

1は陶器の塊であり、底部が平底である。2は青磁の碗である。口唇部にわずかに膨らみがあり、口縁部が外反する。3は土師器の皿である。口縁部は外反し、底面は糸切り離し痕が見られる。4は白磁の碗と思われる。口縁部は内湾し、高台内面はヘラ搔き出しと思われる。5は陶器の塊と思われ、底部に高台をもつ。

土坑（図IX.05）

VII・IX-1a層上面において4基の土坑が検出された。埋土内からは遺物が確認できなかったため、土坑の造られた時期の特定はできなかった。各土坑の計測値は表IX.02のとおりである。

（1）土坑1

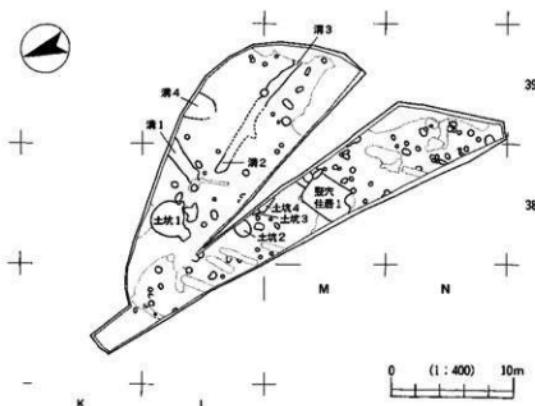
L-38区で検出された。平面形は楕円の南西側の一端が隅丸長方形に突出する形状である。土坑1の埋土を2.5mほど人力で掘り下げたが、土色の変化も見られず、埋土に湿気を帯びていた。そこで、埋土の一部分の下層確認を行ったが、土色の変化は見られず、井戸の可能性も考えられたため、作業上危険と判断し、土坑1は調査を中断した。

（2）土坑2

L-38区で検出された。平面形の一部が調査区外に延びており、楕円形と思われる土坑である。遺構埋土内からは遺物は確認できなかった。

（3）土坑3・4

土坑3はL-38区、土坑4はM-38区で検出された。土坑3と土坑4は切り合いの関係にあり、土坑3・4とも平面形の一部が調査区外に延びる。土坑3は平面形に凹凸が見られるが楕円形と思われ、土坑4も楕円形を思わせる。遺物は土坑3・4とも埋土内から確認できなかった。



図IX.01 東南区 遺構配置

表IX.02 東南区 土坑 計測表

土坑番号	検出番号	検出区	平面形	長軸(cm)	短軸(cm)	長軸方位	備考
1	図IX.03	L-38	(楕円形)	355	285	北西	2次調査検出
2	図IX.03	L-38	(楕円形)	(125)	(120)	北西	3次調査検出
3	図IX.03	LM-38	(楕円形)	(118)	(50)	北	3次調査検出
4	図IX.03	M-38	(楕円形)	(104)	(42)	北東	3次調査検出

溝(図IX.03)

VII・IX-1a層上面において4基の溝が検出された。各溝の計測値は第IX.03表のとおりである。

(1) 溝1

L-38区で検出された。遺構の北東端が調査区外に延び、南西端は擾乱を受け、遺構全体の形状ははっきりしない。溝1内の埋土は粒子の細かい全体的に締まったオリーブ黒色土で、溝1の底面は南西から北東に緩やかに下り、若干硬化している。

(2) 溝2・3

溝2はL-38・39区・M-39区、溝3はM-39区より検出され、溝2・3は同軸上に継列に延びる。溝2は途中が削平を受け、溝3は南西端が擾乱により破壊されているが、溝2・3の残存した底面は、それぞれ北西から南東に緩やかに下るように思われ、若干硬化している。

(3) 溝4

L-39区で検出された。遺構の北東端が調査区外に延び、南西端は擾乱により破壊されている。底面は南西から北東に向って下り、若干硬化している。

表IX.03 東南区 溝 計測表

溝番号	検出番号	検出区	長軸(cm)	短軸(cm)	長軸方位	硬化面の有無	備考
1	図IX.03	L-38	(172)	(62)	北東	有	
2	図IX.03	L-38・39 M-39	374	41	北西	有	一部削平を受ける
3	図IX.03	M-39	(190)	(35)	北西	有	南東端は削平を受ける
4	図IX.03	L-39	(67)	(96)	北東	有	南端は削平を受ける

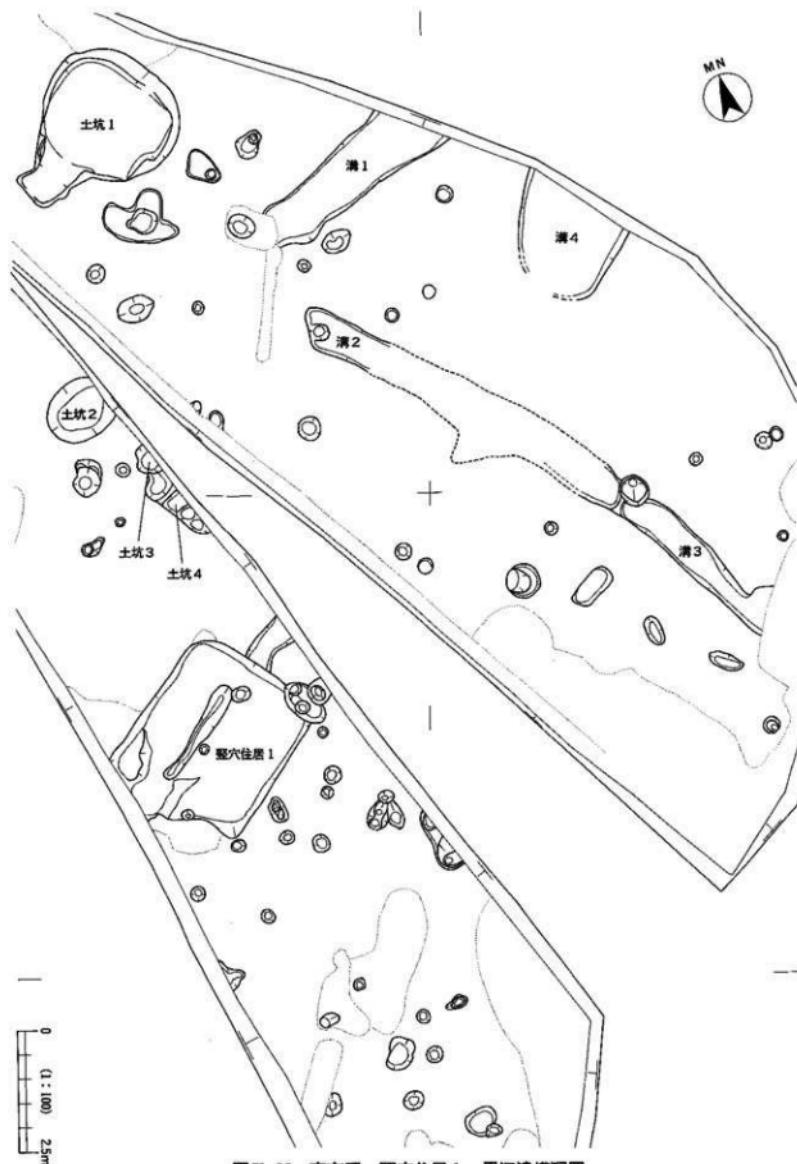
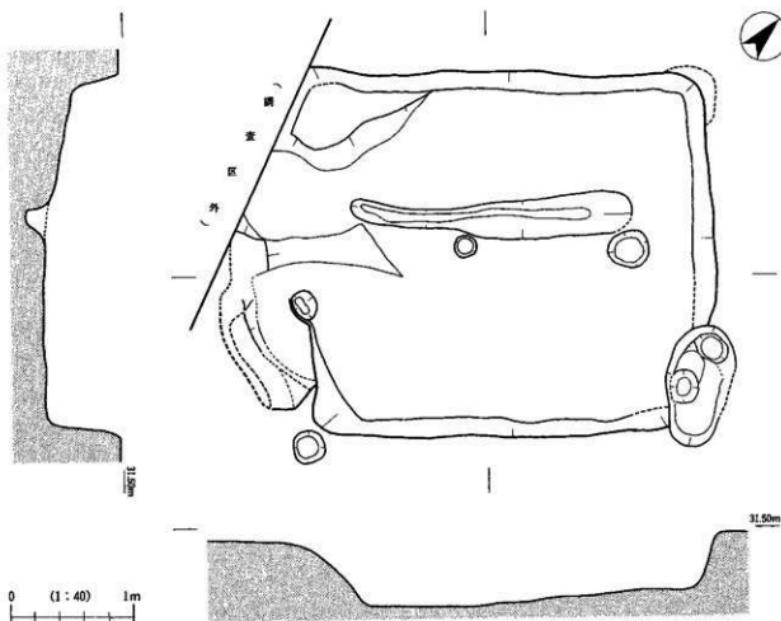
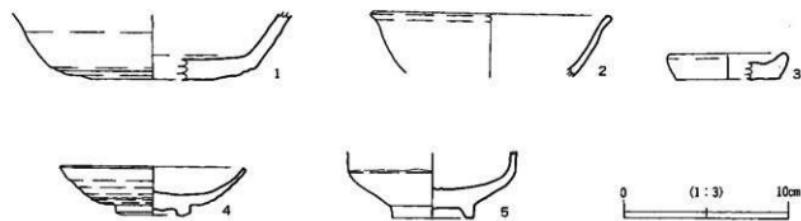


図 IX.02 東南区 竪穴住居 1 周辺遺構配置



図IX.03 東南区 竪穴住居1



図IX.04 東南区 竪穴住居1 出土遺物

東南区 V層出土・表面採集 遺物

6～10はV層出土遺物である。6は白磁の碗である。口縁部は直行し、底部に高台をもつ。7は染付の皿である。口縁部がわずかに内湾し、底部に高台をもつ。8は白磁の碗である。口縁部は内湾し、底部に高台をもち、高台の接地面に砂目が付着する。内面の底部の一部に釉掻き取り痕が見られる。9は白磁の皿である。口縁部はわずかに内湾し、底部に高台をもち、内面の底部の一部に釉掻き取り痕と砂目が見られる。10は陶器の皿と思われ、口縁部はわずかに内湾する。11～15は表面採集遺物である。11

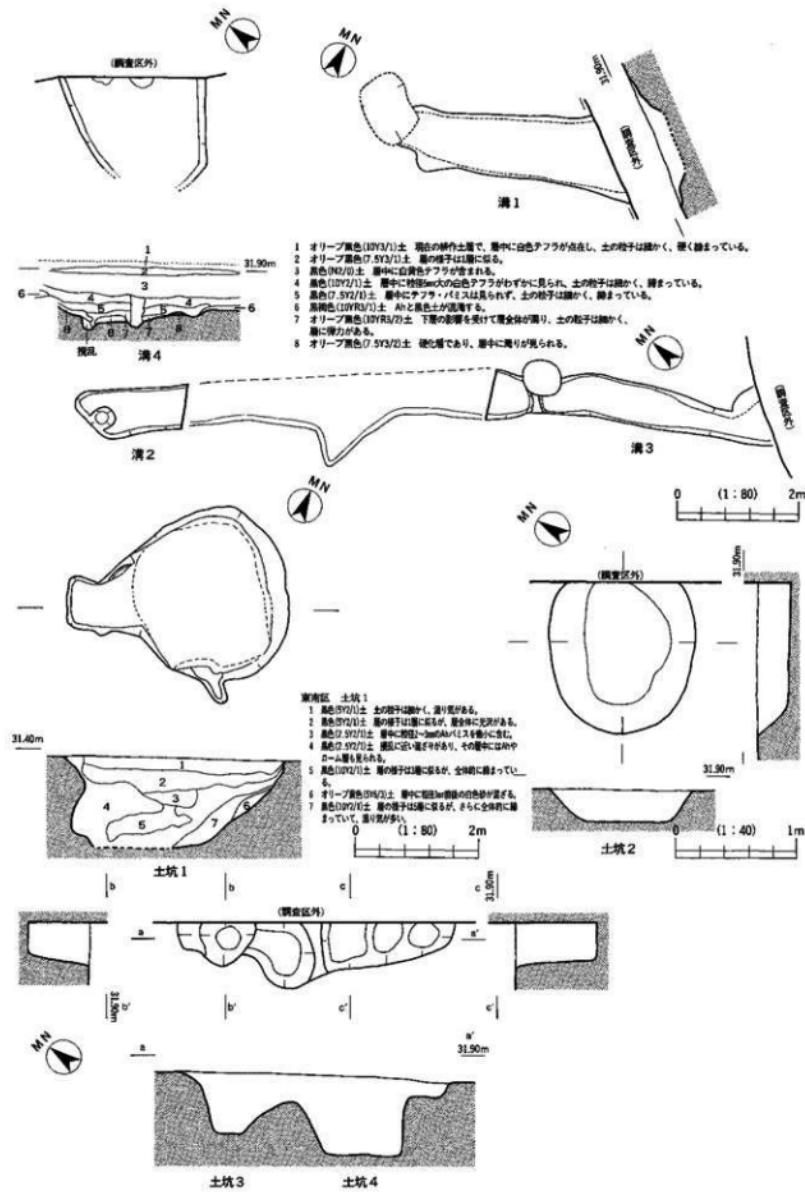
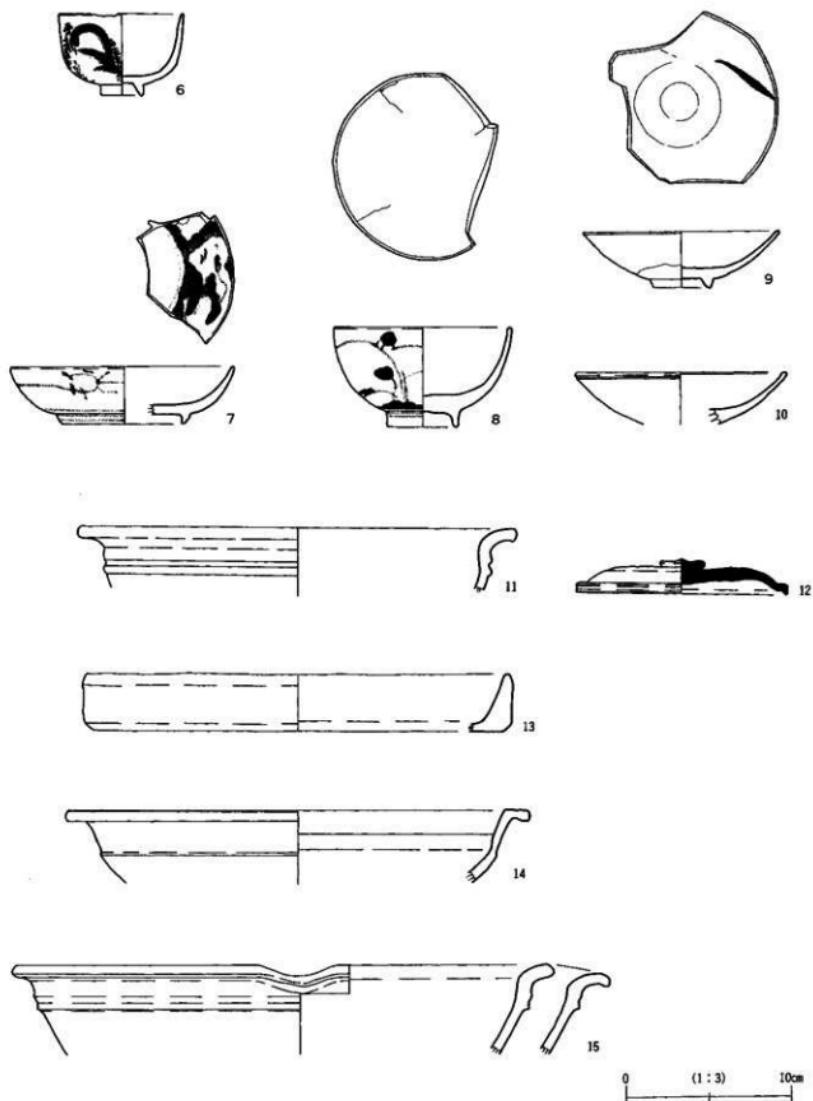


図 IX.05 東南区 溝 1~4 土坑 1~4



図IX.06 東南区 出土遺物

は薩摩焼の甕である。口縁部が大きく反り返り、その下部に1条の沈線が施される。内面の口縁部上部には釉が掻き取られた痕跡が見られる。12は須恵器の蓋である。外面の天井部にボタン形のつまみが付く、内面の天井部に渦巻状の削りが見られる。13は陶器の皿と思われる。口縁部が直行し、底部は平底と思われる。14は陶器の甕である。口唇部が肥大し、口縁部が屈曲する。15は薩摩焼の攢り鉢である。口縁部が外反し、その下部に2条の突帯が廻る。また内面の口縁部上部には釉が掻き取られた痕跡が見られる。

表Ⅳ.04 東南区 出土土器 観察表

件次 番号	実測 高さ(cm)	径 (cm)	厚 (mm)	遺構	埋蔵地層	部位	和 石 英 角 石 有 無 合 計 (個)	色 調	調 査	寸法(cm)		備 考		
										内面	外面			
MDX.05.1	1	M-30	灰土	東南区 第六住居1	須恵器	浅腹	○	内面 淡黄色 外面 淡黄色	内面 ロクロナデ 外面 ロクロナデ-へラ切り出し	13.2	4.0	3次調査遺物		
MDX.05.2	-	一戸	M-30	灰土	須恵器 第六住居1	口縁部 S.YV1	△	内面 淡白色 外面 淡白色	内面 ロクロナデ-へラ切り出し 外面 ロクロナデ-へラ切り出し	14.8	3.73	3次調査遺物 灰土		
MDX.05.3	-	折	M-25	堆1:	東南区 第六住居1	土器部 -底部	○	内面 淡白色 外面 淡白色	内面 ロクロナデ 外面 ロクロナデ-へラ切り出し	-	6.4	1.6	3次調査遺物	
MDX.05.4	-	一戸	M-20	堆1:	東南区 第六住居1	白磁 甲	口縁部 2.S.YV2	淡白色 外面 無施釉:灰土色	内面 淡白色 外面 淡白色	内面 ロクロナデ-へラ切り出し 外面 ロクロナデ-へラ切り出し	11.1	3.85	3次調査遺物 遺物は揚げ出し古谷	
MDX.05.5	-	折	M-20	堆1:	東南区 第六住居1	須恵器 尾	底部	淡白色 2.S.YV2	内面 淡白色 外面 淡白色	内面 ロクロナデ-ナゲ 外面 ロクロナデ-ナゲ	-	3.8	4.1	3次調査遺物 高台に古谷
MDX.06.6	-	一戸	東南 区	V	-	白磁 手鏡	手鏡 N.YV1	淡白色 外面 淡白色	内面 淡白色 外面 淡白色	内面 鏡面 外面 鏡面	7.5	2.1	5.05	2次調査遺物
MDX.06.7	93	L-35	V	-	須恵 器	口縁部 -底部	N.YV2	淡白色 外面 淡白色	内面 淡白色 外面 淡白色	内面 鏡面 外面 鏡面	13.4	7.4	3.5	3次調査遺物
MDX.06.8	-	一戸	東南 区	V	-	白磁 罐	手鏡 N.YV1	淡白色 外面 淡白色	内面 淡白色 外面 淡白色	内面 鏡面-輪郭引き取り 外面 鏡面	10.8	4.3	5.2	2次調査遺物 輪郭引き取り-砂押
MDX.06.9	-	折	東南 区	V	-	白磁 罐	手鏡 2.S.YV1/1	淡白色 外面 淡白色	内面 淡白色 外面 淡白色	内面 鏡面-輪郭引き取り 外面 鏡面	12.0	3.5	3.45	2次調査遺物 輪郭引き取り-砂押
MDX.06.10	-	一戸	東南 区	灰土	-	陶器 瓶	丁度 S.YV1	淡白色 外面 淡白色	内面 淡白色 外面 淡白色	内面 鏡面-輪郭引き取り 外面 鏡面	13.0	-	3.15	2次調査遺物 輪郭引き取り-砂押
MDX.06.11	-	一戸	東南 区	灰土	-	陶器 蓋	口縁部 S.YV1/1	淡白色 外面 淡白色	内面 淡白色 外面 淡白色	内面 鏡面 外面 鏡面	27.3	-	4.2	3次調査遺物
MDX.06.12	-	一戸	東南 区	灰土	-	陶器 蓋	口縁部 -底部	○	内面 淡白色 外面 淡白色	内面 ロクロナデ 外面 ロクロナデ-ナゲ	26.0	33.5	3.5	2次調査遺物 外側に底付省
MDX.06.13	-	折	東南 区	灰土	-	須恵器 蓋	蓋	○	内面 淡褐色 外面 淡褐色	内面 ロクロナデ-ナゲ 外面 ロクロナデ-ナゲ	-	13.6	2.1	3次調査遺物
MDX.06.14	-	折	東南 区	陶瓦 土	-	陶器 蓋	口縁部 H.YV1	淡褐色 外面 淡褐色	内面 淡褐色 外面 淡褐色	内面 鏡面 外面 鏡面	25.4	-	4.5	3次調査遺物
MDX.06.15	-	折	東南 区	陶瓦 土	-	陶器 蓋	口縁部 2.S.YV1/1	淡褐色 外面 淡褐色	内面 淡褐色 外面 淡褐色	内面 鏡面 外面 鏡面	24.3	-	5.55	3次調査遺物

第X章 南区(後期旧石器・縄文早期・中世・近世)の概要

はじめに

南区は、3つ遺物包含層を対象に調査を行っている。遺構の検出面は、上から検出面1(VII層上面)、検出面2(XII層上面)、検出面3(XV層上面)になる。検出面3の調査については、XIII層以下での遺物の有無の確認を目的に実施していることから、補足調査と称している。以下、検出面1から順に述べる。

第1節 検出面1(VII層上面)の調査

1. 層位

層位は、全調査区の中で最も遺存状況が良く、基本層序と同様の土層堆積が見られる。しかし、一部ではIV層がIII層に削平される範囲がある。詳しくは図X.01に示している。

2. 遺構配置

遺構の配置状況は、調査区の北端・中央・南端の3地点に偏る。確認された遺構は、地点ごとに異なっており、北端・南端は掘立柱建物が多く、中央は道・溝・土坑が多い。南端は多数の柱穴が集中している。いずれの地点も重複する遺構はほとんど見られない。

現在の地形は、調査区の北端を頂点に、北東から南西方向に向かって緩やかに下る。VII層上面においてもほぼ同様であるが、やや調査区の中央部が全体的に低くなる。

なお、調査区の東端と中央では芋穴と考えられる土坑が検出されている。時期は近代と考えられるが、それ以前の遺構の分布と重複する。

3. 遺構

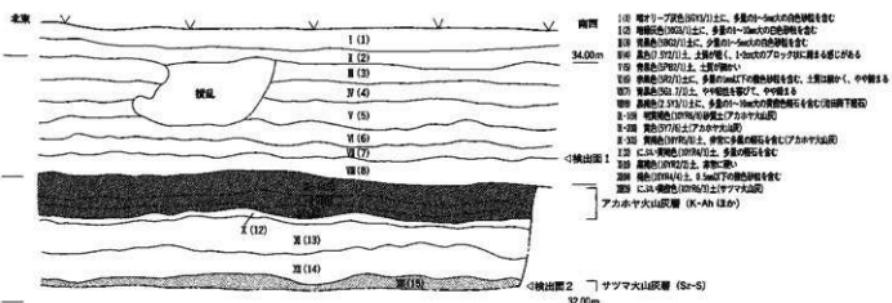
南区では、土坑11基以上、道路状遺構が5条、溝11条に多数の柱穴を検出し、6棟の掘立柱建物と3基の柱列を復元している。また、1基の風倒木痕も存在する。時期は、いずれも覆土に白色砂を含まないことから、近世以前と考えられる。以下、遺構別に述べる。

ア) 土坑

土坑はおもに調査区中央と西端で検出されている。

土坑4

調査区の中央にあり、道4・溝11を切り込んで築かれる。完掘した底面に複数の掘り込みを確認した



図X.01 南区 南壁土層断面 [S=1/40]

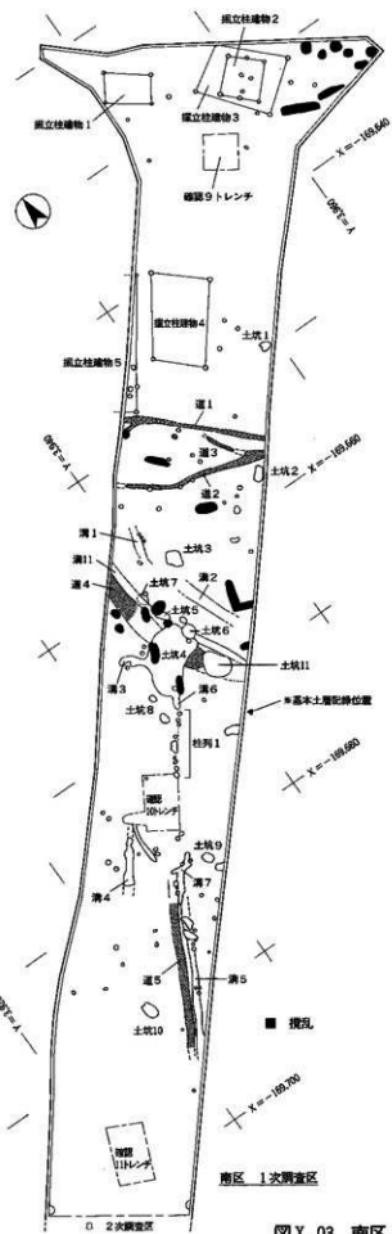


図 X.03 南区 検出面1 遺構配置

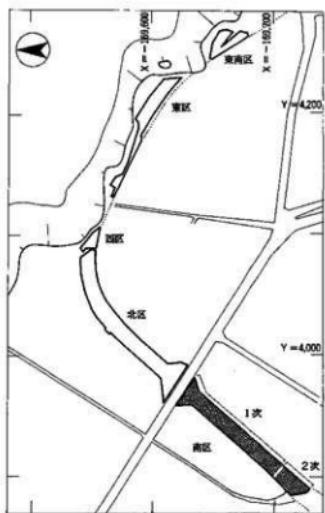
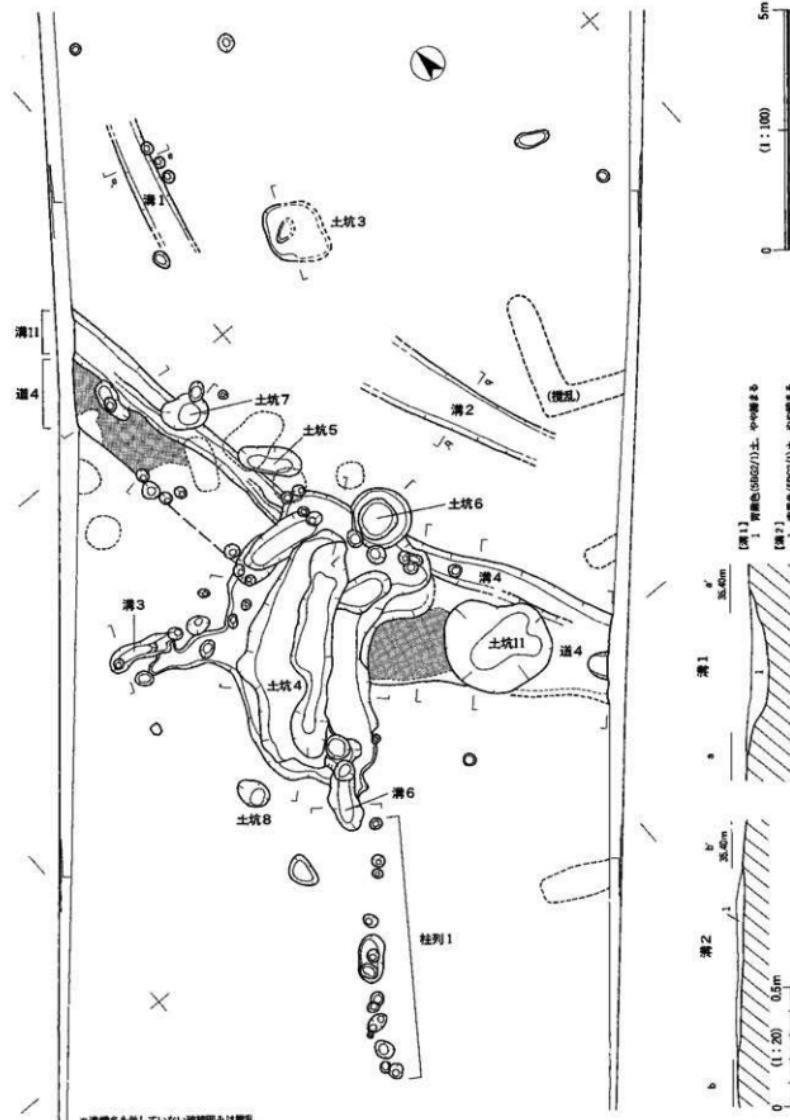


図 X.02 南区 調査区配置



0 (1 : 400) 20cm



図X.04 南区 檢出面1 道4・溝11・土坑4ほか周辺遺構配置

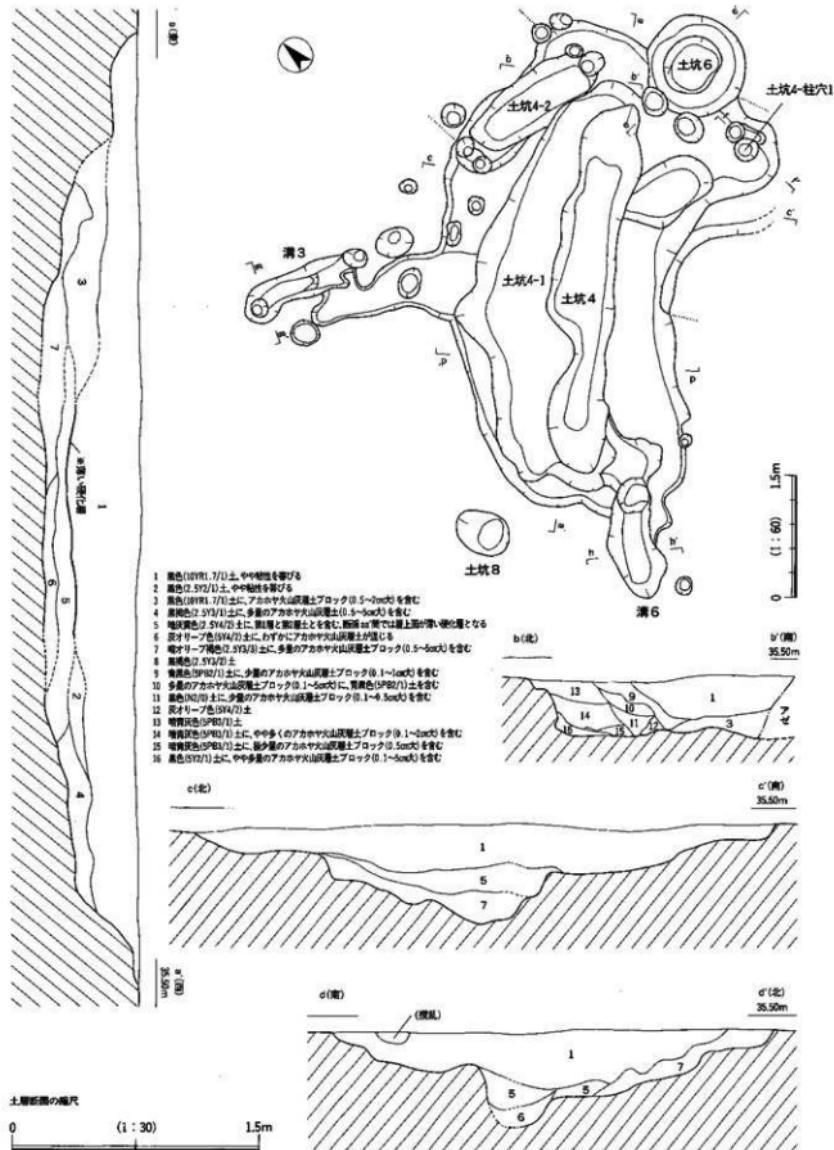
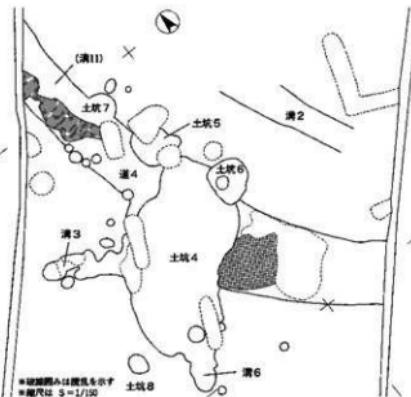


図 X.06 南区 檢出面 1 土坑 4



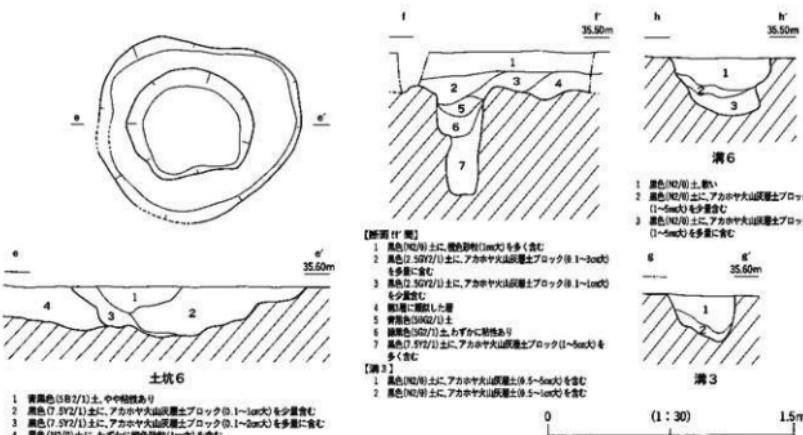
図X.07 南区 検出面1 道4・土坑4の周辺遺構検出状況

深さ18cmを測り、平面形が細長い長方形を呈する。覆土は混ざりのない黒色土がおもで、最下層の一部に橙色土ブロック混じりの人の為的埋め戻し土（7層）が確認される。

土坑4の底面で確認された遺構は土坑・柱穴がある。土坑4-2は、土坑1基と3対の並行する柱穴で何らかの施設と考えられる。土坑の平面形は長方形で、規模が幅66cm×深さ62cmを測る。柱穴は径24~33cm×深さ18~56cmを測る。その他複数の柱穴もあり、土坑4-1柱穴1を代表例として図化している。柱穴1は径26cm×深さ68cmを測る。覆土に柱痕跡は認められない。

また、土坑4には、溝3と溝6が接続している。溝3は平面形が鏡状に折れ曲がる。西側が最も深く30cmを測るが、土坑4に接続する付近は深さ5cm程度と浅くなる。幅は36~67cmを測る。溝6は底面が階段状に土坑4へと続く。幅61cm×深さ35cmを測る。

土坑4を切り込んで土坑6が染かれている。形態は平面形が円形、断面が逆台形を呈して、底面には



図X.08 南区 検出面1 土坑4の周辺遺構（土坑6、溝3・6）

が、検出時の覆土には土色・質の違いは見られず、土坑4が何らかの施設として機能していた時期の遺構と考えられる。とくに土坑4北側の平面形が長方形で、短辺側に2基の柱穴を伴うもの（土坑4-2）や中央底部面の平面が長方形の掘り込み（土坑4-1）などは、土坑の性格を考える上で重要と考えられる。

時期は、僅わずかに覆土から成川式の土器小片や石錐X-7が出土しているが、出土状況などから遺構に伴うものでないと考えられる。道4を切り込むことから古代以降と考えられる。詳しくは不明である。

土坑4の規模は幅295cm×長さ595cm×深さ62cmを測る。形態は平面形が歪な長方形、断面は逆台形を呈する。底面には2段の掘り込み（土坑4-2）があり、2段目は幅135cm×深さ30cmを測る。最も深い掘り込みは幅50cm×

浅い掘り込みがある。規模は平面124cm×114cm、深さ28cmを測る。

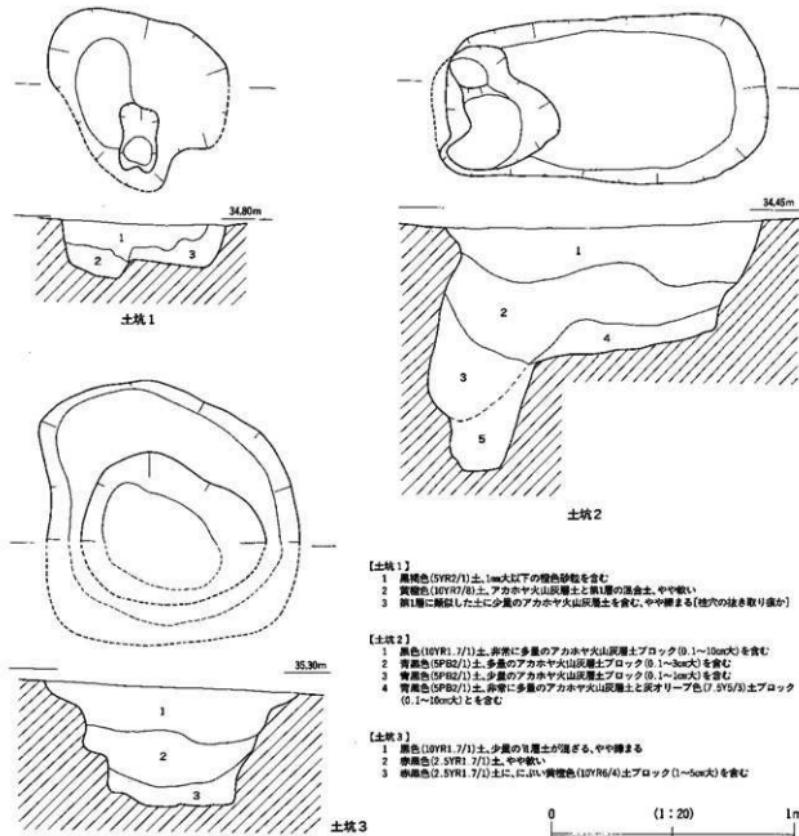
土坑1～3・土坑8～11

土坑はいずれも遺構内からの遺物の出土がなく時期は不明である。

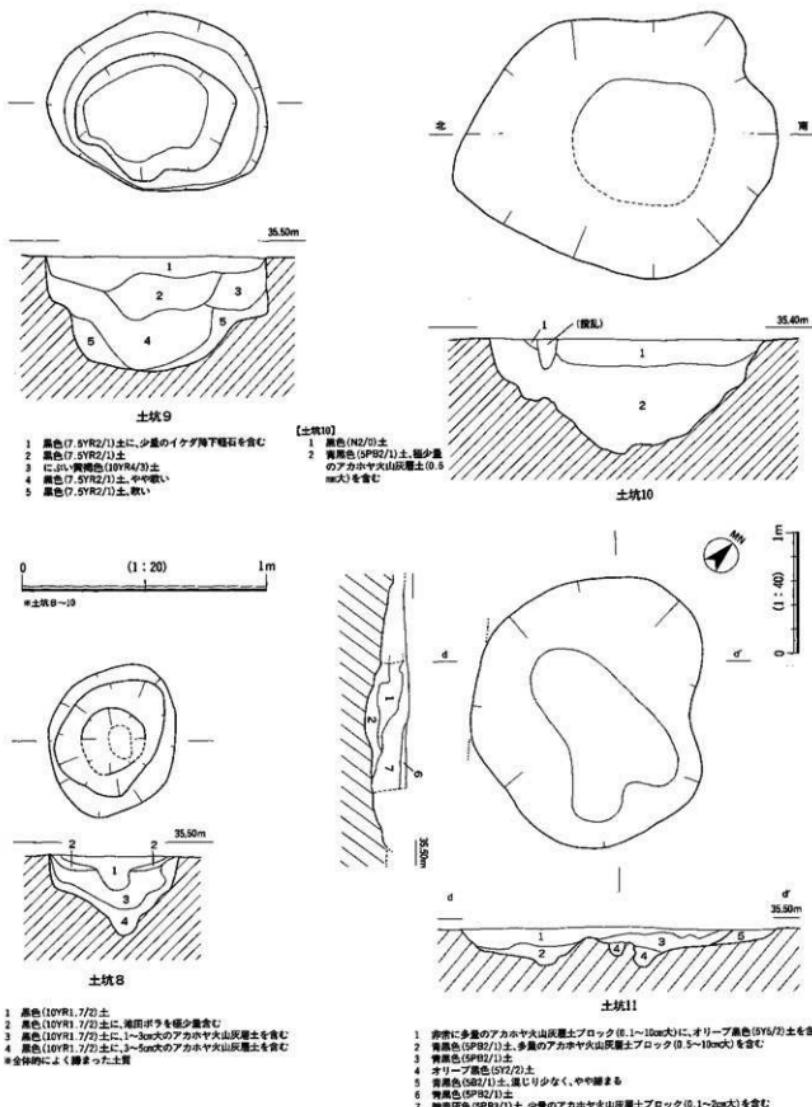
土坑1は掘立柱建物4に近接する。形態は平面形が直角円形、断面が逆台形を呈する。底面には柱穴状の掘り込みが見られる。規模は径70cm×深さ22cmを測る。

土坑2は道1～3に隣接する。形態は平面形が長方形、断面が逆台形を呈する。規模は径135cm×深さ52cmを測る。底面には柱穴状の掘り込みがあり、深さ98cmを測る。形態から柱穴の抜き取り痕跡をもつ、柱穴の可能性が考えられる。

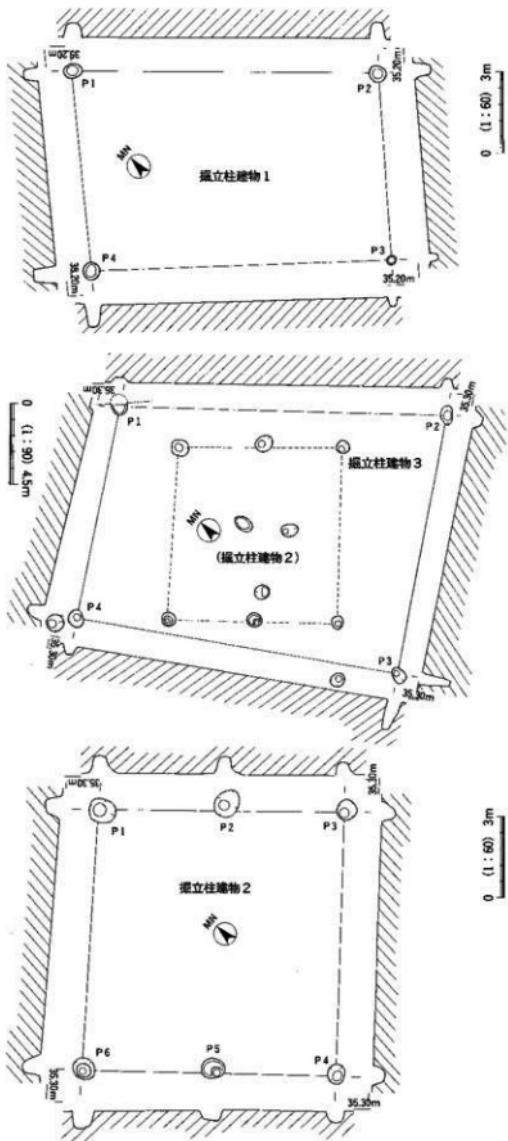
土坑3は溝1・2に近接する。形態は平面形が直角円形、断面形が逆台形を呈する。壁面は直つで、底面は2段掘りに掘り込まれる。規模は径50cm×深さ48cmを測る。



図X.09 南区 検出面1 土坑1～3



図X.10 南区 検出面1 土坑8~11



図X.11 南区 検出面1 掘立柱建物1～3

土坑8は土坑4に隣接する。形態は平面形が橢円形、断面形が逆台形を呈し、底面が逆三角形に落ち込む。規模は平面が $60\text{cm} \times 50\text{cm}$ 、深さ33cmを測る。

土坑9は溝7に近接する。形態は平面形が橢円形、断面形が逆台形を呈する。規模は平面が $90\text{cm} \times 75\text{cm}$ 、深さ48cmを測る。

土坑10は道5に近接する。形態は平面形が正な円形、断面形が底面の狭い逆台形を呈する。規模は平面が $130\text{cm} \times 107\text{cm}$ 、深さ48cmを測る。

土坑11は道4を切り込んで築かれる。形態は平面形が正な円形、断面形がレンズ状を呈する。底面には小さな凹凸が多く見られる。規模は平面が $110\text{cm} \times 90\text{cm}$ 、深さ17cmを測る。覆土はオレンジ色土ブロックを多量に含んでいる。

表X.01 掘立柱建物1の計測表

	径×深さ(cm)	距離(cm)
P1	15×15	P1-P2 370
P2	20×20	P2-P3 225
P3	10×10	P3-P4 365
P4	20×30	P4-P1 245

表X.02 掘立柱建物2の計測表

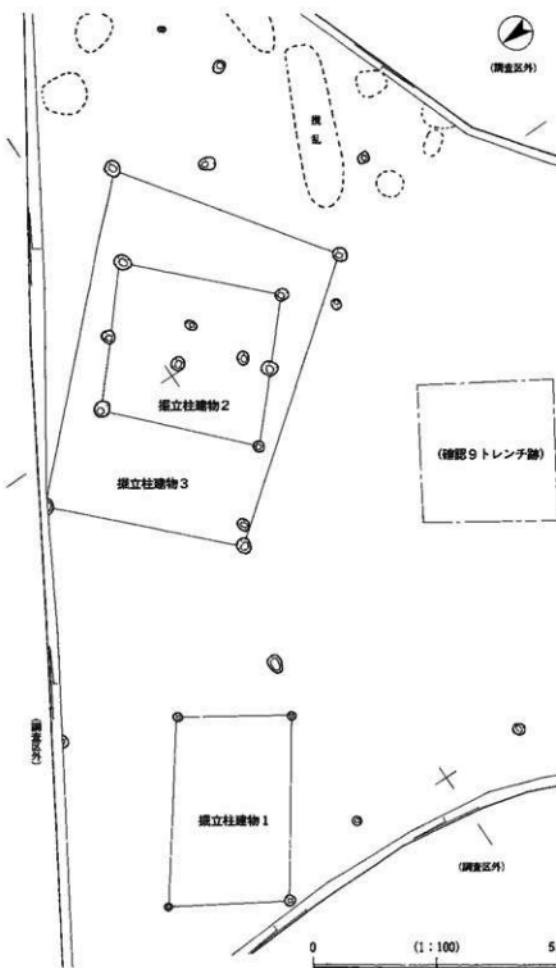
	径×深さ(cm)	距離(cm)
P1	30×20	P1-P2 150
P2	30×20	P2-P3 145
P3	25×15	P3-P4 320
P4	20×15	P4-P5 150
P5	30×10	P5-P6 155
P6	25×20	P6-P1 320

表X.03 掘立柱建物3の計測表

	径×深さ(cm)	距離(cm)
P1	30×7	P1-P2 595
P2	25×15	P2-P3 485
P3	25×55	P3-P4 590
P4	25×20	P4-P1 400

イ) 堀立柱建物と柱列

復元された堀立柱建物は6棟を数える。調査区の北半と南端に集中している。北半の1群は周辺遺構の分布が疎なのに対して、南半のものは周囲に多数の柱穴が存在している。南半の堀立柱建物6は軸方向が磁北と一致している。各堀立柱建物の時期は、埋土と出土遺物から中世¹と考えられるが、詳しくは遺構内の出土遺物がなく不明である。



柱列は3基を数え、調査区中央と西端に存在する。柱列2・3は堀立柱建物6に隣接している。

堀立柱建物1～3

建物は、堀立柱建物1・3が1間×1間、堀立柱建物2が2間×1間である。堀立柱建物3は平面形がやや歪である。軸方向は堀立柱建物1・2が一致している。

周囲には柱穴が少なく、遺構密度も疎である。堀立柱建物1～3が築かれる範囲は、Ⅲ層上面での地形では周囲に比べて20cmほど高くなる。堀立柱建物2・3の地点は調査区内で最も高い。

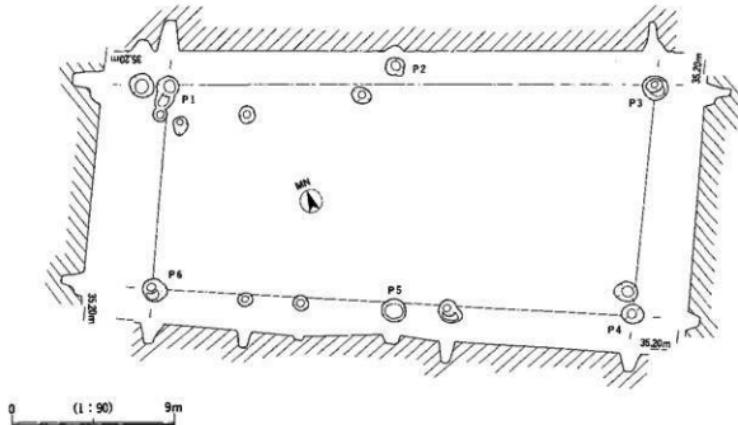
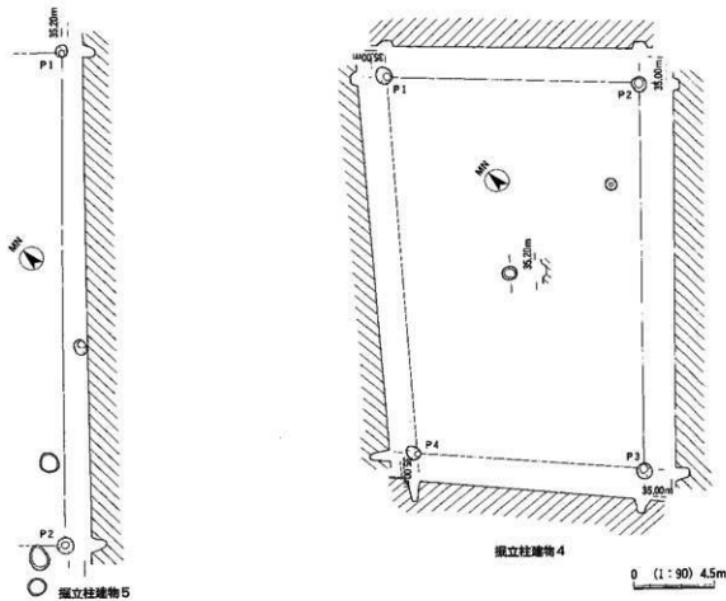
堀立柱建物4・5

両者は隣接し軸方向が並行している。堀立柱建物4は1間×1間で、堀立柱建物5はおもな範囲が調査区外に続いている。軸方向は堀立柱建物1・2とはほぼ一致する。周囲には柱穴が少なく、遺構密度も疎である。なお、堀立柱建物5の範囲中央には浅い柱穴があり、床柱の可能性が考えられる。

堀立柱建物6

建物は2間×1間である。軸方向が磁北に一致している。周囲には柱穴・土坑が多く、西側には軸方向が同じの柱列

図X.12 南区 検出面1 堀立柱建物1～3の周辺遺構配置



2・3が存在する。なお、周囲で検出される柱穴には平面形が花弁状のものや抜き取り痕をもつものが多く見られる(図X.22)。

柱列1

溝5の延長線上に大小の柱穴が1列に並んでいる。土坑4に見られる溝6に接続する。配置状況から道5・溝5に並行していると考えられる。道5・溝5にはやや類似する柱穴群が見られる(図X.05・X.17・X.23)。

柱列2

調査区西端の掘立柱建物6の南側にある。等間隔で柱穴があり、平面配置が幅の狭い長方形を呈する。軸方向が掘立柱建物6と並行する。掘立柱建物の一部の可能性が考えられる。短辺には掘立柱建物でいう棟持柱にあたる柱穴が存在する。

柱列3

柱穴2と同様に、調査区西端の掘立柱建物6の南側にある。等間隔で柱穴があり、平面配置が正方形を呈する。軸方向が掘立柱建物6と並行する。2間×2間の掘立柱建物の可能性が考えられる。

ウ) 風倒木痕

調査区西端の掘立柱建物6の南側にある。3.5m×3.0mの範囲の地層が横転する。倒木による樹木根の横転により地層が横転したものと考えられる。倒木方向はほぼ西側を向いている。

表X.04 掘立柱建物4の計測表

	径×深さ(cm)	距離(cm)
P1	32×10	P1-P2 480
P2	30×10	P2-P3 720
P3	28×24	P3-P4 430
P4	28×40	P4-P1 710

表X.05 掘立柱建物5の計測表

	径×深さ(cm)	距離(cm)
P1	20×22	P1-P2 920
P2	30×28	

表X.06 掘立柱建物6の計測表

	径×深さ(cm)	距離(cm)
P1	40×58	P1-P2 416
P2	34×8	P2-P3 484
P3	48×46	P3-P4 430
P4	40×34	P4-P5 450
P5	42×26	P5-P6 450
P6	46×36	P6-P1 378

表X.07 柱列1~3の計測表

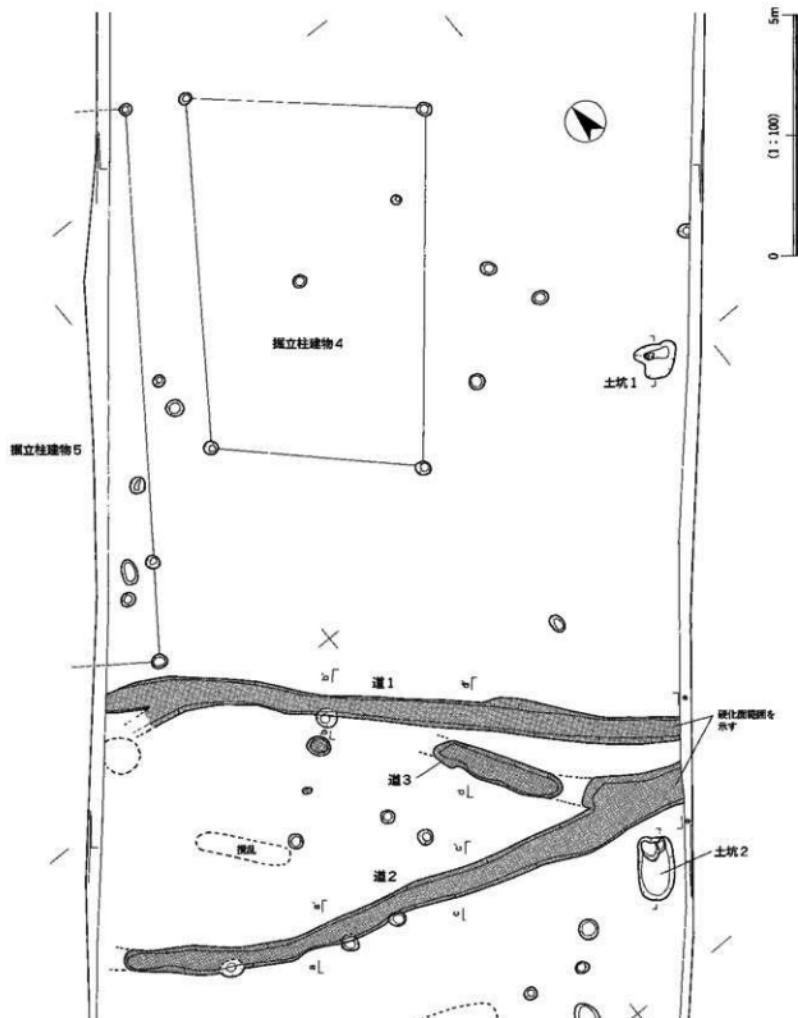
柱列1		
	径×深さ(cm)	距離(cm)
P1	34×30	P1-P2 30
P2	24×	P2-P3 40
P3	36×30	P3-P4 40
P4	10×	P4-P5 20
P5	30×34	P5-P6 30
P6	18×12	P6-P7 14
P7	22×14	P7-P8 50
P8	30×24	P8-P9 30
P9	26×26	P9-P10 80
P10	30×34	P10-P11 100
P11	20×20	P11-P12 30
P12	24×28	P12-P13 80
P13	28×30	

柱列2

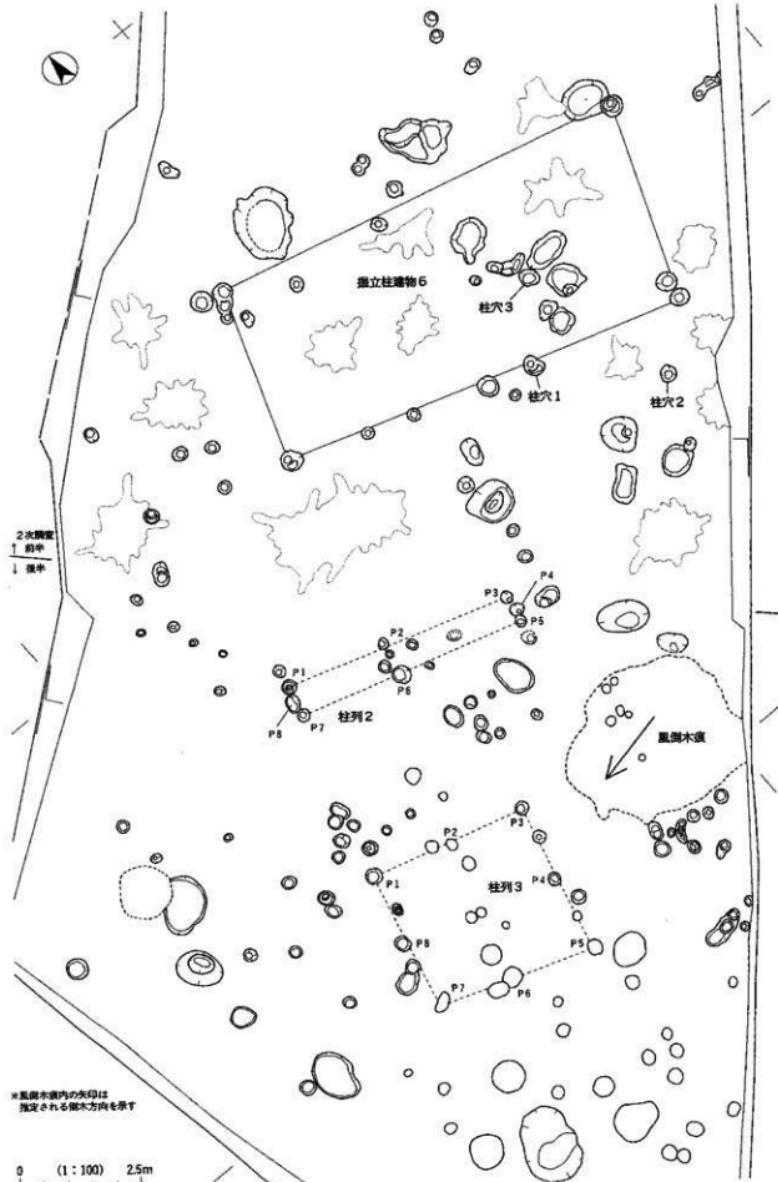
	径×深さ(cm)	距離(cm)
P1	30×	P1-P2 220
P2	24×	P2-P3 280
P3	26×	P3-P4 40
P4	30×	P4-P5 20
P5	22×	P5-P6 268
P6	40×	P6-P7 220
P7	30×	P7-P8 30
P8	30×	P8-P1 40

柱列3

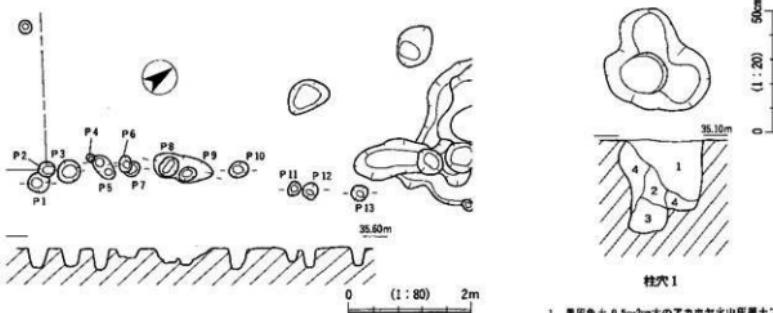
	径×深さ(cm)	距離(cm)
P1	32×	P1-P2 180
P2	20×	P2-P3 170
P3	28×	P3-P4 160
P4	24×	P4-P5 170
P5	30×	P5-P6 188
P6	40×	P6-P7 160
P7	30×	P7-P8 150
P8	30×	P8-P1 150



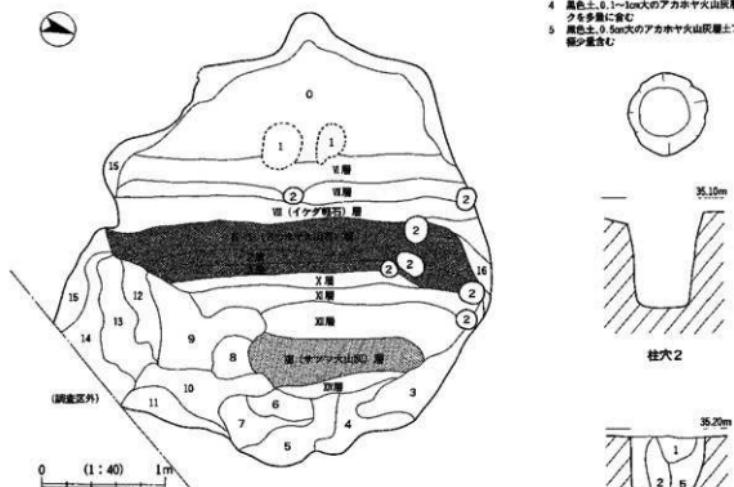
図X.15 南区 検出面1 道1～3、掘立柱建物4・5の周辺遺構配置



図X.16 南区 検出面1 据立柱建物6の周辺遺構配置



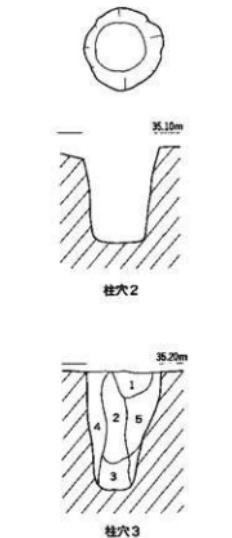
図X.17 南区 検出面1 柱列1



- 0 黒色(2.5GY2/1)土、軟い
- 1 硬化部
- 2 柱穴
- 3 アカホヤ火山灰層と黒色土層(3層)とが混ざる
- 4 黒色土層(0層)に、粒径2mmのアカホヤ火山灰土粒子を多量含む
- 5 黒色土層(1層)に、粒径2mmのアカホヤ火山灰土粒子を多量含む
- 6 岩間に隙合し、粒径2mmのアカホヤ火山灰土粒子を含む。軟い
- 7 オリーブ黑色(5GY2/1)土、僅少量の粒径5mmのアカホヤ火山灰土粒子を含む
- 8 黒色土(5GY2/1)土、柔軟
- 9 黒色土(5GY2/1)土、柔軟
- 10 黒色土(5GY2/1)土、柔軟
- 11 黑色土(5GY2/1)土、柔軟
- 12 アカホヤ火山灰層と岩層が混じり合う。硬い
- 13 黒色土(5GY2/1)土、柔軟
- 14 アカホヤ火山灰層と岩層が混じる
- 15 黑色土(5GY2/1)土、柔軟
- 16 15層と類似するが、わずかに色が濃い。
- 17 3~16層については、植物の影響で擾乱したものと考えられる

図X.18 南区 検出面1 風倒木痕

- 1 黒色土、0.5~2mmのアカホヤ火山灰土ブロックを少量含む
- 2 ブロック状の黒色土と極少量のアカホヤ火山灰土ブロックを含む
- 3 黒色土、0.5~1cmのアカホヤ火山灰土ブロックを少量含む
- 4 黒色土、0.1~1cmのアカホヤ火山灰土ブロックを多量に含む
- 5 黒色土、0.5mmのアカホヤ火山灰土ブロックを極少量含む



図X.19 南区 検出面1
柱穴1~3

工) 道と溝

道路状遺構と考えられるものを5つ確認している。道1～3は、同一の掘り込みから延びることから、同時期のものと考えられる。道4と道5は硬化面の脇に側溝とも言うべき、溝が並行している。道4・道5は、形態が類似している点と、溝5を北に延ばしていくと溝・柱列などと並行ないし重複する位置になることから、連続する時期の可能性が考えられる。

道1～3

北西から南東に延びる道1・2からは、道3などの分岐が見られる。いずれも検出段階では、硬質化した土が面をもって帶状に延びる。この硬化層は板状に薄く剥がれる特徴を持っており、版築などの工法の結果と考えられる。調査区南壁の観察の結果、道1～3は本来掘り込みの中に築かれていたと考えられ、北区の例などから、掘り込みは平面形では溝状を呈していたと思われる。また、硬質層の他にも硬く締まった層があり、少なくとも3段階に分けることができる。平面検出したのは最下層の最初の段階にあたるものと考えられる。規模は、土層断面で掘り込みが幅226cm以上×深さ46cm、溝1が幅84cm×深さ36cm、溝2が幅116cm×深さ34cmを測る。

道の掘り込みは基本土層IV層より上から掘り込まれる。のことから時期は近世と考えられる。

道4・溝11

南東から北に向かってやや弧を描いて硬化面が延びる。検出された硬化面・溝は擾乱を多く受ける。検出された硬化面は1層で形成され、調査区南壁の土層断面においても同様である。残存する硬化面の硬度は非常に硬く、板状に薄く剥がれる。調査区南壁の土層断面からは硬化面に伴う掘り込みが確認でき、規模が幅445cm×65cmを測る。硬化面の東側には線に沿って溝が延びる。溝は幅52～64cm×深さ28cmを測り、一部では底面に幅20cm×5cmの2段掘りが見られる。機能は排水路であろうか。

溝の覆土より輸入陶磁器5が出土している。出土状況は底部を上にして底面を水平に伏せた状態で出土している。陶質土器9は土坑11に伴うものと考えられる。

溝4と溝11の時期は出土遺物から古代と考えられる。

道5・溝5

南から北北東に向かってまっすぐ延びるが、遺存状況が悪く途中で途切れる。検出された硬化面はほぼ1層で形成される。掘り込みを伴ったかは不明であるが、溝4に比べて検出された層位が高いことから掘り込みを伴わない可能性が考えられる。硬化面の硬度は、非常に良く締まる程度である。規模は幅55～76cm×深さ8cmを測る。硬化面の東側には、線に沿って溝が延びる。溝は幅64cm×深さ24cmを測る。溝の下には溝7や柱穴が重複する。溝5の機能は排水路であろうか。

時期は出土遺物がなく不明である。付近では微量ではあるが、古代・中世の須恵器・土師器や近世の陶磁器の小破片が出土している。また、硬化層には白色砂は含まれない。

溝1～4・6・8～10

溝1・2の覆土はやや緑色を帯びた黒色土である。時期は近世であろうか。溝1は幅68cm×深さ13cmを測る。溝2は幅78cm×深さ4cmを測る。(図X.08)

溝3と溝6については、土坑4と一緒に記述している。(図X.13～15)

溝4は覆土がやや緑色を帯びた黒色土である。時期は近世であろうか。規模は94cm×深さ8cmを測る。(図X.10)

溝7は大小の土坑や柱穴が接合した様な形態を呈する。溝5下より検出されている。規模は50cm×深さは10～40cmを測る。時期は出土遺物がなく不明である。(図X.09) 溝8～10は欠番である。

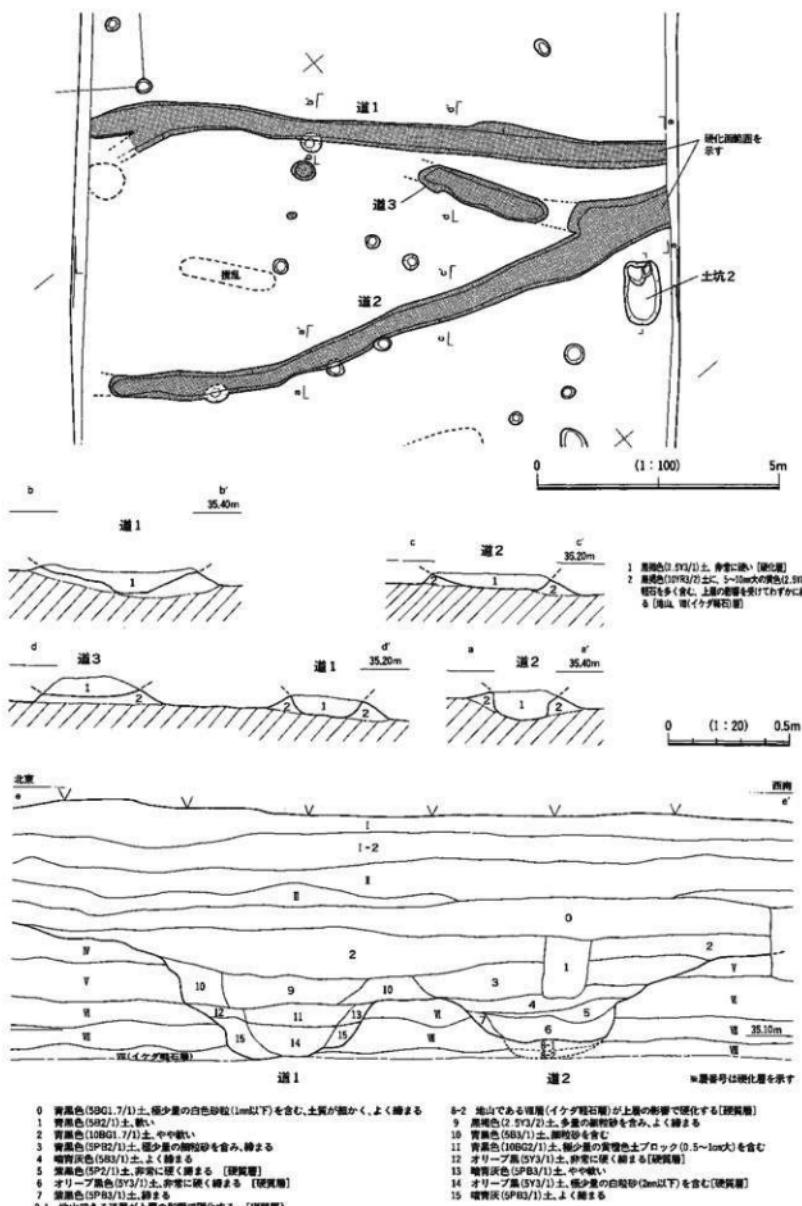
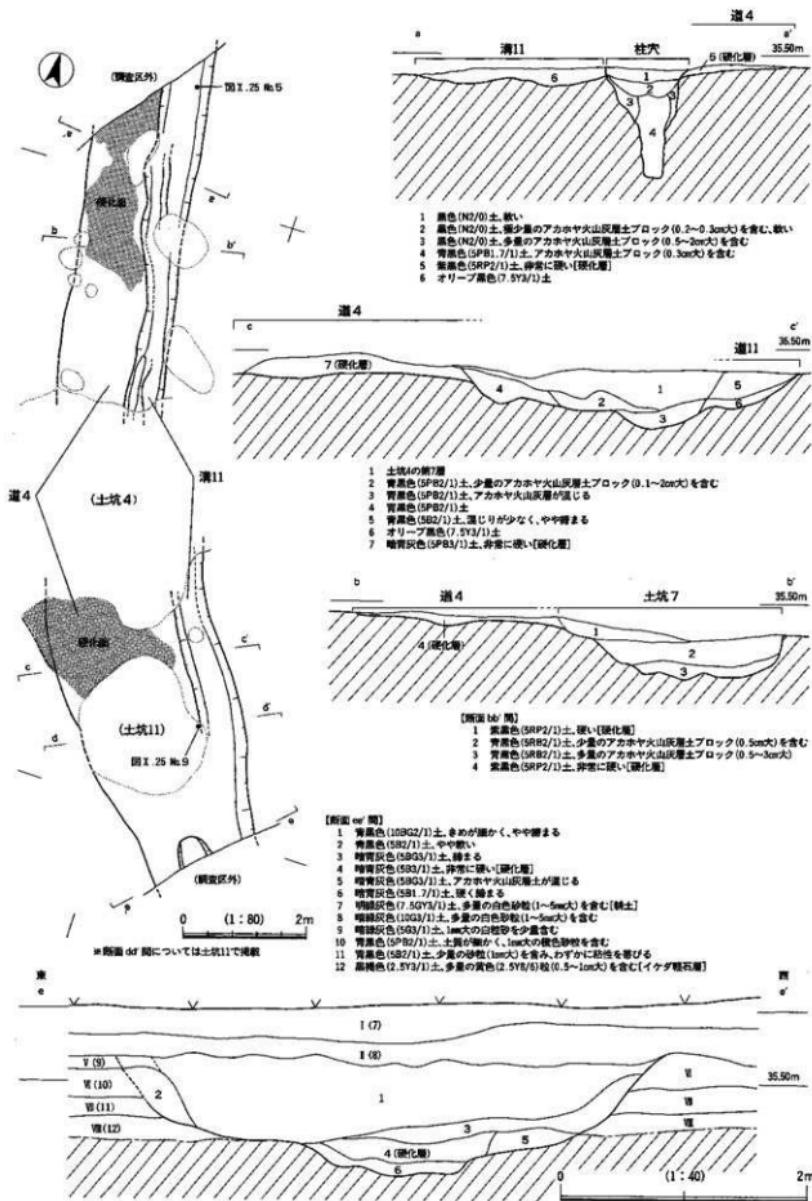


図 X.20 南区 検出面1 道1~3



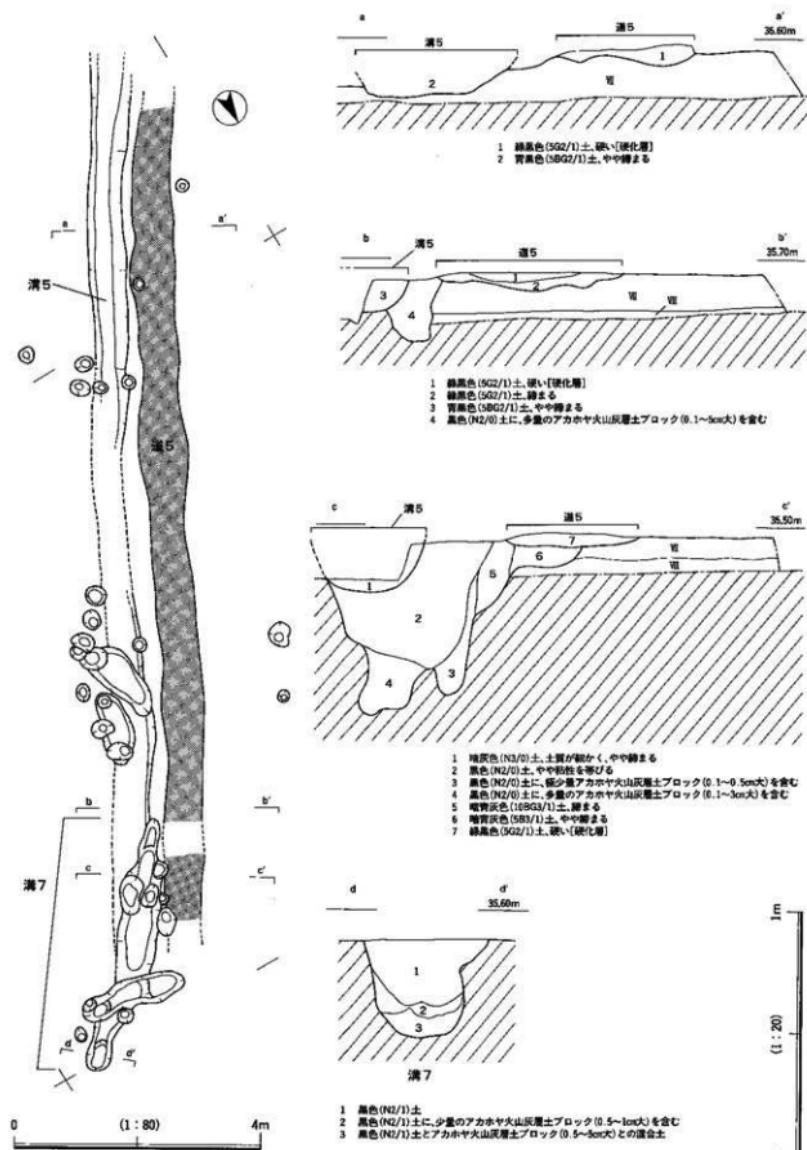
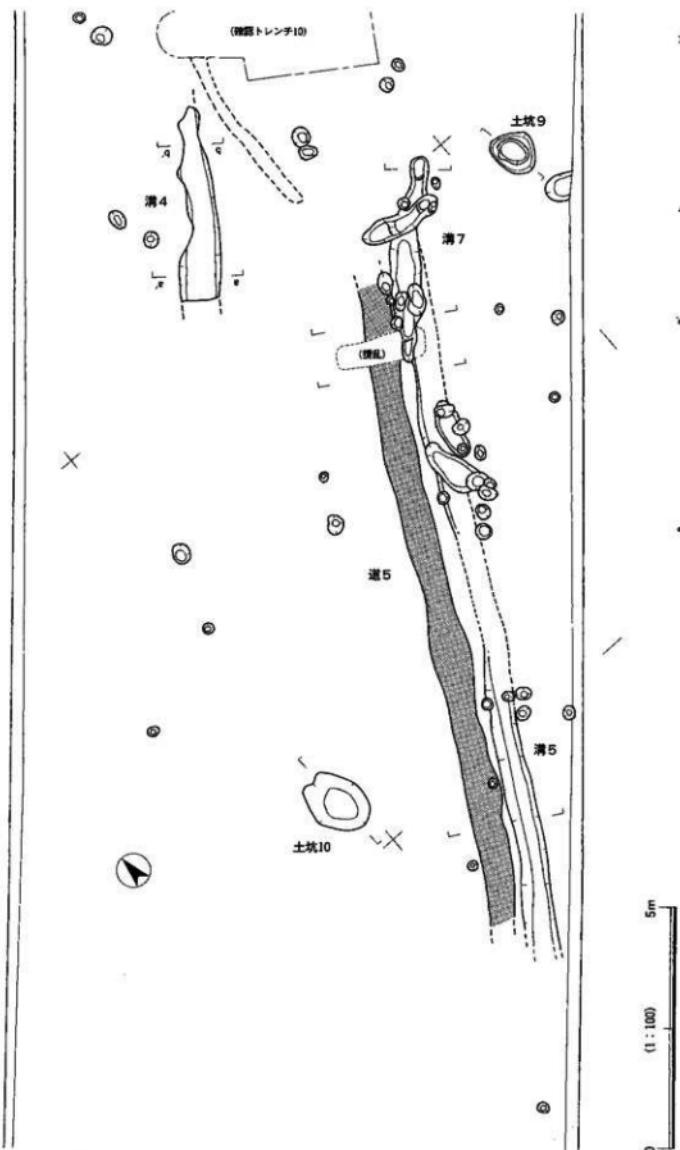


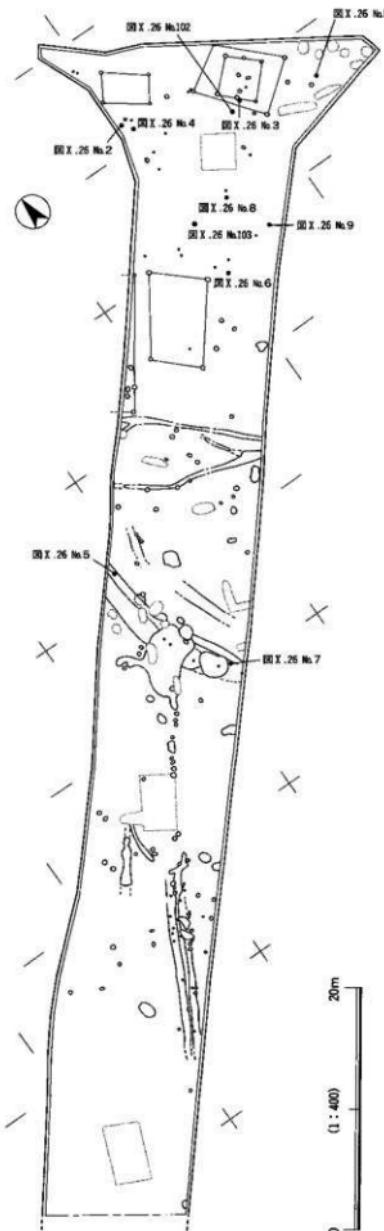
図 X.22 南区 検出面1 道5・溝5・7



図X.23 南区 検出面1 道5・溝4・5・7ほかの周辺遺構配置



図X.24 南区 検出面1 溝4 土層断面



図X.25 南区 (V・VI)層 遺物分布状況

4. 遺物分布状況

南区のV・VI層出土の遺物量は極めて少なく、分布も偏る。分布は調査区南端と道4・道5周辺に限られる。

5. 遺物

遺物はおもに中世・近世の時期のものが出土している。

土器

磁器1・2は、呉須が発色のよい青色で暗青灰色(5B3/1)～青灰色(5B6/1)を呈する。染付けは菊唐草文が描かれる。1は5寸皿、2は碗と考えられる。

磁器3～5は、貿易陶磁器の白磁碗と考えられる。器面は稚菜がかかり灰白色(7.5Y7/2)を、胎土は灰白色(10Y7/1)を呈する。

土師皿6は横のナデで器面を整える。色調が明褐色(7.5YR5/6)を呈する。

甕8～10は胴部一部と考えられる。陶質土器であろうか。10は灰黄褐色(10YR5/2)であるが、焼成による色調の変化のためか8・9は黄橙色ないし赤褐色を呈する。外面に格子目のタキ痕が見られ、内面は横のナデで整える。

羽釜12は瓦質土器と考えられ、器面が黒色化する。外面の器面調整は、口縁端部から取っ手は横のナデ、取っ手下は縦のハケメで整える。内面は横のハケメを施す。

陶器12は赤褐色(10R4/3)の胎土をもつ。薩摩焼の擂鉢と考えられる。

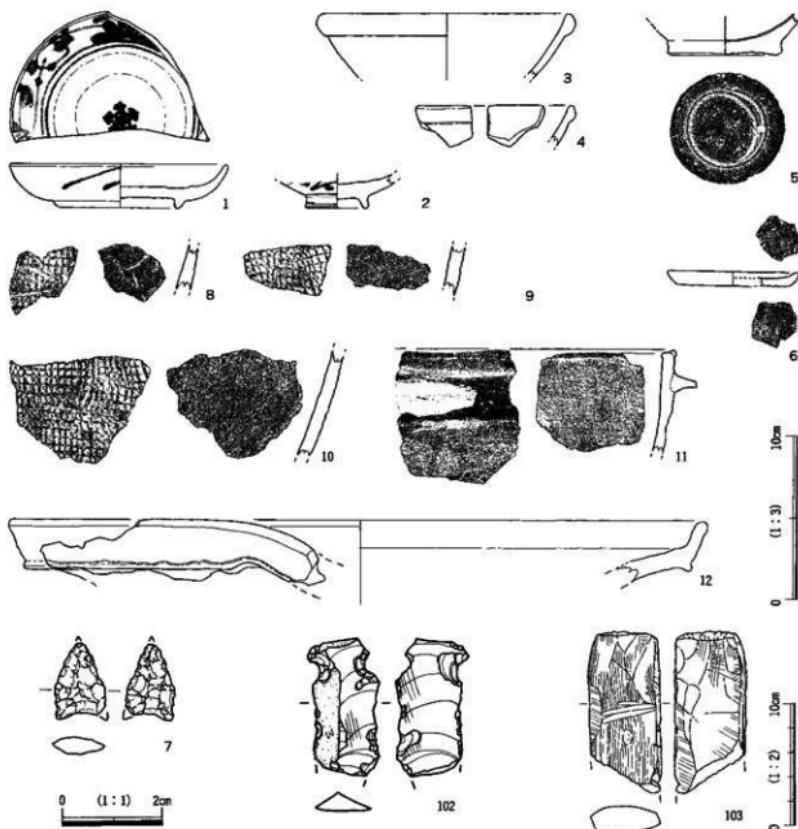
石器

石鉄7は、剥離面の稜が不明瞭になるほど摩滅し、光沢をもつ。

石匙102は、桑ノ木津留産と考えられる黒曜石を用いる。縦長剥片の短辺に対応する抉りを作る。側辺には微細な剥離が見られる。

石製品103は、滑石製で石鍋の二次加工品と考えられる。短冊状の形態を呈して、器面には成形時のものと考えられる擦痕が見られる。器面はほとんどが光沢をもつ。

1 振立柱建物6については、近世の可能性も考えられる。



図X.26 南区 V・VI層 出土遺物

表X.08 南区V・VI層 出土石器の計測表

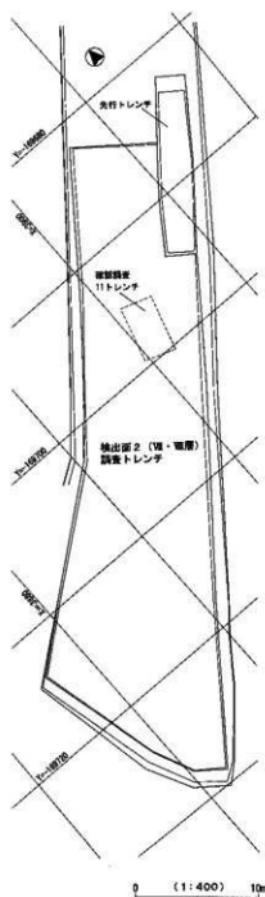
掲 番号	遺物 番号	出土位置		種類	器種	石材	法量 (cm・g)			
		地點	層位				最大長	最大幅	最大厚	重量
7	1449	南区	遺4.上面	剥片石器	石鏟	白色チャート	(1.60)	(1.00)	0.35	0.5
102	1043	F区	遺	剥片石器	石匙	黒曜石	2.80	1.50	0.40	1.6
103	1034	F区	遺	滑石製品	二次加工	滑石	(6.70)	(3.00)	(1.20)	34.7

※層位における層番号は調査時のものである。

※法量計測値の()は欠損品の残存値を示す。

第2節 検出面2（XII層上面）の調査

調査に際しては、IX層以下における遺物分布が河岸段丘の縁辺部に集中すると事前に予想されていた。そのため遺物の分布範囲を確認するのを目的に南区の中央付近に先行トレンチを設けることから調査を始めている。その後、西側に調査区を拡張し、IX-3（アカホヤ火山灰）層から人力による掘り下げを開始して XII層上面で遺構を検出している。



1. 遺構

遺構は検出されていない¹⁾。

2. 遺物

おもに土器・剥片石器・剥片類・石核などが出土している。出土層位はほぼ X 層に限られる。

ア) 分布状況 2

遺物の分布は、土器が調査区中央と北側・南側の 3ヶ所の範囲に集まる。中央の範囲はとくに集中する。いずれの範囲にも土器 1類が多く分布するが、北側の範囲には土器 3類、南側の範囲には土器 2類が集まる。

複数個体が存在する土器 1類を個体別にみると、中央の範囲には 1 個体分の土器片が単独で集中する（土器 1類-1）。北側の範囲には土器 1類-1 を除いたいずれの個体の土器片も見られる。南側の範囲とその北側には同一個体のものが分布する。

石器の分布は土器と異なり、調査区内に広く分布する。器種別では石鏃・剥片類は調査区全体に広く分布する。スクレイバーや石核などの分布は東側と西側の 2ヶ所に集まっている。石材別の分布では、頁岩の分布が比較的調査区の西側に集まる。

なお、垂直分布での上下での分布差は、地形の高低差によるものと考えられる。

イ) 出土土器

出土した土器は、以下のように分類している。土器 1類については、個体数が複数あると考えられるが、それ以外はほぼ 1個体と思われる。

土器 1類 (13~30)

IX-3 層と X 層との境から X 層にかけて出土している。内外面に深い貝殻条痕文を施す。胎土には 1~3 mm 大の砂粒を多く含む。焼成はやや軟く、もろい。右京西式と考えられる。

土器 2類 (31~33)

器形は、胴部が膨らみ、頸部が縮まる。そこから口縁部が大きく外反する。胴部の外面には、弧を描いた刺突文が繰り返される。2枚貝などを重ねて貝殻腹縁を刺突したものであろうか。手向山式に含まれると考えられる。

図 X.27 南区 検出面2
(XII層上面)
調査区配置

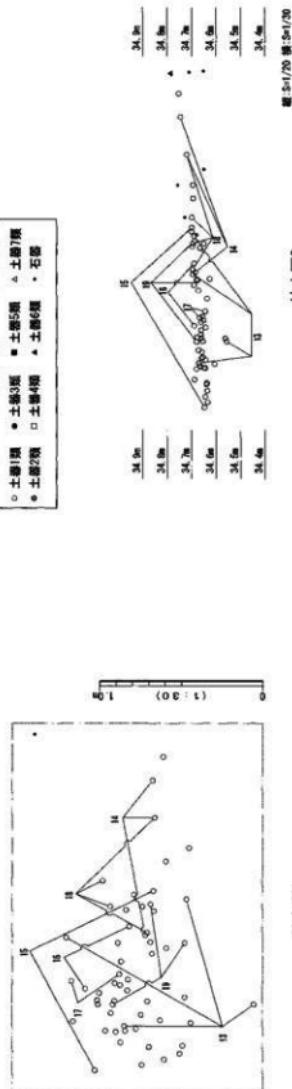
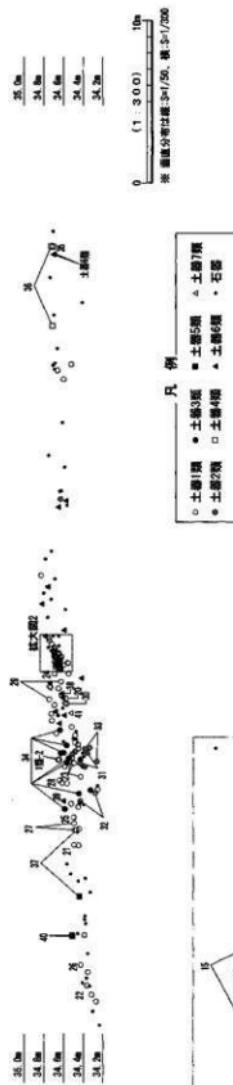
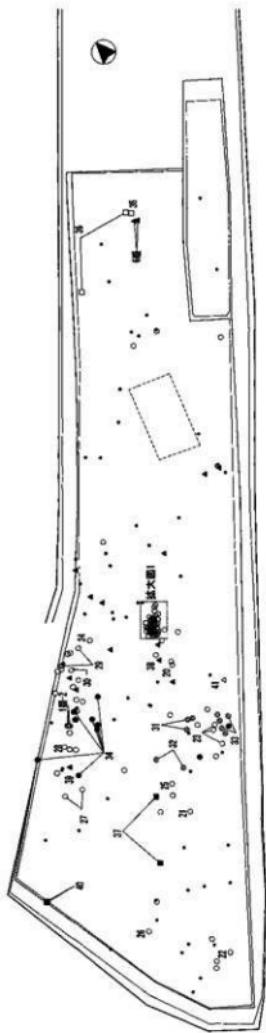
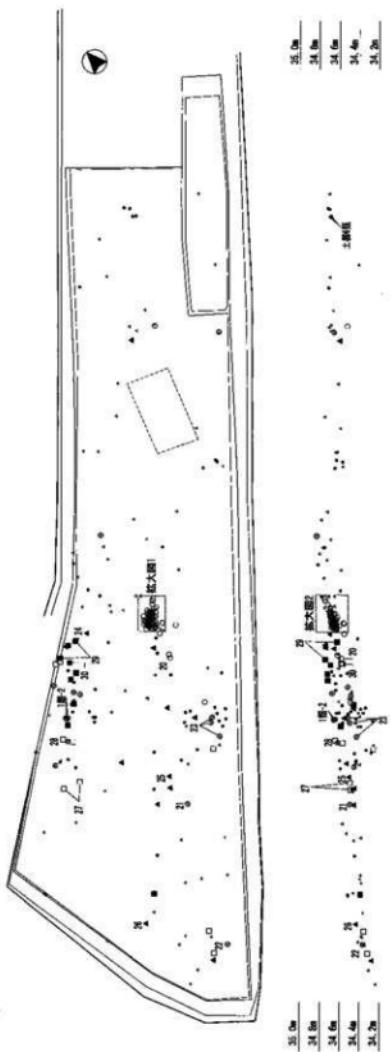
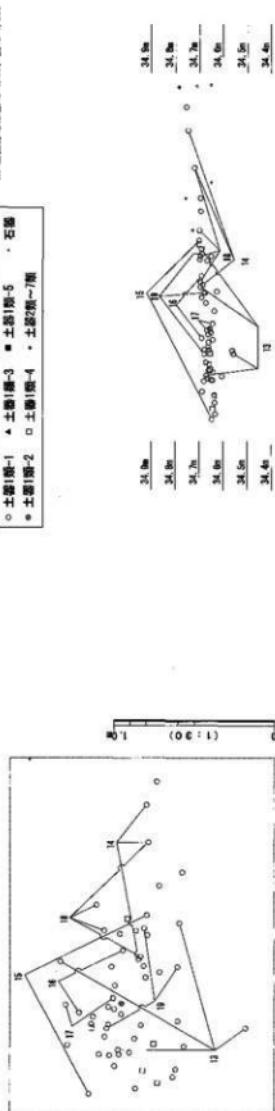
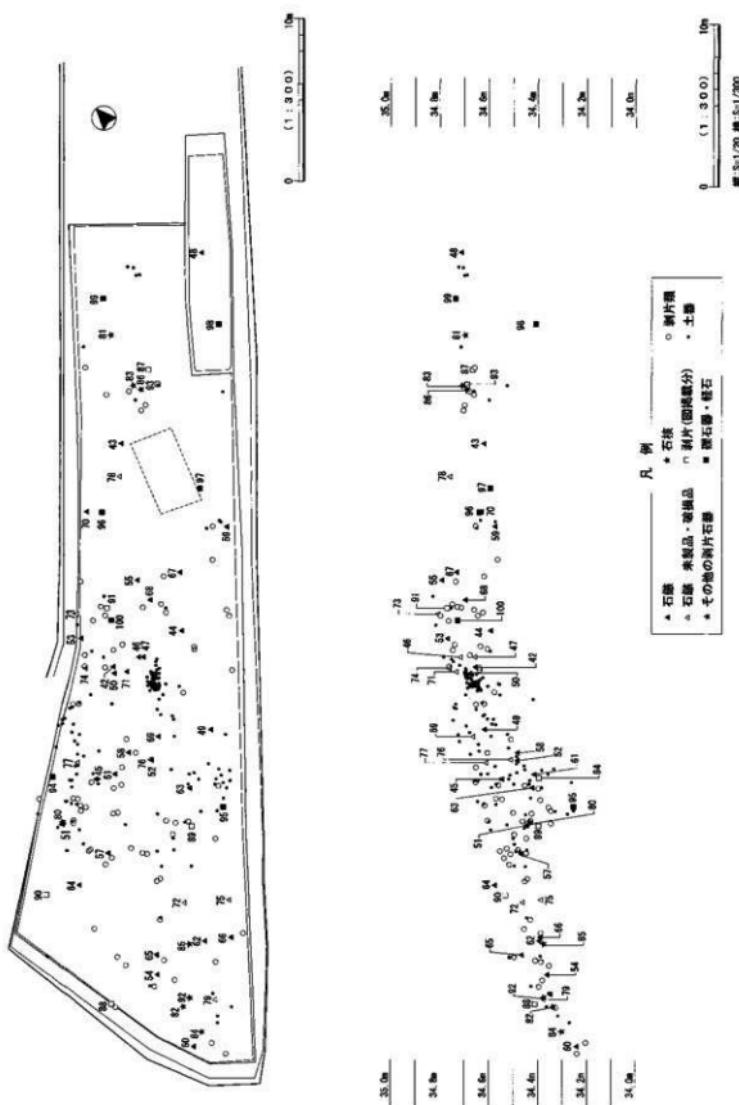


図 X.29 南区 X・Y層 土器 1類の分布状況

拡大図2

拡大図1





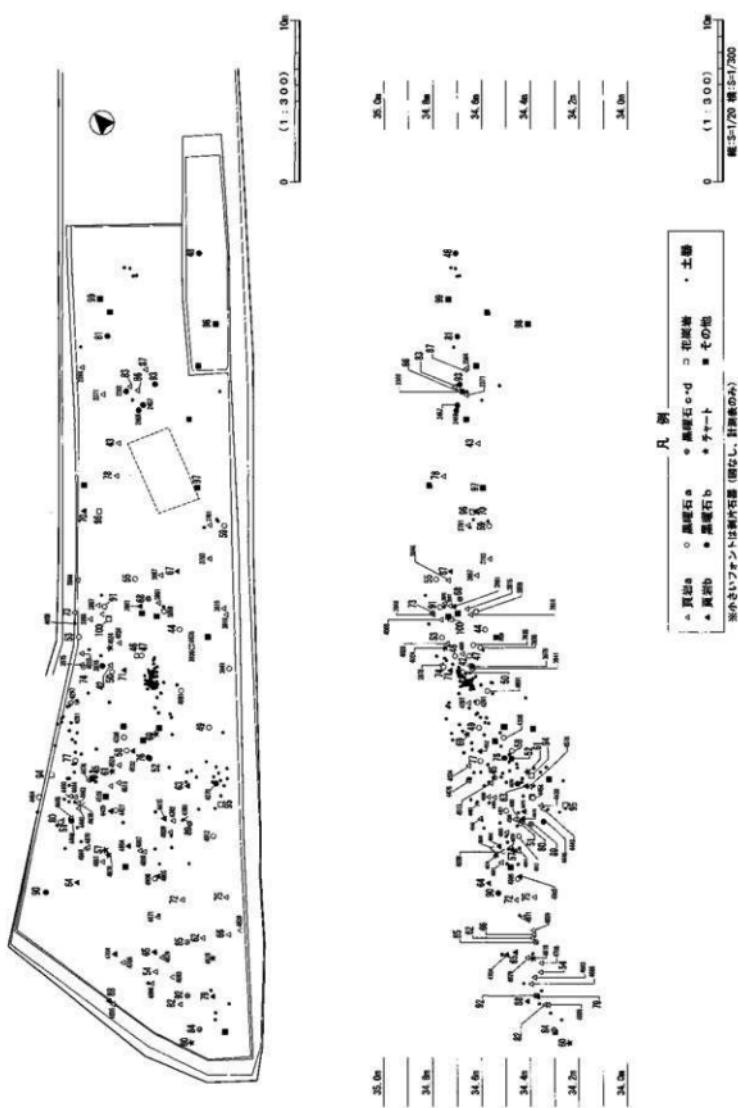
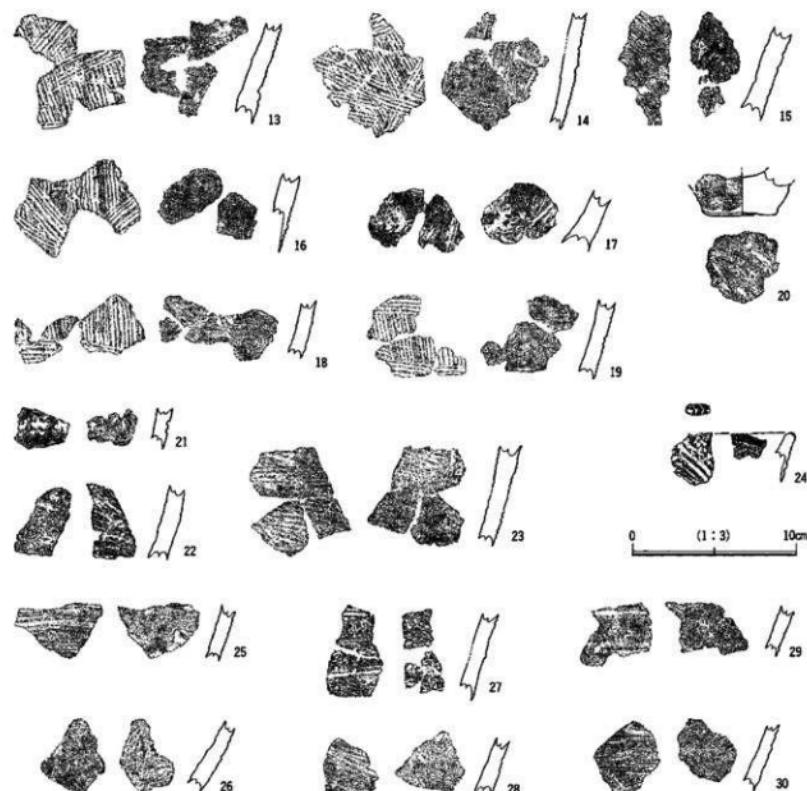


図 X.31 南区 X・X' 層 石器石材別の分布状況



図X.32 南区(X・XI層)出土土器(1)

土器3類(34)

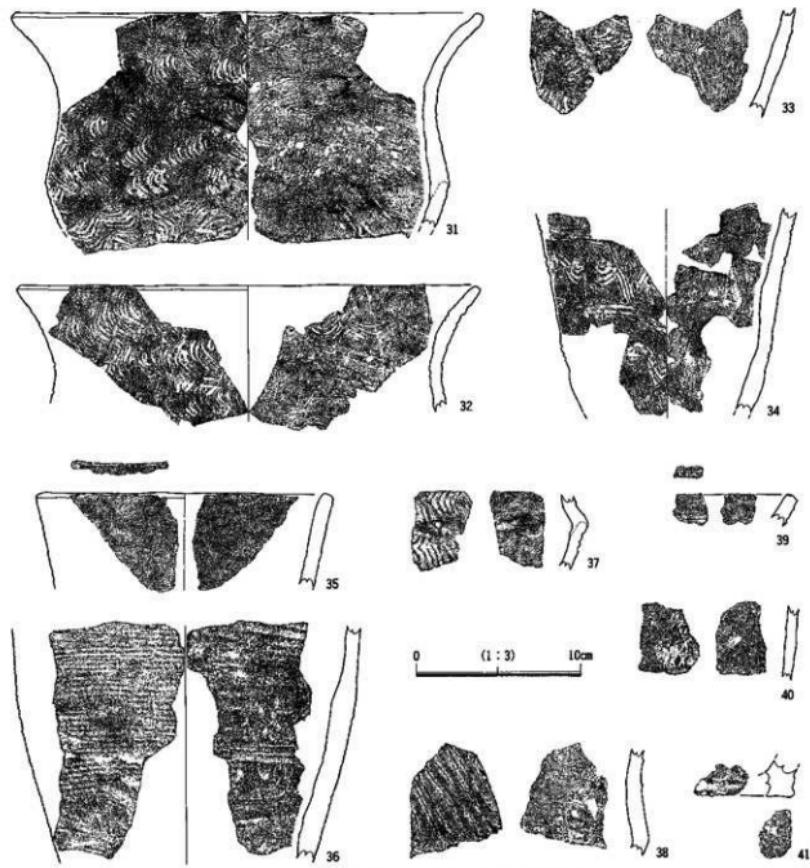
外面に横位と波状の沈線文で文様を構成する。沈線は貝殻腹縁を使用していると考えられる。器形は胸部からやや開いた形で真っ直ぐに立ち上がる。苦浜式と考えられる。

土器4類(35・36)

器形は、ほぼ円筒形を呈し、外面に並行した浅い貝殻条痕が巡る。円筒形の貝殻条痕文系土器と考えられる。

その他

土器5類(40・37)、土器6類(38・39)、土器7類(41)と分類していたが、出土量が極めて少ないので、一括する。



図X.33 南区 (X・XI)層 出土土器 (2)

37の外表面の文様は山形押型文と考えられる。38・39の外表面には微隆帶文が見られる。38の外表面は横位でキザミをもつ。39は斜位で不明瞭である。胴部下半には撚糸文が見られる。40は縱位の撚糸文を施す。

ウ) 石器

南区のX・XI層からは、剥片石器83点、剝片類84点、礫石器類8点が出土している。出土層位はX層にはば限られる。

表 X.09 南区 X・XI層 出土土器の観察表

相 互 に て ある 事 件 の 順 序 号	遺 物 番 号 (取 り上 げ)	層 位	部 位	色調		調査・文様		断面(cm)					備考	
				内面	外面	内面	外面	鉛 度	石 灰	黒 色	白 色	緑 色		
X	13 4052, 4081, 4273, 4534	X	頭部	に赤い赤肉 5YR4/4	に赤い青 7.5YR5/4	頭部: 貝殻条痕斑、ナデ 底部: 基へのケズリ 底面: 定方型のケズリ	頭部: 貝殻条痕斑、ナデ 底部: 基へのケズリ 底面: 定方型のケズリ	3	○	○	○	○	1層 同一個体 内外面が黒色化	
32	14 4038, 4040, 4058	X	頭部											
	15 4046, 4254	X	頭部											
	16 4055, 4071	X	頭部											
	17 4072, 4265	X	頭部											
	18 4047, 4048, 4053, 4271	X	頭部											
	19 4066, 4069, 4542	X	頭部											
	20 4346	X	底部											
	21 4911	X	頭部	に赤い赤肉 7.5YR5/4	に赤い黄 10YR6/4	貝殻条痕もしくはナデ	ナデ後、部位の貝殻条痕と やや押付状に複数の貝殻剥離 文 貝殻条痕もしくはナデ	1	○	○	○	○	1層 同一個体	
	22 4634	X	頭部											
	23 4364, 4369, 4373	X	頭部											
	24 4287	X	口縁部	に赤い赤肉 7.5YR5/4	に赤い黄 7.5YR6/4	横のナデ	口唇部: 横のナデ後、貝殻剥離文 と 貝殻剥離文 口縁部: 頭位の貝殻剥離文 貝殻剥離文	1	○	○	○	△	1層 同一個体	
	25 4901	X	頭部	に赤い赤肉 10YR6/4		左へのケズリ	横の貝殻条痕後、横のナデ	1	○	○	○	○	1層 同一個体	
	26 4587	X	頭部											
	27 1868, 4866	X	頭部	に赤い赤肉 10YR5/3	に赤い赤肉 10YR6/4	ナデ	横の貝殻条痕後、横のナデ	1	○	○	○	○	1層 同一個体 内外面が黒色化	
	28 4458	X	頭部											
	29 4260, 4305	X	頭部	に赤い赤肉 10YR5/4		ナデ	横の貝殻条痕後、横のナデ	1	○	○	○	○	1層 同一個体 内外面が黒色化	
	30 4308	X	頭部											
X	31 4386, 4582	X	口縁部、 頭部		7.5YR7/6	口縁部: 左へのケズリ後、 2枚貝の貝殻剥離跡突出文か 山縫部: 左へのケズリ 頭部: 左斜め上へのケズリ	横のナデ後、2枚貝を重ねた貝 貝殻剥離跡突出文	1	○	○	○	○	2層 同一個体 内外面が黒色化	
33	32 4381, 4601	X	口縁部											
	33 4359, 4576	X	頭部											
	34 4444, 4452, 4485, 4489, 4499, 4591, 4503	X	頭部	に赤い赤肉 10YR6/3		上へのケズリ	横のナデ後、横の比較文と波 状の比較文	4.5	○	○	○	△	3層 同一個体 内外面が黒色化、横が付箇	
	35 2102	X	口縁部	に赤い赤肉 2.5YR6/3	に赤い黄 10YR6/3	左へのケズリ後、横のナデ	左への深い貝殻条痕文	8.5	○	○	○	△	3層 内外面が黒色化、横が付箇	
	36 2103, 2253	X	頭部											
	37 4670, 4899	X	頭部	に赤い赤肉 10YR6/3	に赤い黄 10YR7/4	横のナデ	部位の山形齊文か	8.5	○	○	○	○		
	38 4925, 4926	X	頭部	汽蒸肉 7.5YR8/2	に赤い黄 10YR7/4	横のナデ	(上)斜位の巻渦帶文か (下)轟き文か	8.5	○	○	○	○		
	39 4342	X	口縁部	に赤い赤肉 7.5YR6/4		横のナデ	口縁部: 横のナデ後、部位の キザミ 口縁部: キザミのある巻渦 帶文、比較文	8.5	○	○	○	○		
	40 4447	X	頭部	に赤い赤肉 2.5YR6/3		横のケズリ後、横のナデ	横のナデ後、部位の轟き文	8.5	○	○	○	○		
	41 4096	X	底部	に赤い赤肉 2.5YR6/3	透視圖 7.5YR8/4	横のナデ	横のナデ	8.5	○	○	○	○		

※断面寸の精度は最も多く含まれる大きさをしめす。「○」は各段が含まれる。「○」は多く、「△」は少なく含まれるをしめす。

石材

石材の割合は黒曜石と頁岩がほとんどを占め、チャートがわずかに見られる。製品に占める割合は頁岩の点数に比べて黒曜石がやや多いが、剝片では頁岩の方が多くなる。石材の分類³は、肉眼観察で行っている。黒曜石は以下のように細分している。

黒曜石a：色調が灰白色ないし灰色を呈する。不透明で剝離面も光沢がない。姫島産の黒曜石と考えられる。

黒曜石b：色調が暗緑色を呈する。全くの不透明で剝離面も光沢が鈍い。西北九州系産の黒曜石と考えられる。

黒曜石c：色調が紫黒色を呈する。ガラスの様に透明で、剝離面が光沢をもっている。0.5mm大の不純物を極少量含んでいる。桑ノ木津留産の黒曜石と考えられる。

黒曜石d：色調が紫黒色を呈する。ガラスの様に透明で、剝離面が光沢をもっている。多量に0.5mm大の不純物を含んでいる。三船産の黒曜石と考えられる。

頁岩は、色調が灰白色を呈するものを頁岩a、暗青灰色を呈するものを頁岩b、黄灰色を呈するものを頁岩cとしている。頁岩bは珪質頁岩、頁岩cは硬質頁岩と考えられる。

チャートは、「チャート」と表示したものについては、半透明の灰白色と黒色の混ざるものである。それ以外は、色調で区別している。

剝片石器

石鎚27点、石鏃未製品10点、スクレイバー2点、使用痕剝片2点、フレーク8点、マイクロコア2点が出土している。

石鎚は、長さが1~1.5cm大のものが多く、42~49は非常に小さい。次いで長さが2cm大となり、68・69は2cmを超える。器形は長い脚部をもつものが多いが、54~56には調整加工の剝離は存在するものの抉りは作られない。そのため脚部をもっていない。57・58には浅い抉りで短い脚部を作る。表裏面には44・50・52・53・56・60・63・65などのように主剝離面を大きく残すものがあり、未製品の可能性も考えられる。76・77は破損品である。

石鏃未製品には、70・71のように製品と変わりないものもある。それ以外は調整加工途中のものがほとんどである。

80は石匙で、横長の刃部をもっている。82・83は使用痕剝片で、一部に微細な剝離が見られる。

84・85はマイクロコアと考えられ、旧石器時代の遺物と考えられる。何らかの現象により、下層よりX層中に移動したものと思われる。92は多数の剝離面が存在するが、打点が見られない。

なお、白色チャート製の剝片(X.106)が1点確認されている(図版48)。

剝片類

剝片については、フレーク・チップに細別してない。剝片類として一括している。石材は頁岩と黒曜石がほとんどを占める。詳しくは、表X.12に示している。

礫石器

磨石1点、敲石1点、磨・敲石1点、石錘1点、不明石製品が4点出土している。剝片石器・剝片類に比べると出土量が非常に少ない。

94・96には断面があり、擦痕も見られる。96には敲打部もある。95は溶結凝灰岩製で、尖部が剝離する。敲石であろうか。105は長軸方向に対する敲打部がある。敲打部は浅い。石錘の可能性が考えられる。97~99・104は縄文時代早期包含層中によく見られる。何らかの素材であろうか。

100は固化していないが、溶結凝灰岩の石塊で赤色化しており、被熱を受けている。

表X.10 南区 X・XI層 出土剥片石器の計測表

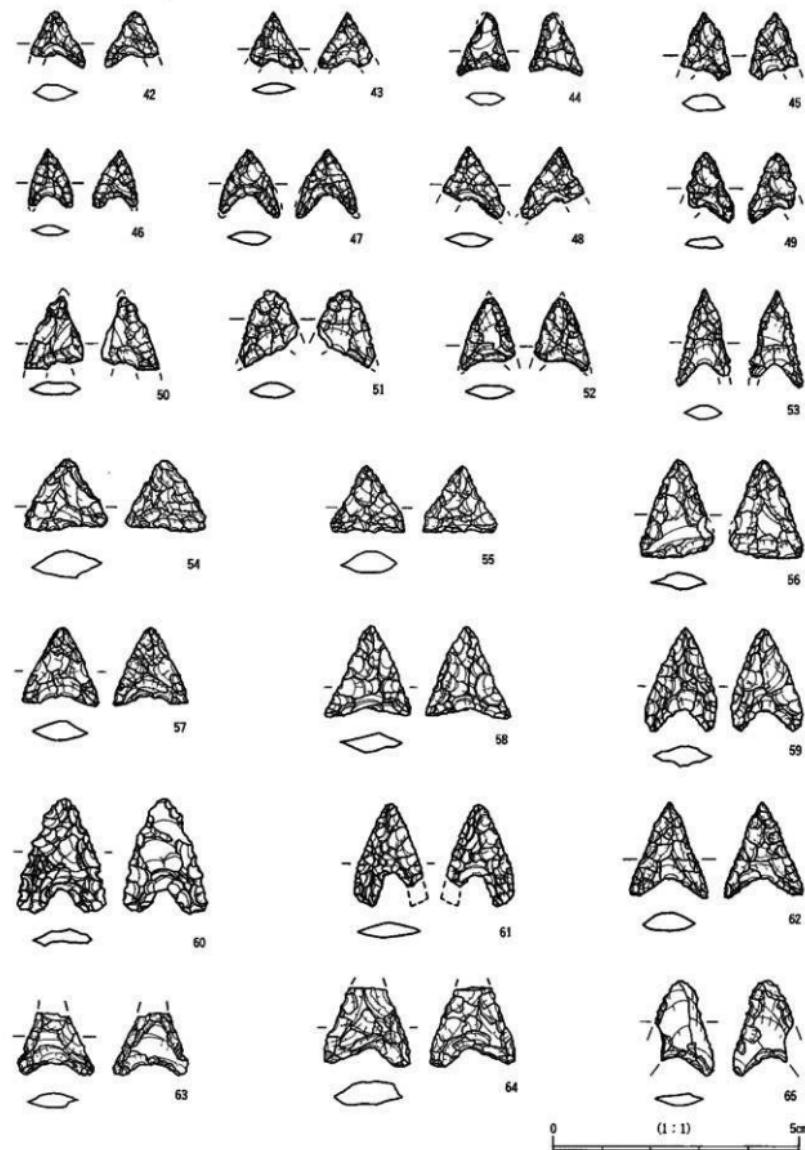
図 番号	遺物 番号	種類	器種	出土位置		石材	法量(cm・g)			
				地点	層位		最大長	最大幅	最大厚	
42	3988	剥片石器	石鏃	南区	X	頁岩a	(1.20)	(1.10)	0.30	0.10
43	3600	剥片石器	石鏃	南区	X	頁岩a	(1.15)	(1.10)	0.25	0.20
44	3850	剥片石器	石鏃	南区	X	黒曜石a	(1.30)	1.10	0.25	0.10
45	4500	剥片石器	石鏃	南区	X	黒曜石a	(1.40)	(1.00)	0.35	0.30
46	4035	剥片石器	石鏃	南区	X	黒曜石a	(1.20)	0.90	0.20	0.10
47	4034	剥片石器	石鏃	南区	X	黒曜石a	(1.40)	1.20	0.25	0.20
48	2024	剥片石器	石鏃	南区④	X	黒曜石b	(1.50)	(1.30)	(0.30)	0.20
49	4356	剥片石器	石鏃	南区	X	黒曜石a	(1.40)	(1.00)	0.25	0.10
50	3993	剥片石器	石鏃	南区	X	黒曜石a	(1.50)	(1.20)	(0.25)	0.40
51	4450	剥片石器	石鏃	南区	X	黒曜石a	(1.60)	(1.20)	0.30	0.50
52	4403	剥片石器	石鏃	南区	X	黒曜石b	(1.50)	(1.10)	0.30	0.30
53	4016	剥片石器	石鏃	南区	X	黒曜石a	2.00	1.10	0.30	0.30
54	4684	剥片石器	石鏃	南区	X	頁岩a	1.45	1.60	0.55	0.90
55	3952	剥片石器	石鏃	南区	X	黒曜石a	1.40	1.50	0.40	0.60
56	2097	剥片石器	石鏃	南区	X I	頁岩a	2.00	1.50	0.35	0.80
57	4877	剥片石器	石鏃	南区	X	青灰色チャート	1.60	1.50	0.40	0.60
58	4531	剥片石器	石鏃	南区	X	黒曜石a	1.80	1.70	0.40	0.80
59	3784	剥片石器	石鏃	南区	X	黒曜石a	2.10	1.50	0.40	0.80
60	4645	剥片石器	石鏃	南区	X	チャート	2.30	1.70	0.50	1.40
61	4521	剥片石器	石鏃	南区	X	チャート	2.10	(1.90)	0.40	0.60
62	4613	剥片石器	石鏃	南区	X	頁岩a	1.95	1.60	0.40	0.80
63	4385	剥片石器	石鏃	南区	X	頁岩b	(1.30)	1.50	0.30	0.60
64	4804	剥片石器	石鏃	南区	X	頁岩b	(1.60)	1.75	0.50	1.00
65	4677	剥片石器	石鏃	南区	X	頁岩b	1.95	(1.20)	0.30	0.50
66	4611	剥片石器	石鏃	南区	X	頁岩a	2.15	1.60	0.30	0.60
67	3871	剥片石器	石鏃	南区	X	頁岩b	(1.70)	1.50	0.30	0.40
68	3958	剥片石器	石鏃	南区	X	黒曜石d	(2.65)	(1.50)	0.35	0.80
69	4395	剥片石器	石鏃	南区	X	白色チャート	2.85	1.35	0.40	0.80
70	4230	剥片石器	石鏃未製品	南区	X	頁岩b	(3.30)	(1.50)	0.35	1.30
71	3996	剥片石器	石鏃未製品	南区	X	頁岩b	(3.30)	(1.90)	(0.40)	1.60
72	4908	剥片石器	石鏃未製品	南区	X	頁岩a	2.45	1.40	0.70	1.10
73	3968	剥片石器	石鏃未製品	南区	X	頁岩a	(2.10)	(1.70)	(0.75)	1.90
74	3976	剥片石器	石鏃未製品	南区	X	黒曜石a	(2.60)	(2.40)	1.20	4.60
75	4607	剥片石器	石鏃未製品	南区	X	頁岩a	(1.80)	(1.95)	(0.30)	1.10
76	4402	剥片石器	石鏃	南区	X	黒曜石b	(1.45)	(1.25)	0.30	0.40
77	4480	剥片石器	石鏃	南区	X	黒曜石a	(1.40)	(0.80)	(0.35)	0.20
78	3638	剥片石器	石鏃未製品	南区	X	頁岩a	2.10	1.20	0.30	0.87
79	4627	剥片石器	石鏃未製品	南区	X	頁岩b	2.60	2.20	0.85	4.09
80	4449	剥片石器	スクレイバー(石匙)	南区	X	頁岩a	3.10	4.00	0.70	6.40
81	2211	剥片石器	スクレイバー	南区	X	黒曜石b	1.80	2.00	0.50	1.80
82	4650	剥片石器	使用痕剥片	南区	X	頁岩a	2.50	2.60	0.70	5.40
83	2345	剥片石器	使用痕剥片	南区	X	頁岩a	2.80	2.70	0.90	6.00
84	4646	剥片石器	マイクロコア	南区	X	黒曜石c	2.10	1.40	1.20	3.60
85	4665	剥片石器	マイクロコア	南区	X	黒曜石c	1.80	1.40	1.30	2.20
86	2325	剥片石器	フレーク	南区	X	頁岩a	1.80	1.90	0.30	1.00
87	4696	剥片石器	フレーク	南区	X	頁岩a	2.20	1.60	0.30	1.20
88	4379	剥片石器	フレーク	南区	X	頁岩b	1.90	2.30	0.40	1.60
89	4821	剥片石器	フレーク	南区	X	黒曜石c	2.90	2.60	0.60	2.20
90	2348	剥片石器	フレーク	南区	X	黒曜石b	3.00	2.40	1.40	8.20
91	3964	剥片石器	フレーク	南区	X	黒曜石a	3.70	2.10	1.20	6.60
92	4631	剥片石器	フレーク	南区	X	黒曜石c	1.90	2.20	1.00	4.95
93	2322	剥片石器	フレーク	南区	X	黒曜石b	3.10	2.00	0.50	2.00

表X.11 南区 X・XI層 出土礫石器の計測表

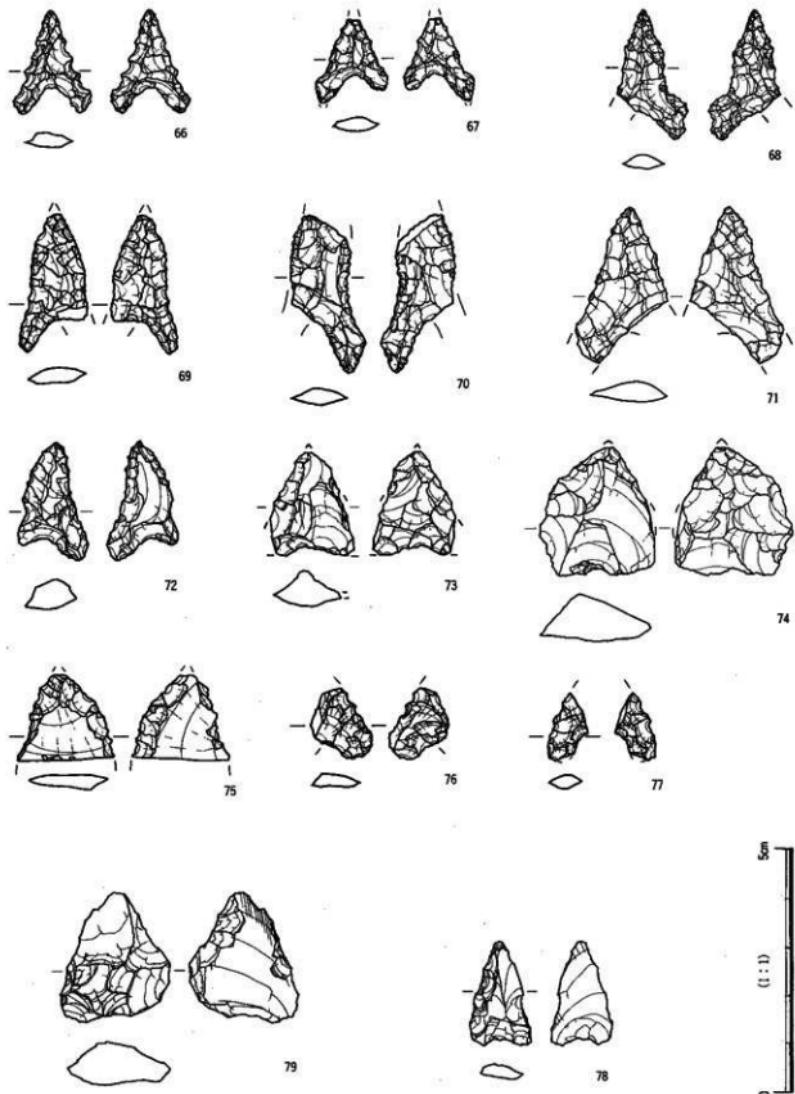
図 番号	遺物 番号	種類	器種	出土位置		石材	法量(cm・g)			
				地区	層位		最大長	最大幅	最大厚	重量
94	4456	礫石器	磨石	南区	X	砂岩	17.10	12.70	5.70	1720.00
95	4577	石製品	敲石?	南区	—	溶結凝灰岩	10.80	6.80	3.80	231.90
96	3651	礫石器	磨・敲石	南区	X	砂岩	85.38	49.27	48.56	278.28
97	3765	礫石器	(素材)	南区	X	花崗岩	20.99	17.49	13.83	6.46
98	2061	礫石器	(素材)	南区	X I	花崗岩	18.69	15.68	13.93	5.67
99	2129	礫石器	(素材)	南区	—	花崗岩	18.23	18.36	11.39	4.31
100	4005	石製品	(焼石)	南区	—	溶結凝灰岩	179.14	130.52	74.86	1490.22
104	4391	石製品	(素材)	南区	X	花崗岩	49.65	39.01	13.79	36.38
105	3857	礫石器	石錐	南区	X	花崗岩	43.05	36.65	28.40	56.55

表X.12 南区 X層 出土剝片類の計測表

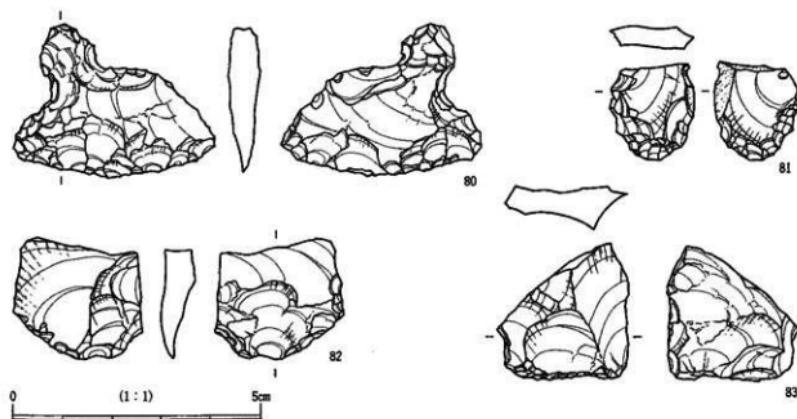
遺物 番号	石材	法量(cm・g)				遺物 番号	石材	法量(cm・g)			
		最大長	最大幅	最大厚	重量			最大長	最大幅	最大厚	重量
3835(大)	黒曜石 a	5.93	4.34	1.46	0.06	4020	頁岩 a	28.13	18.80	2.34	1.40
3835(中)	黒曜石 a	4.05	3.70	0.84		4026(大)	頁岩 a	16.42	7.99	4.99	0.56
3835(小)	黒曜石 a	4.31	3.48	0.95		4026(小)	頁岩 a	11.35	3.93	1.73	
3836	黒曜石 a	11.74	8.04	6.85	0.83	4297	頁岩 a	18.48	12.66	5.31	1.25
3841	黒曜石 a	12.73	5.66	2.18	0.12	4380	頁岩 a	16.50	10.38	2.18	0.37
3859	黒曜石 a	14.16	5.76	2.64	0.22	4382	頁岩 a	23.50	13.89	4.65	1.30
4091	黒曜石 a	24.49	8.77	5.83	1.37	4438	頁岩 a	11.71	8.48	2.14	0.13
4291(大)	黒曜石 a	11.77	4.20	1.04	0.10	4440	頁岩 a	18.96	10.27	2.48	0.62
4291(小)	黒曜石 a	9.23	3.96	0.88		4448	頁岩 a	17.34	14.98	1.59	0.48
4336	黒曜石 a	17.40	12.47	2.52	0.67	4460	頁岩 a	12.14	8.42	1.08	0.11
4427	黒曜石 a	5.32	4.81	1.03	0.02	4463	頁岩 a	26.78	14.53	4.59	1.40
4454	黒曜石 a	5.33	4.25	1.70	0.01	4464	頁岩 a	9.40	8.81	2.07	0.16
4906	墨曜石 a	9.45	2.46	1.13	0.03	4476	頁岩 a	11.52	10.65	1.77	0.22
4912	黒曜石 a	12.47	5.02	3.95	0.33	4513	頁岩 a	28.40	10.00	5.65	1.22
2457	黒曜石 b	34.51	18.12	9.98	7.39	4518	頁岩 a	31.39	15.60	3.83	2.31
3978	黒曜石 b	18.20	6.85	4.78	0.87	4524	頁岩 a	23.69	21.16	9.82	4.02
4370	黒曜石 b	13.61	10.87	3.24	0.36	4532-2	頁岩 a	20.33	14.34	4.42	1.12
4446	黒曜石 b	12.50	6.84	4.22	0.29	4609	頁岩 a	17.53	10.44	4.27	0.81
2468	黒曜石 b	20.99	18.13	11.51	3.95	4671	頁岩 a	22.41	13.03	4.81	0.93
2352	黒曜石 b	24.32	16.73	8.51	3.87	4679	頁岩 a	29.65	21.31	2.70	1.58
4024	チャート A	25.15	20.51	7.29	3.14	4683	頁岩 a	14.30	13.32	2.88	0.61
4878	チャート B	16.57	11.09	5.03	0.68	4686	頁岩 a	17.75	10.02	2.90	0.74
4618	白色チャート	30.90	17.40	13.41	8.05	4695	頁岩 a	19.85	5.86	4.09	0.45
2364	頁岩 a	16.58	14.38	9.97	3.56	4708	頁岩 a	23.72	11.17	3.69	0.75
2371	頁岩 a	20.67	9.91	10.25	2.40	4869	頁岩 a	15.59	13.35	3.31	0.70
3781(大)	頁岩 a	17.13	13.25	2.85	1.23	4870	頁岩 a	17.69	16.00	3.66	0.75
3781(小)	頁岩 a	17.09	10.83	3.34		4881	頁岩 a	18.56	7.38	2.11	0.26
3793	頁岩 a	15.51	11.08	2.16	0.28	4897	頁岩 a	13.07	12.62	2.47	0.44
3815	頁岩 a	19.72	12.88	2.61	1.01	4898	頁岩 a	14.16	8.06	1.22	0.18
3816	頁岩 a	18.62	12.03	2.95	0.69	4900	頁岩 a	12.43	7.97	1.25	0.13
3861	頁岩 a	14.46	9.37	1.93	0.25	3961	頁岩 b	12.72	10.52	1.24	0.15
3867	頁岩 a	22.71	8.02	6.85	0.81	4415	頁岩 b	27.37	14.05	2.92	1.33
3944	頁岩 a	17.77	10.53	3.79	0.55	4429	頁岩 b	9.34	4.65	1.37	0.06
3966	頁岩 a	18.02	12.95	4.95	1.05	4532-1	頁岩 b	18.01	17.27	2.27	1.12
3967	頁岩 a	18.52	9.52	3.69	0.56	4884	頁岩 b	27.49	13.72	6.27	2.26
3975	頁岩 a	23.91	10.08	7.62	1.77	4905	頁岩 b	10.23	7.71	0.85	0.07
4008	頁岩 a	22.43	14.14	5.85	1.52	4704	頁岩 c	39.19	35.16	5.06	6.71



図X.34 南区(X・XI)層 出土石器(1)



図X.35 南区 (X・X)層 出土石器 (2)



図X.36 南区(X-XI層)出土石器(3)

表X.13 南区 X・XI層 出土花崗岩の計測表

図 番号	遺物 番号	種類	器種	出土位置		石材	法量(cm・g)			
				地点	層位		最大長	最大幅	最大厚	重量
97	3765	礫石器	(素材)	南区	X	花崗岩	20.99	17.42	13.57	6.43
98	2061	礫石器	(素材)	南区	XI	花崗岩	18.93	15.39	14.30	5.67
99	2129	礫石器	(素材)	南区	-	花崗岩	18.74	18.45	11.61	4.33
-	2001	-	-	南区	X	花崗岩	64.53	51.23	36.88	217.06
-	3644	-	-	南区	X	花崗岩	46.52	24.94	23.23	34.79
-	3671	-	-	南区	X	花崗岩	89.80	62.19	37.92	325.01
-	3829	-	-	南区	X	花崗岩	46.27	32.34	22.89	40.06
-	3857	-	-	南区	X	花崗岩	42.55	36.48	28.29	56.59
-	4000	-	-	南区	X	花崗岩	45.19	43.23	26.67	59.97
-	4198	-	-	南区	X	花崗岩	55.24	42.50	16.22	37.43
-	4334	-	-	南区	X	花崗岩	46.45	26.80	21.82	136.25
-	4337	-	-	南区	X	花崗岩	46.78	34.44	18.70	31.08
-	4509	-	-	南区	X	花崗岩	46.04	37.16	28.84	68.62
-	4596	-	-	南区	X	花崗岩	46.74	28.04	21.96	31.57
-	4593	-	-	南区	-	花崗岩	61.53	48.42	20.27	75.87
-	4637	-	-	南区	X	花崗岩	27.79	25.64	20.88	14.97
-	4892	-	-	南区	X	花崗岩	73.71	63.31	42.90	203.54

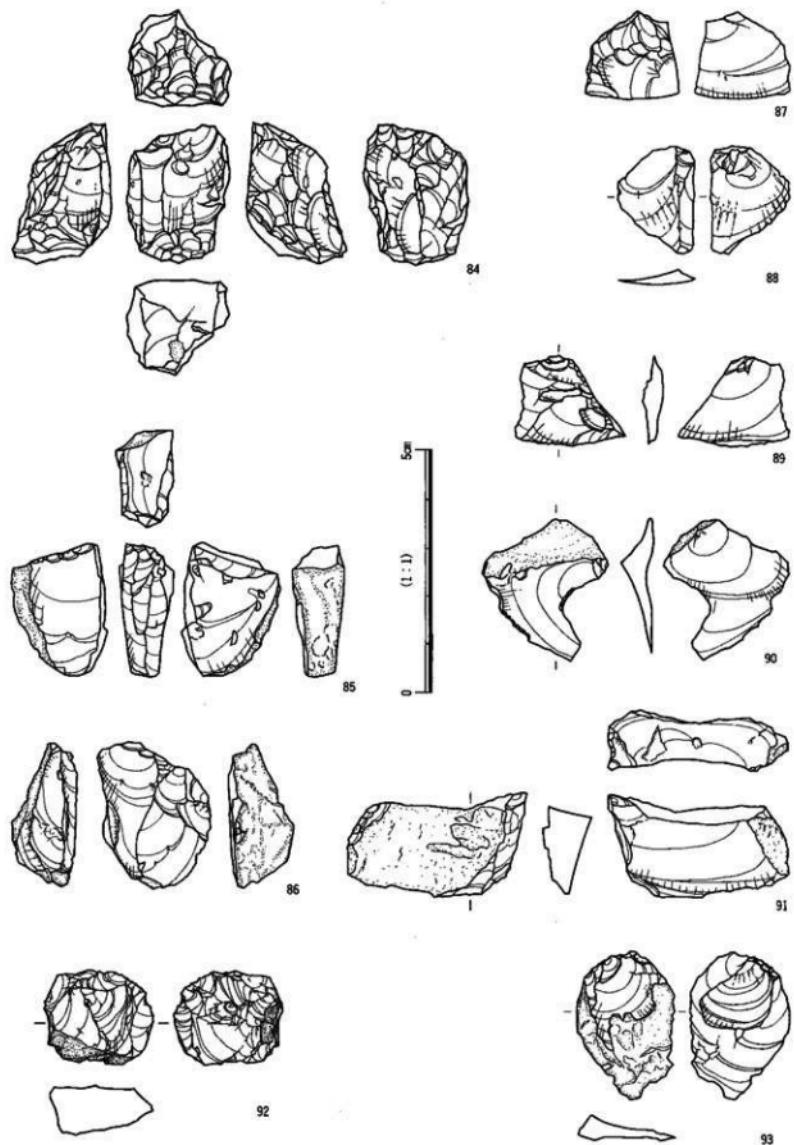
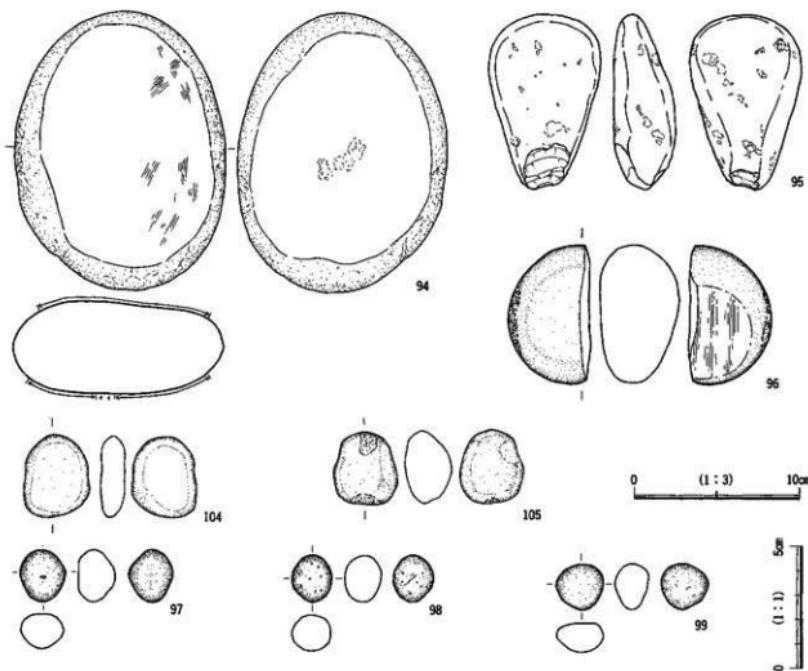


图 X.37 南区 (X+XI) 层 出土石器 (4)



図X.38 南区(X-XII層)出土石器(5)

第3節 補足調査

補足調査は、X・XI層からの出土遺物の中に旧石器時代と考えられるマイクロコア85などが含まれていたことから、サツマ火山灰層下の状況確認のため実施している。調査はX・XI層調査トレーニチの中央部と南西端部の2カ所に、サブトレーニチを設けて行なっている。

掘り下げたところ、遺物が補足調査トレーニチ2において確認された。遺物は剥片101など剥片4点が出土した。出土層位はXIV層中である。遺物の詳細については表X.14に示している。遺構は検出されていない。

(東)

- 調査後の検討において、遺物量と遺構量があまりにも違うことから、調査方法の改良を含めた検証が必要と考えられた。その後、他の遺跡の発掘調査において調査方法の検討を行なった。結果、土坑類の大きな遺構については従来どおりサツマ火山灰層より1層上(XII層)で検出できるが、小さな柱穴類についてはサツマ火山灰層(XIII層)での調査が必要であることが判明している。
- 70~77は、分布では石錠と表示しているが未製品である。表では未製品と記入している。その他、分布図と表で器種の標記に食い違いが存在するが、表が最終的な見解である。
- 和田のみ子氏(新和技術コンサルタント株式会社)にご教示いただいている。

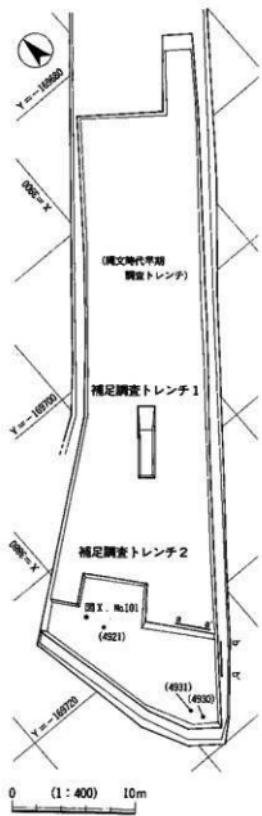


図 X.39 南区 補足調査
(XIV)層
遺物分布状況

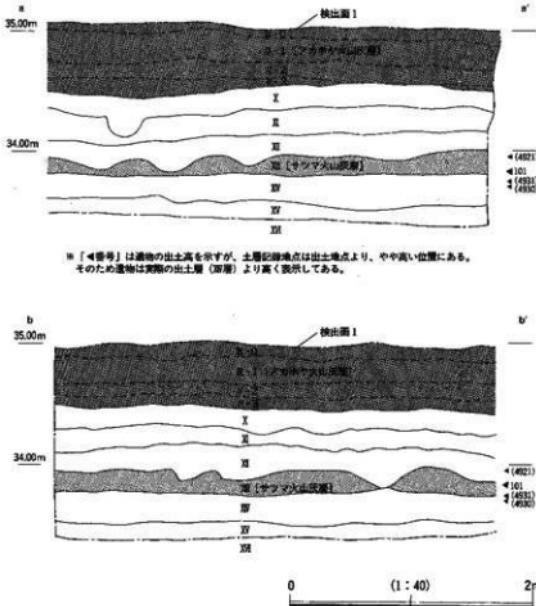


図 X.40 南区 補足調査トレンチ2 土層断面

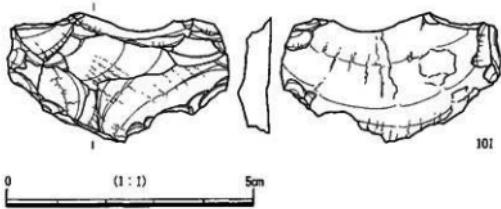


図 X.41 南区 補足調査 (XIV)層 出土遺物

表 X.14 南区 XIV層 出土剝片類の計測表

括図 番号	遺物 番号	石材	法量(cm・g)			
			最大長	最大幅	最大厚	重量
101	4920	頁岩(摩滅頁岩)	2.60	4.50	0.70	7.8
-	4921	黒曜石 d (三船産)	17.14	7.17	6.11	0.55
-	4931	黒曜石 d (三船産)	19.53	14.12	7.61	1.61
-	4930	黒曜石 c (桑ノ木津留産)	23.60	18.78	11.76	4.45

第XI章 分析

第1節 分析について

各分析は次の機関などに依頼している。土器胎土の植物珪酸体分析についてはパリノ・サーヴェイ株式会社と古環境研究所株式会社に、鉄器の保存処理及び分析は財団法人元興寺文化財研究所に委託している。石縫の分析は、鹿児島大学大学院 和田るみ子氏に依頼している。

1. 土器胎土の植物珪酸体分析

土器胎土の植物珪酸体分析は、先ず包含層出土の土器を用いてイネ科植物の存在の有無について分析を行なった¹。同時に他遺跡の試料も合わせて分析し、対照比較を行っている（分析(1)）。

次いで整理作業が進んだ段階で、古墳時代の堅穴住居の覆土及び埋土から出土した甕²を中心に分析を行なっている³。また、製塙土器の可能性のある土器群から2点を加えている（分析(2)）。

なお、仕明遺跡の土器を用いて、同様の分析を上苑遺跡⁴でも行なっている。

分析と試料

・分析（1） 仕明遺跡および東田遺跡出土遺物の分析調査

（試料：「仕明、D地点、表土層」、「仕明、D地点、III層」）

・分析（2） 有明町、仕明遺跡から出土した土器（胎土）の植物珪酸体分析

試料1：[VI.2] 「仕明、確認2T、SH3、No.2E-E SK1・797ほか」

試料2：[VI.141] 「仕明、1次北区、iii層、No.104・107ほか」

試料3：[VI.01] 「仕明、1次北区、SH1、No.6ほか」

試料4：[VI.29] 「仕明、1次北区、SH4、No.1014ほか」

試料5：[VI.156] 「仕明、1次A区、iii層、(SH4)、No.996ほか」

試料6：[VI.41] 「仕明、1次北区、iii層、(SH5)、No.519ほか」

試料7：[VI.55] 「仕明、1次北区、SH6、No.1243ほか」

試料8：[VII.16] 「仕明、2次東区、SH2、No.174ほか」

試料9：[製塙土器1類] 「仕明、1次A区、iii層、No.75」

試料10：[製塙土器2類] 「仕明、1次北区、iii層、表採」

* [番号] は報告書中の遺物番号を示す。

2. 鉄器の保存処理と分析

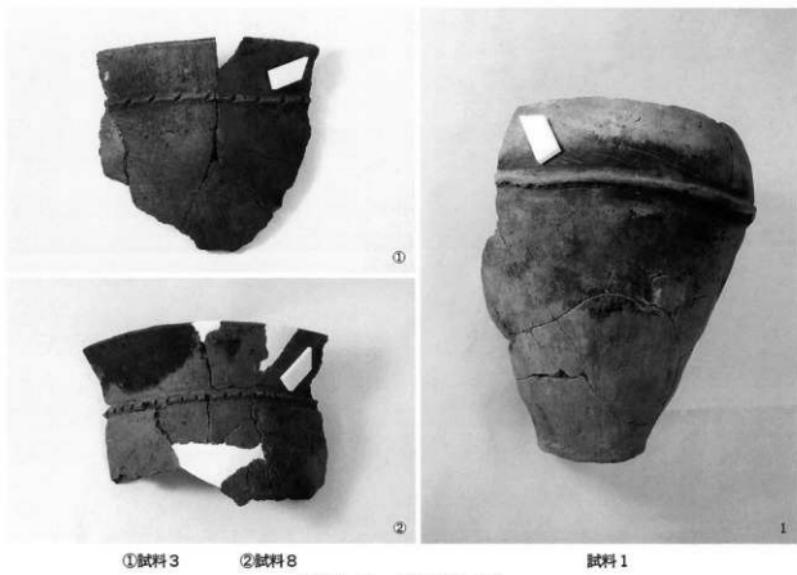
鉄器は、東区一堅穴住居3出土の馬具VII.23・VII.24、北区一グリッドA18—土壙墓出土の刀子VI.26の3点の保存処理及び分析・実測・トレースを行っている。分析結果は後述している。観察結果はVI章・VII章に示している。

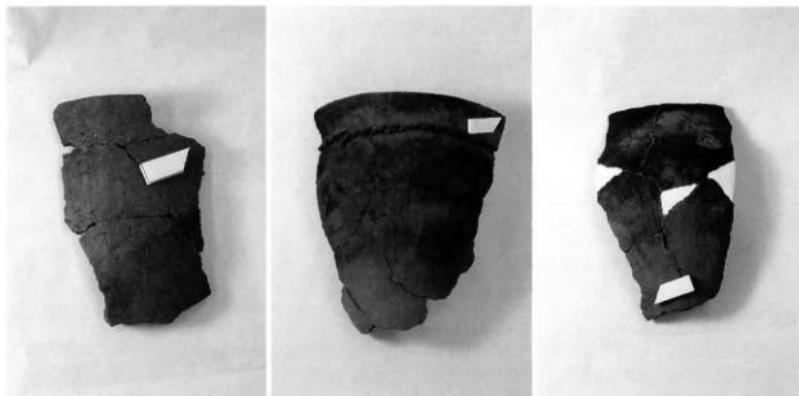
3. 石縫VI.179の分析

石縫は、北区一溝5の埋土より出土している。出土状況などの詳細は不明である。実測・トレースまで含めた遺物の観察分析を和田氏に依頼している。

(東)

- 1 分析に際しては、堂込秀人氏（鹿児島県教育庁文化財課）にご助言・ご協力頂いている。
- 2 「甕」を抽出したのは、使用の状況・頻度などから破損の可能性が比較的高いため、在地系の割合が高いと考えたためである。
- 3 分析に際しては、杉山真二氏（古環境研究所株式会社）に多大なるご配慮を頂いている。
- 4 中水忍・東徹志 2003 「上苑遺跡」 有明町教育委員会 第Ⅷ章 「第2節 土器胎土の植物珪凝体分析」に記述している。
上苑-試料5：「仕明、SH2、17」、上苑-試料6：「仕明、SH6、埋土、1241」





試料 2

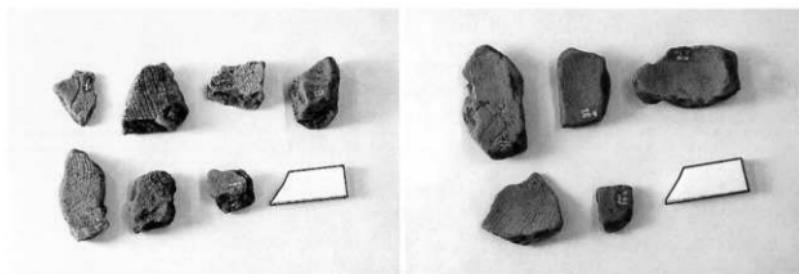
試料 5

試料 6



試料 4

試料 7



試料 9ほか

試料10ほか

写真Ⅺ.02 分析試料（2）

第2節 仕明遺跡および東田遺跡出土遺物の分析調査

パリノ・サーヴェイ株式会社

はじめに

仕明遺跡が所在する有明町は、志布志湾に臨む大隅半島北東部に位置する。町の大部分は、いわゆる「シラス」の厚く堆積した台地が広がっている。本遺跡は菱田川沿いに位置し、縄文時代早期以降の複合遺跡であることが明らかにされている。

今回、古墳時代の土器胎土中に含まれる植物珪酸体の種類を調べ、栽培植物や混和材に関する情報を得る。

1. 試料

植物珪酸体分析を行う試料は、仕明遺跡のD地点表土層およびIII層から出土した古墳時代の土器片2点、比較試料として東田遺跡の10号住および27号（報26号）より出土した古墳時代の土器片2点、合計4点である。

2. 分析方法

胎土重量を土器片から切り離し、アルミナ製乳鉢で粉砕する。この試料に対して、過酸化水素水・塩酸処理、超音波処理（70W、250kHz、1分間）、沈定法、重液分離法（ポリタンクスチレン酸ナトリウム、比重2.5）の順に物理・化学処理を行い、植物珪酸体を分離・濃集する。検鏡しやすい濃度に希釈し、カバーガラス上に滴下・乾燥させる。乾燥後、ブリュエラックスで封入してプレパラートを作製する。

400倍の光学顕微鏡下で全面を走査し、その間に出現するイネ科葉部（葉身と葉鞘）の葉部短細胞に由来した植物珪酸体（以下、短細胞珪酸体と呼ぶ）および葉身機動細胞に由来した植物珪酸体（以下、機動細胞珪酸体と呼ぶ）を、近藤・佐藤（1986）の分類に基づいて同定・計数する。結果は、検出された種類とその個数の一覧表で示す。

3. 結果

結果を表1に示す。植物珪酸体は、各試料から検出されるものの、検出個数が少ない。また保存状態が悪く、表面に多数の小孔（溶食痕）が認められる。

仕明遺跡のD地点表土層およびIII層から採取された土器片からは、タケアキ科珪酸体の短細胞珪酸体・機動細胞珪酸体が検出された。

東田遺跡の土器片の内、10号住出土土器はタケアキ科・ウシクサ族（スキ属）の両珪酸体、および樹木起源珪酸体第IIIグループ（近藤・ピアソン、1981）が検出される。樹木起源第IIIグ

表1 植物珪酸体分析結果

種類	遺跡名場所 試料名	仕明 D地点		東田 27号	
		表土層	III層	10号住 (報26号)	
イネ科葉部短細胞珪酸体					
タケアキ科		2	3	15	2
ウシクサ族スキ属		—	—	2	—
不明キビ型		—	—	2	—
不明タンチク型		—	—	2	—
イネ科葉身機動細胞珪酸体					
タケアキ科		16	12	28	2
ウシクサ族		—	—	1	—
不明		2	6	14	8
合計					
イネ科葉部短細胞珪酸体		2	3	21	2
イネ科葉身機動細胞珪酸体		18	18	43	10
总计		20	21	64	12
樹木起源III		—	—	4	—

ループは、「Y」あるいは「く」の字状の形態を呈し、大部分の樹木葉部に観察される。また、東田遺跡27号（報26号）出土土器からは、タケ亜科の両珪酸体が検出される。

4. 考察

東田遺跡および仕明遺跡の土器胎土からは、植物珪酸体がわずかに認められた。実験的に土器を焼成した調査によると、材料土壤に包含されていた植物珪酸体は被熱後も胎土中にほとんど残り、その産状は材料土壤の由来を反映する傾向が見られる（辻本・伊藤、1995）。今回検出された植物珪酸体の保存状態が悪かったが、前述の調査例を考慮すれば被熱により溶解した可能性は低い。本遺跡の立地や土器に関する情報が乏しいため詳細は不明であるが、土器胎土中から検出されたタケ亜科・ウシクサ族（ススキ属）・樹木に由来する植物珪酸体は、おそらく素地に本来包含されていたものと思われる。これまでの調査例では土器胎土中の植物珪酸体を調べることから、栽培に関する情報が得られる事例も報告されている（例えば藤原、1981）。今回の土器胎土は、栽培種であるイネ属が検出されないため、製作過程において稲作耕土や稻藁等が混入していないと思われる。よって、今回の結果から遺跡周辺の農耕について検討することは難しい。また、植物体の混入を示唆する珪化組織片が見られないため、イネ科植物体が混和材として用いられたかも不明である。

ところで、周辺に位置する長田遺跡と中尾遺跡で出土した同時代の土器胎土中からは、タケ亜科・ウシクサ族・樹木に由来する珪酸体に加えて、湿潤な場所に生育するヨシ属に由来する珪酸体が認められた。このような違いは、おそらく粘土の採取場所の環境を反映していると考えられ、非常に興味深い結果である。今後、土器に関する詳細な情報を加え、周辺の堆積物について植物珪酸体の産状を把握するとともに、重金物組成など土器胎土そのものの特徴に関する調査を行い、その由来に関する情報を蓄積していきたい。

【引用文献】

- 藤原宏志（1981）プラント・オパール分析法の基礎的研究（4）－熊本地方における縄文土器胎土に含まれるプラント・オパールの検出－、考古学と自然科学、14、p.55-65。
- 近藤錬三・ピアスン友子（1981）樹木葉のケイ酸体に関する研究（第2報）双子葉被子植物樹木葉の植物ケイ酸体について、帯広畜産大学研究報告、12、p.217-229。
- 近藤錬三・佐瀬 隆（1986）植物珪酸体分析、その特性と応用、第四紀研究、25、p.31-64。
- 辻本崇夫・伊藤良永（1995）市兵衛谷遺跡第II群土器の製作技術について－分析調査結果の解釈から－、綾瀬市埋蔵文化財調査報告4「市兵衛谷遺跡・新道遺跡－綾瀬市における縄文早期遺跡の研究－」、p.108-125、綾瀬市教育委員会。

写真1 植物珪酸体



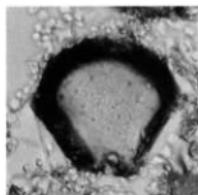
1



2



3



4

50μm

(1、2)

50μm

(3、4)

1. タケ亜科短細胞珪酸体（東田遺跡 27号(報26号)）

2. タケ亜科短細胞珪酸体（仕明遺跡 D地点III層）

3. タケ亜科機動細胞珪酸体（東田遺跡 10号住）

4. タケ亜科機動細胞珪酸体（仕明遺跡 D地点表土層）

第3節 有明町、仕明遺跡から出土した土器（胎土）の植物珪酸体分析

株式会社 古環境研究所

1. はじめに

植物珪酸体は、植物の細胞内に珪酸 (SiO_4) が蓄積したものであり、植物が枯れたあともガラス質の微化石（プラント・オバール）となって土壤中に半永久的に残っている。植物珪酸体分析は、この微化石を遺跡土壤などから検出して同定・定量する方法であり、イネをはじめとするイネ科栽培植物の同定および古植生・古環境の推定などに応用されている（杉山、2000）。

2. 試料

分析試料は、仕明遺跡から出土したNo.1～No.10の10点の土器である。試料の詳細を分析結果図に示す。

3. 分析法

植物珪酸体の抽出と定量は、ガラスピーズ法（藤原、1976）を用いて、次の手順で行った。

- 1) 土器のコア（中心部分）を抽出して超音波で洗浄
- 2) 48時間水没の後にメノウ乳鉢を用いて細粒化
- 3) 試料を105°Cで24時間乾燥（絶乾）
- 4) 試料約1gに対し直徑約40μmのガラスピーズを約0.02g添加（電子分析天秤により0.1mgの精度で秤量）
- 5) 超音波水中照射（300W・42KHz・10分間）による分散
- 6) 沈底法による20μm以下の微粒子除去
- 7) 封入剤（オイキット）中に分散してプレパラート作成
- 8) 検鏡・計数

同定は、400倍の偏光顕微鏡下で、おもにイネ科植物の機動細胞に由来する植物珪酸体を対象として行った。計数は、ガラスピーズ個数が400以上になるまで行った。これはほぼプレパラート1枚分の精査に相当する。試料1gあたりのガラスピーズ個数に、計数された植物珪酸体とガラスピーズ個数の比率をかけて、試料1g中の植物珪酸体個数を求めた。

また、おもな分類群についてはこの値に試料の仮比重（1.0と仮定）と各植物の換算係数（機動細胞珪酸体1個あたりの植物体乾重、単位：10～5g）をかけて、単位面積で層厚1cmあたりの植物体生産量を算出した。これにより、各植物の繁茂状況や植物間の占有割合などを具体的にとらえることができる。ヨシ属（ヨシ）の換算係数は6.31、ススキ属（ススキ）は1.24、メダケ節は1.16、ネザサ節は0.48、チマキザサ節型（チマキザサ節・チシマザサ節）は0.75、ミヤコザサ節は0.30である（杉山、2000）。タケ亜科については、植物体生産量の推定値から各分類群の比率を求めた。

4. 分析結果

分析試料から検出された植物珪酸体の分類群は以下のとおりである。これらの分類群について定量を行い、その結果を表1および図1に示した。主要な分類群について顕微鏡写真を示す。なお、イネ科栽培植物（イネ、ムギ類、ヒエ、アワ、キビなど）に由来する植物珪酸体は、いずれの試料からも検出されなかった。

(イネ科)

キビ族型、ヨシ属、ススキ属型（おもにススキ属）、ウシクサ族A（チガヤ属など）

(イネ科-タケ亞科)

メダケ節型（メダケ属メダケ節・リュウキュウチク節、ヤダケ属）、ネザサ節型（おもにメダケ属ネザサ節）、チマキザサ節型（ササ属チマキザサ節・チシマザサ節など）、ミヤコザサ節型（ササ属ミヤコザサ節など）、未分類等

(イネ科-その他)

表皮毛起源、棒状珪酸体（おもに結合組織細胞由来）、茎部起源、未分類等

(樹木)

ブナ科（シイ属）、マンサク科（イスノキ属）、その他

5. 結果および考察

仕明遺跡から出土したNo.1～No.10の10点の土器は、胎土に含まれる植物珪酸体の組成や密度から、次の4つに分類される。

(1) 土器No.5

土器No.5では、チマキザサ節型やミヤコザサ節型が多量に検出され、キビ族型、ウシクサ族Aなども少量検出された。おもな分類群の推定生産量によると、チマキザサ節型が優勢であり、ミヤコザサ節型も多くなっている。このような植物珪酸体組成は、仕明遺跡に近接する牧遺跡（第2次調査）の基本土層の植物珪酸体分析結果と比較すると、桜島薩摩テフラ（Sz-S、約1.28万年前）直下層に対比される。したがって、土器No.5の胎土は、桜島薩摩テフラ直下層が主な素材となっていると考えられる。

(2) 土器No.1～No.4、No.7

土器No.3、No.4、No.7では、ミヤコザサ節型が多量に検出され、キビ族型、ウシクサ族Aなども少量検出された。おもな分類群の推定生産量によると、ミヤコザサ節型が優勢となっている。土器No.1とNo.2でもおおむね同様の結果であるが、ミヤコザサ節型はやや少量である。このような植物珪酸体組成は、牧遺跡の分析結果と比較すると、岩本火山灰（Ata-Iw、約1.9万年前）を混在する層準およびその下層に対比される。したがって、これらの土器の胎土は、岩本火山灰を混在する層準およびその下層が主な素材となっていると考えられる。

(3) 土器No.6、No.8

土器No.8では、キビ族型、ウシクサ族A、ミヤコザサ節型などが検出されたが、いずれも少量である。土器No.6では、植物珪酸体がほとんど検出されなかった。牧遺跡の分析結果と比較すると、姶良入戸火碎流堆積物（A-Ito、約2.6～2.9万年前）直上層に対比されるが、植生に乏しい河川堆積物などが土器の胎土の主な素材になっている可能性も考えられる。

(4) 土器No.9、No.10

製塙土器とされるNo.9では、マンサク科（イスノキ属）が多量に検出され、ブナ科（シイ属）や樹木（その他）も検出された。製塙土器とされるNo.10でもおおむね同様の結果であるが、マンサク科（イスノキ属）は比較的の少量である。なお、各試料ともイネ科はほとんど検出されなかった。このような植物珪酸体組成は、牧遺跡では対比される層準が認められない。これらの土器の胎土は、照葉樹林下で生成された土壤（森林土壤）が主な素材となっていると考えられる。

【文献】

- 奥野 充 (2002) 南九州に分布する最近約3万年間のテフラの年代学的研究。第四紀研究、41(4)、p. 225-236。
- 杉山真二 (1987) タケ亜科植物の機動細胞珪酸体。富士竹類植物園報告、第31号、p.70-83。
- 杉山真二 (1999) 植物珪酸体分析からみた九州南部の照葉樹林発達史。第四紀研究、38(2)、p.109-123。
- 杉山真二 (2000) 植物珪酸体 (プラント・オバール)。考古学と植物学。同成社、p.189-213。
- 藤原宏志 (1976) プラント・オバール分析法の基礎的研究(1)－数種イネ科栽培植物の珪酸体標本と定量分析法－。考古学と自然科学、9、p.15-29。

表1 有明町、仕明遺跡から出土した土器(胎土)の植物性断面分析結果

分類群	学名	地点・試料			土器(胎土)					
		1	2	3	4	5	6	7	8	9
イネ科 キビ族型	Gramineae (Grasses) Paniceae type <i>Panigyrus</i> (red) <i>Miscomitus</i> type	7 21 7	15 7	20 7	14 7	7 34	7	7	7	10
ヨシ属 ススキ属型										
ウシクサ族A タケ亜科	<i>Andropogoneae A</i> type <i>Bambusoideae</i> (Bamboo) <i>Pleioblastus</i> sect. <i>Nipponocalamus</i>	21 66 7	27 49 14	49 14 8	14 14 15	15 15 8				
メダケ族型										
ネザサ節型	<i>Pleioblastus</i> sect. <i>Nezasa</i>	15	7	7	200	7				
ミヤコザサ節型	<i>Sasa</i> sect. <i>Sasa</i> etc. <i>Sasa</i> sect. <i>Crasinodii</i>	7 150 50	81 44	287 67	404 49	248 90	302	37	7	8
未分類等	Others						14	7	7	
その他イネ科										
表皮毛起原	Husk hair origin	14	15	7	7	7	7	7	7	15
棒状硅酸体	Rod-shaped	215	162	314	202	297	192	192	53	22
茎部起原	Stem origin	7								
未分類等	Others	350	375	561	411	635	8	515	147	278
樹木起原										
マングサク科(イヌノキ属)	<i>Castanopsis</i>								8	15
その他 (海綿骨針)	<i>Diospyros</i> Others		7		7				338	52
植物性断面総数	Sponge		14						15	22
Total		851	780	1315	1135	1497	15	1092	213	706
おもな分類群の推定生産量(単位: kg/m²·cm): 試料の返比重を1.0と仮定して算出										
ヨシ属	<i>Phragmites</i> (red)	1.35	0.42							0.43
ススキ属型			0.08							
メダケ族型	<i>Miscomitus</i> type									
メダケ族型	<i>Pleioblastus</i> sect. <i>Nipponocalamus</i>	0.99								
ネザサ節型	<i>Pleioblastus</i> sect. <i>Nezasa</i>	0.07	0.03							
ネザサ節型	<i>Sasa</i> sect. <i>Sasa</i> etc.	0.05	0.06							
ミヤコザサ節型	<i>Sasa</i> sect. <i>Crasinodii</i>	0.45	0.24	0.86	1.21	0.74	0.91	0.91	0.11	
タケ亜科の比率(%)										
メダケ族型	<i>Pleioblastus</i> sect. <i>Nipponocalamus</i>	21								
メダケ族型	<i>Pleioblastus</i> sect. <i>Nezasa</i>	18	3							
ネザサ節型	<i>Sasa</i> sect. <i>Sasa</i> etc.	11	5							
ミヤコザサ節型	<i>Sasa</i> sect. <i>Crasinodii</i>	89	61	91	100	33	95	100		

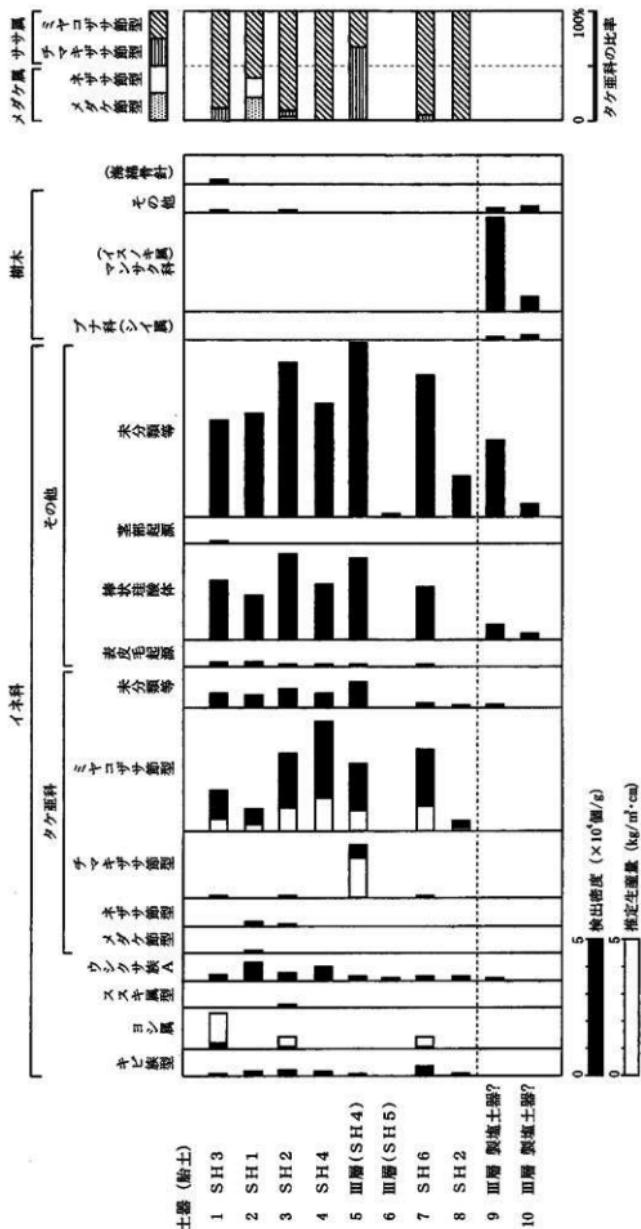
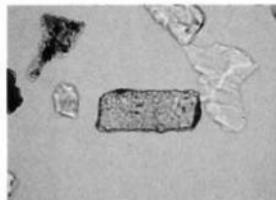
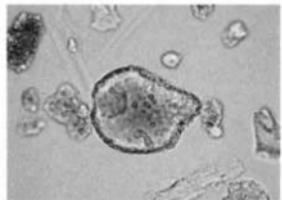


図1 有明町、仕明遺跡から出土した土器(胎土)の植物珪酸体分析結果



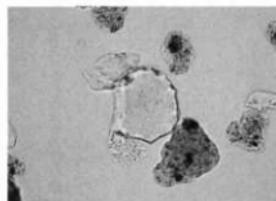
キビ族型
仕明 土器2



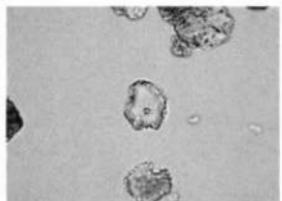
ヨシ属
仕明 土器1



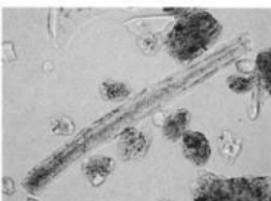
メダケ節型
仕明 土器2



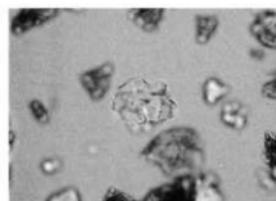
チマキザサ節型
仕明 土器1



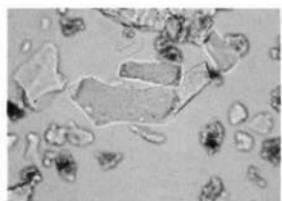
ミヤコザサ節型
仕明 土器4



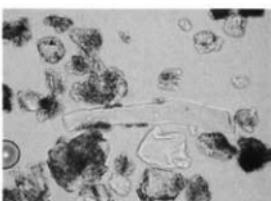
棒状硅酸体
仕明 土器1



ブナ科（シイ属）
仕明 土器9



マンサク科（イスノキ属）
仕明 土器9



マンサク科（イスノキ属）
仕明 土器9

— 50μm —

植物硅酸体（プラント・オバール）の顕微鏡写真

第4節 仕明遺跡出土 刀子の分析について

財団法人 元興寺文化財研究所

1. 調査対象

No.1 刀子の破断面（写真1）



写真1 No.1 刀子の分析箇所

2. 内容

ケイ光X線分析（以下、XRF）装置で、比較的サビの少ない箇所の元素分析を行った。

3. 使用機器及び測定条件

エネルギー分散型ケイ光X線分析装置（セイコーインスツルメンツ製 SEA5230）。試料の微小領域にX線を照射し、その際に試料から放出される各元素に固有のケイ光X線を検出することにより元素を同定する。モリブデン管球使用、大気条件下、コリメータ 1.8mm、管電圧45kV。

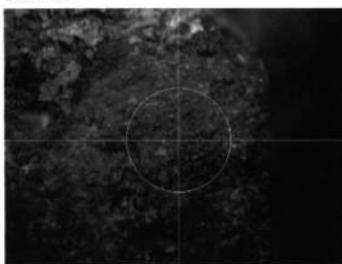
4. 結果

XRFの結果、No.1刀子の破断面では主な元素として鉄(Fe)を検出した（図1）。

[測定条件]

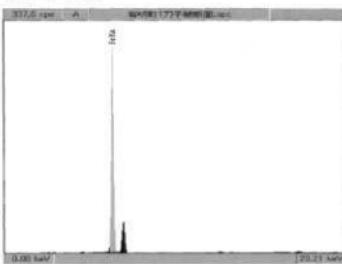
測定装置	SEA5230
測定時間(秒)	300
有効時間(秒)	222
試料室雰囲気	大気
コリメータ	φ1.8mm
駆起電圧(kV)	45
管電流(μA)	16
コメント	03189有明町No.1刀子破断面

[試料像]



視野：[XY] 6.60 4.95 (mm)

[スペクトル]



[結果]

Z	元素	元素名	ライン	A (cps)	ROI(keV)
26	Fe	鉄	K α	2399.782	6.23-6.57

図1 No.1 刀子破断面のXRFスペクトル

第5節 仕明遺跡出土の石鎌について

和田るみ子

1. はじめに

石鎌は、縄文時代後・晩期から弥生時代中期にかけて認められる石器である。1996年に国立歴史民族博物館がまとめた『農耕開始期の石器組成1』によると「長辺の1つを刃部とし、尖り気味の先端とは反対側の短辺を基端とする」と定義づけられている。

また、齊野裕彦は「石鎌の機能と用途（上）」のなかで、石鎌は本来直柄に装着された状態をいうが鉄製の鎌身に類似する形態から名称付けられている経緯もあって、鎌身そのものを示すとし、刃部と基部で構成されるとしている（齊野2001a）。

該当する時期の石器組成のなかでは、比較的出土数の少ない石器である。

2. 石鎌の分布と鹿児島県内の石鎌の出土状況

石鎌の分布は、齊野によると、縄文時代後・晩期から弥生時代中期までに、南は鹿児島県から東は静岡県まで、約100遺跡、総数400点ほど出土している。なかでも石鎌が出土した遺跡の約8割が北部九州から山陰にかけての地域に集中している。南九州での分布については、明確ではないとしながらも、点在した分布をみせ、1遺跡での出土数も少ないとから、搬入品が含まれる可能性を示した。また、石器組成に占める割合も極めて低いことから、石鎌は短期間で消滅したかあるいは特殊な石器として存続しているとしている（齊野2001b）。

鹿児島県内の石鎌の出土遺跡は、前述した『農耕開始期の石器組成』2（1996）に宮田栄二により日置郡金峰町高橋貝塚、同郡吹上町入来遺跡、薩摩川内市外川江遺跡、鹿屋市高付遺跡の4遺跡が報告されている¹。更に1996年以後は、今回報告する曾於郡有明町仕明遺跡のほかに同町大久保遺跡、指宿市敷頭遺跡、垂水市柊原遺跡と、少なくとも4遺跡から出土しており、現在のところ計8遺跡、10点が出土している（表1）。

石鎌の出土状況としては、現在のところそのほとんどが包含層からの一括出土、もしくは表採であり、時期を確定することができない。しかし、遺跡によってはその一括遺物に、土器では夜臼式から山ノ口式・松木蘆式、石器ではいわゆる大陸系磨製石器や打製土壙具などを伴っていることから、時期幅としては縄文時代後・晩期から弥生時代中・後期までと、他の地域とほぼ変わらないものと思われる。また、出土する遺跡の立地が平野部、もしくは河川に近いという共通点をもつ。

鹿児島県内で出土した石鎌は、今までのところ打製のものが10本中7本と多い。欠損品のため、全体像が不明のものもあるが、長さが15cm以下の小型のものが多いといえる。齊野は、縄文時代後・晩期は小型の打製石鎌を主体とし、縄文時代晩期後半（弥生時代早期）から弥生時代前期になると大陸系磨製石器の一器種として組成され、小型・大型の磨製石鎌を主体とする変化がみられるとした（齊野2001a）。これによると、現在のところ鹿児島県内では、縄文時代後・晩期から弥生時代前期にかけての石鎌が出土することになる。しかし、大型化した磨製石鎌はみられないが、高付遺跡のように一括とはいえ弥生時代中・後期の遺物を伴う打製石鎌もあるため、大型化もしない打製の石鎌が地域的に残ったという可能性も否定はできないのではないか。

石材は、打製・磨製とも頁岩を多く用いている。柊原遺跡の2点は記載では粘板岩とされるが、柊原遺跡の石器を見るとホルンフェルス化した石を選択していることから、当時の人々の認識としては柊原遺跡の粘板岩も他の遺跡の石材と同様の認識で用いられたものと思われる。なお、柊原遺跡の石材は高隈山周辺で見られる石材であり在地の石材を利用しているといえる。

3. 仕明遺跡出土の石鎌（VI.179）

次に、仕明遺跡出土の石鎌について述べたい。仕明遺跡出土の石鎌は打製で、石材は鹿児島県内で出土している他の石鎌と同様頁岩である。長さは15.8cmをはかり、齊野（2001a）の分類ではI類：小型に属する。刃部は直線刃である。

この石鎌は、使用痕と思われる光沢面が刃部両面に刃縁から主面にかけてほぼ同様に認められる。写真1はその右面の刃縁部をキーエンス社 VHX200マイクロスコープにて50倍にした写真である¹。倍率が低いため若干わかりにくいか基部方向から先端方向に向かって刃縁に沿った斜めの線状痕を観察することができる。

齊野が行った複製石器による実験によると、前記したような光沢面の分布および線状痕の方向は「根刈り」によるものに当たる。しかし、齊野は北部九州地域で出土した石鎌の使用痕と複製石器による実験を比較した結果、石鎌の用途をイネ科植物の穂刈りに用いられたと考えている。それは、比較対象とされた出土石鎌が刃縁に対し直交する線状痕があり、左面に比べて右面の光沢面が発達している点によるものである（齊野2001a）。

仕明遺跡出土の石鎌も齊野が推測するように、着柄ではなく直に手に握って使用したものと思われる。しかし、その使用法は穂刈りではなく根刈りの可能性が高いものと思われる。

また、石材の頁岩については、硬質であり前川・安楽川流域に見られる在地石材である。

4. おわりに

今回、使用痕の観察については仕明遺跡出土のものだけであったが、今後鹿児島県内で出土している他の石鎌の使用痕と比較していくことで、石鎌の機能にも差異（時期差もしくは地域差）が認められる可能性がある。また、本文により、南九州においても絶対的資料数の少ない石鎌が改めて認識され、新たな資料が増加することを期待したい。

最後に、本文を書く機会を与えていただいた有明町教育委員会 東徹志氏、資料に関してご教示いただいた鹿児島大学法文学部助教授 本田道輝氏、写真資料をご提供いただいたキーエンス社 姫野望氏、本論を書くにあたり協力していただいた新和技術コンサルタント株式会社 井之上宏氏、別府哲二氏、賦句博隆氏、松木益幸氏、中村祐一氏に感謝を表したい。

1 本田道輝によりまとめられた「鹿児島県下の弥生時代の石器と金持器出土遺跡地名表」（1992）では、石鎌の出土した遺跡数は同じく4遺跡であるが、外川江遺跡ではなく同じ鹿児島県川内市に所在する若宮遺跡が記載されている。本文では、齊野が石鎌の分布図作成の際に挿ったのが宮田（1996）であること、また、筆者が遺物を実見していないためこれに沿った。

2 キーエンス社 姫野望氏がデモンストレーションのため撮影したものである。今回、了承を得て使用させていただいた。

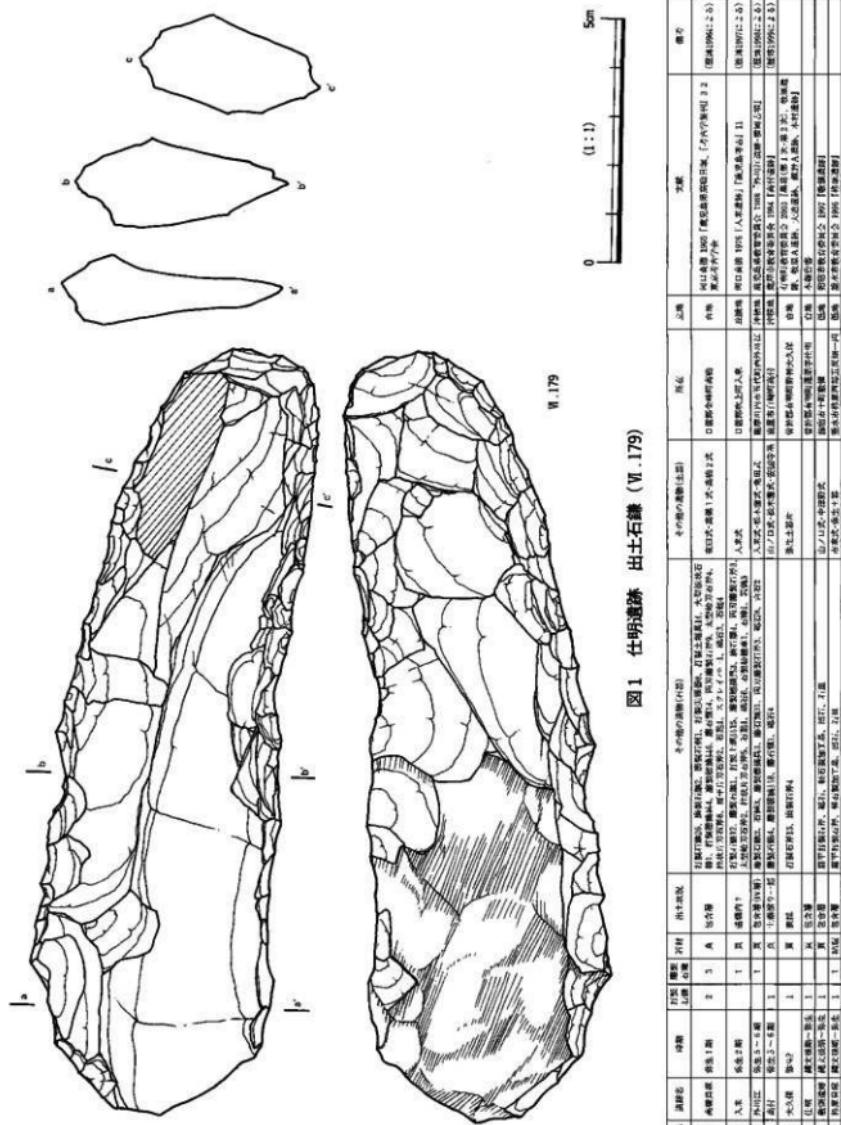


図1 仕明遺跡 出土石器（W.179）

表1 鹿児島県内石器出土遺跡

No.	遺跡名	時期	打製	磨耗	上槽	下槽	石器	所々付記	所々付記	所々付記	所々付記	所々付記	所々付記	所々付記	所々付記	所々付記	所々付記	所々付記	所々付記
1	高瀬遺跡	後金	1脚	2	3	A	台面削	打製刃端部、側面刃部、側面斜面、刃部尖削部、大型刮削石	粗大、薄削										
2	入江	後金	2脚	1	1	直削	直削	打製刃端部、側面刃部、側面斜面、刃部尖削部、大型刮削石	粗大、薄削										
3	川口江	後金	1脚	1	1	直削	直削	打製刃端部、側面刃部、側面斜面、刃部尖削部、大型刮削石	粗大、薄削										
4	舟崎	後金2～6期	1	1	1	直削	直削	打製刃端部、側面刃部、側面斜面、刃部尖削部、大型刮削石	粗大、薄削										
5	大久保	舟崎	1	1	直削	直削	打製刃端部、側面刃部、側面斜面、刃部尖削部、大型刮削石	粗大、薄削	粗大、薄削	粗大、薄削	粗大、薄削	粗大、薄削	粗大、薄削	粗大、薄削	粗大、薄削	粗大、薄削	粗大、薄削	粗大、薄削	
6	川原	後金2～6期	1	1	直削	直削	打製刃端部、側面刃部、側面斜面、刃部尖削部、大型刮削石	粗大、薄削	粗大、薄削	粗大、薄削	粗大、薄削	粗大、薄削	粗大、薄削	粗大、薄削	粗大、薄削	粗大、薄削	粗大、薄削	粗大、薄削	
7	高瀬遺跡	後金2～6期	1	1	直削	直削	打製刃端部、側面刃部、側面斜面、刃部尖削部、大型刮削石	粗大、薄削	粗大、薄削	粗大、薄削	粗大、薄削	粗大、薄削	粗大、薄削	粗大、薄削	粗大、薄削	粗大、薄削	粗大、薄削	粗大、薄削	
8	高瀬遺跡	後金2～6期	1	1	直削	直削	打製刃端部、側面刃部、側面斜面、刃部尖削部、大型刮削石	粗大、薄削	粗大、薄削	粗大、薄削	粗大、薄削	粗大、薄削	粗大、薄削	粗大、薄削	粗大、薄削	粗大、薄削	粗大、薄削	粗大、薄削	

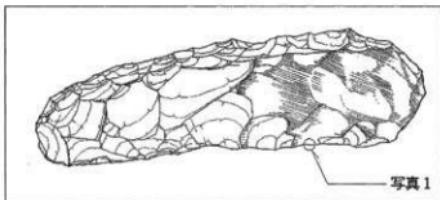


写真1

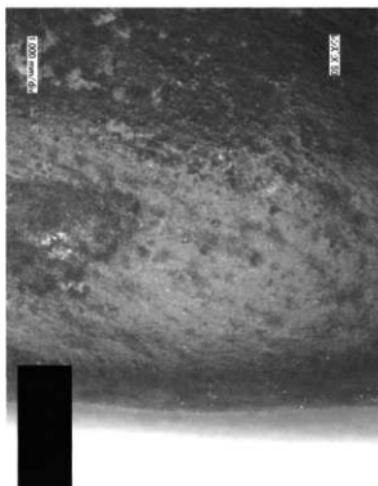


写真1 仕明遺跡出土石鎌右面刃縁部使用痕

【参考文献】

- 国立歴史民族博物館 1996 「農耕開始期の石器組成」 1、2 国立歴史民族博物館資料調査報告書7、千葉
齊野裕彦 2000a 「石鎌の機能と用途（上）」『古代文化』52 古代学協会、京都 pp.17-32
齊野裕彦 2000b 「石鎌の機能と用途（下）」『古代文化』52 古代学協会、京都 pp.32-44
宮田栄二 1996 「鹿児島県の石器」「農耕開始期の石器組成」2 国立歴史民族博物館資料調査報告書7、千葉 pp.718-774
本田道輝 1992 「鹿児島県下の弥生時代の石器と金属器出土遺跡地名表」「南九州地域における原始・古代文化の諸様相に関する総合的研究」平成3年度教育研究学内特別経費研究成果報告書 鹿児島大学法文学部、鹿児島 pp.28-33

第XII章 まとめにかえて

はじめに

「仕明」の字名の由来は、藩政時代、「仕明地」または「抱地」とも呼称し、郷士が藩主の許可を得て、荒地を開墾した土地であると伝えられ、検地門割の場合も門高より除外し、郷士の永久耕作地として認められた土地であったという。また当遺跡の近くには、片平古墳（69-69）、片平城跡（69-80）が存在し、当遺跡周辺は古來の生活・動きの感じられる土地柄であった。

第1節 近世

近世の遺構は、北区は溝3～7（図VI.57）、東区は土坑201（図VIII.23）・溝1（図VIII.26）、南区は道1～3（図X.20）、溝1・2・4（図X.04、図X.23）が該当すると思われ、遺物は遺構内で確認されたものがほとんどであり、表面採集遺物は東区から東南区に広がりが見られる。遺物・遺構の分布から近世の遺物包含層は削平を受けていることが考えられ、近世の遺跡範囲は、舌状台地の中央から東西端に広がっている可能性がある。

なお遺構に関して、北区溝4～7を挟んで北側に北区掘立柱建物9～14（図VI.50）、南側に南区掘立柱建物1～5（図X.03）が検出されている。これらの掘立柱建物はその長軸方向・短軸方向のいずれかが北区溝4～7に並行するように検出され、その配列から溝4～7に関連する遺構の可能性がある。東区土坑201は、その断面の形状から溝部分の北側にある斜面に向かう排水施設ではないかと思われる。また周辺の遺構内埋土は黒色土又は黒褐色土が主であるのに対し、東区土坑201の方形土坑部分の埋土は赤黑色土とアカホヤ粒の混ざる赤黒色土が交互にレンズ状に堆積し、その下位からは全く遺物は確認されず、検出面レベルに近世の染付・黒薩摩等の壇・甕・鉢類等が出土している。このことから東区土坑201と出土遺物には若干の時期差があり、遺物は土坑が埋没する段階で焼棄されたものと思われる。東区溝1は、溝床面にある硬化面の幅が30cm程度であり、人が山を登り降りするには通行が可能と思われ、道として使用された可能性が考えられる。

第2節 中世

中世の遺構は、北区は道1（図VI.51）、土壤墓（図VI.27）、土坑16・17（図VI.32）が該当すると思われ、遺物は包含層中の分布は主に北区・東区に広がっており、南区・東南区ではわずかに確認できる程度であった。遺物・遺構の分布から中世の遺跡範囲は舌状台地の東面に広がる可能性がある。

なお、遺構に関して北区土壤墓はその床面近くから鉄製刀子（VI.63）とほぼ完形の土師器碗（VI.57）、土師器皿（VI.58～VI.62）が確認され（図VI.27）、その遺物は意図的に遺構の東西端に寄せられているようであり、埋納されたものと思われる。なお鉄製刀子（VI.63）の刃部の所々に付着している木質物質は、鞘と思われ、刃部を覆うように付着しており、鞘に納めた状態で埋納したと思われる。北区土坑16は、土坑の床面に近いレベルの出土であり、埋納したものではないかと思われ、土壤墓の可能性も推測される。また北区土坑16・17で出土した土師器皿（図VI.33）は、同町教育委員会で発掘調査を行った長田遺跡の2号土壤墓出土遺物と酷似し、その遺物は共伴遺物として玉環口縁を持つ白磁碗が出土したことから、中世において土師器皿と磁器を埋納する慣習等があったと思われる。なお、北区検出の土坑内より遺物が確認されたのは、土坑I類は北区土坑130（図VI.29）、土坑III類は北区土坑9・16・17・27・124（図VI.32、図VI.34、図VI.35）、土坑IV類は北区土坑101（図VI.38）と、遺構検出数に対して遺物出土土坑数が少なく、北区土坑16・17以外の土坑内遺物は検出面より上位の包含層に近いレベルでの出土であり、土坑が埋没する段階で混入したものと思われ、さらにI～V類に分類したように、埋土の状態、平面形状、長軸方位に違いがあるため、北区の中央付近に集中して検出された土坑の作成時

期については断定ができない。遺物が全く確認できなかった土坑V類は、その様相について第VI章で前述したように土坑として位置付けるには条件的にも難しいと思われるが、検出面ではっきりとした平面プランが確認でき（図版12）、V類土坑が他のI～IV類土坑よりも掘り込みが浅く、土坑の床面近くの埋土の染み込みが検出面で確認できたと考えた場合、V類が土坑である可能性があると思われる。

第3節 古代

古代の遺構は、北区は溝1・溝2（図VI.56）、南区は道4・溝11（図X.04）、東南区は竪穴住居1（図IX.03）が該当すると思われ、遺物は北区の北端の包含層中から布目土器が分布している。この布目土器は出土点数が17点と少ないが、この類の土器は他の調査区では見られない。調査区内における古代の遺物・遺構の分布状況は局所的にごく狭い範囲に存在するため、古代の遺跡範囲については不明である。

第4節 古墳時代

古墳時代の遺構は、北区は竪穴住居1～6（図VI.03、図VI.07、図VI.10、図VI.14、図VI.19、図VI.23）、東区は竪穴住居1～6（図VIII.03、図VIII.07、図VIII.11、図VIII.15、図VIII.18）、溝3（図VIII.29）と思われ、遺物も遺構と同様に北区の東側と東区全体に分布している。東南区においては古墳時代相当の遺物はほとんど確認できず、北区・東区では竪穴住居埋土中に多くの成川式土器片が出土したのに対し、東南区竪穴住居1の埋土上位において陶器、須恵器のみが出土していることから、東南区において古墳時代の遺物包含層はほとんど存在しないと思われ、これらのことから古墳時代の遺跡範囲は東区付近を南限とし、舌状台地の東端に広がっている可能性がある。

なお、遺構に関して北区竪穴住居1～6、東区竪穴住居1～6の出土状況は、それぞれ2種類に大別されると思われる。北区竪穴住居1・2・3・6は、床面直上に遺物はほとんどなく、埋土の上位に集中して分布することから、竪穴部が埋没する段階で遺物が混在して流入したと思われる。北区竪穴住居4・5の出土状況は、遺構の中央に集中し、検出面から床面の直上にかけて分布する。なお、北区竪穴住居1のP1～P10はほぼ同様の円柱穴で、床面からの深さに若干の差異はあるが、P10を中心としてP1～P8が巡るような配置にあることから、竪穴住居を構成する柱穴の配列であると思われる。北区竪穴住居3は北区で検出された竪穴住居の最南端の検出遺構であり、この住居から南西側には古墳時代の遺物量も減少することから、北区竪穴住居3はこの一体に広がる古墳時代住居群の南端部に近い竪穴住居ではないかと思われる。北区竪穴住居5は、P1とP4については、その直径に大きな差異はあるが、床面からの深さはP1が19cm、P4が20cmと対応する深さであり、住居の長軸方向に準じる配列を持つことから、P1とP4は住居を構成した柱穴の配列と思われる。東区竪穴住居1・2・3の出土状況は、床面の直上付近に多く出土し、検出面より上位にも分布する。東区竪穴住居4の出土状況は、床面直上に遺物はほとんどなく、埋土の上位に集中して出土している。東区竪穴住居5・6については、検出面より上位は削平を受けていたためはっきりしないが、確認調査の際、床面の直上にも遺物が確認できたことから、東区竪穴住居1・2・3の出土状況に似ると思われる。なお、東区竪穴住居1・3～6には北区検出の竪穴住居と異なり、その床面に貼り床と思われるアカホヤと黒色土の混ざる面が検出されており、東区竪穴住居1・3・4には竪穴壁を巡る様相の溝が床面上に検出され、その溝の底面には所々に柱穴が確認されていることから、北区と東区の竪穴住居には作成時期差があると思われる。東区溝3はその埋土上位において成川式土器と思われる土器片が確認されているが、東区溝3の東西に長軸方向がほぼ平行に並ぶ東区溝2・4・5（図VIII.29）が検出されている。これらの溝は遺構幅に差があり、それぞれの溝の作成時期に若干の差はあるとしても、東区溝2・4・5は古墳時代の遺構の可能性があり、またその性格は集落等の境界を示す溝ではないかと思われる。

第5節 繩文時代前期

縄文時代前期に該当する遺構は確認されなかったが、北区D-15~A-19区付近にかけて貝殻条痕紋土器片が9点出土している（図VI.67）。また西区V層中からは局部磨製石鎌、打製石鎌がそれぞれ1点出土している（図VII.03）。西区は北区の東側に隣接し、台地の縁辺部にあたる調査区であり、遺物量は少ないが縄文時代前期の遺跡が舌状台地の東側に存在する可能性があり、その範囲については不明である。

第6節 縄文時代早期

縄文時代早期に該当する遺構は確認できなかったが、遺物は南区に多く出土した。南区は舌状台地の西側にある調査区であり、南区西側の縁辺部に向かって遺物量も増える傾向にあり、縄文時代早期の遺跡範囲は河岸段丘の舌状台地の西側に広がる可能性がある。

第7節 後期旧石器時代

後期旧石器時代相当の遺物は南区の南西端に4点出土した（図X.41）。後期旧石器時代の遺物包含層は調査区の最南端に存在し（図X.39）、地形的には河岸段丘縁辺部にある。その南側には谷状の南に延びる細い窪みあるが、後期旧石器時代には現在よりも浅かった可能性も考えられる。

おわりに

仕明遺跡は調査の結果、旧石器時代・縄文時代早期・縄文時代前期・古墳時代・古代・中世・近世と幅広い時代の複合遺跡であった。当遺跡の立地が蛇行する河岸段丘の縁辺にあたり、舌状に延びる台地の東西端部に竪穴住居を含めた遺構の分布が確認でき、この河岸段丘を形成している菱田川には、同様な地形が近隣に存在し、今後の調査においても同様な複合遺跡の存在が期待できると思われる。

（出口）